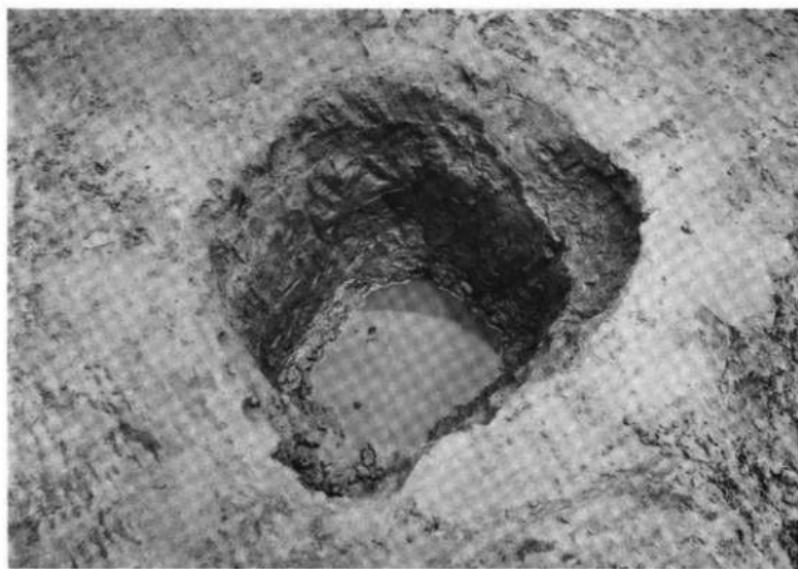




S E 1 遺物出土狀況



S E 1 完掘

## 第6章 跡部遺跡発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、八尾市春日町1丁目57番地において実施した、ハヤシハイツ建設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年11月9日から11月19日かけて実施した。
1. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財室が行ない、高木真光が現地を担当した。なお、調査にあたっては西村公助の協力があった。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか成海佳子(遺物実測)、中谷聖子(トレース)が行ない、執筆は高木真光が担当した。

## 本　文　目　次

I	調査の目的と経過	141
II	調査の概要	142
III	層序	142
IV	検出遺構	142
V	出土遺物	144
VI	まとめ	145
VII	出土遺物観察表	151

## 挿 図 目 次

図 1	調査地周辺図	141
図 2	A グリッド上層遺構平面図	148
図 3	C グリッド下層遺構面出土石器実測図	145
図 4	平面面図(折込)	147~148
図 5	木棺・人骨実測図	149
図 6	出土遺物実測図	150

## 図 版 目 次

図版 1	A グリッド 上層遺構検出状況 同上 木棺検出状況	図版 3 B グリッド 灰色粘土 I 層出土遺物 人骨遺存状況
図版 2	B グリッド 上層遺構検出状況 C グリッド 下層遺構検出状況	

## 第6章 跡部遺跡(春日町1丁目57番地)

### I 調査の目的と経過

跡部遺跡は昭和53年に春日町1丁目で実施された国鉄職員官舎の建設の際、弥生時代前期の壺や鍛冶時代の屋瓦片等の遺物が採集されたことによって発見された遺跡である。今回申請されたマンション建設予定地は、この採集地点の西方約200mに位置するため、これに先立つて遺跡の拡がりなどを確認する目的で試掘調査を行なった。

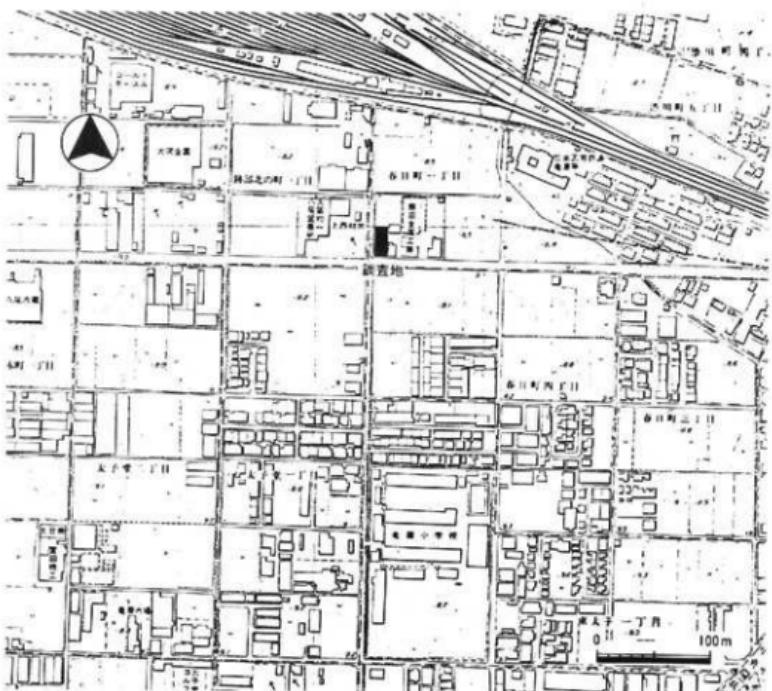


図1 調査地周辺図

試掘調査では、弥生時代前期・弥生時代後期末～古墳時代前期の遺物や造構を認めたため、昭和56年11月9日から11月19日にかけて、発掘調査を実施した。

当遺跡は、地形的には長瀬川と平野川に挟まれた沖積地に立地する。また、周辺には、西～北西に亀井遺跡(弥生時代前期～江戸時代)、久宝寺遺跡(弥生時代～宝町時代)<sup>②</sup>が位置し、南には木の本遺跡(弥生時代中期～古墳時代中期)<sup>③</sup>が近接している。また、遺跡推定範囲内には、洪川庵寺の推定地も含まれている。<sup>④</sup>

## II 調査の概要

調査地に3ヶ所のグリッドを設定した。各グリッドは北からAグリッド(3.5m×4.5m)、Bグリッド(3.5m×4.0m)、Cグリッド(4.0m×15.5m)と付称し、全体として1本のトレンチを意図した。調査はA～Cへ順次行なったが、このうちCグリッドの両側は壁面の崩壊により、調査できていない。調査総面積はCグリッド両側を含めて約92m<sup>2</sup>である。

## III 層序

各グリッドの基本的な土層地積は、上層より盛土、旧耕土、茶灰色混砂粘土、綠灰色シルト、暗灰色粘土、灰青色シルトである。

これらの基本層序の他に、A・B両グリッドでは旧耕土下に黒色粘土があり、綠灰色シルト下には灰色粘土Ⅰがみられる。Cグリッドでは、A・B両グリッドの黒色粘土と同レベルに綠灰色混砂粘土があり、茶灰色混砂粘土下には灰色粘土Ⅱが認められた。

また、A・Bグリッド内の灰色粘土Ⅰの下部は古墳時代前期の遺物包含層で、各グリッドでみられた暗灰色粘土は弥生時代前期から中期にかけての遺物包含層と考えられる。

## IV 検出遺構

遺構には暗灰色粘土をベースにするものと、灰青色シルトをベースにするものがある。上層に位置する前者を上層遺構、後者を下層遺構と呼び、記述する。

### 1) 上層遺構

Aグリッドで方形周溝墓と考えられる遺構、Bグリッドで溝を検出した。時期については、遺構の内部からは決め手となるものは出土しなかったが、層位の比較や遺物含包層出土の小型鉢(1・2)や鏡(3)から、古墳時代前期に比定できるものと考えられる。

### 方形周溝墓状遺構

Aグリッドの南側で一部を検出した。主体部には木棺の底板や側板が認められ、底板上には腐朽の著しい人骨が遺存していた。底板は長さ210cm・幅40cmが遺存しており、側板は内部に倒れ込んだ状態で長さ120cm・幅20cm程度が残存していた。

周溝と考えられる溝は幅約80cm・深さ約25cmを測り、グリッド西壁近くでわずかに屈折する状態が認められた。溝内には暗灰色粘土が堆積し、弥生時代前期の蓋(4・5)等の破片が少量出土した。この土層は、上層遺構のベースとなっている弥生時代前期～中期の包含層とほとんど同質であり、溝掘削後に付近の包含層が流入したものと考えられる。

### SD1

Bグリッドで検出した北西方向に延びる溝である。幅約80cm・深さ30cm前後を測り、溝内には暗灰色粘土が堆積する。

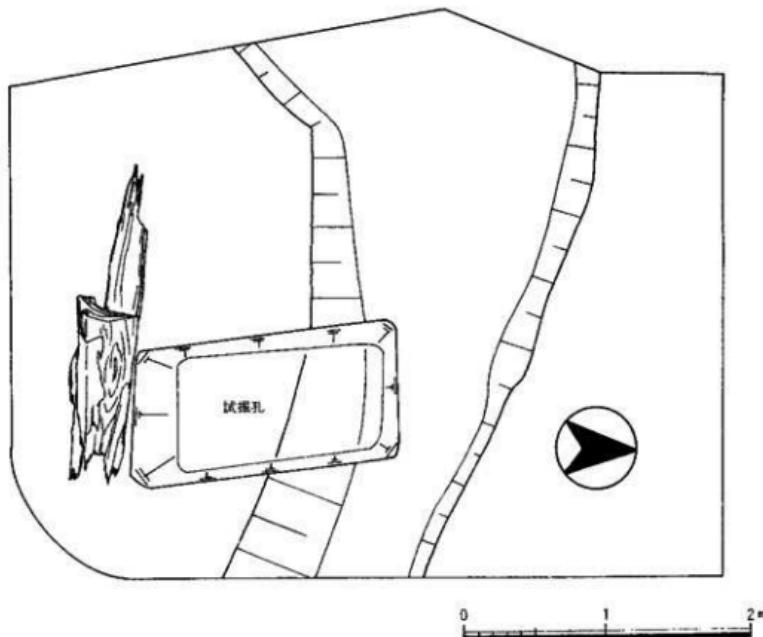


図2 Aグリッド上層遺構平面図

## 2) 下層遺構

Bグリッドで上塙・溝、Cグリッドで溝を検出した。これらの遺構および遺構を被覆する包含層より、弥生時代前期～中期と考えられる遺物が出土している。

### S K 1

Bグリッド南側で検出した。東側はS D 2に切られ、土塙内には暗灰色粘土が堆積する。

### S D 2

Bグリッド南東で北側の肩のみを検出した。S K 1を切っているが、堆積状況は同様である。内部から弥生時代中期の甕(10)等の破片がわずかに出土した。

### S D 3

Cグリッドで検出した南北方向の溝である。北側は大溝に切られている。幅約60cm・深さは25cm前後を測る。溝内には暗灰色粘土が堆積し、弥生時代中期の遺物が少量出土した。また、この溝の延長線上にS D 2があり、同一の溝としての可能性がある。

### S D 4

Cグリッドで検出した。北側は壁面の崩壊によって明確ではないが、幅約4m程度で、深さ約1.2mを測り、南西から北東へ延びると考えられる。上部には暗灰色粘土、下部には暗灰色粘土が堆積し、上部より弥生時代中期の甕(12～14)が出土した。規模・堆積状況等から自然河川とも考えられるが、部分的に検出したのみで、詳細は不明である。

## V 出土遺物

土器や石器等が出土し、総量はコンテナ1箱である。このうち実測可能なものは土器14点、石器2点で、灰色粘土Iより出土した小型鉢(1・2)、壺(3)を除き、他はすべて磨耗をうけた細片である。

### 1) 土器

時期的に、弥生時代前期～中期のものと、古墳時代前期のものが出土した。なお、土器個別については観察表にまとめた。

### 2) 石器

Cグリッド下層遺構面より、サヌカイト製の刃器(1)と楔形石器(2)が出土した。

(1)は全長4.8cm・幅4.0cm・厚さ0.8cmを測り、横長剣片を利用した刃器で、背腹両面に

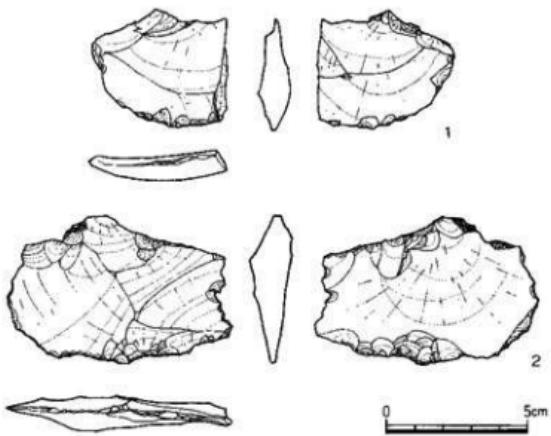


図3 Cグリッド下層遺構面出土石器実測図

粗材面が大きく残る。打点側より複数の二次剥離を行ない、粗材の縁端部は使用痕による細かい剝離が背腹両面にみられ、刃部として利用されていたことがわかる。その後、腹面からの加熱により、一部を欠損する。

(2)は全長7.8cm・幅5.2cm・厚さ1.2cmを測り、横長剝片を利用した楔形石器で、背面には上端よりの剝離痕が観察され、腹面はポジティブな粗材面をそのまま残す。打点近くには部分的に自然面を残し、対向する両縁辺部には、連続する細かい剝離がみられる。

## VI まとめ

調査によって得られた諸点について簡単にまとめると次の通りである。

i) 遺構と時期について：遺構は層位の違いによって、2時期のものが確認された。時期については、遺構内および遺構上下の土層より出土する遺物によって、以下の時期に比定できる。

a. 古墳時代前期のもの(上層遺構)

b. 弥生時代前期～中期のもの(下層遺構)

ii) 遺構の性格について：上層遺構面では方形周溝墓状遺構を、下層遺構面では溝を中心とする遺構を検出した。このことから、古墳時代前期にはこの地域が墓域とし利用されていたものと考えられ、弥生時代前期～中期には直接的な生活拠点を肯定する遺構は検

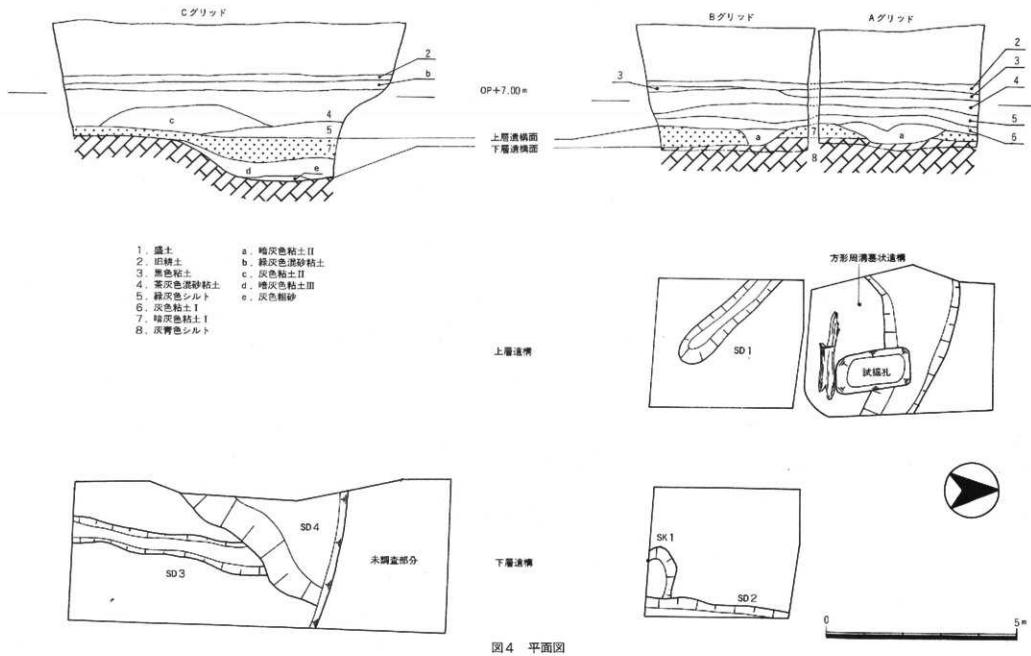
出できなかったものの、調査地近隣にその存在の可能性が窺える。

- iii) 出土遺物について：出土した土器については、古墳時代前期の包含層である灰色粘土 I 出土のものを除き、ほとんどが小破片であった。下層遺構内より出土した遺物は小破片ながら遺構の時期を決定し得る資料となったが、上層遺構からは直接的な時期決定の資料は得られなかった。

以上のように、今回の調査では当調査地に 2 時期の遺構が存在することが確認された。しかし、遺跡全体の詳細については、いまだ充分に把握し得ていない。当遺跡の調査は緒についたばかりであり、今後の調査資料の集積を待って明らかにしたい。

#### (注 記)

- 1 (財)大阪文化財センター『龜井・城山』1981年
- 2 (財)大阪文化財センター『近畿自動車道吹田～天理線建設予定地内瓜生堂遺跡他 5 遺跡第 1 次発掘調査報告書』1975年
- 3 本誌所収第 3 章
- 4 八尾市役所『八尾市史』1958年



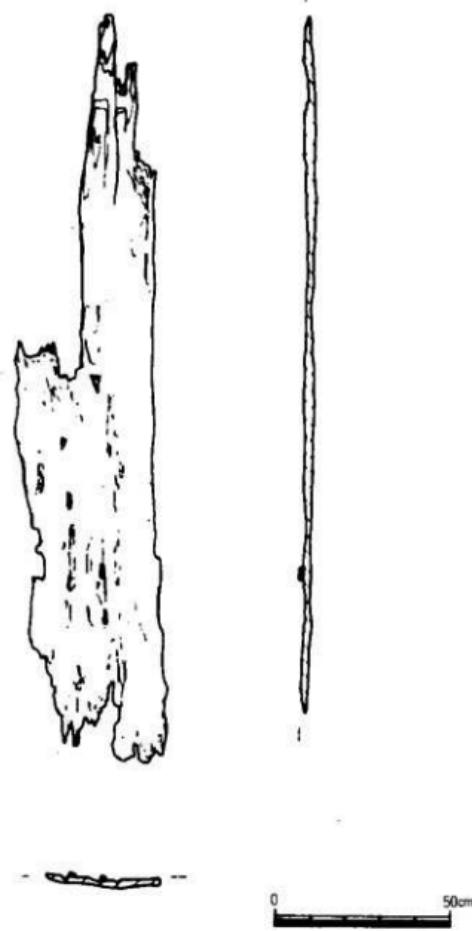


図5 木棺・人骨実測図

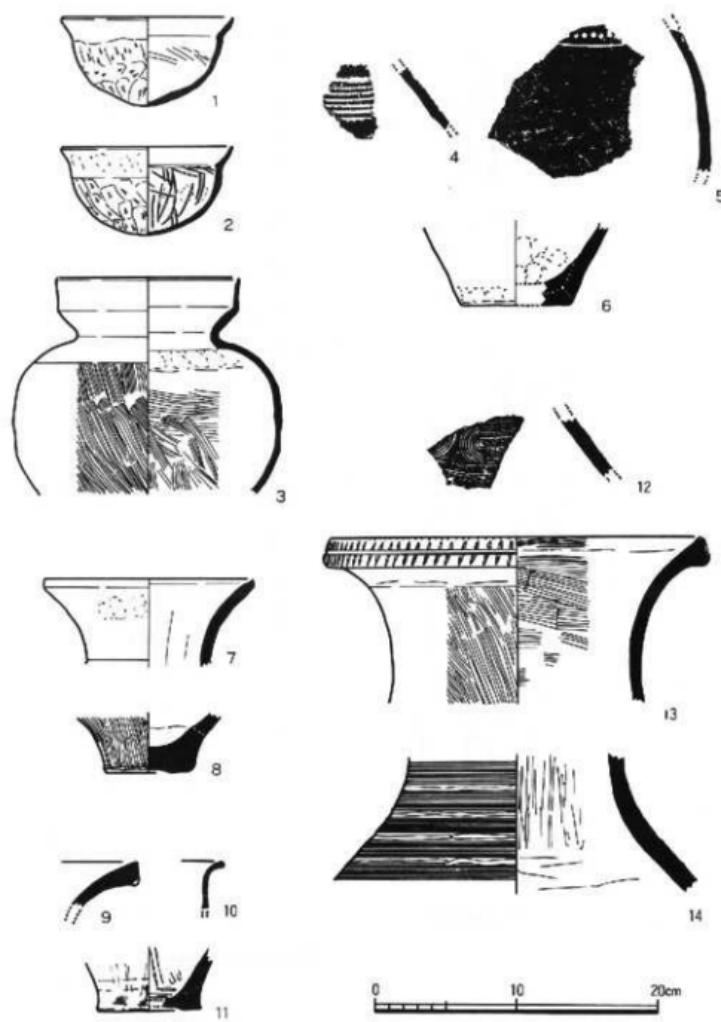
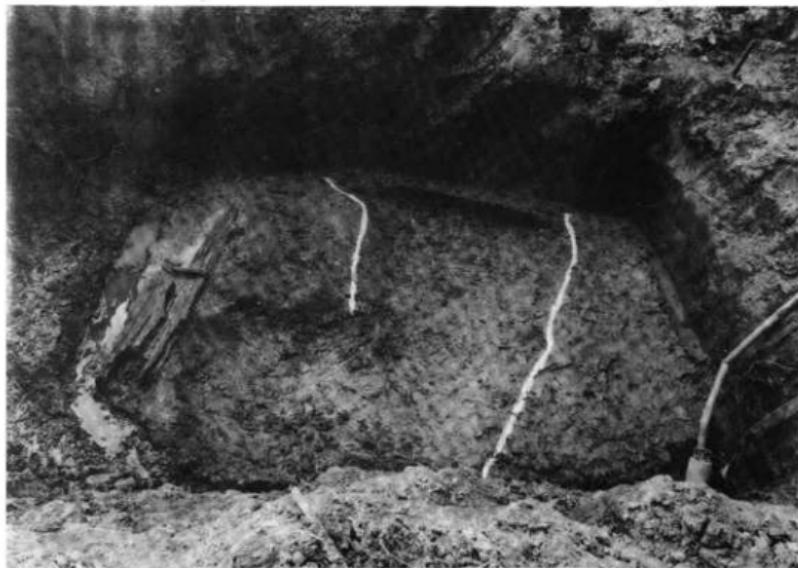


図6 出土遺物実測図

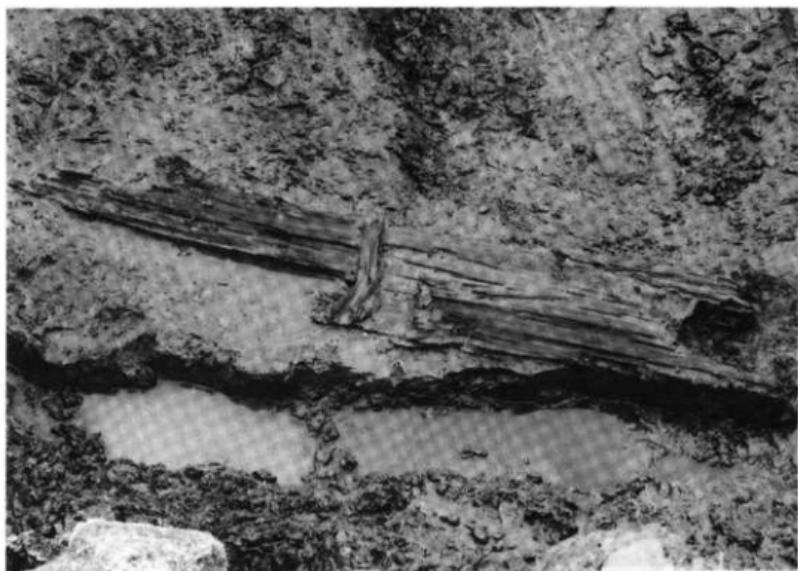
VII 出土遺物観察表

番号	器種 出上位面	法 基(cm)	形 態の特徴	手 法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
1	小鉢鉢 Bグリッド 粘土色粘土	口 径 12.0 高 度 6.3	半球形の体部から内凹きみに外折する口縁部である。 底部は尖りぎみとなる。	外側 口縁部はヨコナデし、体部は全体にヘラケズリを施す。 内側 口縁部をヨコナデし、体部内面は「手」字にナデを行なう。	色調 泥赤褐色 粘土 石英、長石を含む。 焼成 良好
2	小鉢鉢 Bグリッド 粘土色粘土	口 径 12.0 高 度 6.3	1と同様の器形であるが、底部は丸みをおびる。	外側 口縁部はヨコナデし、体部は全体にヘラケズリを施す。 内側 口縁部をヨコナデし、体部内面はナデのあと細かいヘラきを施す。	色調 泥赤褐色 粘土 石英、長石を含む。 焼成 良好
3	壺 Bグリッド 粘土色粘土	口 径 12.9	「く」の字形に丸く彫曲した後、直立する口部に来る。腹部は丸く終わる。 体部は材の虫の虫跡であると思われる。	外側 口縁部および肩部をヨコナデし、それ以下は8条/10.0mmのハケを施す。 内側 口縁部をヨコナデし、肩部は5~6条/10.0mmのハケのあと、肩部上方にナデを行なう。	色調 泥茶灰色 粘土 石英を多く含む。 焼成 良好
4	壺 埋蔵		腹部の破片と思われる。 幅25.0mmの凸筋をつくりその上に5条のヘラ指捺痕を施す。	外側 沈模文様の上下方にナデあるいはヘラミガキを施す。 内側 指捺压痕がみられる。	色調 灰黄色~泥灰色 粘土 チャート、石英を多く含む。 焼成 良好
5	壺 埋蔵		肩部の破片と思われる。 ヘラ指捺痕文間に刺突文を施す。	外側 壁紙を受け不明。 内側 上部に程方向のナデ、下部はヘラミガキを施すと思われる。	色調 泥褐色(外側) 黒色(内側) 粘土 チャート、石英を含む。 焼成 良好
6	壺 埋蔵	底 径 7.5	平底を有する。	外側 ナデと思われる。 内側 指捺压痕が減る。	色調 暗赤褐色(外側) 黑色(内側) 粘土 チャート、石英を含む。 焼成 良好
7	壺 Aグリッド 粘土色粘土	口 径 14.7	外反する口縁部で端部はわずかに上方へ立ち、外側に面をもつ。	外側 指捺痕がわずかに残る、 内側 ヘラ指捺痕と思われる压痕がわずかに残る。	色調 泥灰色 粘土 石英を多く含む。 焼成 やや不良
8	壺 Aグリッド 粘土色粘土	底 径 6.4	中央がわずかに凹む突出平底である。	外側 5条/10.0mmのハケを施す。 内側 表面が剥離を受け不明。	色調 泥赤褐色(外側) 茶灰色(内側) 粘土 チャート、石英、長石を含む。 焼成 良好

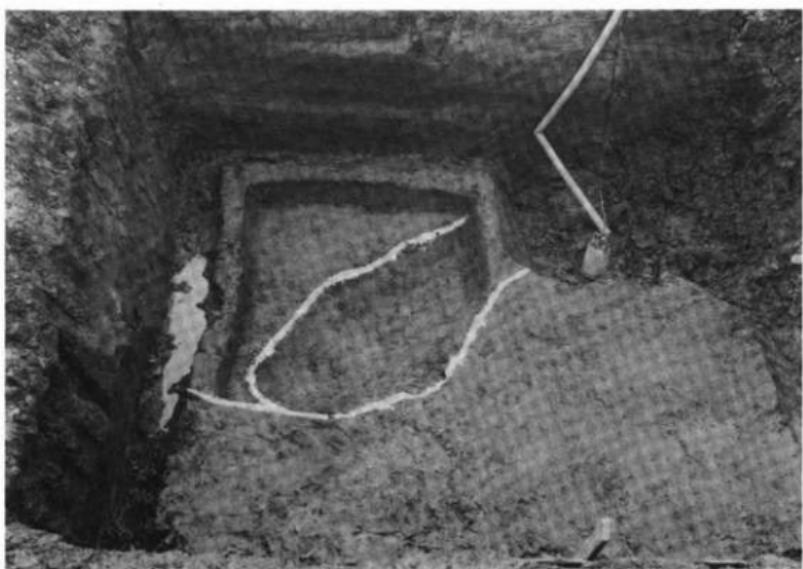
番号	器種 出土位置	法蓋(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
9	甕	C ダリッシュ 下算器横面	大きく外反する赤の口縁部である。 腹部は下方に肥厚し、広い面となる。 口縁下端部にへつによる割み目がみられる。	外面 南部の平川面はナダ。それ以下はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキを施す。	色調 淡茶褐色 胎土 石英・長石・角閃石を含む。 焼成 良好
10	甕	SD 2	丸く彌曲する口縁部で、腹部は外傾する面となる。 器内は済めである。	外面 口縁部と腹部の接合部に指揮压痕がみられる。 内面 壁純を受け不明。	色調 淡水褐色 胎土 石英・長石・角閃石を含む。 焼成 良好
11	甕	底深 7.4 SD 2	中央部がわずかに凹む上昇底状の底盤である。	外面 ヘラナダ。 内面 一部にヘラ模様のこり、全体にナダ。	色調 黒灰色(外面) 茶褐色(内面) 胎土 石英を多く含む。 焼成 良好
12	甕	SD 4	唇部の破片と思われる。 8条/14.5mmを単位とする標榜文を施す。	外面 文様面をヘラミガキする。 内面 ユビナダ。	色調 淡褐色 胎土 石英・石英・角閃石を含む。 焼成 良好
13	甕	II 底 26.6 SD 4	筒形の底盤から外反する口縁部に続く。 腹部は下方に肥厚し、広い面をつくる。 口縁上端部にへつによる割み目、縁間に旋削の割み目のみと、中央部に1条のヘラ模様を施す。	外面 底盤の平坦面はナダ。それ以下はハケを施す。 内面 ハケを施す。	色調 淡茶褐色(外面) 茶褐色(内面) 胎土 石英、チャートを含む。 焼成 良好
14	甕	SD 4	唇部の破片と思われる。 10条/17.0mmを単位とする標榜文を施す。	外面 表板表面にヘラミガキを施す。 内面 上部はヘラミガキ。 下部にナダを行なう。	色調 淡褐色 胎土 石英・長石・角閃石を含む。 焼成 良好



Aグリッド 上層遺構検出状況



同上 木棺検出状況



Bグリッド 上層造構検出状況



Cグリッド 下層造構検出状況



1

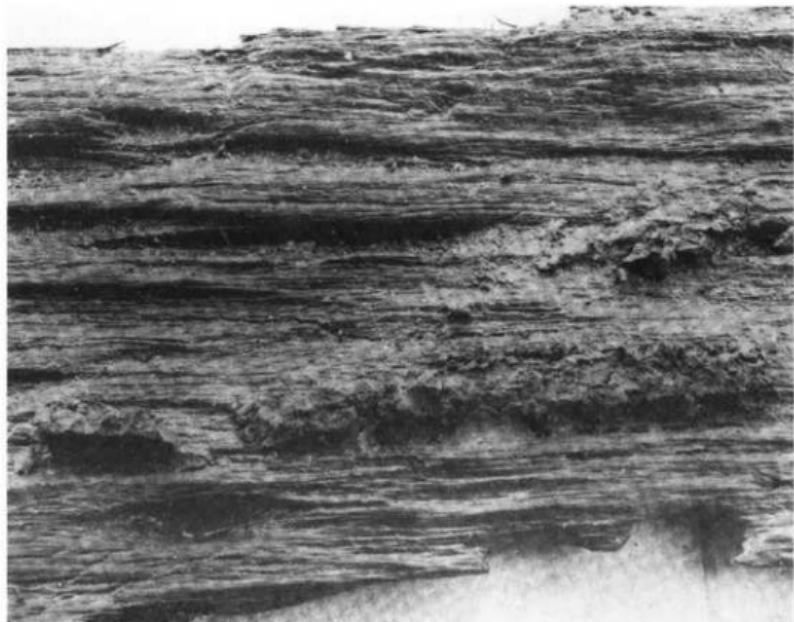


2

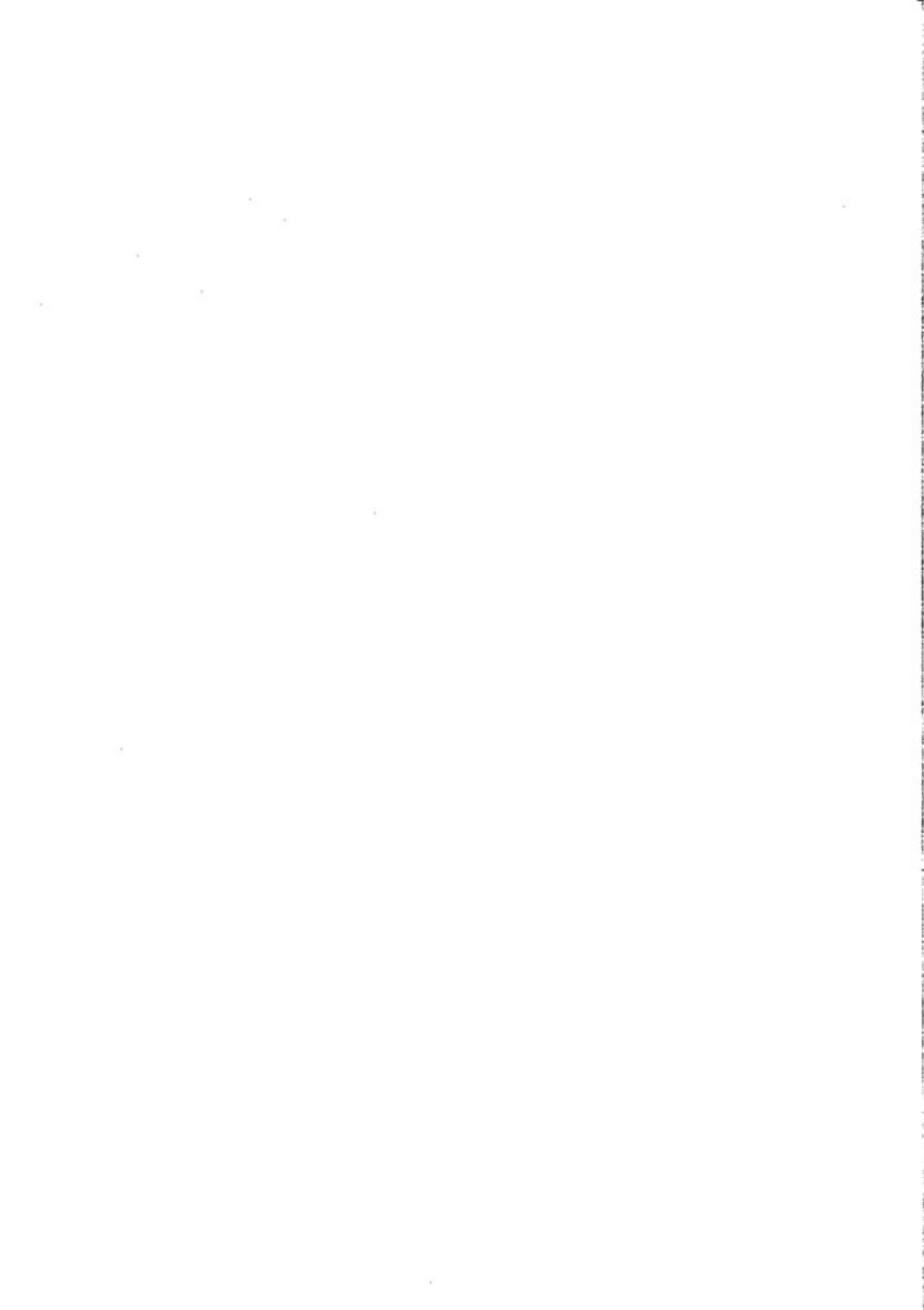


3

B グリッド 灰色粘土 I 層出土遺物



人骨遺存状況



## 第7章 老原遺跡発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、八尾市老原1丁目42番地において実施した、関西電力株式会社社宅建設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年4月20日から5月13日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、八尾市教育委員会文化財室が行ない、高萩千秋・高木真光が現地を担当した。なお、調査にあたっては西村公助・野田雅彦・角花田建設の協力があった。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか米田敏幸(遺物実測)・成海佳子(遺物実測・トレース)が行ない、執筆は高萩千秋・米田敏幸(S E 2出土遺物)が分担した。

## 本 文 目 次

I	遺跡の概要	159
II	調査の概要	159
III	検出遺構	160
IV	出土遺物	162
V	まとめ	165

## 挿図目次

図1 調査区設定図	159
図2 Aグリッド上層平面図	160
図3 Aグリッド下層平面図	161
図4 Bグリッド平面図	162
図5 Cグリッド平面図	162
図6 古墳時代後期の遺物実測図	163
図7 鎌倉時代の遺物実測図	166

## 図版目次

図版1 Aグリッド 遺構検出状況  
同上 SE2 遺物出土状況

図版2 出土遺物

## 第7章 老原遺跡発掘調査概要報告

### I 遺跡の概要

当遺跡は長瀬川左岸に拡がる沖積地の東端部に位置し、古墳時代から鎌倉時代に続く集落遺跡である。遺跡の周辺には長瀬川に沿って、南から東弓削遺跡・田井中遺跡・植松南遺跡・跡部遺跡・久宝寺遺跡などが所在している。  
① ② ③  
④ ⑤

当遺跡は昭和52年に老原2丁目で関西電力株式会社が実施した送電鉄塔建設工事中、古墳時代～鎌倉時代の遺物が出土した記録があるが、その規模や実態は明らかではなかった。今回の調査地は、この地点より約300m東方に位置している。規模を確認する上で、重要な地点であった。

### II 調査の概要

調査地に3ヶ所の調査区を設定し、中央部をAグリッド、東側をBグリッド、西側をCグリッドとし、調査を行なった。

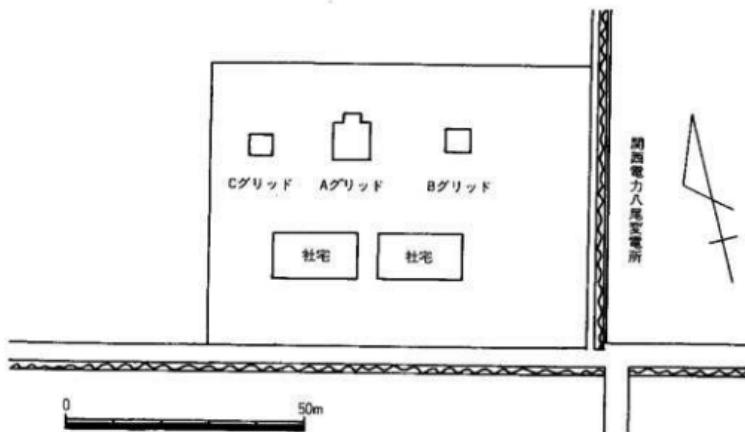


図1 調査地設定図

調査は現地表から盛土、旧耕土、床土までの約80cmを機械掘削し、以下の約30cmを手掘り調査とした。

層序は盛土約60cmの下に第1層旧耕土、第2層床土、第3層灰褐色シルト、第4層茶灰褐色砂粘土、第5層灰色砂礫土(A・Cグリッド)、灰青色シルト(Bグリッド)である。

このうち第3層は中世以降の水田址、第4層は鎌倉時代の整地層となっている。この層の上面から井戸・土器窪・柱穴を検出している。第5層はBグリッドでは古墳時代の生活面となっているが、A・Cグリッドでは古墳時代以前の河川跡と思われ、部厚い粗砂の堆積で多量の湧水がみられる。

### III 検出遺構

#### 1) Aグリッド

調査地の中央部で8×8m、拡張部2×2mのグリッドを設定した。上層から鎌倉時代の井戸2基・柱穴3個・土器窪・溝2条が、下層からは古墳時代後期の上塙が検出された。

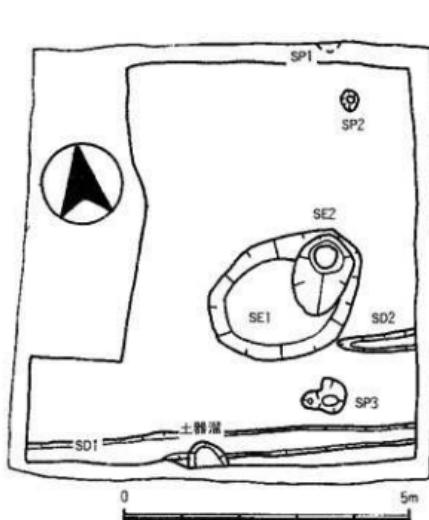


図2 Aグリッド上層平面図

#### 上層

##### S E 1

グリッド中央部で検出した。長径約160cm・短径120cm・深さ60cmを測り、平面は稍円形を呈する浅い素掘りの井戸である。この井戸は古墳時代以前の砂礫堆積層(河川跡)に掘り込まれており、深さに比して湧水量は豊富である。

井戸内から、鎌倉時代の瓦器窪・台付小皿・瓦片等が出土している。

##### S E 2

S E 1が埋められた後、新たに掘られたものである。この井戸は長径156cm・短径96cm・深さ86cmの穴を掘り、内部に井筒を納めるものである。

井筒の構造は、最下段に羽蓋を据え、上段に曲物2個を積み上げたものである。曲物は径46cm・高さ18cm・厚さ0.8cmを測る。井筒内から鎌倉時代の白磁碗、瓦器椀、瓦器小皿、土師質小皿、平瓦、須恵質のすり鉢などが出土している。

#### ピット

3個の柱穴(S P 1～S P 3)を検出した。これらは径20～60cmと不揃いで、規則的な配列は認められなかった。

#### 土器窪

グリッド南隅で検出した。径約60cm・深さ約15cmを測り、円形を呈する土器窪である。遺物は、上部から均整唐草文軒平瓦1点、瓦器小皿(20)、土師質小皿(11～19)等が出土している。

#### 溝

##### 東西方向の2条の溝(SD1・SD2)

を検出した。SD1は幅40cm前後・深さ8cmを測り、SD2は幅25cm前後深さ7cmを測る。

これらは、中世以降の水田耕作に伴なうものと考えられる。

#### 下層

##### SK1

下層の北東隅で検出したが、北東部は調査区外へ至り不明である。現存の最大幅350cm・最小幅280cm・深さ20～30cmを測る。

土坑内西側には径140cm・深さ30cmの落ち込みがあり、その底部には約2cmの厚さで炭化物が堆積する。

遺物としては、古墳時代後期の土師器杯・高杯・壺・甕、須恵器蓋杯・高杯などが多く出土しているが、この土坑の性格は不明である。

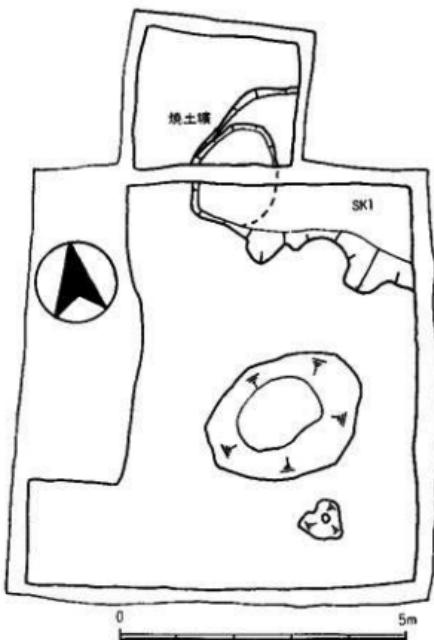


図3 Aグリッド下層平面図

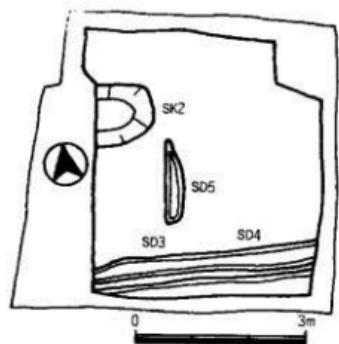


図4 Bグリッド平面図

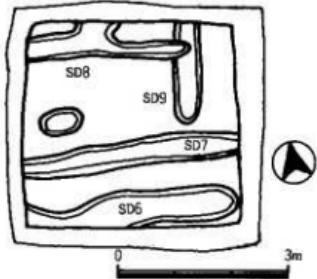


図5 Cグリッド平面図

## 2) Bグリッド

Aグリッドから東へ20mの地点に $5\times 5\text{m}$ のグリッドを設定した。グリッド内では土塙・溝を検出した。

### SK2

径約100cm・深さ約40cmを測る。遺物は出土しなかった。肩位からみて所蔵時期は鎌倉時代と推定されるが、性格は不明である。

### 溝

3条の溝(SD3～SD5)を検出した。これらはAグリッドで検出された溝と同じく、中世以降の耕作に伴なうものようである。

## 3) Cグリッド

Aグリッドから西15mの地点に、 $4.5\times 4.5\text{m}$ のグリッドを設定した。遺構として4条の溝を検出した。

### 溝

東西方向のもの3条(SD6～SD8)、南北方向のもの1条(SD9)である。いずれも幅40cm前後、深さ7cmほどの規模で、A・Bグリッドの溝と同じく、中世以降のものであろう。

## IV 出土遺物

出土遺物については、Aグリッドのものが多数を占め、B・Cグリッドでは細片が若干出土したのみである。遺物は古墳時代後期のものと、鎌倉時代のものに大別される。

### 1) 古墳時代後期

この時期の遺物として、AグリッドSK1から出土した土師器・須恵器、包含層から出土した土錐などがある。

#### 土師器

杯(1～3)：口縁部が2段に屈曲する(1・2)と直口の(3)が出土した。(1)は口径13.6cmを測る。口縁部は直立した後外反し、端部は上方へ尖りざみに終わる。(2)は口径16cmを測る。

口縁部はやや内弯ぎみに直立した後外反し、端部は丸く終わる。ともに内外面をヨコナデ調整する。(3)は口径13.8cm・器高6.6cmを測る。口縁端部はやや内傾する面をもつ。底部は丸味をおびた平底である。体部は指圧ナデ、口縁部はヨコナデ調整を行なう。

高杯(4)：口径16.4cm・杯部高5cmを測り、脚部を欠損する。杯底部より内弯ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は丸く終わる。外面杯底部と口縁部の境には、丸みのある段をなす。内外面をヨコナデ調整する。

盞(5)：口径8.6cmを測る。肩部から急に縮まり、斜めに拡がる長い口頭部をもつ。口縁端部は丸く終わる。外面には縱方向のヘラミガキ、内面には指圧ナデを施し、口縁端部にはヨコナデを行なう。

盞(6)：口径14.6cmを測る。口縁部は「く」の字形にゆるく外反し、端部はつまみ上げている。体部はゆるやかに内弯する。調整は接合部を指圧ナデの後、体部外面に縱方向のハケ、口縁部内外面にはヨコナデを施す。

#### 須恵器

蓋杯(7・8)：いずれも蓋である。(7)は口径13cm・器高7.8cmを測る。口縁部は垂直に下りながらわずかに外反ぎみとなり、丸く終わる端部に至る。天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを行なう。(8)は口径13.8cm・器高5cmを測る。口縁部はやや内弯しながら垂直に下

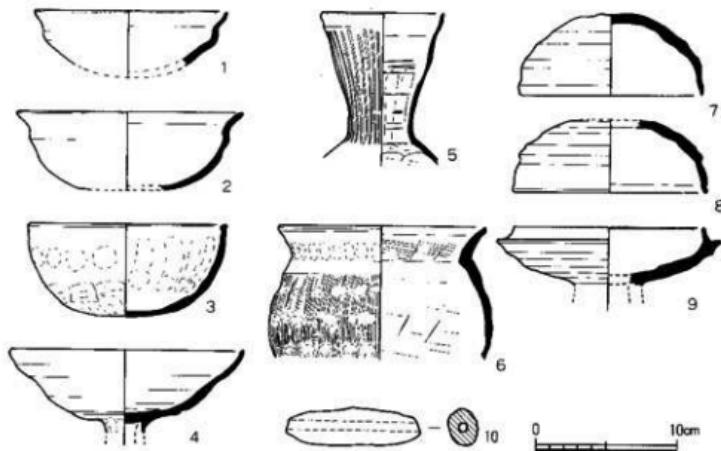


図6 古墳時代後期の遺物実測図

り、わずかに外反して丸く終わる端部に至る。退化した稜をもつ。天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを行なう。

有蓋高杯(9)：口径13.6cm・杯部高4cmを測る。口縁部は短かく内傾し、端部は内傾する凹面となる。受部はほぼ水平にのび、底部は浅く平らである。杯部外面下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを行なう。

#### その他

土鍵(10)：径2.6cm・長さ9.6cmを測る。径0.6cmの孔を穿っている。

## 2) 鎌倉時代

この時期の遺物としては、土器溜・井戸から大半が出土している。その種別は瓦器碗、瓦器小皿、羽釜、土師質小皿、白磁碗、瓦、瓦質土器、木製品などである。

### 土器溜出土遺物

遺物は多数が土師質小皿で、他に瓦器小皿(20)、均整唐草文軒平瓦などが出土している。

土師質小皿(11～19)：口縁部の形態により、3形態に分類できる。Aタイプ(15・16)は口縁部と体部の境に稜をもつ。Bタイプ(11)は口縁部が外上方に直線的に立ち上がる。Cタイプ(12～14・17～19)は平坦な底部からゆるやかなカーブを描き、外上方に内弯しながら立ち上がるものである。さらに底部の形態や口径から、A・Cタイプは2種に細分することができる。

### S E 2 出土遺物

遺物は、井筒外と井筒内で2時期に分けることができる。

瓦器碗(21～27)：井筒外出土のもの(21・22)は、断面三角形の高台より上方へ内弯し、口縁部へ至る。口縁端部は丸く終わる。外面は口縁部ヨコナデ、以下に指頭ナデを行なった後、粗めのヘラミガキを上半部に施す。内面は見込みに平行暗文、他はやや密なヘラミガキを施す。これらの瓦器碗は、高台の形状やヘラミガキの相様から、「挾山編年」のVI期に位置づけることができる。<sup>⑥</sup>

井筒内出土のもの(23～27)は、断面方形ないし三角形の低い高台より内弯し、口縁部へ続く。口縁端部はやや外反ぎみに終わる。外面は口縁部を強くヨコナデし、下方に指頭ナデを行なう。外面のヘラミガキは、口縁部付近にわずかに施される程度である。内面は見込みに平行ないし格子状の暗文を施し、他はやや粗いヘラミガキを施す。暗文やヘラミガキは(21・22)に比べやや粗雑で、器形も浅めのものが目立つ。これらはその特徴から、「挾山編年」のV期に位置づけられるものである。

瓦器小皿(28・29)：ともに井筒内出土である。外面は口縁部付近をヨコナデ、底部は指頭ナデで調整する。内面は見込みに平行・不定方向の暗文を施すが、どちらも粗雑である。

ここにみられる瓦器類は、その出土位置によって若干の型式差がみられ、それがこの井戸の掘削時と廃絶時との時間差を示している。しかし、同一井戸内の資料であり、両者にさほど大きな時間差が存在するとは考え難い。

白磁碗(30)：井筒内出土のもので、前述の「浜山編年」V期の瓦器碗に共伴する資料である。口径18.0cm・高台径6cm・器高6.8cmを測る。高台は高く規則直立し、碗底部に回転ヘラ切り痕がみられる。体部は内夷ぎみに上外方へのび、口縁部へ続く。口縁端部はわずかに外反し、平らな面で終わる。外面は口縁部付近まで回転ヘラケズリを行ない、内面は見込み部に沈線状の浅い段をもつ。釉は内面および外面の高台のやや上方まで施され、高台付近は露胎となっている。釉層は全体に薄く、釉調は黄色味をおびた乳白色を呈する。

この白磁碗の形態的特徴は「大宰府分類」の白磁碗V類に属し、11世紀以後に出現する器形であるとされている。<sup>⑦</sup>

## V まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の土塙、鎌倉時代の井戸・柱穴・土器窯、鎌倉時代以降の溝が検出された。遺跡の規模や実態については充分に把握できるものではなく、井戸・柱穴などの遺構によって、住居址および集落の一画に触れたに過ぎない。しかし、周辺に古墳時代と鎌倉時代の集落跡の存在することが認められたわけで、今回の調査の意義は大きい。

### 〔注 記〕

- 八尾市教育委員会「東弓削遺跡」「八尾市文化財調査報告3」1976年
- 大阪府『大阪府史』1978年
- 本誌所収第2章
- 本誌所収第6章
- 八尾市教育委員会「久宝寺遺跡」「昭和51・52年度埋蔵文化財発掘調査年報 八尾市文化財調査報告4」1979年
- 大阪府教育委員会「浜山遺跡・軒里遺跡発掘調査概要」1978年
- 横田賛二郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」「九州歴史資料館研究論集4」1978年

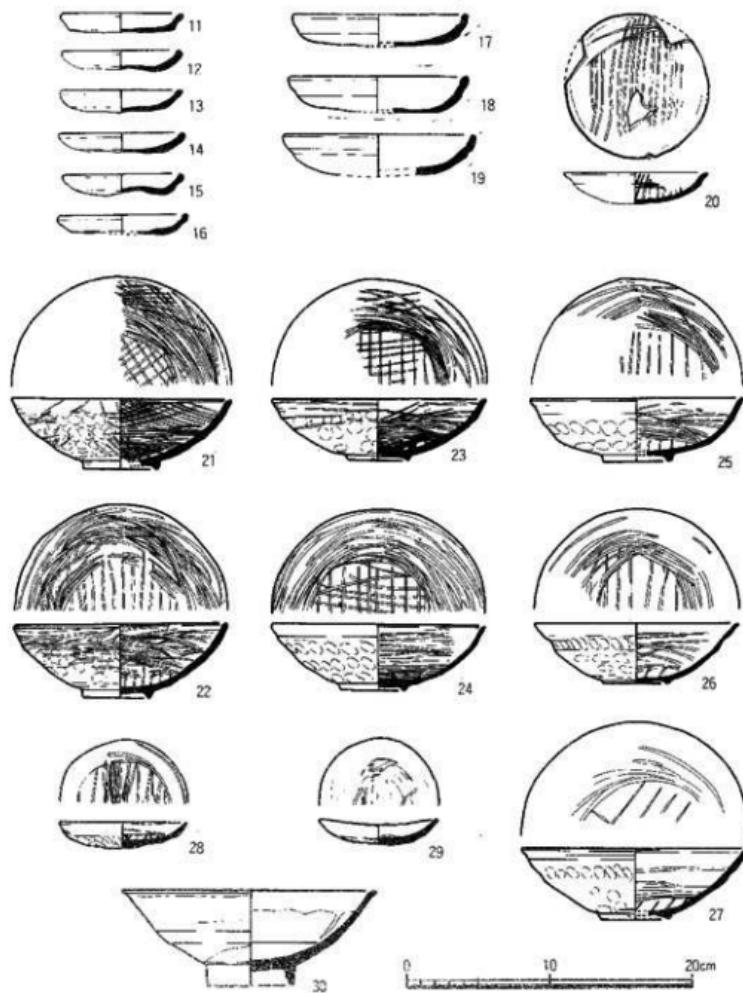
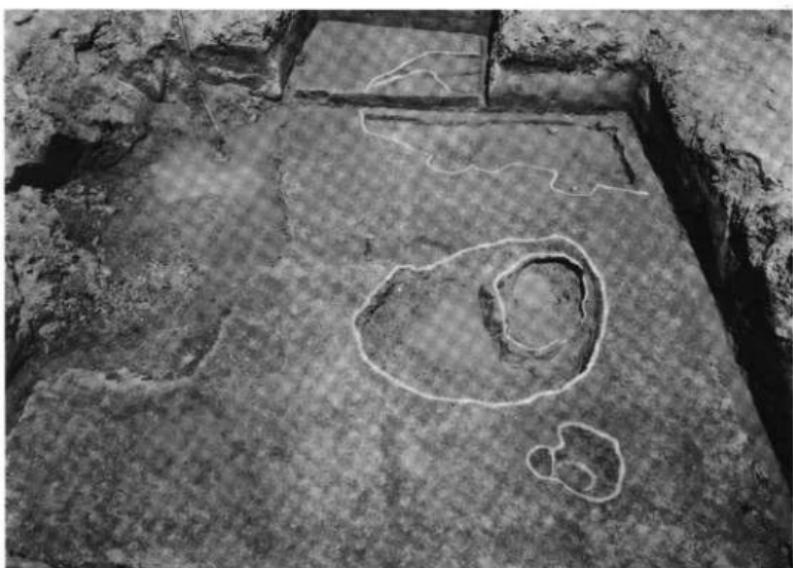


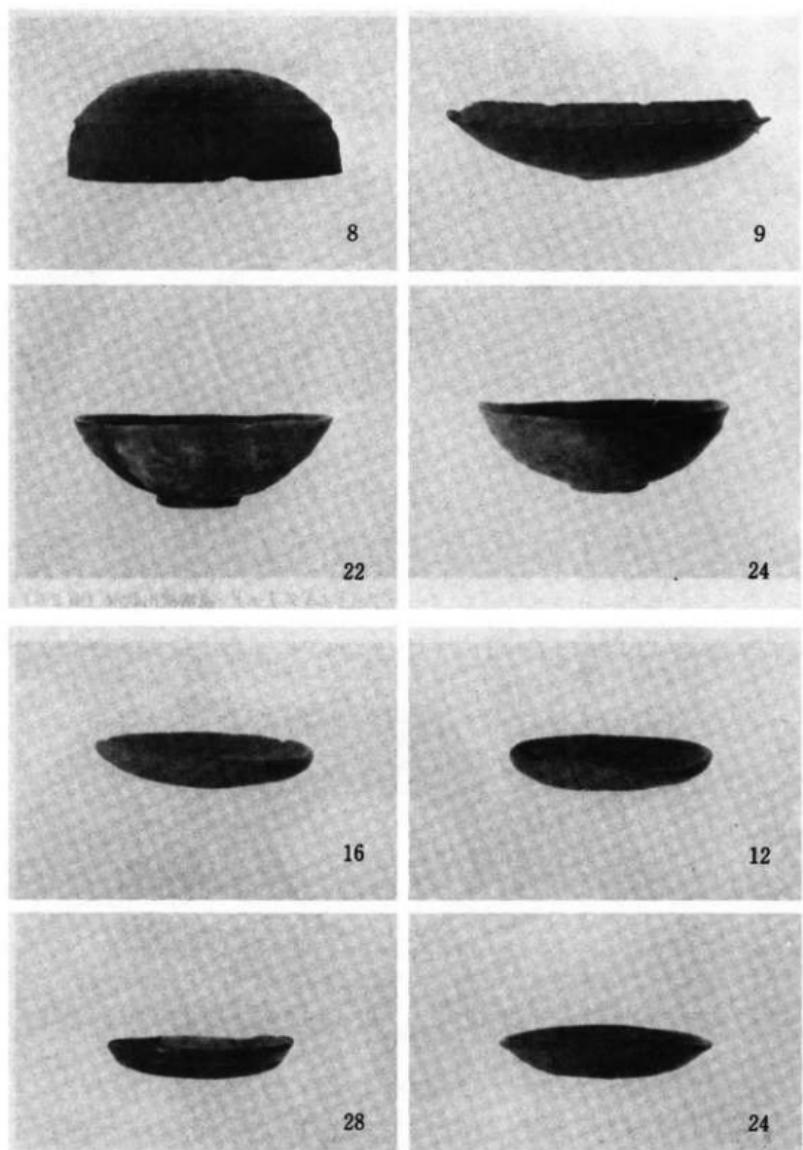
図7 鎌倉時代の遺物実測図



Aグリッド 遺構検出状況（南より）



同上 SE 2 遺物出土状況（東より）



出土遺物

## 第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、八尾市桜ヶ丘・北本町・光町において昭和56年度に実施した東郷遺跡の概要報告である。東郷遺跡は昭和55年度に桜ヶ丘3丁目8-1・8-9で実施した発掘調査を第1次調査とし、以後調査順に第2次・第3次…と付称している。なお調査地の詳細は文中の一覧表で明示する。

1. 発掘調査は八尾市教育委員会文財室が行ない、第2次(米田敏幸・原田昌則)、第3次～第5次(高萩千秋・高木真光)、第6次(白神典之・森田実)、第8次～第10次(高萩千秋)が現地を担当した。

なお、調査にあたっては、西村公助・駒沢牧・中野慶太・西辻正信・田中義紀・浅井賢一・北尾耕三・山西嘉彦・㈱大林組・㈱奥村組・㈱大永土木・㈱辻本工務店・㈲花田建設・㈱美濃部建設の協力があった。

1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか、西村公助・野田雅彦・中野慶太・西辻正信・田中義紀・中野健太郎・山上弘・張本洋一(遺物実測)、成海佳子・酒井雅代・中谷聖子(トレス)が行ない、執筆は第2節米田敏幸、第3節～第5節高萩千秋(遺構)・高木真光(遺物)、第6節白神典之・森田実、第7節～第10節高萩千秋(遺構)・高木真光(遺物)が分担した。

## 本　文　目　次

第1節　遺跡の概要 .....	179
第2節　第2次調査 .....	183
I　調査の概要 .....	183
II　検出遺構 .....	183

III 遺物観察表	185
 第3節 第3次調査	186
I 調査の概要	186
II 層序	187
III 遺構・遺物	187
IV 遺物観察表	190
 第4節 第4次調査	198
I 調査の概要	198
II 層序	198
III 遺構・遺物	194
IV 遺物観察表	203
 第5節 第5次調査	206
I 調査の概要	206
II 層序	206
III 遺構・遺物	207
IV 遺物観察表	227

第6節 第6次調査 .....	241
I 調査の概要 .....	241
II 層序 .....	241
III 検出遺構 .....	242
IV 出土遺物 .....	244
V まとめ .....	245
VI 遺物観察表 .....	252
第7節 第8次調査 .....	261
I 調査の概要 .....	261
II 層序 .....	261
III 遺構・遺物 .....	262
IV 遺物観察表 .....	280
第8節 第9次調査 .....	284
I 調査の概要 .....	284
II 層序 .....	285
III 遺構・遺物 .....	285
IV 遺物観察表 .....	299

第9節 第10次調査	309
------------	-----

I 調査の概要	309
II 層序	310
III 自然河川および出土遺物	310
IV 古墳時代前期の遺構・遺物	312
V 中世の遺構・遺物	312
VI 遺物観察表	314

第10節 まとめ	315
----------	-----

I 検出遺構について	315
II 出土遺物について	317

## 挿 図 目 次

<第1節>

図1 調査地概要図	181~182
-----------	---------

<第2節>

図2 平面図	188
--------	-----

図3 出土遺物実測図	188
------------	-----

<第3節>

図4 調査地設定図	186
-----------	-----

図5 水田出土遺物	187
-----------	-----

図6 平断面図	188
---------	-----

図7 出土遺物実測図	189
------------	-----

<第4節>	
図8 調査地設定図	198
図9 水出遺構平断面図	194
図10 S E 1 平断面図	195
図11 S E 2 平断面図	195
図12 S E 3 上層平面図	196
図13 S E 3 下層平断面図	197
図14 砥石実測図	197
図15 第2・第3遺構面平面図	199
図16 断面図	200
図17 出土遺物実測図	201
図18 S E 3 出土遺物実測図	202
<第5節>	
図19 調査地設定図	206
図20 S I 1 平断面図	207
図21 S B 1 平断面図	207
図22 S E 2 平断面図	208
図23 S E 1 平断面図	211
図24 S E 2 平断面図	211
図25 S E 4 平断面図	212
図26 S E 5 平断面図	212
図27 S D 6 平断面図	214
図28 S D 9 平断面図	214
図29 平面図	217
図30 断面図	218
図31 出土遺物実測図1	219
図32 出土遺物実測図2	220
図33 出土遺物実測図3	221
図34 出土遺物実測図4	222
図35 出土遺物実測図5	223
図36 出土遺物実測図6	224

図37 出土遺物実測図 7	225
図38 出土遺物実測図 8	226
<第6節>	
図39 調査地設定図	241
図40 S E 1 出土木製品	242
図41 平断面図	247
図42 A レンチ出土遺物実測図	248
図43 B レンチ出土遺物実測図 1	249
図44 B レンチ出土遺物実測図 2	250
図45 B レンチ出土遺物実測図 3	251
<第7節>	
図46 調査地設定図	261
図47 S I 1 平断面図	262
図48 S I 2 平断面図	263
図49 S B 1 平断面図	264
図50 S B 2 平断面図	264
図51 S B 3 平断面図	265
図52 S B 4 平断面図	265
図53 S B 5 平断面図	266
図54 S B 6 平断面図	266
図55 S B 7 平断面図	266
図56 S B 9 平断面図	267
図57 S K 2 · S K 3 平断面図	268
図58 S K 10 平断面図	270
図59 S D 1 平面図	271
図60 S P 1 平断面図	274
図61 横列平断面図	275
図62 平面図	276
図63 断面図	277
図64 出土遺物実測図 1	278
図65 出土遺物実測図 2	279

<第8節>

図66 調査地設定図	284
図67 SK2 平面図	285
図68 SK3 平面図	286
図69 SE1 半断面図	288
図70 SE2 半断面図	289
図71 平面図	292
図72 断面図	293
図73 出土遺物実測図1	294
図74 出土遺物実測図2	295
図75 出土遺物実測図3	296
図76 出土遺物実測図4	297
図77 出土遺物実測図5	298

<第9節>

図78 調査地設定図	309
図79 自然河川出土木製品	310
図80 平面図	311
図81 自然河川断面図	311
図82 出土遺物実測図	313

## 挿 表 目 次

表1 東郷遺跡発掘調査一覧表	188
表2 井戸内遺物出土状況一覧表	317
表3 タタキの幅について	319

## 図版目次

図版1 東郷遺跡周辺航空写真	〈第5次調査〉
〈第3次調査〉	
図版2 第1トレンチ 沼沢地検出状況	図版12 第1調査区 遺構検出状況
第2トレンチ 水田址検出状況	同上 SE1 遺物出土状況
図版3 第3トレンチ 水田址検出状況	図版13 第2調査区 遺構検出状況
同上 水田畔断面	同上 SK5
図版4 沼沢地出土遺物	図版14 第2調査区 SE2
〈第4次調査〉	
図版5 第1調査区 第3遺構面検出状況	図版15 第3調査区 S11
同上 SE2	同上 SE3
図版6 第2調査区 第3遺構面検出状況	図版16 第3調査区 SE4 上層遺物出土状況
同上 SE3	同上 SE4 完掘
図版7 第2調査区 第2遺構面検出状況	図版17 第4調査区 遺構検出状況
同上 SE3 上層	同上 SD9 遺物出土状況
図版8 第3調査区 沼沢地検出状況	図版18 SE1・SE2・SE4・SE5
第1調査区 水田址検出状況	出土遺物
図版9 第2調査区 水田址検出状況	図版19 SE5・SD9 出土遺物
第3調査区 水田址検出状況	
図版10 SE2・SE3 出土遺物	図版20 SD9 出土遺物
〈第6次調査〉	
図版11 SE3 出土砾石・木製品	図版21 SD9・SD10・SK10 出土遺物
	図版22 Aトレンチ
	Bトレンチ
	図版23 Bトレンチ SK1 完掘
	Bトレンチ 包含層遺物出土状況
	図版24 Bトレンチ 出土遺物

〈第8次調査〉

- 図版25 第1調査区 遺構検出状況  
第2調査区 遺構検出状況
- 図版26 第1調査区 S I 1  
同上 S I 2 検出状況
- 図版27 第1調査区 S B 2  
第1調査区 S B 8
- 図版28 第1調査区 S B 3・S B 4  
第1調査区 S B 3 柱根検出状況
- 図版29 第1調査区 S B 5  
第1調査区 S B 6
- 図版30 第2調査区 S B 9  
第1調査区 S K 10
- 図版31 第1調査区 柱穴列  
同上 S D 1 検出状況
- 図版32 S P 1・S B 7・S K 9・包含層出土遺物

〈第9次調査〉

- 図版33 遺構検出状況  
S K 2
- 図版34 S K 2 遺物出土状況  
S K 3 遺物出土状況
- 図版35 S E 1 遺物出土状況  
S E 1 光掘
- 図版36 S E 1 下層遺物出土状況  
S E 2 光掘
- 図版37 S K 2・S E 1・S E 2 出土遺物
- 図版38 S E 1 出土遺物
- 〈第10次調査〉
- 図版39 調査地全景  
遺構検出状況
- 図版40 自然河川上層遺物出土状況  
同上 下層遺物出土状況
- 図版41 自然河川出土遺物



## 第8章 東郷遺跡

### 第1節 遺跡の概要

東郷遺跡は、八尾市東本町・北本町・光町・桜ヶ丘一帯に所在する弥生時代から中世に至る複合遺跡である。当遺跡は現在八尾市の中枢部に位置し、古くは河内国若江郡に属し、地形的には楠根川と長瀬川に挟まれた沖積地に立地している。

楠根川や長瀬川等の河川は、大和川や石川の豊かな水をこの地域に送り、幾多の氾濫をくり返しながら肥沃な土壤を形成してきた。このように、河内低平地における集落遺跡は、豊かな土壤を経済基盤の背景として、発展し続けた跡をとどめている。

同じ沖積地上には、多くの遺跡が分布している。東方に小阪合遺跡、西方には古墳や住居址等が検出されている佐堂遺跡があり、また南方には古墳時代前期の土器や埴輪等が多量に出上<sup>①</sup>する中田遺跡および東弓削遺跡、北方には弥生時代前期から続く山賀遺跡や、弥生時代中期の方形圍溝墓群で知られる瓜生堂遺跡があり、この沖積地が河内地方の中でも、比較的早くから開けた地域であることが理解できよう。

当遺跡の発見は昭和46年4月、八尾市東本町2丁目(東郷光明寺裏付近)で水道管敷設工事中、地表下約1.5mで墨書き人面土器等が出土したことに端を発するが、それ以後近鉄線高架工事<sup>②</sup>や下水道工事等で若干の遺物包含層の存在が確認された以外、実態は明らかではなかった。しかし、昭和55年1月、桜ヶ丘3丁目でマンション建設に伴なう事前調査において、古墳時代から中世に至る土塙・井戸・柱穴等の遺構や、それらに伴なう遺物を検出したことから、当遺跡が広範囲に亘ることが確認できた。

当遺跡は古代から河内と大和を結ぶ交通の要所であったが、前述のように現在も八尾市における行政や経済、交通機関等の中枢部である。近年の急激な開発に伴ない、市域の多くの遺跡は破壊、または消滅の危機に瀕し、特に当遺跡の位置する近鉄八尾駅前の開発は急激に進んでいる。この貴重な遺跡の歴史的価値を多くの人々に知らしめるため、当市教育委員会では遺跡指定区域内の開発事業に対し、申請者と協議を重ね、多くの人々の努力によって、試掘調査や発掘調査を実施している。

なお、当遺跡における昭和56年度事業の発掘調査は9件であり、調査面積は延べ2030m<sup>2</sup>におよぶ。調査区の地番・申請者・申請面積・申請目的等については、次ページの一覧表の通りである。

表1 東郷遺跡発掘調査一覧表

付称	調査地	調査面積	申請者	調査期間	目的	備考
第2次	桜ヶ丘3丁目7-8-1	9町	中西 義弘	4月15日	店舗付住宅	第2節
第3次	光町1丁目69-2	64	木村 悅夫	4月13日～ 4月15日	貸ビル	第3節
第4次	北本町2丁目145-12	125	木村 悅夫	5月13日～ 5月26日	#	第4節
第5次	光町1丁目88	196	岡田 徳一	6月8日～ 7月7日	#	第5節
第6次	桜ヶ丘2丁目9他	40	大阪府民生部保険課長 富国生命相互会社	7月25日～ 8月8日	社会保険事務所廈舍	第6節
第7次	桜ヶ丘3丁目	200	大阪東月星支社	9月21日～ 10月31日	社屋	整理中
第8次	光町2丁目156	565	日本生命相互会社	10月15日～ 12月4日	貸ビル	第7節
第9次	光町1丁目47	210	西岡 正雄	12月4日～ 12月23日 昭和57年 2月1日～ 3月12日	#	第8節
第10次	光町2丁目17	621	藤井 勉		#	第9節

## 〔注記〕

- 1 八尾市役所「八尾市史」1958年
- 2 八尾市教育委員会「昭和51・52年度埋蔵文化財発掘調査年報」1977年
- 3 中田遺跡調査会「中田遺跡調査概要」1973年
- 4 八尾市教育委員会「東弓削遺跡」『八尾市文化財調査報告3』1975年
- 5 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター「山賀遺跡現地説明会資料1」1981年
- 6 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡」1971年

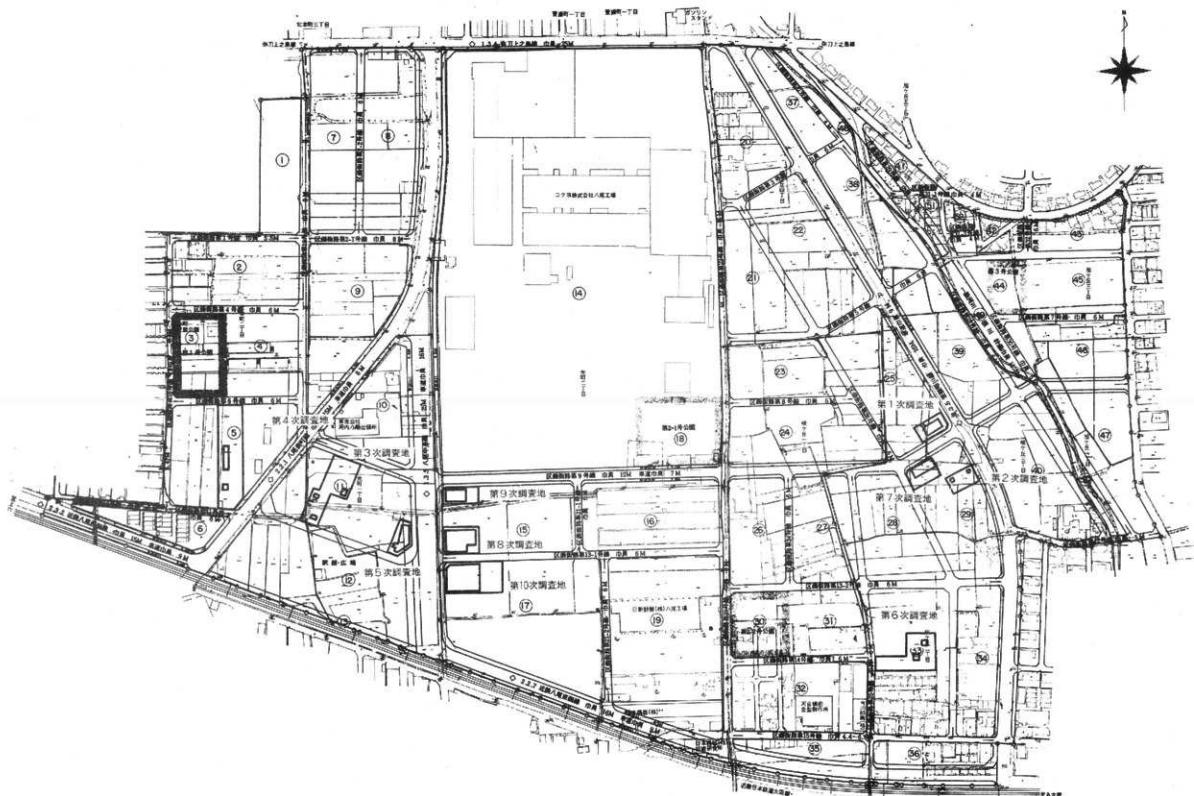


図1 調査地概要図

## 第2節 第2次調査

### I 調査の概要

調査地は八尾市桜ヶ丘3丁目に所在し、第1次調査地の南方50mに位置する。調査は個人住宅の建築工事に伴なって実施したもので、350m<sup>2</sup>の敷地に3×3mの調査区を2ヶ所設定した。調査の結果、西側の調査区から古墳時代と平安時代の遺構を検出したが、東側の調査区では後世の搅乱が著しく、遺構の検出はできなかった。ここでは西側調査区の概要を記す。

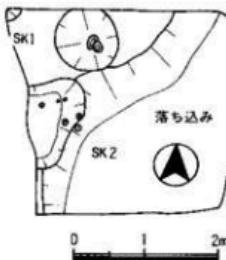


図2 平面図

### II 検出遺構

検出した遺構は古墳時代の土塹、平安時代の落ち込みである。これらは、III耕土下50cmの黄褐色シルト粘土をベースにしており、上面に被る約40cmの包含層を取り除いたところで検出した。

#### SK1

径90cm・深さ30cmの円形の平面を呈する土塹で、断面はすり鉢状である。埋土内より若干の須恵器片と土師器片が出土している。

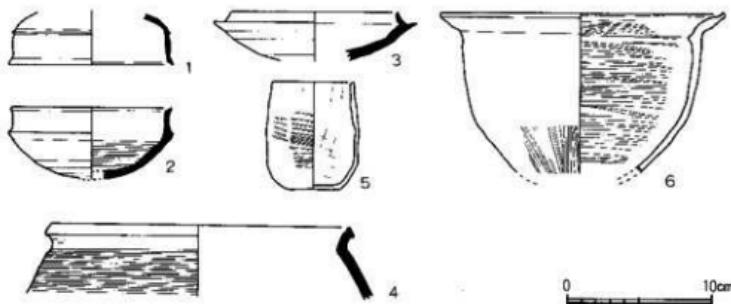


図3 出土遺物実測図

## SK 2

幅120cm・深さ34cmを測る土塙であるが、一部を検出しただけである。埋土には木炭が多くみられ、須恵器片や土師器片の他、製塩土器が出土している。

## 落ち込み

調査区東半は西側より30cmほど落ち込んでおり、ここから瓦や宋銭等が出土している。

(注 記)

- 八尾市教育委員会『八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要』1981年

### III 出土遺物觀察表

番 号	種 類 出土地点	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色 調 ・ 地 土 ・ 施 成 ・ 備 考
1	苦6(透)	口 径 11.6	丸味を持った天井部より俊をなし、 邊辺におりる口縁部に至る。口縁部は外折し、内側に縫を有する。	天井部欠損、天井洞部より口縁部ま で内外面とも回転ナガ	色調 淡灰色 地土 砂粒を多く含む。 施成 良好 備考 天井部に灰付痕。
	SK 2				須恵器
2	苦6(分)	口 径 11.5	丸味を持つ深い杯底部より鋭い棱を なして直面に立ち上り口縁部に至る。 口縁部は内縮する。	外面 杯底部は均回転ヘラケズリ。 口縁部までは回転ナガ 内面 杯底部は回転ナガ	色調 淡灰色 地土 細密 施成 良好 備考 口縁部外側に灰付痕。
	SK 2				須恵器
3	紫(分)	口 径 11.6	低い手す杯底部より上外方へのびる棱 を有し、内傾して立ち上る細かい 口縁部を有する。	外面 杯底部は全底回転ヘラケズリ。 先は回転ナガ 内面 回転ナガ	色調 淡灰色 地土 砂粒を多く含む。 施成 良好 備考 杯底部外側に灰付痕。
	SK 2				須恵器
4	紫	口 径 21.0	ふくらんだ胸部より弧曲して外反する も細かい口縁部を有する。口縁部は内 傾する平坦面を有する。	外面 胸部は回転カキ目直面堅、口縁 部は回転ナガ 内面 回転ナガ	色調 丸灰色 地土 細密 施成 やや不良
	SK 2				須恵器
5	製塙七器	口 径 5.6	やや高い底部より丸みを持って立ち上 がり内傾さみに口縁部に至る。	外面 横方向の平行切き目がわざか に認められる。 底部付近横方向のナゲ、柄は 縱方向ナガで口縁附近に統り 目が認められる。	色調 黄褐色 地土 石英・長石・花崗岩の 砂礫を多く含む。 施成 やや良
	SK 2				
6	製塙七器	口 径 19.9	丸く深い体部より弧曲して外反する 口縁部を有する。口縁部はわずか に上に更厚する。	外面 体部下半横方向ハケ、他はナ ゲ 内面 横方向ハケナガ	色調 淡褐色 地土 砂れ・石英・基母の他 チャートを含む。基母 は多い。 施成 良好
	SK 2				

### 第3節 第3次調査

#### I 調査の概要

調査地は八尾市光町1丁目に所在し、当遺跡推定範囲の中央部に位置する。調査地に3ヶ所のトレンチを設定し、調査を実施した。各トレンチは南側より第1トレンチ(4×5m)、第2トレンチ(4×5m)、第3トレンチ(4×6m)と付称し、順次調査を行なった。調査面積は延べ64m<sup>2</sup>、調査期間は昭和56年4月13日から4月15日までである。

調査方法は現地表(O P + 9.20m)から盛土・旧耕土・床土までを機械掘削し、以下は入力掘削によつた。最終的に層序を確認するために、幅および深さ1mの小トレンチを機械掘削し、調査を終了した。

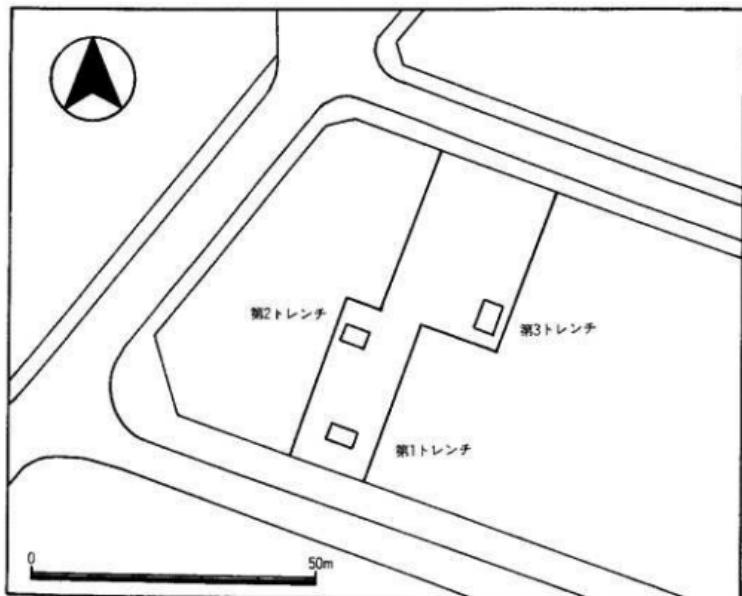


図4 調査地設定図

## II 層序

盛土を除去すると第1層IH耕土、第2層青灰色粗砂土(床土)、第3層暗茶灰褐色粗砂土、第5層灰青色微砂土、第6層暗茶灰色粘土、第7層暗灰色粘土、第8層青灰色粘土、第9層灰色粘土、第10層淡灰青色粘土の基本層序である。

このうち第3層～第5層は中世以降に堆積した土層で、第6層上面が水田面である。その下の第7層～第10層が古墳時代前期頃までの沼沢地と思われる。

## III 遺構・遺物

### 1) 中世の水田

全トレンチにわたって検出した第6層暗茶灰色粘土の上面は、畦畔や足跡を伴なう中世の水田遺構である。

畦畔は東西方向のもの2本を検出した。第2トレンチ南北隅のものは幅30cm以上・高さ10cmで、第3トレンチ南北側のものは幅60cm・高さ10cmを測る。畦畔は暗灰褐色粘土で、水田の土層とは同質である。



水田面や畦畔に、灰青色シルトを堆積する径5～30cmの円形・楕円形等の凹みを検出したが、これは足跡と思われる。

水田を被覆する茶褐色砂土層より、中世遺物を含む小片がわずか

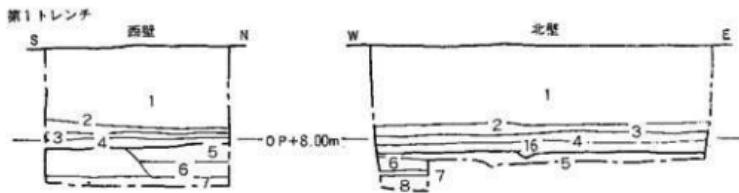
図5 水田出土遺物 に出土した(図5)。

### 2) 沼沢地

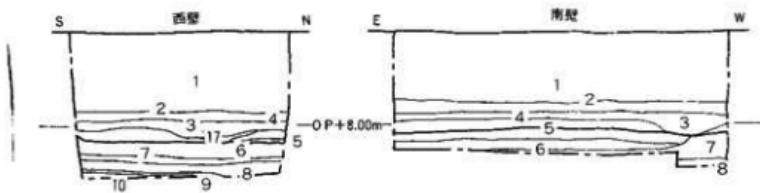
水田址の下層は、地積状況から沼沢地であると推定される。堆積土は第7層暗灰色粘土・第8層青灰色粘土・第9層灰黑色粘土・第10層淡灰青色粘土等からなり、非常に粘性の高いものである。このうち、第3トレンチの第7層からは、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物が多量に出土した。

出土遺物の器種には、甕(1～3)・甕(4～17)・小型鉢(19～21)・小型丸底壺(22)・小型器台(23)・器台(24)・高杯(25)がある。甕にはV様式タイプのもの、庄内式のもの、布留式のもの等が混在しており、搬入品である山陰系の器台(24)も含まれている。

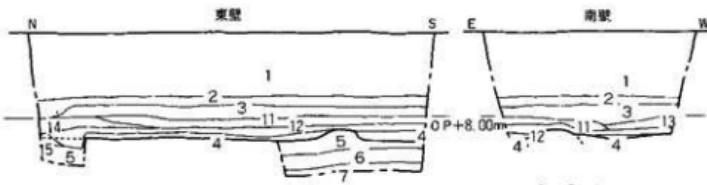
これらは小片で出土したものが多く、周辺より流れ込んだものと思われ、遺物全体を通じて時期差を認めるものである。



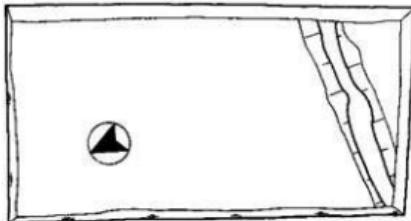
第2トレーニング



第3トレーニング



第3トレーニング 水田畦畔平面図



1. 盛土
2. 深耕土
3. 青灰色砂混じり粘土
4. 淡青灰色細砂土
5. 黄茶褐色粘土
6. 黄茶褐色粘土
7. 灰黑色粘土
8. 青灰色粘土
9. 灰黑色粘土
10. 淡灰青色粘土
11. 墓茶灰褐色粗砂土
12. 黄茶褐色細砂土
13. 淡灰青色細砂土
14. 灰綠色シルト
15. 灰綠色砂粘土
16. 淡灰色細砂土
17. 淡灰色粗砂土

0 5m

図6 平断面図

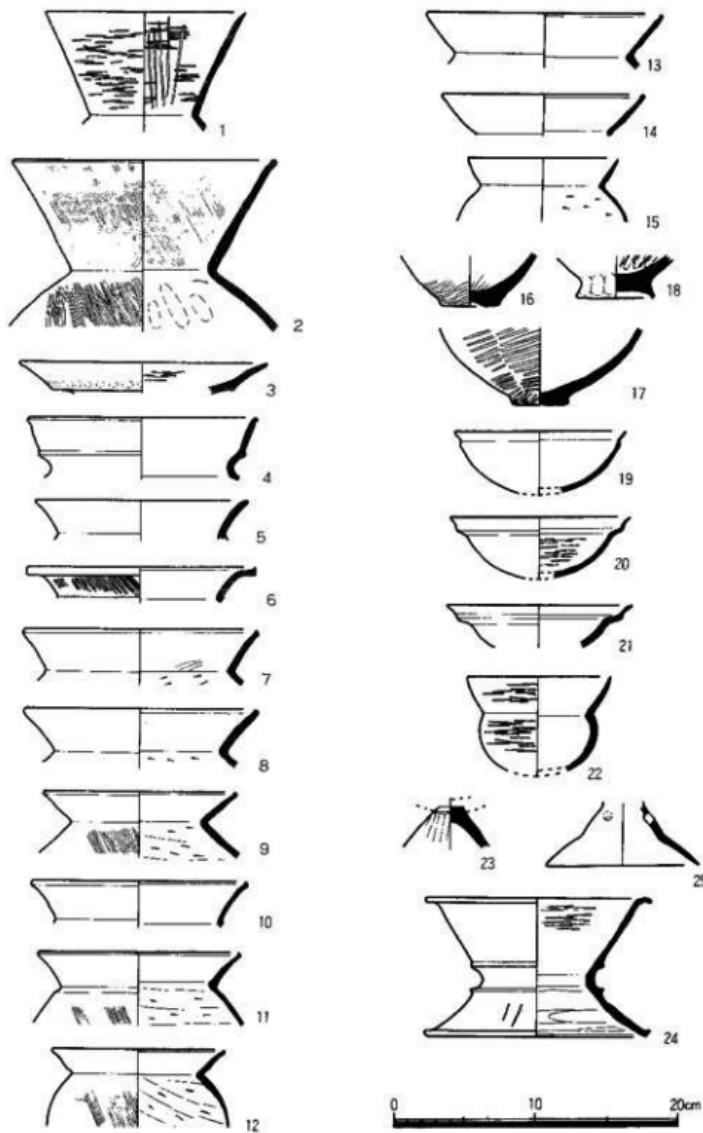


図7 出土遺物実測図

IV 出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・加工・焼成・備考
1 瓢	口 釜 沼沢地	口 径 34.0	「く」の字形に屈曲し、直線的に長く伸びる口縁部のみ遺存。端部は薄く終わる。	外周 ヘラミガキを施す。 内面 ヘラミガキのみと磁方向に擦文を施す。	色調 淡黄褐色 加工 磁土 1.0mm程度の長石・石英を含む。 焼成 良好
2 瓢	口 釜 沼沢地	口 径 18.3	「く」の字形に屈曲し、直線的に長く伸びる口縁部である。端部は丸く終わる。	外周 7cm/10.0cmのハケのあと口縫部をヨコナナデする。 内面 口縫部は外周と同じ。 口縫部と肩部の接合部にナナデ。	色調 淡茶褐色 加工 磁土 1.0mm~2.0mm程度の石英・長石を含む。 焼成 良好
3 瓢	口 釜 沼沢地	口 径 17.3	複合口縁の蓋であろう。端部外周には長い棱をつくり、端部は尖りぎみに終わる。 複合口縁部下方に円形浮文を粘付した痕跡がみられる。	外周 廃絶を受け不明。 内面 ヘラミガキを施す。	色調 淡灰褐色 加工 磁土 海松のくさり織を含む。 焼成 良好
4 瓢	口 釜 沼沢地	口 径 15.8	複合口縁の蓋であろう。体部より丸く屈曲した後、外周に丸みのある棱をつくりて外傾する複合口縁部にまる。端部は丸く終わる。	外周 摩耗を受け不明。 内面 摩耗を受け不明。	色調 淡灰褐色 加工 磁土 1.0mm程度の石英・長石を含む。 焼成 良好
5 瓢	口 釜 沼沢地	口 径 14.9	体部より凹曲して外反する口縁部のみ遺存。端部は丸く終わる。	外周 ヨコナナデ 内面 ヨコナナデ	色調 淡褐色 加工 磁土 2.0mm程度の石英を含む。 焼成 良好
6 瓢	口 釜 沼沢地	口 径 16.0	体部より「く」の字形に屈曲し、外傾する口縁部のみ遺存。端部はつまみ上げ、わずかに外傾する平底面となる。	外周 11cm/10.0mmのクタキと思われる。 内面 ヨコナナデを行す。	色調 淡褐色 加工 磁土 磁化の角閃石を多く含む。 焼成 良好
7 瓢	口 釜 沼沢地	口 径 16.3	体部より「く」の字形に屈曲し、外傾する口縁部のみ遺存。端部は「く」方へ丸くよみ。外傾する平底面となる。	外周 ヨコナナデを行す。 内面 ヨコナナデを行す。端部はヘラケズリがみられる。	色調 淡褐色 加工 磁土 磁化の角閃石を多く含む。 焼成 良好
8 瓢	口 釜 沼沢地	口 径 16.2	7と同様であるが、端部は丸く終わる。	外周 口縫部をヨコナナデする。 内面 ヨコナナデを行す。端部はヘラケズリがみられる。	色調 淡褐色 加工 磁土 磁化の角閃石を多く含む。 焼成 良好

番号	基盤 出上位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒度・成成・備考
9	葉	口 径 13.4	体部より屈曲し、外反する口縫部のみ直角、上位でさらに外反きみとなり、端部は鋭く突き出る。外傾する半円曲となる。	外面 口縫部をヨコナデし、結合部に8条/10.0mmのハケを施す。 内面 口縫部をヨコナデし、側部にヘラケズリがみられる。	色調 黄褐色 粒度 角閃石を多く含む。 成成 良好
	沼沢地				
10	葉	口 径 13.0	「く」の字形に屈曲し外反する口縫部で、先端となる。端部はつまみ上げ、外傾する半円曲となる。	外面 粗耗を受け不明 内面	色調 淡茶灰色 粒度 長粒の長石を多く含む。 成成 良好
	沼沢地				
11	葉	口 径 14.0	「く」の字形に丸く屈曲し、外反する口縫部に重なる。端部はわずかにつまみ上げる。 体部の張りは弱いようである。	外面 口縫部をヨコナデし、結合部には8条/10.0mmのハケを施す。 内面 口縫部をヨコナデし、側部にヘラケズリがみられる。	色調 淡茶灰色 粒度 長石、石英を多く含む。 成成 良好
	沼沢地				
12	葉	口 径 12.0	「く」の字形に屈曲し外傾する口縫部で、先端となる。端部は上方へつまみ、丸く終わる。	外面 側部に12条/9.0mmのハケを施す。 内面 ヘラケズリがみられる。	色調 淡茶灰色 粒度 2.0mm程度の石英、微粒の長石を含む。 成成 良好
	沼沢地				
13	葉	口 径 16.4	「く」の字形に強く屈曲し、わずかに内湾きみにのびる口縫部のみ直角。端部は内に丸く肥厚し、外傾する半円曲となる。	外面 粗耗を受け不明 内面	色調 淡灰色 粒度 長粒の長石を多く含む。 成成 良好
	沼沢地				
14	葉	口 径 14.0	13と同様の葉の口縫部である。	外面 ヨコナデ 内面	色調 淡茶褐色 粒度 長粒の長石、赤母を含む。 成成 良好
	沼沢地				
15	葉	口 径 10.5	「く」の字形近くに屈曲し、直線的にのびる口縫部で、端部は尖りきみに終わる。	外面 側部内面にヘラケズリがみられるが、磨耗を受け不明瞭 内面	色調 淡茶褐色 粒度 0.5mm程度の石英を含む。 成成 良好
	沼沢地				
16	葉	底 径 4.2	ドーナツ状の底部である。	外面 4条/17.0mmのタタキを施す。 内面 ヘラケズリによる押圧がみられる。	色調 淡茶灰色 粒度 2.0~4.0mm程度の石英チャートを含む。 成成 良好
	沼沢地				

番号	器種	法算(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
17	甕	底径 3.9	突出する平底で、中央がわずかに凹む。	外面 7条/19.0mmのクサキを施す。 内面 ヘラタケを行なう。	色調 淡灰灰色 胎土 0.5~2.0mm程度の石英、長石を含む。 焼成 良好
	沼沢地				
18	鉢?	底径 5.5	高台状に突出する外の底部であろう。外縁は斜面で指付痕がみられる。腹部は薄く、尖りすぎに終わる。	外縁 接合部に指付痕がみられる。 内面 ヘラミがきを施し底部はナガヘラタケを行なう。	色調 淡灰灰色 胎土 4.0mm程度のチャート、石英を含む。 焼成 良好
	沼沢地				
19	小型鉢	口径 12.0	半球形の体部から屈曲した後、内窓ぎみにのびる口縁部に至る。底部は尖りすぎに終わる。	外縁 摩耗を受け不明 内面	色調 淡灰灰色 胎土 クセリ織を多く含む。 焼成 良好
	沼沢地				
20	小鉢鉢	口径 12.7	半球形の体部から2段に屈曲する。口縁部は外反し、底部は尖りすぎに終わる。	外縁 摩耗を受け不明 内面	色調 淡灰褐色 胎土 クセリ織を多く含む。 焼成 良好
	沼沢地				
21	小型鉢	口径 13.0	20と同様の形であるが、器肉は厚く、体部は浅い。	外縁 摩耗を受け不明 内面	色調 淡灰灰色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
	沼沢地				
22	小型丸底甕	口径 9.9 最大径 8.3	体部から屈曲し、内窓ぎみにのびる口縁部に至る。底部は薄くなり、尖って終わる。	外縁 口縁部・体部とともにヘラミがきを施す。 内面 摩耗を受け不明。	色調 淡灰灰色 胎土 クセリ織を多く含む。 焼成 良好
	沼沢地				
23	小型脚付		扁平状に開く脚部上方のみ遺存。	外縁 ヘラケズリがみられる。 内面 ナギを行なう。	色調 淡灰褐色 胎土 わずかに0.5~1.0mm程度の石英、長石を含む。 焼成 良好
	沼沢地				
24	甕	口径 15.4 腹径 15.4 脚高 9.8	底部から上下に外反する筒形器台である。口縁部は丸く外反し、底部は丸く終わる。断端部はつまみ上げ、内側する平川面をつくる。底部の上には内窓が1条ずつ2通り、腹部外縁にはヘラカキの記号文が認められる。	外縁 摩耗を受け不明。 内面 腹部をヘラミがきし、底部はヘラケズリである。	色調 淡灰灰色 胎土 微粒の角閃石、クセリ織を含む。 焼成 良好
	沼沢地				
25	甕	口径 10.6	内窓ぎみに2段に開く底部のみ遺存	外縁 摩耗を受け不明 内面	色調 淡灰褐色 胎土 微粒のクセリ織を含む。 焼成 良好
	沼沢地				

## 第4節 第4次調査

### I 調査の概要

調査地は八尾市北本町2丁目に所在し、第3次調査地の西方約150mの地点である。調査地の中央に5×20mのトレンチを設定し、南側に5×5mのグリッドを設定した。トレンチの南半分を第1調査区、北半分を第2調査区、グリッドを第3調査区と付称し、順次調査を進めた。調査面積は延べ125m<sup>2</sup>、調査期間は昭和56年5月13日～5月26日である。

調査方法は、現地表(O P + 9.9m)から盛土・旧耕土・床土までを機械掘削し、以下について手掘りによって調査を実施した。

### II 層序

盛土1.6mを除去すると第1層III耕土、第2層床土、第3層灰褐色粘土、第4層灰色微砂土、第5層赤褐色粘土、第6層暗灰色粘土、第7層黄褐色粘土～灰褐色粘土、第8層淡黄灰色粘土、

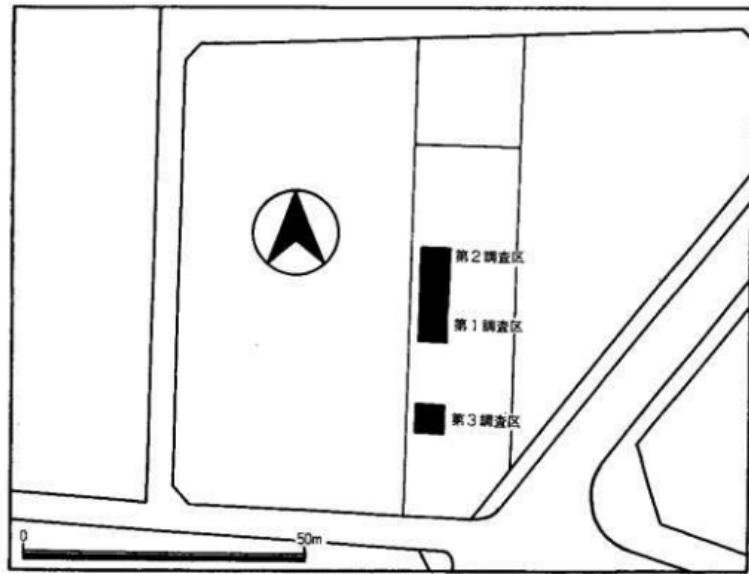


図8 調査地設定図

第9層淡灰色粘土、第10層灰色シルト、第11層灰色細砂土の基本層である。

このうち第5層上面は、第3次調査地と同じく中世の時期の水田面と思われ、第1遺構面とした。第6層は遺物包含層、第7層・第8層が古墳時代前期(庄内式の時期)の遺構面と考えられ、それぞれ第2遺構面・第3遺構面とした。

第1遺構面である水田址は全調査区で認めることができた。第2・第3遺構面については第2調査区

1・第2調査区で井戸や土塙等を検出したが、第3調査区では第2遺構面とはほぼ同レベルで、第3次調査地で検出した沼沢地と同じ上層を検出したため、沼沢地の西への拡がりが確認できた。

以下は堆積状況から、自然河川の堆積土層と考えられる。

### III 遺構・遺物

#### 1) 第1遺構面(水田)

水田面はOP+7.6mを測り、現地表下約2mである。水田や畦畔の上面には、足跡状の凹みが認められる。

第1調査区の北壁近くでは東西に延びる畦畔と、この畦畔の東側から南へ延びる畦畔を検出した。ともに幅60cm以上・高さ15cmを測り、上面には足跡状の窪みがみられる。これらの接合部には幅40cm・深さ15cmの溝状の切り込みがあり、水口ではないかと考えられる。また、第3調査区では東西方向の畦畔と、この畦畔の西側から北へ延びる畦畔を検出した。ともに幅40~70cm・高さは15cmを測る。

水田面上の第4層灰色微砂土は、河川の氾濫などによって運ばれた土であると考えられ、層内には土師質土器の細片をわずかに含んでいる。また、第3次調査地で検出した水田址にも近接することから、水田の時期は中世に比定できる。

#### 2) 第2遺構面

##### SK1

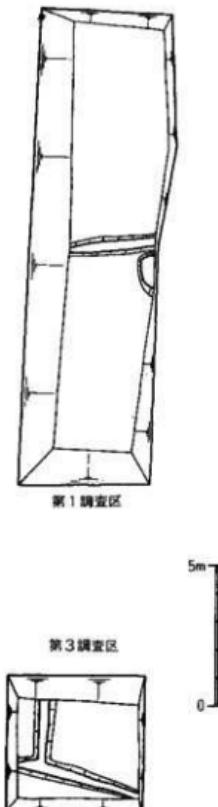
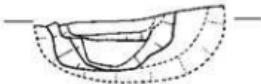


図9 水田遺構平面図

第2調査地の南東部で検出し、東側は調査区外へ至る。検

出部の平面は長辺2.2m・短辺1.1mの隅丸方形を呈する。埋土は暗茶褐色砂混じり粘土1層である。

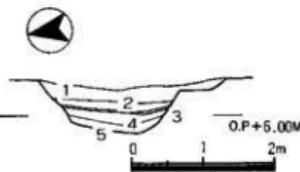


### SE 1

第1・第2調査区間の西壁で検出し、西側は調査区外に至る。径1.6m・深さ0.9mを測る素掘りの井戸で、断面は上部から約30cmの所に段を持つ。

埋土は上方から暗灰茶色砂粘土、暗灰色粘土、淡灰色粘土、暗灰色粘土、黒灰色粘土がほぼ水平に堆積し、最下層は黒灰色粘土と灰色粘土のブロック層である。

遺物は壺(1)、小型器台(2)等が出土したが、いずれも磨耗をうけた細片である。

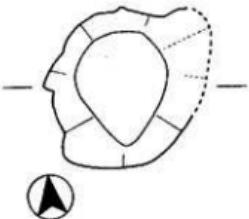


1. 暗灰茶色砂粘土層
2. 暗灰色粘土層
3. 淡灰色粘土層
4. 暗灰色粘土層
5. 暗灰色粘土と灰色粘土のブロック層

図10 SE1平断面図

### SD 1

第1・第2調査区間西側で検出した。幅40~70cm・深さ10cmを測り、北へ延びる溝である。埋土は暗灰色粘土1層である。遺物は出土しなかった。



### 3) 第3造構面

#### SE 2

第1・第2調査区間の東壁近くで検出した素掘りの井戸である。径約1.2m・深さ0.9mを測り、平面は梢円形に近い。断面はU字形を呈するが、中央部はわずかに抉れており、溜水面を示すものと考えられる。

また、北西側の肩には幅約30cm・深さ約10cmを測り、北西へ延びる小溝を有している。

埋土は上方から灰色細砂土、灰色粘土、淡灰色細砂土、淡灰色粘土と暗灰色粘土のブロック層、灰青色シルト粘土が堆積している。

遺物は壺(3・11)、甕(4~10・12)、高杯(13)等が



1. 暗褐色粘土層
2. 灰色細砂土層
3. 灰色粘土層
4. 淡灰色細砂土層
5. 淡灰色粘土と暗灰色粘土のブロック層
6. 灰綠色粘土層
7. 灰色細砂土層
8. 灰青色シルト層
9. 灰色粗砂土層

図11 SE2平断面図

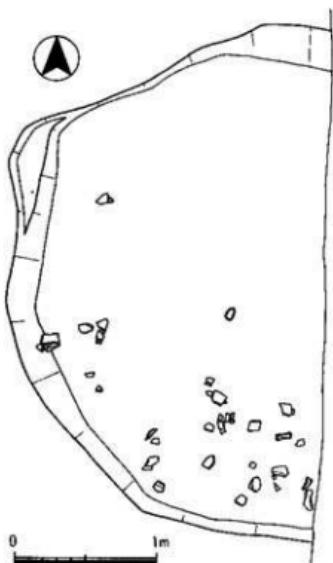
出土した。

(3)は口縁部内外面に鋸歯文を施す複合口縁壺で、西部瀬戸内地方の影響をうけるものかと思われる。奈良県御向遺跡から、同様のものが出土している。

(4) 壺は8点が出土したが、このうち(4)の口縁部は直立するもので、船橋遺跡や經向遺跡出土の壺に類例がみられる。他の壺が暗茶褐色～茶褐色の色調であるのに対し、(5)は淡褐白色を呈する。また、胎土についても、他の遺物に普遍的にみられる角閃石は、肉眼では観察できない。(6)の口縁部は、外傾した後、端部近くで内窵している。タタキは河内地方に多い右上上がりではなく、左上がりである。(7～10・12)は河内地方に一般的な庄内壺である。底部についてみると、(7・12)のどちらもわずかに平底を残している。

(13)は杯部が2段に屈曲する高杯である。

### SE3



第2闊井北東部で検出し、東側の一部は調査区外に至る。上面径3mと大型であるがそれに対し深さ0.9mと浅いため、井戸とは考えにくいが、底部が砂礫層に達し多量の湧水がみられたことから、井戸遺構とした。

埋土は上方から第1層暗茶褐色粘土、第2層黒茶褐色粘土(炭・灰を含む)、第3層黒褐色土(炭化層)、第4層暗灰色粘土と黄灰色粘土のブロック層、第5層暗灰色粘土、第6層暗灰色粘土と灰青色粘土のブロック層が堆積している。第4層から第6層までは、人为的に埋められたと思われる土層である。

第4層の上面には、幅20～35cm・深さ15cmの南北に延びる溝が認められたが、人为的に構築されたものか、自然の流れ込みであるかは不明である。さらに、この溝状遺構が埋まった後に、灰や炭等を含む土層が堆積しており、遺物もここから多量に出土した。

図12 SE3 上層平面図

時期的には、上層(第1層～第3層)は第2遺構面SK1・SE1と同時期と思われ、中層(第4層)・下層(第5層・第6層)は第3遺構面SK2と同時期であると思われる。

遺物は大層から木製品(図18-1～4)、第4層中から壺(14)および甕、第4層を高く被覆する炭化層(第3層)から砾石(図14)の他多量の土器が出土した。

上層から出土した土器の器種には壺(16・17)、甕(18～21)、鉢(22)高杯(23)等がある。このうち高杯の内面には、赤色顔料が塗布されている。

木製品は槌の子(図18-1～3)と、用途不明の板材(図18-4)が出土した。

(1)は直径9cm・長さ約10cmの円柱形である。円柱の両端には粗い面取りが行なわれ、中央部にはV字形の浅い溝が掘り込まれており、部分的に炭化している。

(2)の直径は約7cmで、形状は(1)とはほぼ同様であるが、中央部の溝はやや深めである。

(3)は径7～9cmを測り、扁平な円柱形を呈する。円柱の内部は空洞であるが、人為的に削り抜かれたものかは明確ではない。端部は前述の(1・2)同様粗い面取りが行なわれているが、中央部に溝ではなく、工具痕が一周するのみである。これも(1)同様、火を受けて炭化する部分がある。

(4)は幅6～11cm・長さ48cm以上を測る板材である。径0.5～10cm程度の小孔が10ヶ所に穿たれ、そのうちの1つには目釘状のものが遺存している。またこれらの小孔の他にも径約1.8cmの円形の孔があり、この周囲約0.5cmの範囲をわずかに削り出している。

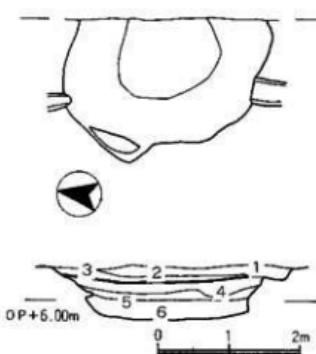


図13 SE3下層断面図



図14 砾石実測図

#### ピット

第1調査区の西隅でSP1・SP2・SP3を、第2調査区の東壁近くではSP4を検出した。

S P 1～S P 3 は径30cm前後・深さ20cm前後を測り、ほぼ1列に並ぶが、調査区内だけでは掘立柱建物の柱穴とは確認できなかった。出土物は S P 3 から庄内葵の細片が出土した程度である。

S P 4 は約半分を検出しただけで詳細は不明であるが、検出径50cm・深さ40cmを測る。

(注 記)

- 1 植原考古学研究所『難向』1976年
- 2 大阪府教育委員会『船橋遺跡発掘調査概要』1980年
- 3 ①前掲書

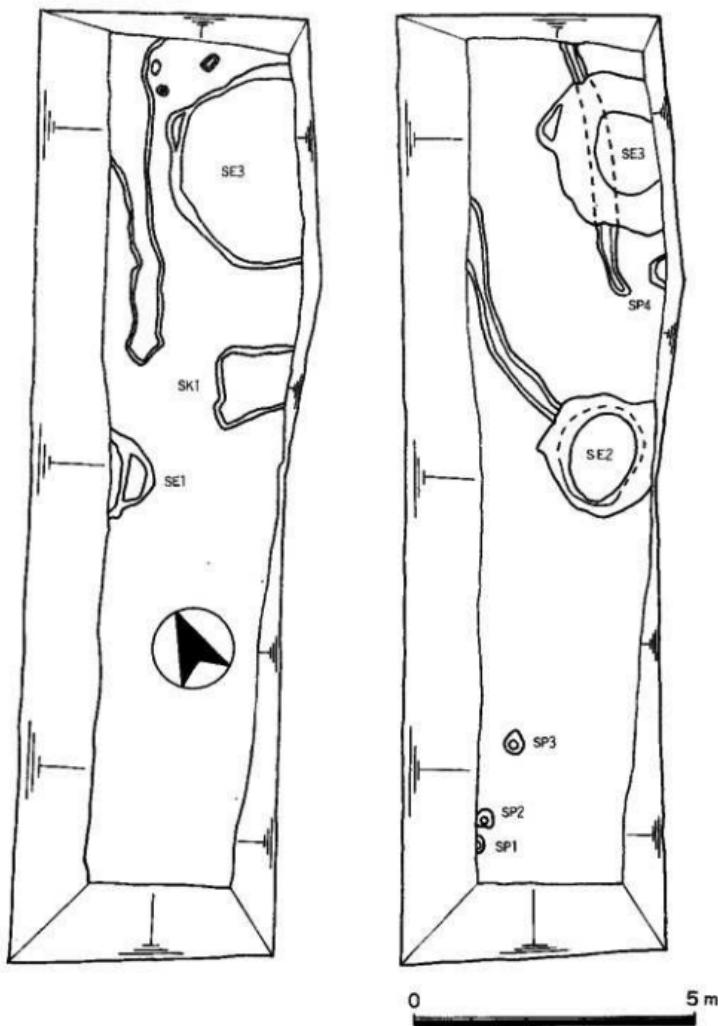


図15 第2・第3遺構面平面図

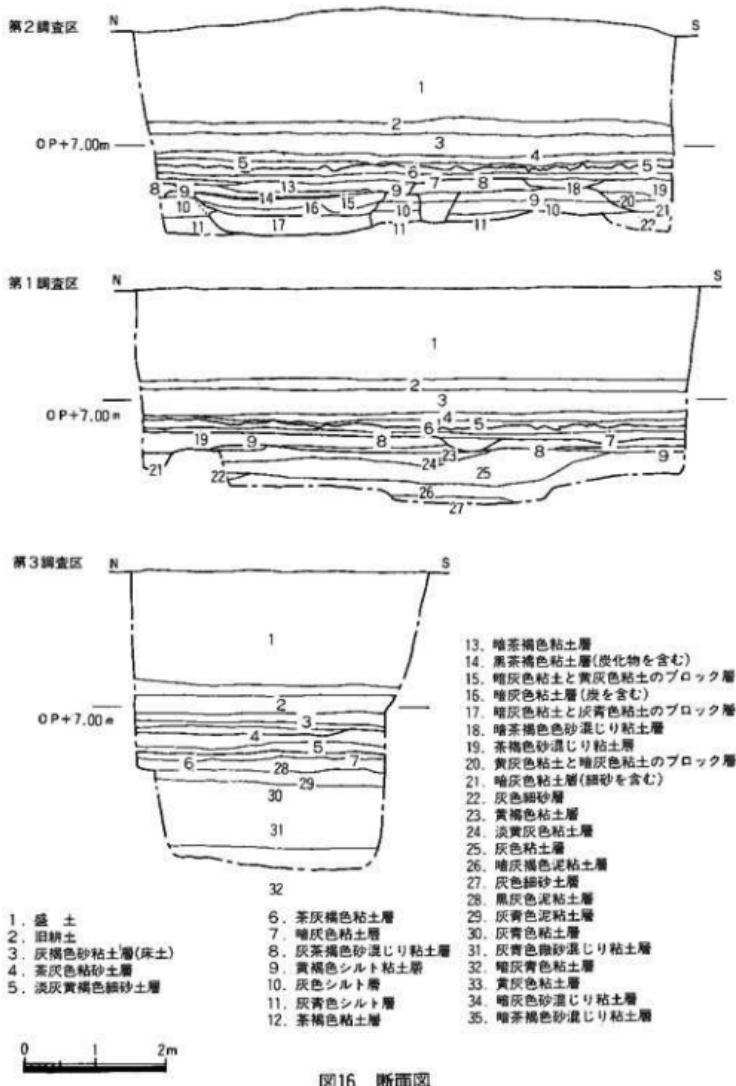


図16 断面図

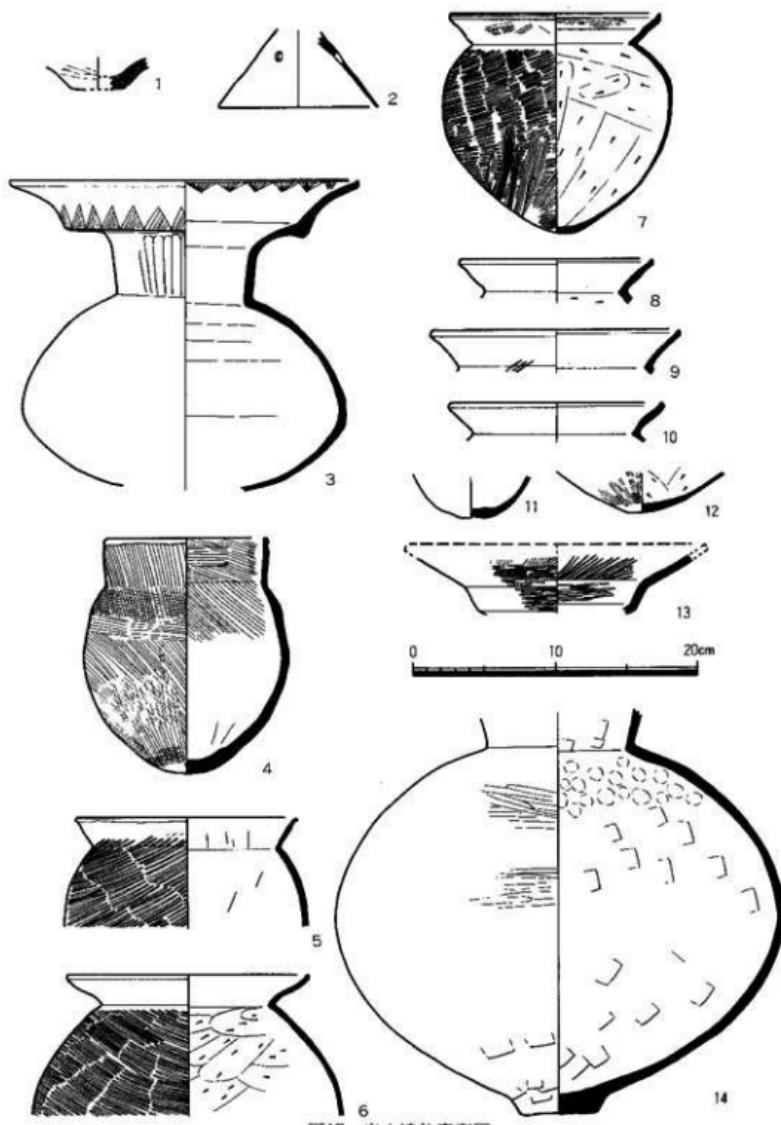


图17 出土遗物实测图

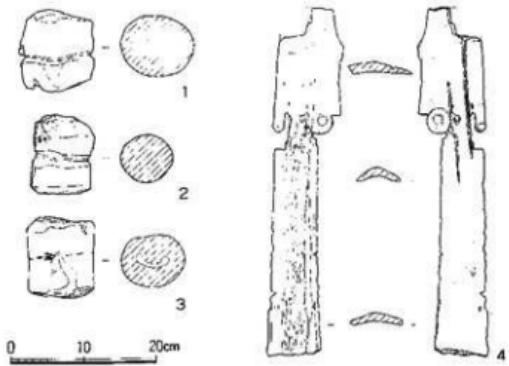
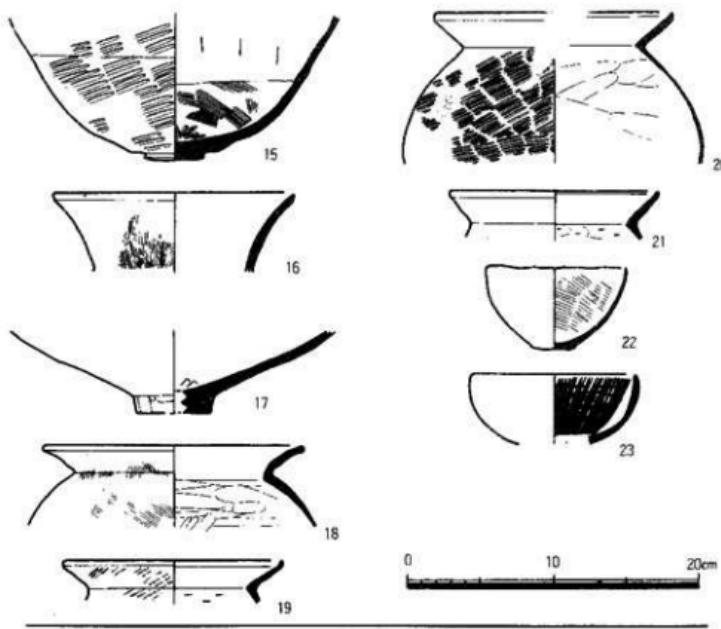


図18 SE3出土遺物実測図

IV 遺物観察表

番号	器種	尺寸(㎝)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒土・焼成・備考
1	壺	底径 11.2	わずかに平底面を残す底部のみ遺存。	外面 ヘラミガキを施す。 内面 滅耗を受け不明。	色調 底黒色 粒土 1.0~3.0mm程度の石英を多く含む。 焼成 良好
	SE 1				
2	小型錫白	底径 11.3	高台状に開く脚部である。中位3方に円孔を穿つ。	外面 1) 滅耗を受け不明 内面 1)	色調 淡赤褐色 粒土 磨耗の反対を多く含む。 焼成 良好
	SE 1				
3	壺	口 横 24.3 最大径 22.7	直立する瓶頸から外反し、屈曲して外反する複合口部を有する。瓶頸は上方へわずかにつきむ。体部は中位に秋大底をもつ。蓋半分様形を呈する。口縁部内外側に脚街文を施す。	外面 瓶頸にわずかにヘラミガキがみられる。 内面 滅耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 粒土 磨耗~3.0mm程度の石英を多く含む。 焼成 良好
	SE 2				
4	壺	口 径 31.2 最大径 高 16.7	側面部の体部から屈曲し、直立する口縁部を有する。瓶頸は外へ丸くつきむ。底部は若干の平坦面を残す。	外面 口縁部に5条/12.5mmのハケを施す。側面部は5条/17.0mmのハケを施す。 内面 口縁部に5条/12.5mmのハケを施す。瓶頸上方を5条/12.5mmのハケ。下方はナゲをおこなう。	色調 茶褐色 粒土 磨耗の角閃石・長石を含む。 焼成 良好
	SE 2				
5	壺	口 径 15.4	「く」の字形に屈曲し、内方ぎみにのびる口縁部を有する。瓶頸は丸く終わる。体部の張りは弱い。	外面 口縫部をヨコナナデし、側面部は6条/16.0mmのタタキを施す。 内面 口縫部上方にタタキが残る。口縫部はヘラナダのあとヨコナナデし、側面部はヘナナダをおこなう。	色調 淡褐色 粒土 ナイドー・石英・長石を含む。 焼成 良好
	SE 2				
6	壺	口 径 16.9	「く」の字形に屈曲し、内方ぎみにのびる口縁部を有する。瓶頸は丸く終わる。体部の張りは強い。	外面 口縫部をヨコナナデし、瓶頸は左上がりの5条/11.0mmを施すタタキを施す。 内面 口縫部をヨコナナデし、側面部はヘラケズリである。	色調 淡赤褐色 粒土 磨耗の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SE 2				
7	壺	口 横 14.6 最大径 16.2 底径 1.6 高 15.6	「く」の字形に屈曲屈折し、直立的にのびる口縫部を有する。瓶頸は上方へつまみ、直立する平底面をつくる。体部は上位に秋大底がある脚部形で、底部はわずかに平底面を残す。	外面 口縫部を5条/7.5mmのハケのあとヨコナナデし、側面部は7条/14.5mmのタタキのあと下方を散状に7条/8.5mmのハケを施す。 内面 4条/4.5mmのハケのあとヨコナナデし、側面部はヘラケズリする。	色調 茶褐色 粒土 磨耗の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SE 2				
8	壺	口 径 13.4	「く」の字形に屈曲屈折し、外方ぎみにのびる口縫部。瓶頸は丸くつまみ上げ、直立する平底面をつくる。	外面 ヨコナナデする。 内面 口縫部をヨコナナデし、側面部はヘラケズリする。	色調 淡赤褐色 粒土 磨耗~1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SE 2				

番号	器種 出上位置	法丈(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒土・施成・備考
9	漆	口 住 17.3	「く」の字形に屈折し、外反してのげる口縁部に至る。端部は上方へ丸くつまみ、直立する平底面となる。	外面 口縁部をヨコナゲする。縫合部にタタキがみられる。 内面 口縁部をヨコナゲする。	色調 茶褐色 粒土 粒状の長石・角閃石を多く含む。 施成 良好
	SE 2				
10	漆	口 住 14.7	「く」の字形に屈曲し、若干内窓ぎみにのびる口縁部に至る。端部は上方へ丸くつまみ。	内外面ともにヨコナゲをおこなう。	色調 淡茶褐色 粒土 長粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。
	SE 2				
11	漆		中央がわずかに凹む底部のみ遺存。全体に擦耗を受け不明。		色調 淡赤褐色 粒土 多量のくさり砂と微細の長石を含む。 施成 良好
	SE 2				
12	漆		わずかに平坦面を残す底部のみ遺存。	外面 タタキのあとハケを施す。 内面 ヘラケズリ。	色調 茶褐色 粒土 角閃石 2.0mm程度の有無を含む。 施成 良好
	SE 2				
13	高杯		杯部が2段に屈折する高杯と思われる。	外面 9条/12.5mmのハケを施す。 内面 ヘラミカキを施す。	色調 淡赤褐色 粒土 長石を含む。 施成 良好
	SE 2				
14	漆	最大径 31.6 底 径 5.5	体部より屈曲し、直立する口縁部があるが、端部を欠損する。体部は中位に最大径がある球形で、突出する平底を有する。	外面 上部にヘラミガキ、下部にヘラナゲがみられる。 内面 縫合部近くを指圧し、以下はヘラナゲする。	色調 茶褐色 粒土 角閃石・石英・長石を含む。 施成 良好
	SE 3中層				
15	漆	底 径 4.1	おしつぶしたような平底を有する。	外面 5条/21.0mmのタタキを施す。 内面 底部近くは9条/11.0mmのハケ。縫合部より上方はハケのあとナゲ。	色調 茶褐色 粒土 長粒～1.0mm程度の角閃石・石英を多く含む。 施成 良好
	SE 3中層				
16	漆	口 住 16.3	体部から屈曲し、外反してのげる口縁部のみ遺存。端部は直立する平底面をもつ。	外面 12条/13.5mmのハケを施し、端部はヨコナゲする。 内面 擦耗を受け不明。	色調 茶褐色 粒土 長粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 施成 良好
	SE 3上層				

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
17	壺	底径 5.0	突出した平底をもち、大きく聞く体部下が直立する。	外面 脊部にヘラによる塑形をおこなう。 内面 ヘラ全体による押圧がみられる。	色調 茶褐色 胎土 新土 焼成 良好
			SE3上層		
18	甕	口径 17.4	「く」の字形に丸みをもつて屈曲し、外反する口縁部に至る。腹部は丸くつまみ上げ、下方へも若干肥厚する。	外囲 口縁部をハケのあとココナデし、側部は6条/11.0mmのハケを施す。 内面 腹部をヘラケズリする。	色調 茶褐色 胎土 新土 焼成 良好
			SE3J層		
19	甕	口径 14.6	「く」の字形に加曲し、若干内方がみにのびる口縁部に至る。腹部はつまみ上げる。	外囲 3条/7mmのタタキのあとワコナデ。 内面 口縁部をココナデし、胴体内面はヘラケズリする。	色調 茶褐色 胎土 新土 焼成 良好
			SE3上層		
20	甕	口径 16.2 最大径 20.6	「く」の字形に屈折し、直線的にのびる口縁部に至る。腹部は上方へつまみ、反する平底面になる。体部中段に最大径をもつと考えられる。	外囲 腹部に7条/13.5mmのタタキを施す。 内面 ヘラケズリである。	色調 茶褐色 胎土 新土 焼成 良好
			SE3J層		
21	甕	口径 14.2	20と同様の口縁部である。	外面 摩耗を受け不明。 内面 腹部にヘラケズリを施す。	色調 茶褐色 胎土 新土 焼成 良好
			SE3J層		
22	甕	口径 9.5 底径 2.9 高さ 5.8	深い窪みを有する直口の体で、端部は不規則に終わる。おしつぶしたような平底を有する。	外囲 摩耗を受け不明。 内面 9条/19.0mmのハケを施す。	色調 淡白褐色 胎土 新土 焼成 良好
			SE3上層		
23	高杯	口径 11.1	橢円形の杯部をもつ小型高杯と思われる。	外囲 摩耗を受け不明。 内面 ヘラミカキのあと放射状に噴文状のヘラミカキを施す。	色調 少褐色 胎土 微粒の長石・くさり砂を含む。 焼成 良好 杯底内面に赤色調料を施す。
			SE3上層		

## 第5節 第5次調査

### I 調査の概要

調査地は八尾市光町1丁目に所在し、第3次調査地の東方約60mに位置する。当初、全面発掘調査を行なうことを前提としたが、敷地面積が狭く機械掘削および人力掘削による土の搬出が困難なため、全体を4区画に分割して発掘調査を実施するに至った。調査は北より第1調査区(44m<sup>2</sup>)、第2調査区(44m<sup>2</sup>)、第3調査区(68m<sup>2</sup>)、第4調査区(40m<sup>2</sup>)とし、面積は延べ196m<sup>2</sup>である。調査期間は昭和56年6月8日から7月7日までである。調査方法は、現地表(O.P.+8.9m)から盛土、旧耕土、床土までを機械掘削し、以下を人力掘削を行なった。

### II 層序

盛土1mを除去すると第1層旧耕土、第2層床土、第3層灰茶褐色粘土、第4層暗茶灰色粘土、第5層黄灰褐色シルト、第6層淡灰色粘土が全調査区の基本層序である。

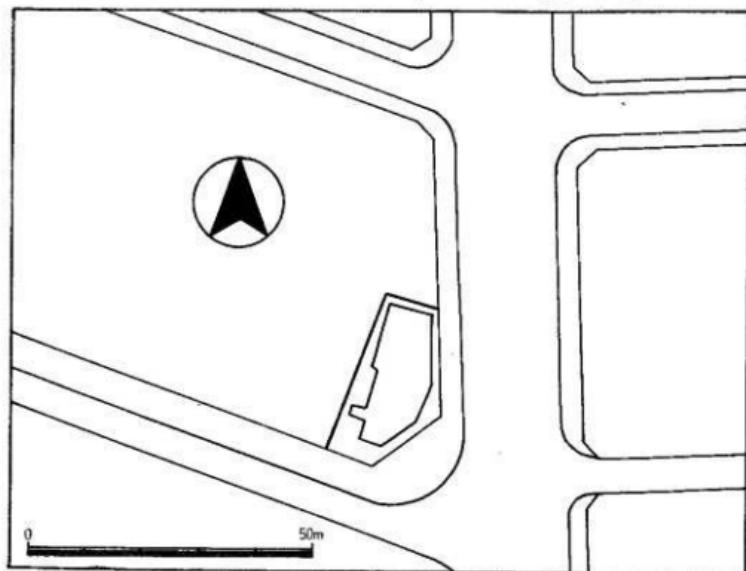


図19 調査地設定図

このうち、第3層上面が中世の水田址で、第4層は遺物包含層、その下の第5層上面が古墳時代前期(庄内式の時期～布留式の時期)の生活面である。検出した古墳時代前期の遺構は竪穴式住居・掘立柱建物・土塙・井戸・溝・ピット等で、遺物は特に井戸(SE5)・溝(SD9)から多量に出土した。なお中世の水田址は断面観察のみにとどめた。

### III 遺構・遺物

#### 1) 住居址

##### SII

第1・第2調査区間の東側で検出したが、東部は調査区外へ至るため、未確認である。

南北辺3.8mを測り、方形を呈する竪穴式住居と思われる。竪穴の肩から床面までの深さ約15cmを測り、床面は平坦である。周囲には幅20～60cm・深さ約8cmを測る溝が残存している。以上のように、周溝を検出したことから竪穴式住居としたが、柱穴や炉址が確認されなかったことによく疑問を残す。

床面より壺(1)、甕(2・3)、小型鉢(4)等が小片で出土しており、遺構の時期は古墳時代前期に比定できる。

##### SB1

第1調査区の北東隅で検出した掘立柱建物である。東西1間×南北2間、主軸方向はN-24°-Wを指す。桁行3.2m・梁行2.2mを測り、復元床面積は約7m<sup>2</sup>である。

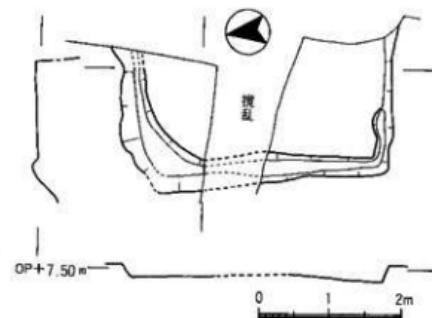


図20 SII 平断面図

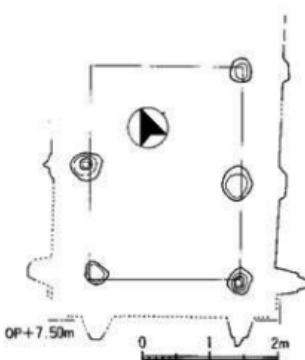


図21 SB1実測図

柱穴は径30~50cm・深さ約50cmで、暗茶灰色シルト粘土が堆積する。

柱穴の埋土内より庄内式表の小片が若干出土しており、遺構の時期は古墳時代前期に比定できる。

#### SB 2

第3・第4調査区間の西側で検出した掘立柱建物である。規模はSB 1同様、東西1間×南北2間を有する。主軸方向はN-16°W、桁行3.1m・梁行2.2mを測る。復元床面積は約6.8m<sup>2</sup>である。

柱穴は径30~50cm・深さ8~20cmを測り、内部には暗茶灰色シルト粘土が堆積する。

遺物は柱穴の埋土内より庄内式表の細片が出土した程度で、時期的にはSB 1と同時期と考えよいだろう。

#### 2) 土塙

##### SK 1

第1調査区中央付近で検出した。最大幅3m以上・最小幅1.1mを測り、平面は不定形を呈する。底部の西側には、長径2m・短径0.6m・深さ0.45mの落ち込みがある。埋土は上方から暗茶灰色シルト粘土、暗灰色砂まじり粘土(炭・灰を含む)が堆積する。

遺物は埋土内より、表(6~10)・高杯(11・12)等が出上したが、いずれも小片である。

##### SK 2

第1調査区の南西隅で検出した。最大幅2.5m以上・最小幅1.2m・深さ0.2mを測り、平面は不定形を呈する。底部からはSE 1が検出された。北側の肩はSD 4と切り合う。埋土は暗茶灰色シルト粘土1層である。埋土内より、V様式タイプの表(13・14)の少片が出土した。

##### SK 3

SK 2の南側で検出した。検出部の最大幅は70cm・深さ15cmを測るが、南西は調査区外へ拡

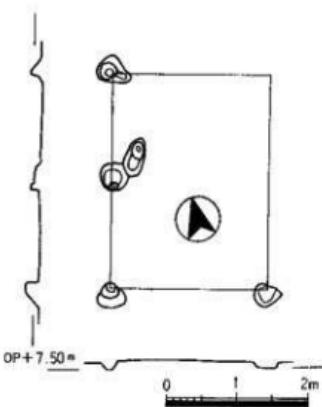


図22 SB2 平断面図

がっている。

#### S K 4

第2調査区の北東で検出した。最大幅3.8m・最小1.3m・深さ0.1mを測り、平面は不定形を呈する。底部からS E 2が検出された。西側の肩はS K 5と接しているが切り合い関係は確認できず、東側は調査区外へ至るために不明である。埋土は暗茶灰色シルト粘土1層である。遺物は製塩土器の脚台(15)が小片で出土した。

#### S K 5

S K 4に隣接する土塙である。最大幅約2m・最小幅1.5m・深さ0.25mで、平面は不定形、断面は浅い皿状を呈する。埋土は上方から暗茶灰色シルト・暗灰黒褐色シルト粘土・黒褐色上(炭・灰を含む)である。底部に接する面には、厚さ2cmを測る炭層が堆積している。

遺物は庄内甕(16)の小片が出土した。

#### S K 6

第2・第3調査区の西隅で検出したが、床上から切り込んでいたため、中世の遺構と考えられる。埋土は暗茶褐色粘土と灰黄色粗砂土のブロック層1層である。

遺物はV様式タイプの甕(17)が小片で出土したが、この土塙の埋め立てに際し、他から流入したものであろう。

#### S K 7

第3調査区の北壁近くで検出した。東西1.3m・南北0.9m以上を測る。深さは10cmと浅く、断面は逆台形を呈する。

埋土は暗茶灰褐色シルト粘土1層である。埋土内より土器の細片が出土したのみで、遺構の時期は明確でない。

#### S K 8

第3調査区の東側で検出したが、東側の一部は調査区外へ至る。最大幅3m以上・最小幅1.6m・深さ0.2mを測る不定形の土塙で、断面は皿状である。南西隅をS E 3に切られ、S D11・S D12を切って構築されている。

底部から S E 4 と、径15~30cm・深さ6~17cmを測る3個のピットを検出した。土塙内の埋土は暗灰褐色シルト1層である。

遺物はV様式タイプの甕(18・19・21)および庄内式甕(20)等が破片で出土した。

#### S K 9

第3調査区の西側で検出した。最大幅1.3m・最小幅1mを測り、深さは9cmと浅い。平面は菱形に近く、断面は逆台形である。S E 5 の西側の肩を切る関係にある。埋土は淡灰褐色砂混じり粘土層である。

遺物は杯(23)が出土した。これは、他の遺構より出土する遺物と比較すれば、新しい時期のものと思われる。

#### S K 10

第3調査区の北壁沿いで検出した。長辺1.6m・短辺1.5m・深さ29cmを測る。平面は隅丸方形を呈し、断面は皿状である。S K 11を切り込んでいる。埋土は暗茶灰色シルト1層が堆積する。

埋土上面に伏せた状態で高杯(37)を検出したが、他の遺物は埋土内のやや上部から出土した。器種には甕(24~28・31)・小型甕(29)・小型鉢(35)・高杯(36)等がある。

遺物を概観すれば、甕のうちではV様式タイプのものが、量的に多くを占める。しかし、小型鉢・高杯等は庄内式の時期のものと考えられることから、これらの遺物群はほぼ庄内式の占相のものと考えられる。

#### S K 11

第3調査区北西隅で検出した。径1.2m・深さ12cmを測る。S K 6 と S K 10に切られる関係にある。埋土は暗灰褐色粘土1層である。

### 3) 井戸

#### S E 1

第1調査区の西側に位置するS K 2 の底部で検出した。径1.2m・深さ78cmを測る素掘りの井戸である。平面は円形を呈し、断面は上部から約30cmのところに段を持ち、以下底部までは逆台形を呈する。調査中に多量の湧水が認められた。

壌上は上方から暗茶褐色シルト粘土、暗灰青色粘土の2層に入別できる。

遺物は井戸掘形の肩の部分から、口縁部が欠損した庄内式甕(38)が出土した。

#### SE2

第2調査区北東側に位置するSK4の底部で検出された。径・深さともに1mを測る素掘りの井戸で、平面は円形、断面はU字形を呈する。

壌上は第1層暗茶灰色粘土、第2層暗灰色粘土(炭化物を含む)、第3層黒褐色土(炭化物を含む)の3層が堆積する。第3層は植物遺体の炭化物を含み、井戸底や壁面に貼り付いた状態であった。

遺物はV様式タイプの甕(39・40)・庄内式甕(41・42)が出土した。このうち(42)は、井戸の底部に接して横向きの状態で検出したもので後述する祭祀に関するものと思われる。

#### SE3

第3調査区の中央部で検出された。層位的には第3層上面(中世の水田面)から抛り込まれているため、中世の水田耕作に関係する井戸であったと推定される。規模は径1.5m・深さ1m以上を測り、平面はほぼ円形、断面はU字形を呈する。

井戸内部には、暗茶灰色シルト粘土と灰色粘土がブロック状に堆積するため、人為的に一挙に埋められたものと推定できる。

壌土内からは、庄内式甕(43)等が細片で出土した。しかし、これらの遺物は井戸の埋め立てに際して他から混入したものであろう。

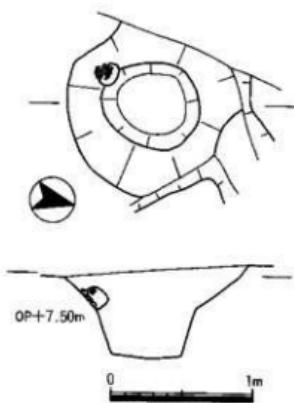


図23 SE1 平断面図

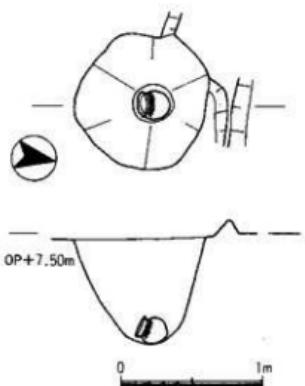


図24 SE2 平断面図

#### SE 4

第3調査区西側、SK 8の底部南東側で検出した。長径1.2m・短径0.9m・深さ1mを測る。平面は楕円形、断面はU字形を呈する素掘りの井戸である。

埋土は上方から、暗茶灰色シルト粘土と暗灰青色粘土の2層に大別でき、下層はヘドロ状で炭化物を含んでいる。

遺物はV様式タイプの甕(44)および庄内式甕(45・46)が出土した。このうち(46)は井戸の底部に接して伏せられた状態で出土している。また、この甕はSE 2出土の甕(42)と形態的に近似する資料であり、遺構の時期はSE 2とはほぼ同時期であると考えられる。

#### SE 5

第3調査区の西側で検出した。長径1.9m・短径1.6m・深さ1.5mを測る。平面は楕円形を呈し、断面は上部から40cmまではすり鉢形、以下底部までは垂直に落ちる素掘りの井戸である。

埋土は第1層暗茶灰褐色シルト粘土、第2層暗灰青色粘土、第3層暗灰青色粘土、第4層暗灰色シルト粘土と暗灰色粘土および灰緑色シルトの混合層である。

遺物はその出土した層位によって、下層のものと上層のものに分けることができる。

下層出土のもの(47)は井戸の底部に接する状態で検出し、山陰または北陸系のものと考えられる。これは胴部中位に穿孔されている。

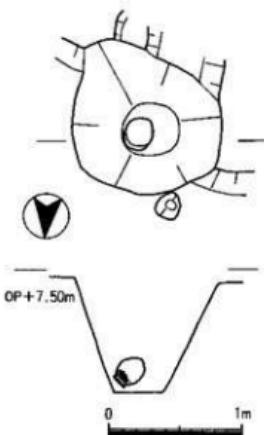


図25 SE4 平断面図

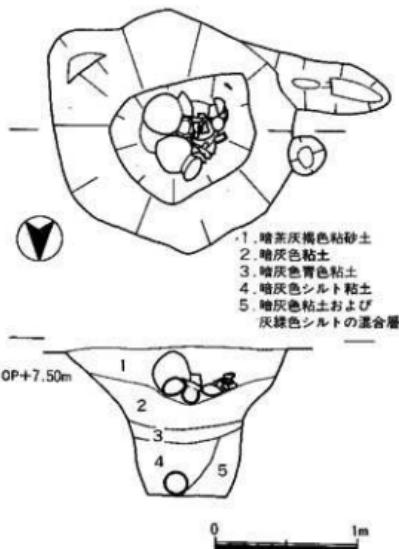


図26 SE5 平断面図

上層出土のものは第1層暗茶灰褐色シルト粘土上面に集積する状態で検出され、器種には壺(48・49)・甕(50・51)・鉢(52)・小型鉢(53)・小型器台(54)の他合計8点あり、うち7点を図示した。このうち甕は、庄内式のものと布留式のものが共伴している。

#### 4) 溝

溝は合計18条を検出したが、これらは方向が一定でなく、幅や深さについても規則性がみられないことから、性格は不明である。中には住居に伴なう排水溝等も含んでいるものと推定される。

##### S D 1

第1調査区を斜め方向に走る溝である。幅25~40cm・深さ約10cmを測る。S D 3・S D13と交差している。

##### S D 2

第1調査区北部で検出した。幅20~30cmを測る。S D 3と直交しており、S D13・S D14・S D15がこの溝から派生している。

遺物はV様式タイプの甕(57)の小破片が出土した程度である。

##### S D 3

第1調査区を縦断する溝である。幅30~60cm・深さ20cmを測る。S D 1・S D 2と交差している。

##### S D 4

第1調査区西側で検出した。幅30~60cm・深さ10~25cmを測る。S E 1・S D13と切り合っている。

甕(58)の口縁部の小破片が出土した。

##### S D 5

第2調査区・第3調査区間にわたり、縦断する溝である。幅30~60cm・深さ15cmを測る。S K 5に切られている。

遺物は、V様式タイプの甕の小片がわずかに出土した程度である。

#### SD 6

第3・第4調査区の南側で検出した。幅30~50cm・深さ約20cmを測る。平面はほぼ円を描くが、南部はSD 9に切られ、東側ではSD 12を、西側ではSD 8を切る。

埋土は暗灰褐色砂粘土1層で、埋土内から土師器の細片がわずかに出土した程度である。

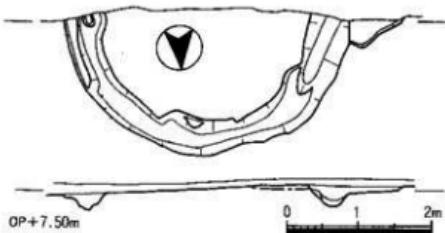


図27 SD6平断面図

#### SD 7

第2調査区東側で検出した。幅10~30cm・深さ15cmを測る。

#### SD 8

第3調査区SE 3に切られ、南北に延びる溝である。幅20~30cm・深さ10cmを測る。SD 6・SD 9に切られている。

埋土は暗茶灰色シルト粘土1層である。

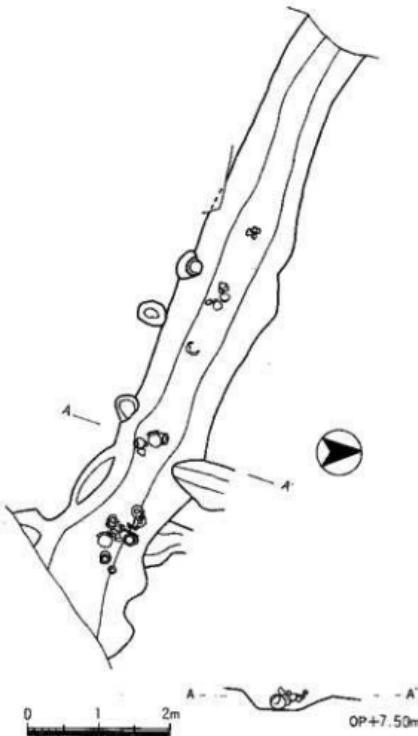


図28 SD9平断面図

呈する。

埋土は上方から第1層暗灰茶褐色シルト粘土、第2層暗灰茶褐色シルト粘土と灰青色シルト粘土の混合層が堆積している。下層は溝の肩より崩れ落ちた土層と思われ、ほとんどの遺物がこの上面から一括出土に近い状態で出土した。

出土遺物のうち、実測可能なものは44点を数える。器種には甕(61~64)・甌(65~93・100)・鉢(94・95)・小型鉢(96~99)・小型器台(100~102)・高杯(103・104)があり、甌には吉備系のもの(88)も含んでいる。出土状況については、各遺物が数個体ずつ集積し、3~5群に分かれしており、完形品近くにまで復元できたものが多くを占める。これらの土器は出土状況からみて、溝の埋没後に放置されたものではないかと考えられるが明確ではない。

#### S D10

第4調査区の南壁に沿って、北側の肩だけを検出したが、自然河道と考えられる。検出部での最大幅約1m・深さは0.7mを測る。断面の形状は、肩から約45°の角度で傾斜して落ち込んでいる。

埋土は上方から第1層黄褐色微砂土、第2層淡灰色粘土、第3層暗灰色粘土、第4層暗灰色シルト粘土、第5層暗灰色シルトが堆積している。

遺物は第2層より甌(105)・小型器台(106)・高杯(107・108)の合わせて4点が出土した。このうち高杯(108)は完形に復元でき、他の遺物についても比較的大きな破片である。

#### S D11

第2調査区S D 7の南側で検出した。幅20cm・深さ10cmを測る。弓状に曲がる溝で、S I 1を切っている。

#### S D12

第3調査区東側で検出した。幅30~80cm・深さ5cmを測る。南側はS D 6に、北側はS K 8に切られている。

#### S D13

第1調査区西側で検出した。幅20~30cm・深さ10cmを測る。S D 4に切られ、S D 2とは直交している。

#### **S D14**

第1調査区北西隅で検出した溝で、S D 2から派生する。幅20cm・深さ10cmを測る。溝底部では、径10cm前後・深さ15cmを測る梢円形のピットを認めた。

#### **S D15**

S D14の西側で、S D14と同じく S D 2から派生する溝である。幅20cm・深さ10cmを測る。溝底部で、長径30cm・深さ20cmの梢円形のピットを認めた。

#### **S D16**

第3調査区東側、S E 4から南へ延びる溝である。幅40cm~60cm・深さ25cmを測る。

#### **S D17**

第2調査区西側で検出した。幅30cm・深さ15cmを測り、西へ延びる。

#### **S D18**

第3調査区東側を S K 8に切られ、南北に延びる溝である。幅20~30cm・深さ10cmを測る。

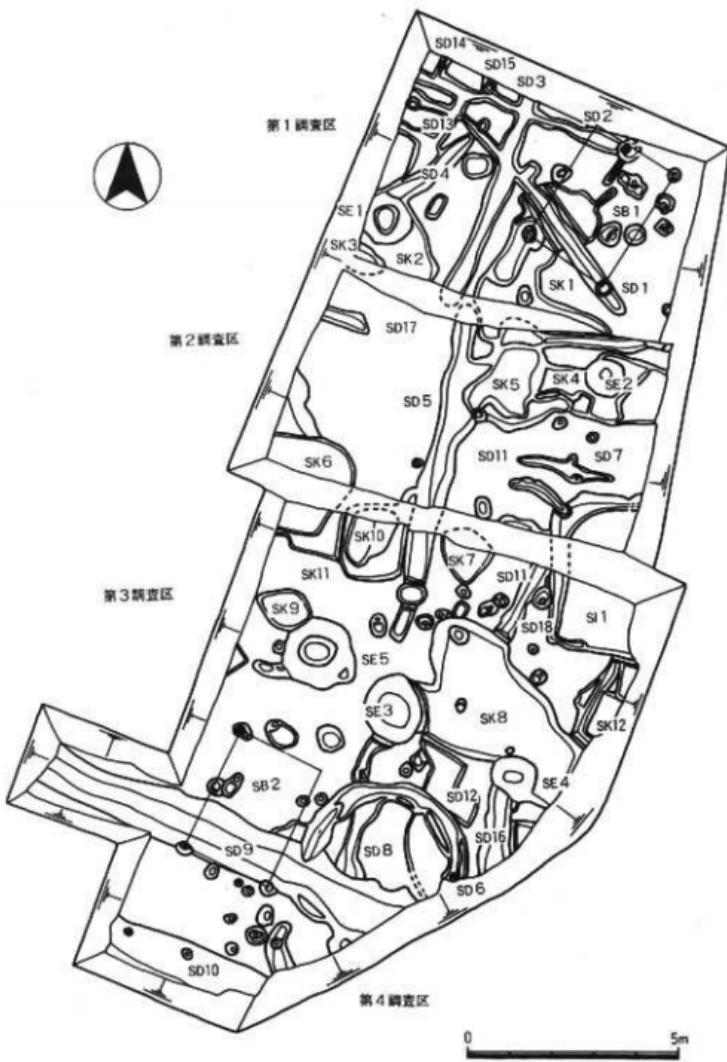
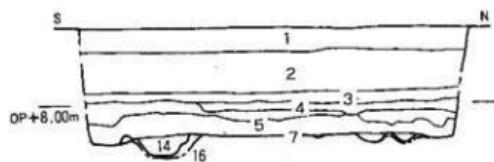
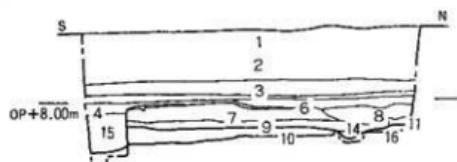


图29 平面图

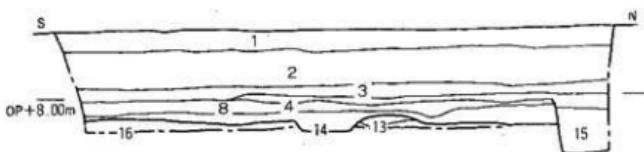
第1調査区



第2調査区



第3調査区



- |            |                             |
|------------|-----------------------------|
| 1. 純土      | 9. 暗黃灰褐色粘土                  |
| 2. 盛土      | 10. 灰褐色粘土                   |
| 3. 旧耕土     | 11. 灰色粘土                    |
| 4. 灰青色粘砂土  | 12. 灰色微砂土                   |
| 5. 灰茶褐色砂土  | 13. 茶灰褐色粘土                  |
| 6. 灰青褐色粘砂土 | 14. 暗茶灰色シルト粘土               |
| 7. 暗茶灰色粘土  | 15. 暗茶褐色粘土と灰黃色粗砂土のブロック(SK5) |
| 8. 暗茶褐色砂粘土 | 16. 黄灰褐色シルト                 |



図30 断面図

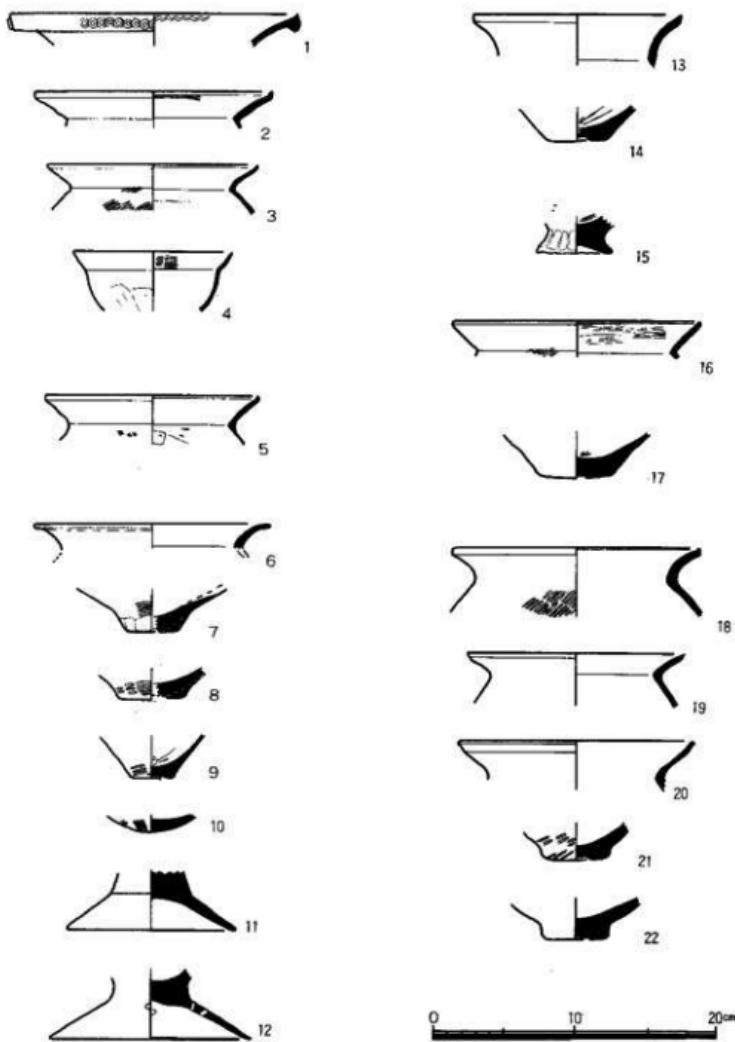


図31 出土遺物実測図1

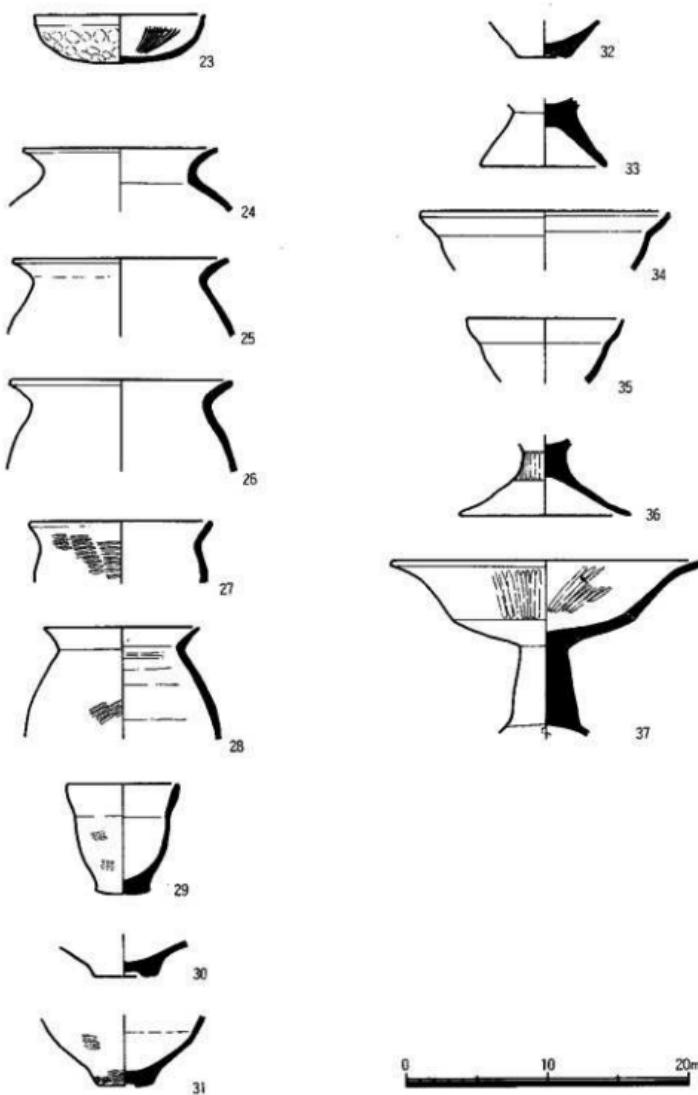


図32 出土遺物実測図2

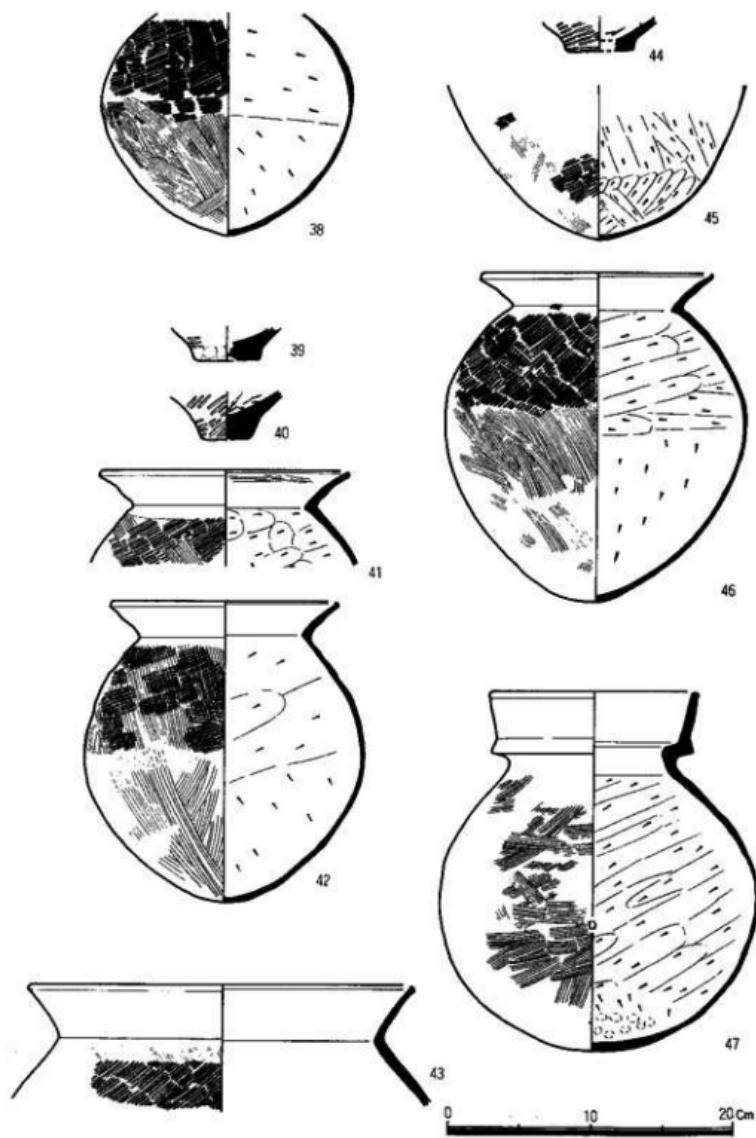


図33 出土遺物実測図3

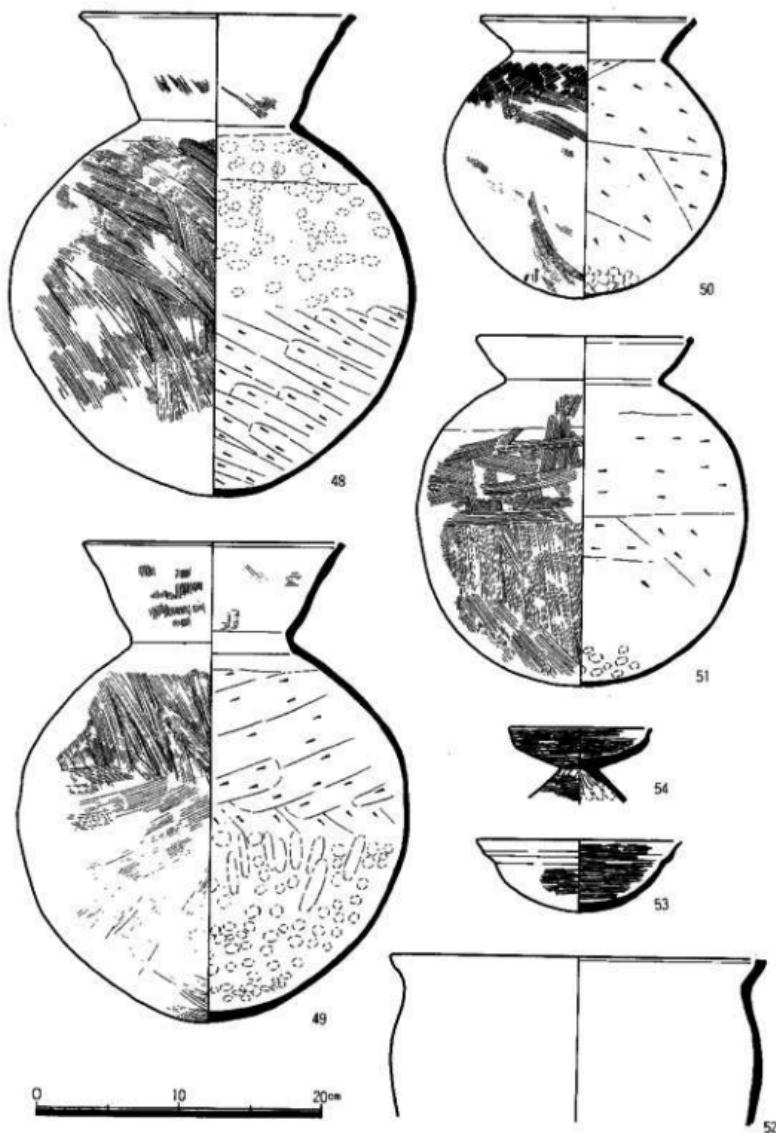


図34 出土遺物実測図4

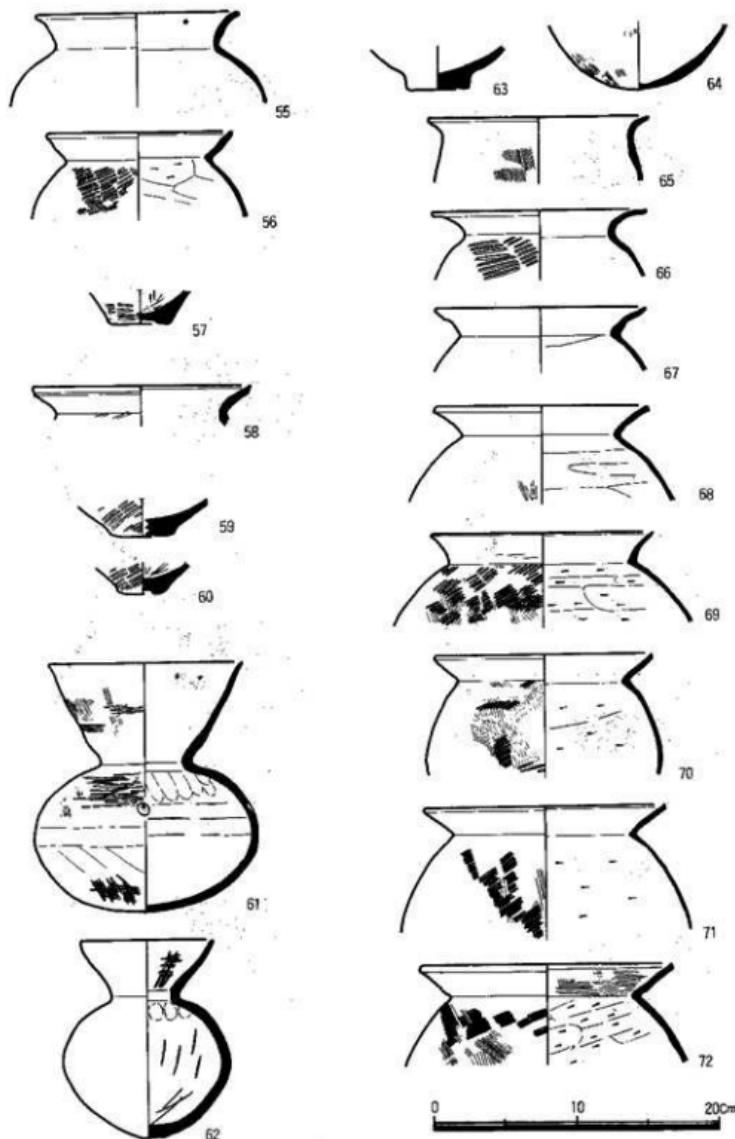


図35 出土遺物実測図5

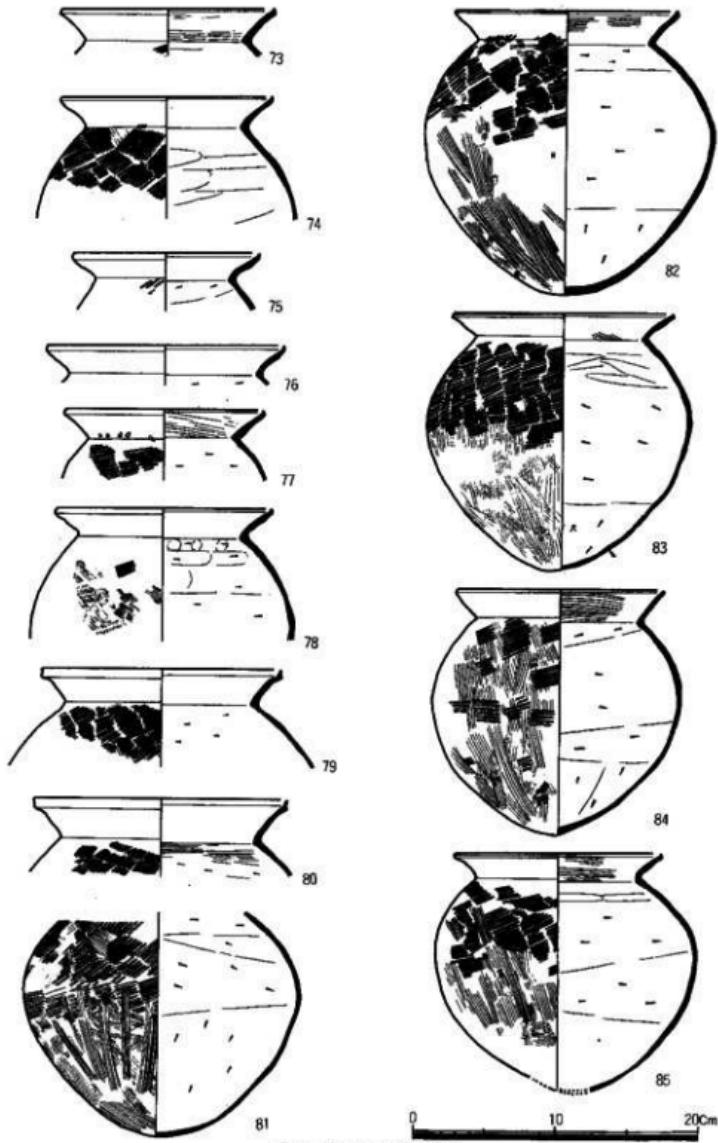


図36 出土遺物実測図6

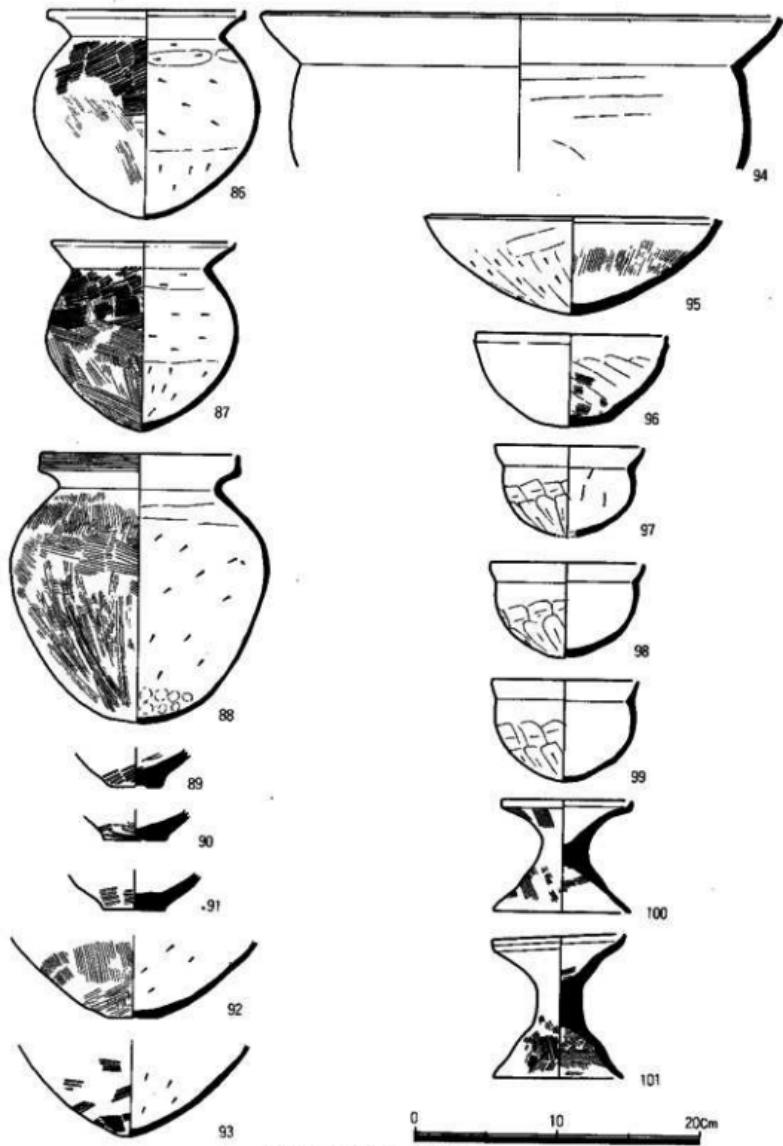


图37 出土遗物实测图7

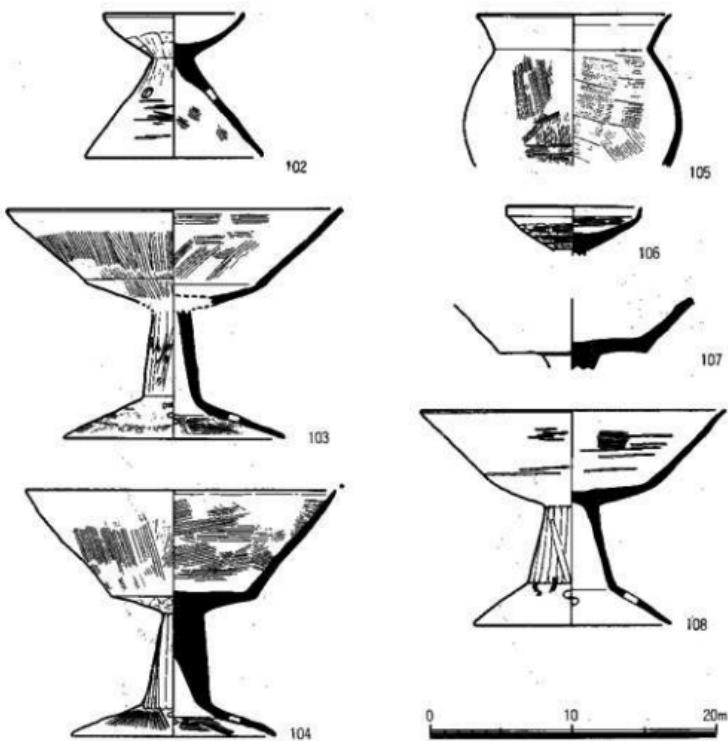


図38 出土遺物実測図8

#### IV 出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒度・焼成・備考	
1	甕	口 径 20.5	外底するは縁部のみ遺存。構造は上 下に肥厚し、広い底をつくる。 縁部側面に竹管押圧円形浮文(9個の み遺存)を貼付し、内底口縁部近くに 裏焼き状文を施す。	外曲 内面	磨耗を受け不明	色調 淡赤褐色 粒度 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好
	SII床面					
2	甕	口 径 16.7	肩部より屈折して外張する口縁部。 端部はつまみ上げ、直立する平底面 をつくる。	外面 内面	ヨコナデ, 5条/4.5mmのハケのあとヨコ ナデ。肩部はヘラケズリと思 われる。	色調 茶褐色 粒度 粗粒の角閃石を 多く含む。 焼成 良好
	SII床面					
3	甕	口 径 14.8	「く」の字形に屈折して外反する口縁 部。端部は上方へつまみ、丸みのある 面となる。	外面 内面	口縁部をヨコナデし、脚部に 5条/9.5mmのタキを施す。 複合部外周部近辺はヨコナデに よってタクナデが残している。 口縁部をヨコナデし、肩部は ヘラケズリと見られる。	色調 底褐色 粒度 粗粒の長石・石英と細 粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SII床面					
4	小型甕	口 径 11.4	半球形の体部より屈曲し、内方ぎみ にのびる口縁部に至る。端部は尖り ぎみに終わる。	外面 内面	口底部をヨコナデし、体部は ヘラケズリのみと軽くナデ。 口縁部を8条/8.0mmのハケの あとヨコナデし、体部はナデ。	色調 淡褐色 粒度 粗粒の長石を含む。 焼成 良好
	SII床面					
5	甕	口 径 14.9	「く」の字形に屈曲して外反する口縁 部。端部は上方へつまみ。体部の 内は締めて薄い。	外面 内面	口縁部をヨコナデし、脚部に 6条/3.5mmのハケがみられる。 口縁部をヨコナデし、肩部は ヘラケズリがみられる。	色調 淡赤褐色 粒度 長石・石英を多く含む。 焼成 良好
	SBI P2					
6	甕	口 径 16.5	外底する口縁部のみ遺存。口縁端部 は丸く終わる。	外面 内面	ヨコナデ。	色調 茶褐色 粒度 粗粒の長石・微粒の角 閃石・石英を含む。 焼成 良好
	SK1					
7	甕	底 径 3.6	D-ナツ状の底部と思われる。	外面 内面	4条/12.5mmのタキ。底部側 面には指壓痕がみられる。 磨耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 粒度 1.0mm程度の長石・石英 を含む。 焼成 良好
	SK1					
8	甕	底 径 4.8	D-ナツ状の底部である。	外面 内面	4条/11.0mmのタキ。 ナデをおこなう。	色調 淡赤褐色 粒度 粗粒の石英を含む。 焼成 良好
	SK1					

番号	器種 出土位置	底径(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
9	甕	底径 3.1	中央部が凹む上げ底状の底部である。 SK 1	外面 3条/9.0 mmのタタキを施す。 内面 ヘラ全体による押圧がみられる。	色調 淡赤褐色 胎土 粘粒の角閃石・花崗岩を含む。 焼成 良好
10	甕		丸底の底部である。 SK 1	外面 3条/5.5 mmのタタキのあと 5 条/7.0 mmのハケを施す。 内面 ヘラケズリと思われる。	色調 淡褐色 胎土 粘粒の雲母を含む。 焼成 良好
11	高杯	底径 11.7	太く短い柱状部から裾部は屈折し開く。 SK 1	外面 滑耗を受け不明 内面 滑耗を受け不明	色調 淡褐色 胎土 粘粒・粗粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
12	高杯	底径 14.0	太く短い柱状部から裾部は屈折し開く。 SK 1	外面 ヘラミガキを施す。 内面 滑耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 胎土 サード : 2.0~3.0 mm 程度の石英を含む。 焼成 良好
13	甕	底径 14.7	肩部より屈折し、丸く外反する口縁部のみ遺存。端部は上方へ若干つまみ、直立する平坦面となる。 SK 2	外面 ヨコナゲ。 内面 /	色調 淡褐色 胎土 3.0mm程度の石英、鐵粒の長石・角閃石を含む。 焼成 良好
14	甕	底径 4.2	ト・ナツ状の底部である。 SK 2	外面 滑耗を受け不明。 内面 ヘラ全体による押圧がみられる。	色調 淡赤褐色 胎土 2.0 mm程度の石英を含む。 焼成 良好
15	製陶土器	底径 5.2	製造土器の脚台であろう。 SK 4	外面 滑耗を受け不明顯であるが、 内面 指れきえによって脚台をつく り出している。	色調 淡褐色 胎土 石英・長石を多く含む。 焼成 良好
16	甕	口径 17.5	「く」の字形に屈折して外反する口縁部で、口縁溝部は上方へわずかにつまむ。 SK 5	外面 口縁部をヨコナゲし、複合部 に 5条/6.5 mmのタタキがみら れる。 内面 口縁部に 4条/5.0 mmのハケの あとヨコナゲ。肩部はヘラケ ズリと思われる。	色調 淡褐色 胎土 粘粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好

番号	種 出上位置	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色調・粒土・焼成・備考
19	裏	底 厚 5.6	ドーナツ状の底部である。	外面 塗耗を受け不明瞭であるが、内面にはヘラ全体の押圧がみられる。	色調 底褐色 粒土 粘粒～2.0mm程度の角 焼成 石英・葉緑を含む。 良好
	SK 6				
18	裏	口 径 17.4	体部から丸みをもって屈曲し、外反する口縁部に至る。底部はつまみ上げ、直立する平坦面となる。	外面 口縁部をヨコナゲし、胴部は6.8/14.0mmのタスキを施す。 内面 口縁部をヨコナゲし、胴部はナゲ。	色調 底褐色 粒土 粘粒の石英を含む。 焼成 良好
	SK 8				
19	裏	口 径 15.4	「く」の字形に屈折して外反する口縁部。底部は尖りざみに終わる、わずかに下退くなる。	外面 塗耗を受け不明 内面	色調 赤褐色 粒土 1.0～2.0mm程度の石英 焼成 多く含む。 良好
	SK 8				
20	裏	口 径 16.5	丸みを持って底面し、内弯ざみに伸びる口縁部。底部は外傾する下退面をつくる。	外面 ヨコナゲ。 内面 塗耗を受け不明。	色調 淡白褐色 粒土 粘粒の石英を多く含む。 焼成 良好
	SK 8				
21	裏	底 径 4.9	ドーナツ状の底部である。	外面 タスキを施す。 内面 水化物の付着により不明。	色調 底褐色 粒土 粘粒の石英・花崗岩を含む。 焼成 良好
	SK 8				
22	裏	底 径 4.8	ドーナツ状の底部である。	外面 塗耗を受け不明。 内面	色調 底褐色 粒土 粘粒の長石を多く含む。 焼成 良好
	SK 8				
23	外	口 径 12.0 高 さ 3.4	浅い半球形の体部から後をもち、外 反ざみの口縁部に至る。底部は外へ 丸く終わる。	外面 口縁部はヨコナゲし体部は指 圧ナゲの後ナゲ。 内面 ヘラミガキのあと放射状の塗 文を施す。	色調 淡褐色 粒土 粘粒の長石、 雲母を含む。 焼成 重焼
	SK 9				
24	裏	口 径 13.6	胴部より丸みをもって前曲し、外反する口縁部に至る。底部は直立する平坦面となる。底部の張りは強いと 思われる。	外面 塗耗を受け不明 内面	色調 赤褐色 粒土 粘粒の長石を多く含む。 焼成 良好
	SK 10				

番号	種出位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒上・焼成・備考
25	腹	口 横 15.1	「く」の字形に丸みをもつて彎曲し、外反する口縁部。腹部はわずかに平坦になる。	外面 密耗を受け不明 内面	色調 茶褐色 粒上 微粒の長石、強粒~1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
	SK10				
26	腹	口 横 15.6	「く」の字形に丸く彎曲し、外縫する口縁部。腹部はわずかに平坦になる。	外面 密耗を受け不明だが、外側にタタキの痕跡がみられる。 内面	色調 茶褐色 粒上 1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
	SK10				
27	腹	口 横 12.8	胴部からなるやかに彎曲し、外縫する口縁部。腹部は丸く終わる。胴部の張りは弱い。	外面 口縁部を5条/15.0mmのタタキのみと軽くナゲ。胴部は5条/15.0mmのタタキを施す。 内面 口縁部をヨコナナギし、胴部はヘラナナギ。	色調 茶褐色 粒上 長石の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SK10				
28	腹	口 横 10.9	下ぶくれの胴部から「く」の字形に屈折し、外反する口縁部に至る。腹部は細く、尖りきみに終わる。	外面 胸幅に4条/10.5mmのタタキ。 内面 口縁部をヨコナナギし、胴部はヘラナナギと思われる。	色調 茶基褐色 粒上 長粒の長石・花崗岩・漂母を含む。 焼成 良好
	SK10				
29	小型腹	口 横 7.6 直 横 3.8 直 縦 7.8	深い椀形の胴部から屈折し、外縫する口縁部に至る。口縁部は丸く終わる。腹部は突出する平底で、中央がわずかに凹む。	外面 胴部の一部にタタキがみられる。 内面 口縁部をヨコナナギ。胴部はナナギと思われる。	色調 茶褐色 粒上 相粒の石英・花崗岩を含む。 焼成 良好
	SK10				
30	腹	直 横 4.8	ドーナツ状の底部である。	外面 密耗を受け不明 内面	色調 茶褐色 粒上 1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SK10				
31	腹	直 横 4.1	ドーナツ状の底部である。	外面 腹部付近と胴部に部分的に3条/7.0mmのタタキを施す。 内面 密耗を受け不明。	色調 茶褐色 粒上 微粒~2.0mm程度の長石・石英を含む。 焼成 良好
	SK10				
32	腹	直 横 4.0	中央部が凹む上げ底状の底部である。	外面 ナナギと思われる。	色調 茶赤褐色 粒上 1.5mm程度の石英・花崗岩・長石を含む。 焼成 良好
	SK10				

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
33	裏?	幅 8.7	湯4枚に聞く腹の脚台であろう。	外面 タタキのあとへラケズリと思われる。 内面 摩耗を受け不明。	色調 赤褐色 胎土 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好
34	体	口 径 17.5	体部より屈折し、内寄ぎみにのびる口株部で、端部は上方へつまむ。	外面 摩耗を受け不明 内面 摩耗を受け不明	色調 淡褐色 胎土 0.5mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
35	小型鉢	口 径 11.1	体部より屈曲し、内寄してのびる口株部で、端部は尖りぎみに終わる。	外面 摩耗を受け不明 内面 摩耗を受け不明	色調 淡赤褐色 胎土 2.0mm程度の石英を多く含む。 焼成 良好
36	高杯	底 径 12.1	安い柱状部から外反ぎみに大きく聞く脚部である。	外面 脚部にヘラケズリ。他は全体に摩耗を受け不明。 内面 摩耗を受け不明	色調 淡褐色 胎土 1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
37	高杯	口 径 21.8	柱状部より内寄ぎみに聞く脚底部から屈曲し、外反しながらのびる長い口株部に続く。口株端部は丸みのある平坦面となる。	外面 口株部内外面にヘラミガキが認められるが、他は不明。 内面	色調 淡赤褐色 胎土 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好
38	裏	最大径 17.7	12.7形の体部である。最大径はやや上方に位置し、底部は尖り底である。	外面 接合部をコナデし、上部に12.6/21.5mmのタタキを施し底部から最大径部分までを8.6/11.5mmのハナ。ヘラケズリを施す。 内面	色調 淡茶褐色 胎土 長粒～2.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
39	裏	底 径 4.7	ドーナツ状の底部である。	外面 3条/8.0mmのタタキを施す。ナナと思われる。 内面	色調 赤褐色 胎土 1.0mm程度の角閃石、石英、チャートを含む。 焼成 良好
40	裏	底 径 3.6	突出する平底で、中央部がわずかに凹む。	外面 5.6/12.0mmのタタキを施す。 内面 ヘラ棒体による押圧がみられる。	色調 淡黒色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調、胎土、焼成、備考
41	甕	口 径 17.2 SE2下層	「く」の字形に軽く屈折して外反する口縁部に至る。腹部は上方へつまみ、底部側面は丸い。	外面 口縁部をヨコナデし、腹部は9条/16.0mmのタタキのあと部分的に6条/10.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をハケのあとヨコナデし、腹部はヘラケズリ。	色調 暗茶褐色 胎土 粘土の青母、0.5mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
42	甕	口 径 15.8 最大径 19.7 基 高 21.3 SE2下層	「く」の字形に軽く屈折して外反する口縁部で、縁部はつまみ上げ、外傾する平底面となる。体部は中位に最大深があり。尖りぎみの丸底をもつ。	外面 口縁部をヨコナデし、腹部は上方に10条/20.5mmのタタキのあと5条/8.5mmのハケ、下方は7条/13.5mmのハケがみられる。 内面 口縁部をヨコナデし、腹部はヘラケズリを施す。	色調 明茶褐色 胎土 粘土の青母、微粒～1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
43	大型甕	口 径 26.7 SE3	「く」の字形に軽く屈折して外反する口縁部で、縁部はつまみ上げぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、腹部は12条/22.0mmのタタキのあと部分的にハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、腹部はヘラケズリのあとナデと思われる。	色調 淡白褐色 胎土 くさり織、微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
44	甕	底 径 4.8 SE4下層	ドーナツ状の底部であると思われる。	外面 5条/15.5mmのタタキ。 内面 ハラ集体经济による押圧がみられる。	色調 本褐色 胎土 青母の青母を多く含む。 焼成 良好
45	甕	SE4下層	尖りぎみの丸底である。	外面 タタキのあと8条/10.0mmのハケ。 内面 ヘラケズリを施す。	色調 淡褐色 胎土 2.0～4.0mm程度の石英を多く含む。 焼成 良好
46	甕	口 径 16.0 最大径 21.2 基 高 23.3 SE4下層	「く」の字形に軽く屈折して外反する口縁部で、縁部はつまみ上げ、外傾する平底面となる。体部は倒卵形で、やや上位に最大深があり、底部にはわずかに平坦面を残す。	外面 山林部の複合部をヨコナデし、腹部上部に14条/22.0mmのタタキを施し、絞りく7条/9.5mmのハケを施す。下部は7条/9.5mmのハケによりタタキは消えている。 内面 口縁部をヨコナデし、腹部はヘラケズリを施す。	色調 基褐色 胎土 粘土、角閃石を多く含む。 焼成 良好
47	甕	口 径 14.2 最大径 22.4 基 高 25.5 SE5下層	体部から弧曲し水平に開いた後、外間に棱を作り、外傾ぎみに立ち上がり複合口縁部。縁部は外傾する平底面となる。体部は下ぶくれの特徴である。体部中位に焼成後の印跡をもつ。	外面 口縁部をヨコナデし、腹部は8条/8.5mmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、腹部はヘラケズリする。底部付近に指痕がみられる。	色調 淡白褐色 胎土 石英、チャートを多く含む。 焼成 良好
48	甕	口 径 18.6 最大径 28.5 基 高 34.3 SE5上層	体部から弧曲し水平に開いた後、外間に棱を作り、外傾ぎみに立ち上がり複合口縁部。縁部は外傾する平底面となる。体部は中位に最大深をもつ。球形にちかい。	外面 口縁部、ハケのあとヨコナデし、腹部は18条/21.5mmのハケを施す。 内面 口縁部、ハケのあとヨコナデし、腹部下方をヘラケズリ、上方に棱け痕が認める。	色調 淡茶褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石、粗粒の石英を含む。 焼成 良好

番号	器 材 名 と 位 置	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色調・粒土・焼成・備考
49	盃	口 径 16.0 最大径 27.5 器 高 34.1	48と同様であるが、瓶頸部内面には「く」の字形に規則として外反する凹出面をつくる。	外面 口縁部の接合部付近をハケのあとヨコナデし、胴部の上方を11条/9.5mm、下方を12条/18.0mmにハケを施す。 内面 口縁部、ハケのあとヨコナデし、胴部の上方をヘラケズリし、下方に捺压者を施す。	色調 淡青褐色 粒土 粒径~1.0mm程度の角閃石・雲母を多く含む。 焼成 良好
	SES上層				
50	甕	口 径 15.0 最大径 29.7 器 高 19.9	「く」の字形に規則として外反する凹出面。端部は上方へつまみあげ、外側する凹面となる。体部は中位に最大径をもち、底形を笠する。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部上方に12条/14.0mmのタタキがみられ、嵌入端部からや上方を7条/7.0mmのハケ。それ以下にナデで長いハケを施す。 内面 口縁部をハケのあとヨコナデし、胴部内面をヘラケズリする。底部付近に粒状がみられる。	色調 淡青褐色 粒土 粒径~1.0mm程度の角閃石・雲母を多く含む。 焼成 良好
	SES上層				
51	甕	口 径 14.8 最大径 23.2 器 高 24.9	丸みをもって屈曲し、内窵する口縁部。端部は丸く、内に肥厚する。体部は中位に最大径をもち、底形を笠する。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部に15条/14.0mmのハケを施す。 内面 口縁部と接合部付近をヨコナデし、胴部にヘラケズリする。底部付近に粒状がみられる。	色調 淡青褐色 粒土 右英・長石・チャートを含む。 焼成 良好
	SES上層				
52	鉢	口 径 26.4	丸く屈曲し、内窵する口縁部。端部は外傾する凹面となり、内に若干肥厚する。	外面 商耗を受け不明 内面	色調 淡褐色 粒土 粒径の長石、2.0mm程度の右英を含む。 焼成 良好
	SES上層				
53	小型鉢	口 径 14.4 器 高 5.0	半球形の体部から、2段に屈曲する口縁部に至る。端部は丸くなり、尖りきみに終わる。	外面 ヘラミカキを主体とするが、商耗を受け不明である。 内面	色調 淡青褐色 粒土 小さり細い、粒径の長石を多く含む。 焼成 良好
	SES上層				
54	小型器内	口 径 9.9	内窵みに聞く杯脚から、丸みをもって立つ口縁部に至る。端部は外へつまみ。脚部は漏斗状に聞くと思われる。	外面 脚部、脚部をヘラケズリしたあと全体にヘラミカキを施す。 内面 脚部、受部をヘラミカキし、脚部にヘラ全体による押圧がみられる。	色調 淡赤褐色 粒土 粒径の角閃石・雲母、粒径~1.0mm程度の長石を含む。 焼成 良好
	SES上層				
55	甕	口 径 13.6	張りの強い体部から屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。	外面 口縁部をヨコナデ。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部はナデ。	色調 淡褐色 粒土 2.0~4.0mm程度の右英を含む。 焼成 良好
	SD 1				
56	甕	口 径 12.8	「く」の字形に規則として内窵みにのげる口縁部に至る。端部は丸く終わる。	外面 口縁部をヨコナデし、胴部は6条/13.5mmのタタキのあと部分的に4条/3.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 墓褐色 粒土 粒径~1.0mm程度の角閃石と雲母を多く含む。 焼成 良好
	SD 1				

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
57	甕	底径 4.5	ドーナツ状の底部である。	外面 4条/10.5mmのタタキ。 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 淡白褐色 胎土 粗粒の石英を含む。 焼成 良好
	SD2				
58	甕	口径 15.2	底部より屈曲する11様部のみ造作。 底部は上方へつまみ上げ、通常側面には1条の凹痕がある。	外面 タコナギ 内面	色調 淡青褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角 閃石、長石を多く含む。 焼成 良好
	SD4				
59	甕	底径 4.6	ドーナツ状の底部であろう。	外面 4条/13.0mmのタタキ。 内面 小明。	色調 赤褐色 胎土 角閃石、長石、石英を 含む。 焼成 良好
	SD5				
60	甕	底径 3.5	ドーナツ状の底部であろう。	外面 4条/11.0mmのタタキ。 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 淡白褐色 胎土 粗粒の角閃石を含む。 焼成 良好
	SD5				
61	甕	口径 13.5 最大径 15.6 基底 高 17.7	丸みをもって屈曲し、内窓さみに開いて長い伸びる11様部。通常近くで外反ぎとなり、底部は外へつまむ。体部は中位に最大径をもつ扁平な球形である。 体部中位に焼成時の穿孔跡とと思われる小孔がみられる。	外面 口縁部に10条/7.5mmのハケのあと縁部近くと接合部にタコナギ。 内面 前部はヘラケズリのあとヘラミガキを施す。口縁部にハケのあとヘラミガキがあると思われるが焼失を受け不分明である。接合部付近は粗粒気泡がみられ側面部はナゲ。	色調 淡青褐色 胎土 微粒の長石、くさり輝、1.0～2.0mm程度の石英、長石を含む。 焼成 良好
	SD9上層				
62	甕	口径 9.2 最大径 11.7 基底 高 14.1 基底 高 1.3	丸みをもって屈曲し、内窓さみに開く口縁部。通常は尖りぎみに終わる。 通常内窓は平面になる。 体部は中位に最大径をもつ球形で、底部はわじかに平底面がみられる。	外面 全体に磨耗を受け不明。 内面 口縁部にヘラミガキのあと研磨を施す。接合部近くに押圧痕が残り、側面部はヘラナゲ、部分的にヘラ原体による押圧が残っている。	色調 淡青褐色 胎土 微粒の長石、角閃石を含む。 焼成 良好
	SD9上層				
63	甕	底径 4.4	突出する手蓋で、中央部は若干凹む。 上行底状を呈する。	外面 磨耗を受け不明 内面	色調 小褐色 胎土 1.0mm程度の石英を含む。 焼成 良好
	SD9上層				
64	甕		丸底の底部である。	外面 8条/5.0mmのハケを施す。 内面 ナゲ。	色調 淡褐色 胎土 微粒の長石を含む。 焼成 良好
	SD9上層				

番号	種類 出上位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒土・焼成・備考
65	甕	口 径 15.4	張りの弱い体部から屈曲してのびる突かい口縁部で、端部は丸く終わる。	外側 口縁部をヨコナデし、胴部はハケを施す。 内面 ナデと思われる。	色調 淡茶褐色 粒土 粘土 焼成 良好
	SD9上層				
66	甕	口 径 15.0	体部から丸く屈曲し、外反する口縁部で、端部はわずかに上方へつまむ。	外側 脇部に4条/12.0mmのタスキを施す。 内面 摩耗を受けない。	色調 本褐色 粒土 粘土 焼成 良好
	SD9上層				
67	甕	口 径 14.6	体部から屈曲して外反し、中位で屈折して、若干屈曲内窪みとなる口縁部。端部は丸く終わる。	外側 全体に摩耗を受け不明瞭であるが、内面脇部にヘラケズリがみられる。	色調 茶褐色 粒土 粘土 焼成 錫鉱~1.0mm程度の角閃石が多く含む。 良好
	SD9上層				
68	甕	口 深 14.7	「く」の字形に屈折し、外反する口縁部に至る。端部は外斜する平坦面となる。	外側 全体に摩耗を受け不明瞭であるが、外面脇部にわずかにハケがみられる。	色調 淡茶褐色 粒土 0.5~2.0mm程度の石英、チャートを含む。 焼成 良好
	SD9上層				
69	甕	口 径 15.5	「く」の字形に強く屈折し、外反する口縁部に至る。端部は上方へ尖りがみに終わる。	外側 口縁部とハケのあとヨコナデ、脇部は9条/16.0mmのタスキのあと6条/8.0mmのハケを施す。 内面 脇部にヘラケズリ。	色調 茶褐色 粒土 錫鉱~2.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
	SD9上層				
70	甕	口 径 15.2 最大径 16.5	「く」の字形に強く屈折し、若干内窪みにのびる口縁部に至る。端部は外斜する平坦面となる。体部の張りは弱い。	外側 脇部に10条/20.0mmのタスキのあと7条/12.5mmのハケを施す。 内面 脇部にヘラケズリ。	色調 茶褐色 粒土 錫鉱~1.5mm程度の角閃石、黄石を含む。 焼成 良好
	SD9上層				
71	甕	口 径 16.8	「く」の字形に強く屈折し、外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外斜する平坦面となる。体部の張りは弱い。	外側 脇部に12条/21.5mmのタスキのあと6条/9.0mmのハケを施す。 内面 脇部をヘラケズリする。全体に摩耗を受けている。	色調 淡茶褐色 粒土 錫鉱~1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SD9上層				
72	甕	口 径 17.6	「く」の字形に屈折し、わずかに内窪みにのびる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外斜する平坦面となる。體内は厚めである。	外側 口縁部をヨコナデし、脇部に7条/8.5mmのタスキのあと6条/10.5mmのハケを施す。 内面 口縁部を6条/10.5mmのハケのあとヨコナデし、脇部にヘラケズリ。	色調 茶褐色 粒土 錫鉱~1.5mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SD9上層				

番号	器種	出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
73	甕	口 住	14.8	「く」の字形に屈折し、外反する口縁部に至る。縁部はつまみ上げ、外傾する平坦面となる。	外側 口縁部をヨコナデし、胴部にタタキがみられる。 内側 口縁部を4重/7.0mmのハケのあとヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 基褐色 胎土 粘土、微粒の長石を含む。 焼成 良好
	SD9上層					
74	甕	II 住	14.8	「く」の字形に屈折し、外反する口縁部に至る。縁部はつまみ上げ、直立する平坦面をつくる。	外側 口縁部をヨコナデし、胴部に12条/25.0mmのタタキのあと5条/9.0mmのハケを軽く施す。 内側 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 基褐色 胎土 粘土、0.5mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SD9上層					
75	甕	口 住	13.0	「く」の字形に屈折し、上位で内窪みとなる口縁部である。縁部はつまみ上げ、直立する平坦面となる。	外側 口縁部をヨコナデし、胴部にわざわざにタタキが残る。 内側 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 基褐色 胎土 粘土、微粒の角閃石、微粒～1.0mm程度の長石を含む。 焼成 良好
	SD9上層					
76	甕	口 住	16.6	75と同様であるが、縁部のつまみ上げはさらに強くなる。	外側 口縁部をヨコナデする。 内側 11縫部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 基褐色 胎土 粘土、微粒～0.5mm程度の長石、角閃石を含む。 焼成 良好
	SD9上層					
77	甕	II 住	13.8	「く」の字形に強く屈折し、外反する口縁部となる。縁部はつまみ上げ、外傾する平坦面となる。	外側 11縫部をヨコナデし、胴部に6条/11.5mmのタタキを施す。 口縁部下方にはタタキ全体にによる凹みが残る。 内側 11縫部を4条/9.0mmのハケのあとヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 基褐色 胎土 微粒～1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
	SD9上層					
78	甕	口 住 最大径	15.0 18.5	丸みのある体部から「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部に至る。縁部は直しくつまみ上げ、直立する円筒となる。体部の頸りは強いためである。	外側 口縁部をヨコナデし、胴部にタタキのあと5条/3.5mmのハケを施す。 内側 口縁部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 基褐色 胎土 粘土、微粒～1.5mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
	SD9上層					
79	甕	口 住	16.8	「く」の字形に強く屈折し、外反する口縁部に至る。縁部は直しくつまみ上げ、直立する円筒となる。体部の頸りは強いためである。	外側 口縁部をヨコナデし、胴部は10条/15.0mmのタタキのあと10条/15.0mmのハケを軽く施す。 内側 11縫部をヨコナデし、胴部にヘラケズリを施す。	色調 基褐色 胎土 粘土、微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SD9上層					
80	甕	口 住	17.8	79と同様の対応である。	外側 口縁部をヨコナデし、胴部に12条/18.0mmのタタキのあと5条/10.5mmのハケを軽く施す。 内側 口縁部をヨコナデし、胴部はヘラケズリのあと複数部元くに5条/10.5mmのハケを施す。	色調 基褐色 胎土 粘土、微粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SD9上層					

番号	品種	法星(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒土・焼成・備考
81	黒	最大径 19.4	球形に近い体部で、最大径はやや上方に位置すると考えられる。体部は丸底である。	外側 脚部上方を 10条/18.0mm のタクキガムからし、底部から最大径部分にかけて 7条/8.0mm のハケを施す。 内側 ヘラケズリである。	色調 基褐色 粒土 粗粒～1.5mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
82	黒	口 径 15.5 最大径 20.3 器 高 20.1	「く」の字形に崩壊して外反する口縁部で、端部はつまみ上げがあり外傾する円錐となる。体部はやや上方最大径があり、倒卵形を呈し、尖りぎみの丸底をもつ。	外側 口縁部をヨコナデし、脚部上方に 11条/22.0mm のタクキがみられ、底部から最大径部分にかけて 8条/10.0mm のハケを施す。 内側 口縁部をハケのあとヨコナデし、脚部にヘラケズリを施す。	色調 基褐色 粒土 粗粒～1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
83	黒	口 径 15.4 最大径 18.6 器 高 18.2	「く」の字形に崩壊して外反する口縁部で、端部はつまみ上げ、さらに外傾する。体部はやや上方に最大径があり、すこし平底の丸底をもつ。	外側 口縁部をヨコナデし、脚部上方に 13条/21.0mm のタクキがみられ、底部から最大径部分にかけて 7条/7.0mm のハケを施す。 内側 11脚部を 6 条/7.5mm のハケのあとヨコナデし、脚部をヘラケズリする。	色調 基褐色 粒土 粗粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
84	黒	口 径 14.4 最大径 17.5 器 高 17.4	「く」の字形に崩壊して直線的にのびる口縁部で、端部はつまみ上げぎみで外傾する平底面をもつ。体部はやや上方に最大径があり、尖り底をもつ。	外側 口縁部をヨコナデし、脚部上方を 9条/15.5mm のタクキをあと 7条/12.0mm のハケを施す。 内側 11脚部を 8 条/15.5mm のハケのあとヨコナデし、脚部をヘラケズリする。	色調 基褐色 粒土 粗粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
85	黒	口 径 14.4 最大径 18.3	「く」の字形に崩壊して外反する口縁部で、端部はつまみ上げは卵巣である。また、下方へすこしに肥厚し、端部側面は直立する円錐となる。体部は中位に最大径があり、球形に近く、尖りぎみの丸底をもつ。	外側 口縁部をヨコナデし、脚部上方に 9条/13.0mm のタクキがみられ、底部から最大径部分にかけて 7条/7.0mm のハケを施す。 内側 口縁部を 5 条/6.0mm のハケのあとヨコナデし、脚部をヘラケズリする。	色調 基褐色 粒土 粗粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
86	黒	口 径 13.8 最大径 15.8 器 高 14.8	「く」の字形に崩壊して外反する口縁部で、端部のつまみ上げは卵巣である。また、下方へすこしに肥厚し、端部側面は直立する円錐となる。体部は中位に最大径があり、球形に近く、尖りぎみの丸底をもつ。	外側 口縁部をヨコナデし、脚部上方に 10条/19.0mm のタクキがみられ、底部から最大径部分にかけて 6 条/9.0mm のハケを施す。 内側 口縁部をヨコナデし、脚部はヘラケズリする。	色調 基褐色 粒土 粗粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
87	黒	口 径 12.9 最大径 13.3 器 高 13.5	「く」の字形に崩壊して外反ぎみにのびる口縁部で、端部は上方へ尖る。端部側面は直立する円錐となる。体部はB6と同様であるが、口縁部に比べ、小型である。	外側 口縁部をヨコナデする、脚部上方に 9条/14.0mm のタクキがみられ、底部から最大径部分にかけて 7 条/9.0mm のハケを施す。 内側 口縁部をヨコナデし、脚部はヘラケズリ。	色調 基褐色 粒土 粗粒～1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
88	黒	口 径 13.8 最大径 18.1 器 高 19.1	丸く崩壊して外反した後直立する口縁部で、上端部は丸く終わる。体部は上方に最大径のある卵形でわずかに平底面のみられた丸底をもつ。 端部側面に 7 条/9.0mm の挑撻沈痕を辿らす。	外側 口縁部をヨコナデし、脚部上方に 8条/13.0mm のハケを施す。底部から最大径部分近くまでは 6 条/8.0mm のハケを施す。 内側 口縁部をヨコナデし、脚部はヘラケズリである。	色調 基褐色 粒土 粗粒の長石・角閃石を含む。 焼成 良好

番号	器種	法蓋(cm)	軸窓の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
89	瓶	底 径 3.7	ドーナツ状の底部である。	外面 4条/10.0mmのタタキを施す。 内面 ヘラナナデである。	色調 淡褐色 粘土 粗粒の長石・角閃石を多く含む。 焼成 良好
90	瓶	底 径 4.4	ドーナツ状の底部である。	外面 タタキを施す。 内面 ヘラナナデである。	色調 淡灰褐色 粘土 粗粒の石英を含む。 焼成 良好
91	瓶	底 径 4.4	突出する平底である。	外面 4条/10.0mmのタタキを施す。 内面 ナナデである。	色調 淡灰褐色 粘土 長母、粗粒のチャート、石英を含む。 焼成 良好
92	瓶	底 径 3.8	おしつぶしたような丸底をもつ。	外面 8条/12.5mmのハケを施す。 内面 ヘラケズリである。	色調 淡褐色 粘土 粗粒～1.0mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
93	瓶		尖り底である。	外面 9条/17.5mmのタタキを施す。 内面 ヘラケズリである。	色調 淡褐色 粘土 粗粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
94	瓶	口 径 36.0	体部からくぼみの字形近くに組目し、内青色みにのびる口縁部に至る。喉部は外傾する平底面となる。	外面 織柄を受け不明。 内面 口縁部はヨコナナデと思われる。喉部はヘラケズリである。	色調 淡褐色 粘土 長粒の長石・変母、粗粒の石英・チャートを含む。 焼成 良好
95	瓶	口 径 20.0 高さ 6.9	突がりぎみの底部から内窓しながら開き、口縁部との境に棱を作り、口縁部は外反しながら直立し、喉部は丸く終わる。	外面 ヘラケズリがみられる。 内面 8条/12.0mmのハケを施す。	色調 淡褐色 粘土 粗粒の長石を含む。 焼成 良好
96	小管瓶	口 径 13.4 高さ 6.5	平底を喉部から内窓きみに開き、口縁部との境に棱を作り、口縁部は外反しながら直立し、喉部は丸く終わる。	外面 口縁部をヨコナナデし、体部は組目なナナデ。 内面 ヘラケズリのあと平底にし、部分的に7条/7.0mmのハケを施す。	色調 淡白褐色 粘土 粗粒の石英・長石を含む。 焼成 良好

番号	基 本 出 土 位 置	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色調・粘土・焼成・備考
97	小型体	口 径 10.3	深い半球形の体部からくびれた後加曲し、内凹ぎみにのびる口縁部に至る。端部は高く、尖りぎみに終わる。	外側 体部にヘラケズリのあとがみられる。 内面 口縁部をヨコナデし、体部はヘラナデのあとナデ。	色調 淡赤褐色 粘土 脱上 チャート・芸母・くさり織を含む。 焼成 良好
	SD9上層				
98	小型体	II 径 10.7 底 径 1.8 高 6.6	深い半球形の体部から屈曲し、内凹してのびる口縁部に至る。端部は内に丸く終わる。底部はわずかに凹んで残す丸底である。	外側 体部にヘラケズリのあとがみられる。 内面 全体に磨耗を受けている。	色調 淡赤褐色 粘土 脱上 くさり織を含む。 焼成 良好
	SD9上層				
99	小型体	口 径 10.2 高 7.2	98と同様の体部から、内に棱を作つて屈曲し、外折する口縁部に至る。端部は内に丸く終わる。底部は尖りぎみに終わる。底部は丸底である。	外側 体部にヘラケズリのあとがみられる。 内面 全体に磨耗を受けている。	色調 赤褐色 粘土 くさり織多く、粗粒の石灰をわずかに含む。 焼成 良好
	SD9上層				
100	小型器内	II 径 9.1 底 径 9.6 高 7.9	底部から外凹ぎみに開き、屈曲して立ち上がる口縁部に至る。端部は丸く終わる。肩部は器内より直線的に膨がり、底部は丸く終わる。	外側 肩部、脚部に6条/6.5mmのハケ。 内面 脚部に6条/6.5mmのハケを施す。	色調 赤褐色 粘土 くさり織、微粒の長石を含む。 焼成 良好
	SD9上層				
101	小型器内	II 径 9.3 底 径 9.0 高 10.0	100と同様の杯部をもつが、口縁部は上方へ尖りぎみにのび、底部は下方へ膨らんで終わる。	外側 脚部に8条/8.0mmのハケ。 内面 脚部と脚部に8条/8.0mmのハケを施す。	色調 赤褐色 粘土 くさり織と微粒の長石を含む。 焼成 良好
	SD9上層				
102	小型器台	口 径 9.8 底 径 12.4 高 10.2	浅い半球形の杯部で、端部は外傾する平底面をもつ。脚部は底部より細小状で大きく膨らむ。底部は下方に尖りぎみに終わる。 脚部下方に円孔を穿つ。	外側 ヘラケズリのあと脚部にヘラシガキがみられる。 内面 脚部に7条/10.0mmのハケのあとナデをおこなう。	色調 淡赤褐色 粘土 微粒の長石を含む。 焼成 良好 全体に磨耗を受けている。
	SD9上層				
103	高杯	II 径 23.5 底 径 15.5 推定器高16.4	杯底部から一辺屈曲し、外傾して反ぐのがる口縁部に続く。端部は外傾する凹面となる。屈曲きの柱状態から丸く屈曲し、大きくながる状態に至る。底部は丸く終わる。 底部下方に円孔を穿つ。	外側 杯部・受部に10条/17.0mmのハケを施し、柱状部にヘラケズリのあと部分的にハケ、底部は9条/5.5mmのハケを施す。 内面 受部に10条/17.0mmのハケがみられ、底部に9条/9.0mmのハケを施す。	色調 淡赤褐色 粘土 くさり織を多く含む。 焼成 良好
	SD9上層				
104	高杯	口 径 21.7 底 径 14.1 高 17.4	下追な柱状部から屈折し、外傾して長く立ち上がる口縁部に続く。端部は尖りぎみに終わる。中段まで中央の柱状部から屈曲し、内凹ぎみに開く柱部に至る。底部は内に丸く終わる。 底部4方に円孔を穿つ。	外側 柱状部にヘラケズリがみられ、受部・脚部に9条/14.0mmのハケを施す。 内面 受部、底部に9条/14.0mmのハケを施す。	色調 淡白褐色 粘土 微粒の長石を多く含む。 焼成 良好
	SD9上層				

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・加工・焼成・備考
105	甕	口 径 13.4 底 大 径 15.2	'く'の字形に屈曲して外反する口縁部で、上位ではわずかに外折する。腹部は細く尖りぎみに終わる。体部は球形に近いと思われる。	外面 口縁部をコロナダし、胸元は6.8cm/7.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をコロナダし、胸元はヘラナダ。	色調 淡褐色 加工 石英・チャートを含む。 焼成 良好
		S D10			
106	小型器台	口 径 9.4	基部より直線的に聞く杯底部から梗をもって屈折し、外反ぎみに立ちする口縁部に平ら。腹部は外へつまんで終わる。	外面 ヘラミガキを施す。 内面	色調 乳白色 加工 繊維の芯母・くさり繩を含む。 焼成 良好
		S D10			
107	高杯		平進な杯底部から窓い梗をもって屈折し、直線的にのびる口縁部に至る。	外面 全体に磨耗を受け不規則。 内面	色調 淡茶褐色 加工 繊維の芯母・くさり繩を含む。 焼成 良好
		S D10			
108	高杯	口 径 21.3 底 径 16.2 最 高 13.8	杯底部から丸みをもって口縁部へ続く。腹部は外へつまみぎみに丸く終わる。柱状部は中空は比較的太く、屈折して内湾ぎみにのびる高い階部に至る。 把部4方に凹孔を穿つ。	外面 先部にヘラミガキ。柱状部にヘラケズリがみられる。 内面 先部にヘラミガキ。	色調 淡赤褐色 加工 繊維～1.0mmの長石・石英・くさり繩を含む。 焼成 良好 全体に磨耗を受けている。
		S D10			

## 第6節 第6次調査

### I 調査の概要

建設予定地内にA・B 2ヶ所のトレーニチを設定した。Aトレーニチは $5.5 \times 5.5\text{m}$ で調査を開始したが、一部 $2 \times 2\text{m}$ を拡張した。Bトレーニチは $3 \times 3\text{m}$ で調査を開始し、最終的に西側へ1m拡張した。調査総面積は約46 $\text{m}^2$ である。

両トレーニチとともに上面から60~70cmまでの盛土・旧耕土・床上の部分を機械掘削し、以下約60cmを人力で発掘した。

### II 層序

基本層序は第1層耕土、第2層床上、第3層褐色土、第4層暗黄褐色土である。第3層は須恵器・土師器・瓦器等の破片を多量に含む。第4層は布留式の古相の包含層である。

Bトレーニチの北東隅を層位確認のため掘り下げたところ、OP+7.5m付近の砂層より庄内式

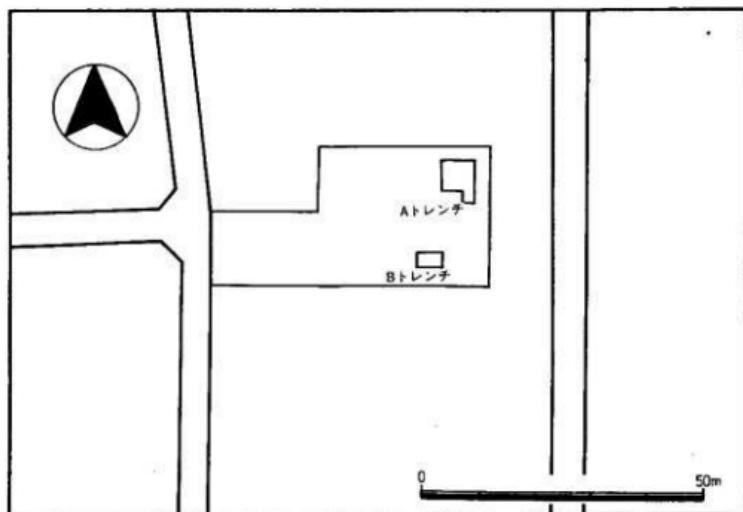


図39 調査地設定図

表、OP+7.0m付近の砂層より布留式の新相の土器を検出した。このことから、古墳時代前期・中期において層序の逆転現象が生じたことが認められる。

### III 検出遺構

#### 1) Aトレント

井戸・溝・柱穴の他、不整形の浅い落込みを検出した。これらの遺構は、すべて第4層（暗黄褐色土）を掘り込んで形成されている。しかし、遺構そのものが浅いことや、遺構集中部分における第4層上面のレベルが他と比べて全体に10~30cm低いことなどから、これらの遺構は後に削平を受けたものとみられる。埋土は井戸を除いてそのほとんどが、第8層の褐色土である。

#### SE1

直徑約80cmを測る素掘りの井戸である。井戸内埋土上層より若干の布留式の時期の上器を検出した。埋土を掘り下げたところで木製品（図40）・自然木を含む青灰色粘土層が確認された。

この層はBトレント掘下部においてみられた層に対応するものと考えられる。なお、この井戸はSP5に切られる。

#### SD1

幅約40cm・深さ約10cmを測り、東から西に流れる溝である。埋土中より土師器・須恵器・瓦器の磨滅した小片が出土した。

#### 柱穴群（SP1~SP14）

柱穴と考えられるものを多数検出したが、確実な建物を復元することはできなかった。SP2・SP3・SP5・SP8の埋土中には、磨滅した土師器の細片が含まれている。



#### 土塙（SK1~SK4）

0 5cm 不整形なもので深さも一様でない。遺物はSK2からは須恵器杯蓋1点が出土した他は、いずれも磨滅した土師器・須恵器の小片である。なお、SK3の埋土下層には遺物を含まない。

図40 SE1出土木製品

## 2) Bトレンチ

トレンチ中央部で、第4層を掘り込んだ土塙を検出した。検出時においては一基の土塙と考えていたが、掘削の結果基底部で幅約35cmの南北に延びる畦状遺構によって、東西に分かれることが判明した。西側のSK1は土器片を多量に含むが、東側のSK2は土器片をほとんど含まない。埋土は両土塙とも、砂質土が混入する暗灰褐色土の上面に暗灰褐色粘質土が堆積している。なお、SK1とSK2を区画する畦状遺構は、土塙掘削時の第4層削り出しによるものであり、盛土によるものではない。

また、SK1の北側の第4層中において、土師器片がみられたので精査を行なったが、遺構は存在しなかった。このことから、第4層は古墳時代前期の包含層であると考えられる。

なお、トレンチ北東隅を約1m掘り下げたところ、川の痕跡と考えられる砂層および、その下のOP十約6.9mで黄灰色粘土質土層・青灰色粘土層を確認したが、年代を決定する遺物は得られなかった。

### SK1

上面は最大長約2.45m・中央部の幅約1m、底面は最大幅約2.2m・中央部の幅約0.5mを測り、断面は舟底形を呈する。

出土した遺物は、須恵器・土師器のみである。主たる遺物は西から土師器片口鉢・同直口壺・同鉢・同把手付鉢・同二重口縁壺・同鉢、須恵器高杯、土師器高杯、須恵器高杯という順で、基本的には埋土の上層中に遺存していた。なお、土塙の東端において土器は皆無であった。須恵器高杯のように完全に破碎されていてすべてが揃わないものや、1個の破片のみのものがある反面、完存の土師器壺や、破碎されていても部分がすべて揃っているものがあるなど、出土状況は多様であるといえよう。

以上より、SK1は単なる廐棄物投棄用のものではなく、土塙墓とも考え難く、現段階においては性格不明の特殊遺構と考えている。ただ、須恵器の大部分が完全に破碎された高杯であることは、幾分祭祀に伴なう性格を示すものと言えるかもしれない。

### SK2

全容が明らかではないが、判明している部分はSK1より畦をはさんで東へ続き、そこに南側から浅い溝が流れ込んでいるという状態である。ほぼ水平な底面は南北長約0.8mを測り、断面は舟底形を呈する。底面の標高はSK1とほぼ同じで、トレンチ南端の溝底部より0.2m

ほど低い。

#### IV 出土遺物

##### 1) A レンチ出土遺物 (図40・42)

###### 第3層出土遺物

須恵器には杯身(4)・杯蓋つまみ(7)があり、土師器には高杯(9)・土鉢(10)・壺(17)・羽釜(18)等がある。他に土師器・須恵器の小片が出土した。

###### 第8層上面出土遺物

この層中からは土師器・須恵器・瓦器・瓦等の小片が多数出土したが、その中で図化できたのは6個体である。須恵器は杯身(2・3)・杯蓋つまみ(5・6)・片口鉢(19)、土師器は高杯(8)である。

###### S K 2 出土遺物

(1)は須恵器杯蓋である。天井部外面にはヘラ切りの本調整痕が残る。なお、天井部内面に「一」文字形のヘラ書き記号文がある。

###### S E 1 上層出土遺物

(11~40)は土師器高杯であると考えられる。(15)は土師器壺、(16)は土師器鉢である。図40は青灰色粘土層より出土した板材である。現状の法量は長さ28.3cm・幅9.8cm・厚さ1.0mmである。長辺の片側端より1.4cmのところに1.5×1.0cm程度の枘穴状のものが、6cm間隔で3ヶ所に認められる。板目材である。

##### 2) B レンチ出土遺物 (図43~45)

###### S K 1 出土遺物

掘削時において上面より取り上げた土器も含めて、実測に堪え得るものは須恵器15個体、土師器14個体であった。うちわけは須恵器が蓋6・高杯(蓋を含む)7・壺1・甕1、土師器が壺3・高杯5・鉢4・把手1・椀1である。

土師器直口壺(2)が完存していた他は、すべて破片で遺存していた。また、同一個体の破片がほぼ集中していることや、須恵器でさえ完全に割れていることなどを考えると、破片で出土

した土器については上塙に入れられた際に意識的に割られたもの、もしくは後世に削平等を受けた際に破壊されたものと考えられよう。須恵器は、陶邑II型式第4段階～第5段階に比定できる。<sup>①</sup>

なお、遺構の項でも述べたように、土塙の掘り込まれている第4層が古墳時代前期の遺物包含層である点を勘案すると、土師器壺(3)は土塙が削削された際に出土し、再び土塙内に投入されたものではないかと考えられる。

#### SK 2 出土遺物

羽釜(47)・甕等の破片が数点出土した程度である。SK 1 の示す年代と大きな隔たりは無いと思われる。

#### 包含層出土遺物

第3層中の土師器・須恵器、第4層中およびトレンチ北東隅深掘部の砂層中より出土した土師器がある。

時期については、第3層中の須恵器には5世紀代のものから7世紀以降のものがあり、第4層中の二重口縁並(35)・高杯(30)等は庄内式の時期のものである。また、トレンチ北東隅深掘部の砂層からは、上層より庄内式の甕が、下層より布留式の新相の甕・壺等が出土しており、砂層内において層位の逆転現象がおこったことを示している。

#### Vまとめ

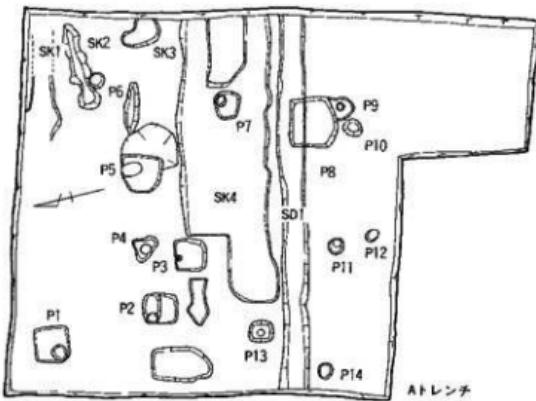
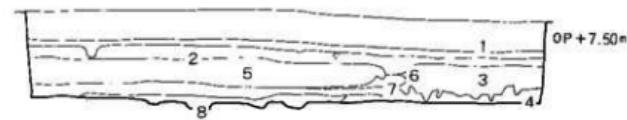
A トレンチの顕著な遺構としては、井戸・柱穴群があげられる。井戸は出土した土器により、布留式の新相に比定できる。その他の遺構については、年代決定の資料に乏しく、正確な時期、および性格は知り得なかった。しかし、このように多くの柱穴が存在することから、古墳時代以降に建物が存在したことが考えられる。

B トレンチでは、多量の土師器・須恵器を伴なう上塙を検出した。なお、これらの土器は出土状況による一括資料と考えられる。また、この上塙は、高杯が破碎された状態でまとめていたことなどから、特殊な性格をおびるものと判断される。

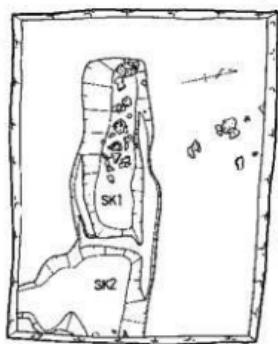
以上のことにより、今回の調査において東郷遺跡の性格が一端なりとも解明できたのではないかと考える。なお、特殊な土塙とそこに含まれていた6世紀後半の土師器は、同時期の数少ない古墳時代研究の一助になるものと思われる。

〔注　記〕

1　大阪府教育委員会『陶邑田』1978年



Aトレーンチ



Bトレーンチ

1. 旧耕土
2. 淡褐色砂質土
3. 増殖色土
4. 増殖褐色土
5. 黄灰色砂層
6. 淡褐色砂質土(やや暗い)
7. 明褐色粘質土
8. 棕色土

0 2m

図41 平断面図

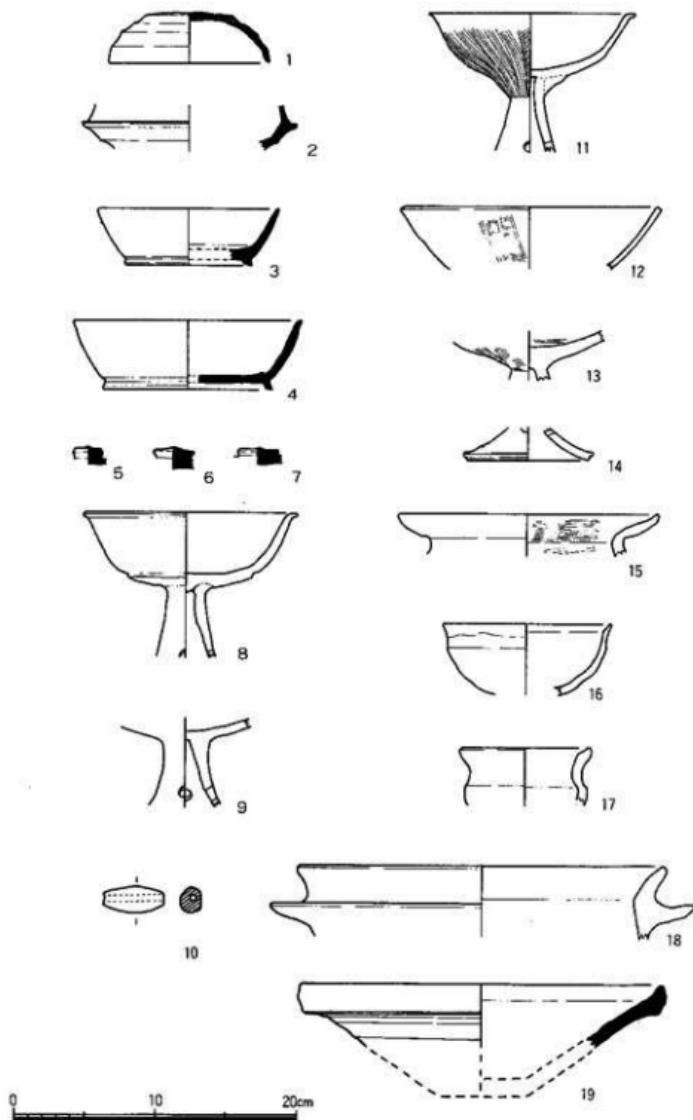


図42 Aトレンチ出土遺物実測図

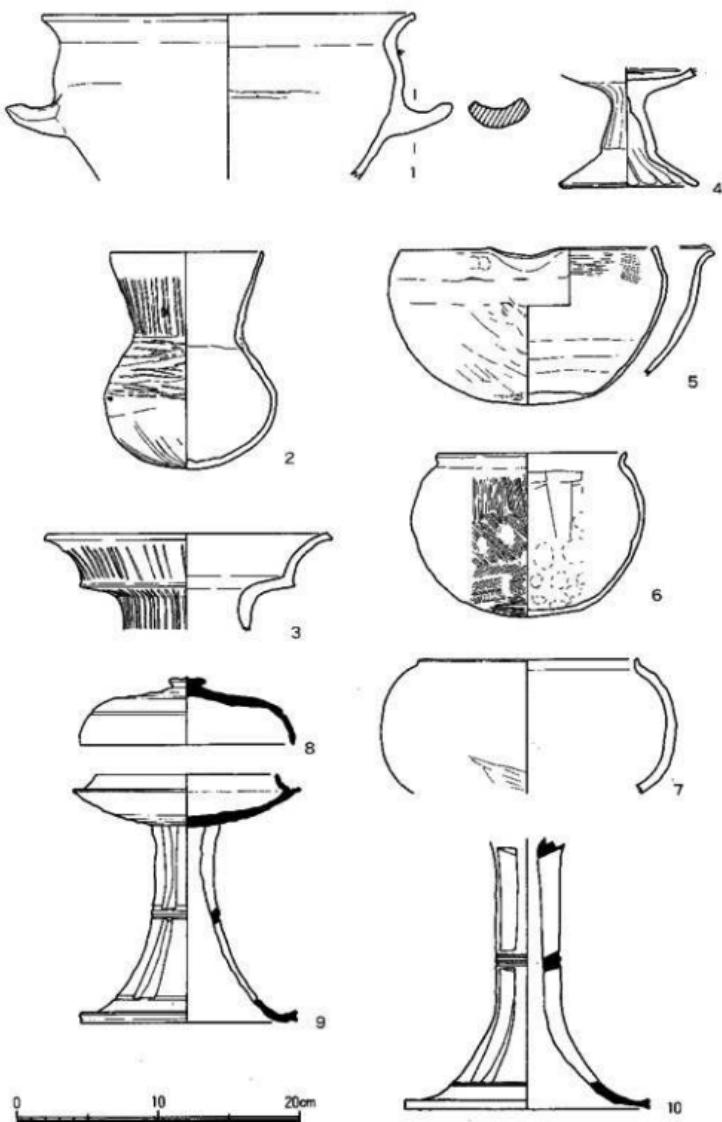


図43 Bトレンチ出土遺物実測図1

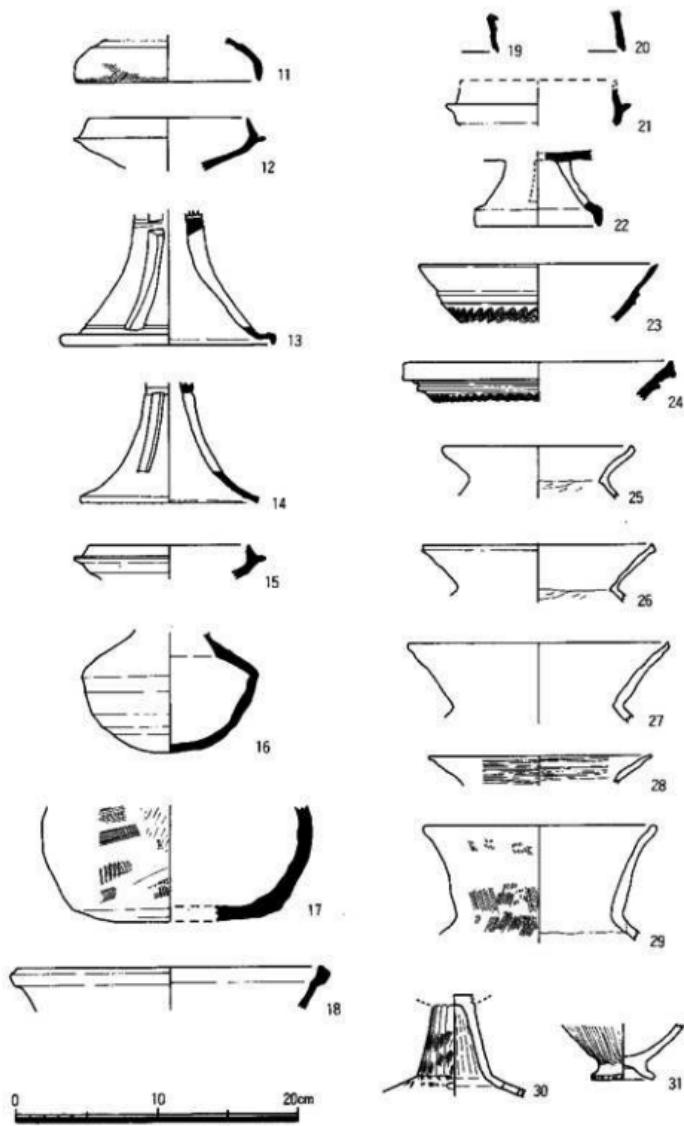


図44 Bトレンチ出土遺物実測図2

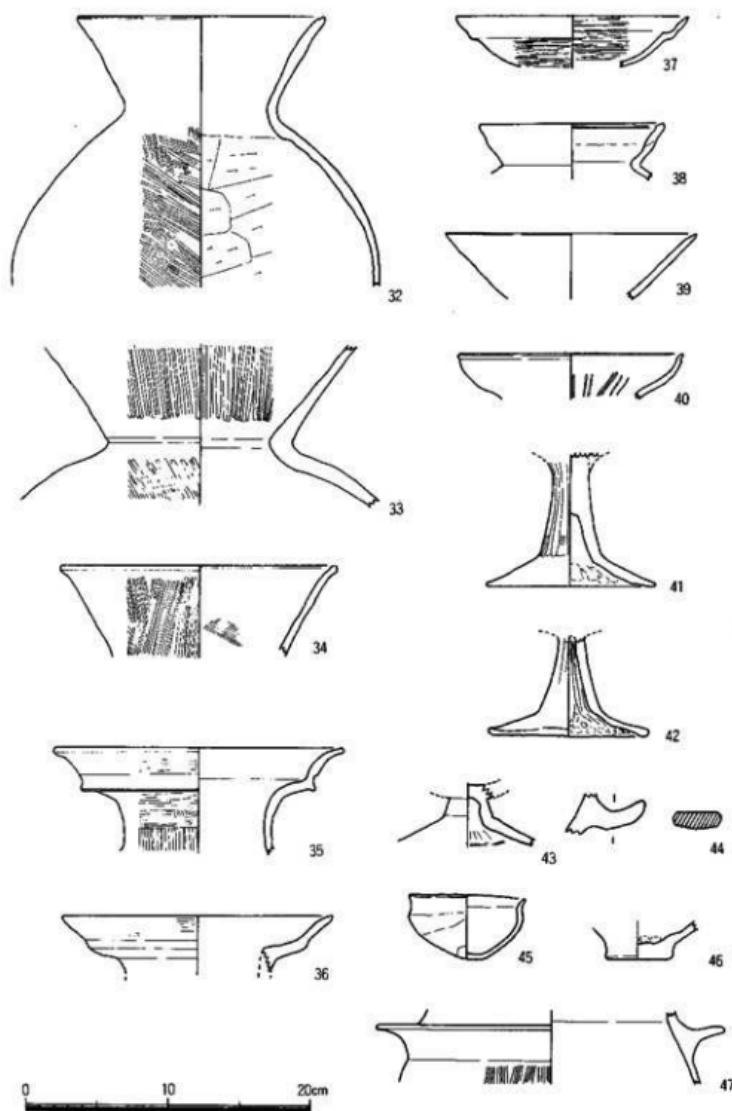


図45 Bトレーニング出土遺物実測図3

## VI 遺物観察表

### 1) Aトレンチ

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手方法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
1	蓋杯(蓋) SK 2	口径 11.3 基高 3.6	口縁部はやや外反して下る。 天井部は平らに近い。	外面 半径 6 cm 以内は回転ヘラ削り 調整。他は回転ナダ調整。 内面 中心付近は不整方向のナダ調整。 他は回転ナダ調整。	色調 淡灰色 粘土 厚 2 mm 以下の砂粒を含む。 焼成 良好至極 残存 稍存
2	蓋杯(身) 第8層上面	受部径 15.2	たちあがりは内傾してのびる。 受部は短かく、端部はやや弧い。	外面 半径 6.2 cm 以内は回転ペラ削り調整。 他は回転ナダ調整。 内面 回転ナダ調整。	色調 淡青灰色 粘土 厚 1 mm 以下の砂粒を少 量含む。 焼成 良好至極 残存 受部約 5%
3	蓋杯(身) 第8層上面	口径 12.8 高台径 9.0 基高 4.1	口縁はやや外反しながら上外方にの びる。 全体部はゆるやかに内窪して立ち上る。	外面 基底はヘラ切ノ失調整。 他は回転ナダ調整。 内面 回転ナダ調整。	色調 淡青灰色 粘土 精緻 焼成 良好至極 残存 稍好
4	蓋杯(身) 第3層	口径 18.2 高台径 12.0 基高 4.9	全体部はゆるやかに内窪して立ち上る。	外面 底部はヘラ切り失調整。 他は回転ナダ調整。 内面 蓋部は団子ナダ調整。 他は回転ナダ調整。 高台はハリツケ	色調 淡青色 粘土 精緻、厚 1 mm 以下の砂 粒を少含む。 焼成 良好至極 残存 稍好
5	蓋杯(蓋) 第8層上面	つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	基部が丸い底平な獨立珠縫つまみ。	外面 回転ナダ 内面 不整方向のナダ	色調 灰色 粘土 精緻、厚 1 mm 以下の砂 粒を含む。 焼成 良好 残存 つまみ完存
6	蓋杯(蓋)	つまみ径 2.8 つまみ高 0.8	獨立珠縫つまみ。	外面 回転ナダ 内面 不整方向のナダ	色調 淡灰色 粘土 精緻、厚 1 mm 以下の砂 粒を含む。 焼成 良好 残存 つまみ完存
7	蓋杯(蓋)	つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	獨立珠縫つまみ。	外面 回転ナダ 内面 不整方向のナダ	色調 淡灰色 粘土 精緻、厚 1 mm 以下の砂 粒を少含む。 焼成 良好 残存 つまみ完存

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
8	高杯	口 径 15.2 基盤上半	底部から口縁部にかけて段を有する。脚部は底部に貼りついている。底より口縁部にかけ内凹し脚部は、内凹や外凸。	外面 内面 器底回遊成のため不明	色調 白赤褐色～白灰色 粘土 粘土 焼成 良好 残存 杯底ほぼ完存
9	高杯	口 径 14.0 第3層	口および杯部の一部を欠く。脚部の4.万連しは外側より穿孔	外面 内面 底耗が激しく不明脚部内面にしばり痕がみられる。	色調 白褐色～灰褐色 粘土 粘土 焼成 良好 残存 杯底上半完存
10	土錠	径 孔 底 全 長	1.8 0.5 0.5 4.4 第3層	外面の一部が扁平 孔は中心よりややずれる。	色調 法褐色 粘土 粘土 焼成 良好 残存 完存
11	高杯	口 径 14.7 SEIJ層	杯底部は外寄した後、やや内寄して口縁部に至る。 口縁部は、外寄しながら底部に至り 脚部は短い。 脚部の淮しは中心よりずれる。	外面 口縁部はヨコナデ 脚部は不整方向のナデ 全体に1cmあたり7条のハケ 目をもつ。 内面 口縁部はヨコナデ 他は不整方向のナデ	色調 赤褐色 粘土 従1mm未満の赤褐色、 全素母等を含む。 焼成 良好 残存 杯底部分および脚部上半
12	高杯	口 径 18.0 SEIJ層	やや内寄気味に立ち上がり、口縁部は平坦面で終わる。	外面 1cmあたり8条の横方向ハケ の後、ヨコナデ調整 内面 ヨコナデ調整	色調 法赤褐色 粘土 従1mm～0.1mmの砂粒を 多量に含む。 焼成 良好 残存 口縁部約4%
13	高杯	SEIJ層	杯底部はわずかに外上方に伸びてゆき、脚部は外側に広がる。	外面 底部に1cmあたり6～7本の タテハケを施す。 内面 不整方向のナデ 脚部の内面もナデを施す。	色調 法赤褐色 粘土 従2mm～0.1mmの砂粒を 含む。 焼成 良好 残存 杯底約3%
14	高杯	径 径 9.2 SEIJ層	横部がゆっくり外寄気味に伸びる。 淮しは外側より穿孔されている。	外面 壁底が激しく不明 脚部はへラのようなものでナ デしている。 内面	色調 法赤褐色 粘土 従1mm以下の砂粒を 含む。 焼成 良好 残存 脚部約3%
15	甕	口 径 18.4 SEIJ層	脚部より「く」の字形に内寄して口縁部に至る。端部は丸味をもって内寄する。	外面 6mmあたり5本の横方向ハケ を施す。 内面 口縁部は外側と同じ。底部は ヨコナデ	色調 法赤褐色 粘土 従2mm以下の白色砂粒 を含む。 焼成 良好 残存 口縁部約3%

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
16	瓶	H 径 12.0 SEL上部	体部は内凹しながら立ち上り、口縁は外反気味に伸びる。腹部は丸い。	外側 体部は不整方向のケズリを施し口縁部は強いナデ。 内面 口縁部は外側と同じ。体部はタテ方向のハケ。	色調 青小菊色(外側) 灰褐色(内面) 粘土 粘土 焼成 1mm以下の砂粒を含む。 良好 残存 約5%
17	壺	口 径 9.0 第3層	体部より外窩しつつ斜上方に伸びる。	外側 体部は不整方向のナデを施し 内面 他はヨコナデ 体部はハラ削りを施し、他はヨコナデ	色調 赤褐色 粘土 2mm~0.1mm以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約4%
18	羽茎	H 径 25.6 第3層	口縁部は上外方にばかり凹は口縁直下にありやや上方に伸びる。	外側 ヨコナデ 内面 口縁部はヨコナデ、その他はナデ	色調 小菊色 粘土 2mm~0.1mm以下の石英、長石、金雲母を含む。 焼成 良好 残存 約50%
19	碗	口 径 25.6 第8層上面	体部はほぼ上外方に伸び、口縁部は肥厚している。	外側 回転ナデ 内面 口縁部は強いナデを施し、他はナデ	色調 青灰色 粘土 约1mm以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 口縁部約5%

## 2) 日トレンチ

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
1	把手付鉢	口 径 26.0 SK1	底盤は欠損するが、球状の体部を有し外反する口縁部につながる。口縁部は丸くおさめ、市下は豊富の筋別の位置に対称に2箇貼り付ける。	外側 口縁部はヨコナデを施し、体部はハラ調整の後ナデを施す。 内面 ヨコナデを施す。	色調 赤褐色 粘土 约1mm以下の砂粒を少含む。 焼成 良好 残存 約5%
2	実口壺	H 径 10.6 最大径 12.2 基高 15.4 SK1	やや外反する口縁部を有し、口縁部は丸く、内面乳突に満る。体部はやや屈曲した球状を呈し、底部は丸底である。	外側 口縁部から体部上部にかけては織方向ハケの後ヨコナデおよび旋方向のヘラミガキを施す。体部下部より底部にかけてはハラケズリを施す。体部には巻上げ痕を残す。 内面 接合部が残る。	色調 小黄褐色 粘土 2mm以下の砂粒を少含む。 焼成 良好 残存 无存
3	複合口縁壺	口 径 19.6 SK1	複合口縁の型である。口縁部は上外方にのじり口縁部は丸を有する。屈折部の縫は丸く、体部へのつなぎはゆるやかな曲線をえぐく。	外側 ヨコナデの接縫方向のヘラミガキを施す。 内面 ヨコナデを施す。	色調 赤褐色 粘土 粘土 焼成 良好 残存 約5%

番号	種 出土位置	法 長(cm)	形 態の特 徴	手 法の特 徴	色調・粒度・焼成・備考
4	高杯	幅 径 9.2 器 高 10.7	杯上部は欠損するが、底部はやや傾く。ややふくらんで脚部にとり巻き、脚部は丸くおさめる。	外側 杯部から脚部にかけて指による成形痕が残る。 内側 脚部はヘラミガキを施し、脚部は強い指おさえを施す。	色調 粘土 径2mm以下の砂粒を含む。 焼成 良好 焼存 約5%
	SK1				
5	片口鉢	口 径 18.0 器 高 10.7	半球形を呈する体部を持ち口縁はやや内凹する。口縁部は面を持つ。底部はやや扁平で肉厚である。口縁部は口縁をやや外側にひねり出す。	外側 口縁部はヨコナナメを施し、指圧痕痕が残る。体部から底部にかけてヘラケズリを施す。 内側 手底工具によるナナメの後ヨコナナメを施す。	色調 粘土 径1mm以下の砂粒を含むが精緻である。 焼成 良好 焼存 約5%
	SK1				
6	杯	口 径 13.3 器 高 11.6	外腹する口縁部からやや簡便な球状を呈する体部につながり底部は丸底である。口縁部は丸くおさめる。	外側 口縁部強いヨコナナメ、肩部ヨコナナメ。体部は上方よりタテハケ、左上からリタケ、横方向ハケを施す。 内側 口縁部ヨコナナメ。体部下端附近に先によるナナメ、下位には指壓痕痕が残る。	色調 粘土 径1mm以下の砂粒を含む。 焼成 良好 焼存 約5%
	SK1				
7	杯	口 径 15.4	ほぼ直立する口縁部で、底部は丸くおさめる。簡便な球状を呈する体部で底部は欠損する。	外側 口縁部は強いヨコナナメを施し、体部上半はナナメを施し、下半部はヘラケズリを施す。 内側 口縁部は強いヨコナナメを施し、体部はナナメで仕上げる。	色調 粘土 径2mm以下の砂粒を含む。 焼成 良好 焼存 約5%
	SK1				
8	高杯(茎)	口 径 15.2 器 高 4.9	口縁部はやや外方に下り、底部は丸くおさめる。大井部はやや扁平で脚部には斜線を一条めぐらす。つまみは扁平で中央部は突出する。	外側 つまみは圓軸ナナメを施し、天井部は圓軸ヘラケズリ、口縁部は圓軸ナナメを施す。 内側 天井部は不整方向のナナメを施すが、全体に圓軸ナナメを施す。	色調 粘土 径2mm以下の白色砂粒を含む。 焼成 良好 焼存 約5%
	SK1				
9	有茎高杯	口 径 12.8 受部径 16.1 器 高 15.2 器 高 17.6	杯たちあがりは内側し堆部はやや高い。底盤はやや深く平らである。脚部は底盤とは直角に成して外方に下り脚部は直角に下り面を持つ。上段と下段の透しの間に2条の沈線をめぐらせ、下段の透しの上に2条の浅い沈線をめぐらす。	外側 脚部は脚部とともに圓軸ナナメを施す。 内側 脚部とともに圓軸ナナメを施し、脚部上部にしづら痕が残る。	色調 粘土 径2mm以下の白色砂粒を含む。 焼成 良好 焼存 約5%
	SK1				
10	高杯	幅 径 17.4	杯部は欠損するが、脚部は輪郭からほぼ直角に下り、下部で外方に開く脚部は直角に下り面を持つ。上段と下段の透しの間に2条の沈線をめぐらせ、下段の透しの上に2条の浅い沈線をめぐらす。	外側 圓軸ナナメを施す。 内側 下半部は圓軸ヘラケズリを施す。上半部はしづら痕を残す。	色調 粘土 径2mm以下の白色砂粒を含む。 焼成 良好 焼存 約5%
	SK1				
11	蓋杯(蓋)	口 径 12.9	口縁部は直角に下り、底部は内凹して丸くおさめる。大井部はやや扁平である。	外側 口縁部から肩上部まで四輪ナナメを施し、成形痕ハケ状のもので調整する。天井部はヘラケズリを施す。 内側 圓軸ナナメを施す。	色調 粘土 径2~3mmの砂粒を含む。 焼成 良好 焼存 約5%
	SK1				

番号	種別 地上位置	法 直(cm)	形 異 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色調・粒土・焼成・備考
12	蓋杯(身) SK1	口 仰 11.1 受部 13.6	口縁部は内側してたちあがり端部は 深い。受部は窪く、底部はやや扁 平である。	外側 口縁部から底部にかけて回転 ナダを施し口縁部ではみ出 した船上にヘラケズリを施す。 内側 回転ナダを施す。	色調 明灰色(外面) 粒土 径2mm以下の白色砂粒 を含む。 焼成 良好 残存 約4%
13	高杯 SK1	脚 仰 14.9	杯部および脚上半部を欠損するが、 下方方に下り、頂部で上方に折り曲 げ直角に下る。頂部はやや扁い。七 段と下段の透しの間に2条の窪・沈 穂がめぐり、下段の透しの下段部に 浅い沈穂をめぐらす。	外側 回転ナダを施す。 内側 下段の透しまで回転ナダを施 し、下段透し上部以上にしば り痕が残る。	色調 暗灰色 粒土 径1mm以下の砂粒を含 む。 焼成 良好 残存 約4%
14	高杯 SK1	脚 仰 12.4	杯部および脚上半部を欠損するが、 脚部は下方方に下り、底部は両を持つ。 下段透しの上端部に1条の沈穂をめ ぐらせる。	外側 回転ナダを施す。 内側 回転ナダを施す。下段透しの 中央部以上にしばり痕が残る。	色調 黒灰色 粒土 径2mm以下の砂粒を含 む。 焼成 良好 残存 約4%
15	蓋杯(身) SK1上面	口 仰 11.3 受部 13.6	口縁部は内側してたちあがり、底部 はやや深い。受部は窪く水平にの びる。	外側 回転ナダを施し、体部下半部 はヘラケズリを施す。 内側 回転ナダを施す。	色調 淡灰色 粒土 径2mm以下の砂粒を含 む。 焼成 良好 残存 約4%
16	透 第3層	最大径 12.4	口縁部は欠損するが、肩はやや丸く 全体は半球状を呈する。底部は丸底 である。	外側 上部から弓まで回転ナダを施 し、底部にかけて回転ヘラケ ズリを施す。 内側 回転ナダを施す。	色調 灰色 粒土 径2mm~0.5mmの長石粒 を含む。 焼成 良好 残存 約5%
17	透 SK1J面	最大径 18.1	体部上半以上を欠損するが、肩平な 半球状を呈する。底部は平底であり 全体に内厚である。	外側 体部は成形後平行タキを施 し、その後竜方向のハケ調整 と部分的にヘラケズリを施す。 底部はヘラ切り未調整である。 内側 回転ナダを施す。	色調 暗灰色 粒土 径2mm~1mmの砂粒を 多量に含む。 焼成 不良 残存 約6%
18	透 SK1上面	口 仰 21.6	口縁部の上部のみが残存し、外方へ 屈曲し、口縁部で肥厚している。 底部は丸くおさめる。	外側 } 回転ナダを施す。 内側 }	色調 淡灰色 粒土 径1mm以下の砂粒を含 む。 焼成 良好 残存 口縁部 約3%
19	蓋杯(蓋) SK1上面		口縁部は外反して下り、沿部は内側 する段を成す。底はやや丸い。体部 は欠損する。	外側 } 回転ナダを施し、底部近くで 強いヨコナダを施す。 内側 }	色調 暗灰色 粒土 微細砂を含む。 焼成 良好 残存 口縁部 約3%

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・附土・施成・備考
20	蓋杯(身) SK1上面		口縁部は下外方に下り、端部は内傾する面を有する。枝は短く鋭い。体部は欠損する。	外側 回転ナデを施す。 内側	色調 淡青灰色 附土 従1mm以下の砂粒を含む。 施成 良好 残存 口縁部 約3%
21	蓋杯(身) 受部後 SK1上面	13.1	口縁部はやや内傾して立ち上がり、受部はほぼ水平にのびる。口縁部および体部は欠損する。	外側 回転ナデを施す。 内側	色調 黄灰色 附土 良好 施成 良好 残存 受部 約5%
22	高杯 高深 SK1上面	8.7	杯部立ち上がり以上を欠損するが底は平らである。脚部は下外方に下り、端部は直角に下り丸くおさめる。	外側 杯部は回転ヘラケズリを施し 脚部は回転ナデ。端部でヨコナデを施す。 内側 脚部は不整方向のナデを施し 脚部は、杯部との接合に粘土を詰り付け、上方にナデる。 脚部全体にヨコナデを施す。	色調 淡灰色 附土 従2mm以下の砂粒を含む。 施成 良好 残存 約5%
23	無蓋高杯 II 深 SK1上面	16.8	口縁部は上外方にのび、体部中央に断面三角形のケズリ出し凸部を2条めぐらし。その直下に波状文を施す。	外側 回転ナデを施す。下部凸部の下に1条10本の波状文をめぐらす。 内側 回転ナデを施す。	色調 淡灰色 附土 従0.5mm以下の砂粒を含む。 施成 良好 残存 口縁部 約3%
24	笠 口 瓶 SK1上面	18.8	口縁部のみ残存し端部から直角に下り内窓しつつ下る。断面三角形の凸部を1条めぐらし。その直下に波状文を施す。	外側 回転ナデを施し、凸部はケズリ出しである。 内側 粘付帯のため不明	色調 淡灰色 附土 従1mmの砂粒を含む。 施成 良好 残存 口縁部 約5%
25	甕 口 瓶 深部妙層	13.2	口縁部は「く」の字形に屈曲し、斜上方へのびる。口縁端部は丸くつまみ上げる。	外側 口縁部はヨコナデ。体部に斜方向のハケを施す。 内側 口縁部はヨコナデ。体部はヘラケズリを施す。	色調 黄灰褐色 附土 従2mm以下の角閃石、金雲母等の砂粒を含む。 施成 良好 残存 口縁部約3%
26	甕 口 瓶 深部妙層	16.2	口縁部は「く」の字形に屈曲し、斜上方へのびる。口縁端部は外傾する面を作り、つまみ上げる。	外側 口縁部はヨコナデ。体部に斜方向のハケを施す。 内側 口縁部はヨコナデ。体部はヘラケズリを施す。	色調 淡灰灰褐色 附土 従2mm以下の角閃石、金雲母等の砂粒を含む。 施成 良好 残存 口縁部約3%
27	甕 口 瓶 深部妙層	18.3	口縁部は「く」の字形に屈曲し、斜上方へのびる。口縁端部はやつまみあげ気味である。	外側 ヨコナデを施す。 内側 口縁部はヨコナデを施す。	色調 淡灰褐色～淡赤褐色。 附土 従2mm以下の金雲母等の砂粒を含む。 施成 良好 残存 口縁部約3%

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
28	鉢	口径 15.6	口縁部はやや外反しながら斜上方へ のびる。口縁端部はやや鋸い。	外面 横方向の丁寧なヘラミカキを 施す。 内面	色調 明褐色 粘土 砂粒をほとんど含まない精良なもの。 焼成 良好 残存 口縁部約4%
	深皿				
29	甕	口径 16.2	口縁部はやや外反しながら斜上方へ のびる。	外面 口縁部は板方向のハケ調整の 後ヨコナナを施す。 内面 体部は瓶方向のハケ調整。 口縁部はヨコナナを施す。	色調 淡黄褐色～淡赤褐色 粘土 粒2mm以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 口縁部約4%
	深皿				
30	高杯		杯部および脚部は欠損するが下外 方にのびる柱部と大きく外傾する脚 部を有する。	外面 杯部はヘラケズリ後右下りの ハケ調整を施す。脚部はハケ 調整を施す。 内面 杯部はしづく痕を残し、脚部 はケズリを施す。	色調 淡赤褐色 粘土 粒2mm以下の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 約3%
	第4層				
31	合付鉢	幅口径 4.2	脚台部は「ハ」の字形にやや外反気味 に開く。 端部には刷毛がみられる。	外面 体部は瓶方向のヘラミカキを 施す。 内面 体部はナナ調整。	色調 暗褐色～淡褐色 粘土 粒2mm以下の砂粒を含む。 金 青等の砂粒を含む。 焼成 良好 残存 脚台部完存
	深皿				
32	甕	口径 17.3	肩部はやや内窪する。 颈部は基部より外反し、やや内窪し たもの外反して腹部へと続く。 端部は丸く、つまり上げ気味にやや 内傾する。	外面 腹部は1cmあたり約16条のハ ケを板方向に施した後、1cm あたり約6条のハケを瓶方向 に施す。颈部は瓶方向に細かい ハケを、腹部はヨコナナを施す。 内面 腹部は瓶方向の細かいハケ調 整を、体部はヘラ削りを施す。	色調 暗褐色 粘土 5mm以上の砂粒を含む。 内閃石を含む。 焼成 良好 残存 約4%
	第4層				
33	甕		肩部はやや内窪する。 颈部にはほほ直線的に斜外方に立ち 上がる。	外面 頸部は瓶方向のヘラ削りを施す。瓶 方向は強いヨコナナを施す。 内面 瓶部は瓶方向に弱り気味の強 いナナを施した後、瓶方向の ヘラ削りを施す。	色調 暗灰褐色 粘土 0.5～2mmの砂粒を含む。 雲母を含む。 焼成 良好 残存 頸部完存
	第4層				
34	甕	口径 19.4	瓶部はやや外反気味に立ち上がり、 外傾する端部へと続く。腹部は丸い、 端部内面には1条の深い虎紋がめぐ る。	外面 瓶方向のハケ調整を施す。端 部はヨコナナを施す。 内面 ハケは1cmあたり8～9条で ある。	色調 暗褐色 粘土 2mm以下の角閃石、金 青等を多く含む。 焼成 良好 残存 口縁部約4%
	第4層				
35	複合口縁部	口径 20.3	外反する1段目の口縁部に、同じく 外反する2段目の口縁部がつながる。 口縁端部は丸く、部壁は薄い。端部 内面はややつまみ上げ気味である。	外面 瓶部の下部は瓶方向のヘラ削 りを、上尾及び2段目の口縁 部は横方向のヘラ削りを施す。 口縁端部及び脇折部はヨコナ ナを施す。 脇折部が削減しているので調整 不明である。	色調 明褐色 粘土 1mm前後の砂粒を若干 含む。 焼成 良好 残存 瓶部約4%
	第4層				

番号	西・北 山土位実	法 直(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色調・粘土・地底・備考
36	複合ヒル	口 保 19.0	直線的にのびる1段目に、同じく直線的に斜方方にのびる2段目の11段部がつながる。 端部はやや尖り気味である。	外側 横方向のハケ調整を施す。 内側 砂波が縮減しているため不明である。	色調 明黄褐色 粘土 1mm前後のチャート・石英等を若干含む。 地底 良好 残存 既存
	SKI上面				
37	林	口 保 16.3	体部は内凹してのび、外反し弱い後へと続いた後、内寄気味に端部へのびる。端部は弱い。 内面の屈曲部は曲をなし、後は明確である。	外側 全面にヨコナデを施した後、屈曲部より下部は斜方内の細かいヘラ磨きを施す。 内側 ヨコナデの後、全面にヨコ方向に細い丁寧なヘラ磨きを施す。	色調 小褐色 粘土 1mm前後の粒石・砂母を含む。 地底 良好 残存 口縁部既存
	第4層				
38	妻	口 保 13.0	屈部はやや外反気味にのび、少し内寄した後さらに外反して端部へと続いく。端部内面は面をなし肥厚する。屈曲部内面は丸い。	外側 端部はヨコナデを施す。 内側 ヨコナデを施す。	色調 淡赤褐色～明黄褐色 粘土 2mm以下の砂母・砂粉を含む。 地底 良好 残存 口縁部既存
	SKI上面				
39	高杯	口 保 17.6	ほぼ直線的に斜方へのびる。端部は尖り気味であり、内面は沈降状にやや凹む。	外側 横方向のハケ調整を施す。 内側	色調 小褐色 粘土 1mm前後の長石・砂母・石英等を含む。 地底 良好、端部外側に黒斑を有する。 残存 口縁部既存
	SKI上面				
40	高杯	口 保 15.8	口縁部は内凹して立ち上がり、端部は斜上方に伸び、弱い。 口縁部に黒斑がみられる。	外側 ヨコナデを施す。 内側 ヨコナデの後ヘラ磨きを施す。	色調 赤褐色 粘土 1mm以下の砂粒を微量含む。 地底 良好 残存 口縁部既存
	SKI下面				
41	高杯	幅 保 11.8	中央の柱状部から試かる屈部。屈部に黒斑がみられる。	外側 1cmあたり10条のハケ目を施す。 内側 屈部に指紋圧痕が残る。	色調 淡赤褐色～黑色(黒度) 粘土 径0.5mm以下の砂粒を少量含む。 地底 良好 残存 柱状部既存
	第3層				
42	高杯	幅 保 11.2	柱状部はやや内寄しながらゆるやかに開き、脚部は「へ」の字形に大きく開く。	外側 屈部は指おさえを施す。 内側 柱状部はしばり痕がある。	色調 淡赤褐色 粘土 砂粒をほとんど含まない。 地底 良好 残存 柱状部既存。
	SKI上面				
43	高杯		柱状部は短く、脚部は「へ」の字形に大きく開く。	外側 横方向のヘラミガキを施す。 内側 屈部はハケ調整の後ナカを施す。	色調 淡赤褐色 粘土 径1mm以下の長石・砂母を含む。 地底 良好 残存 脚部既存
	第4層				

番号	基準 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
44	把手		内窓しながら前め外方にのびるが把手以外は欠損する。	外面 全体に擦で形成する。	色調 赤褐色 胎土 砂土 焼成 良好 残存 完存
	SK1上面				
45	小型柄	口径 器高 4.6	外反する口縁部から内方にする体部につながり底部は丸底である。口縁部は丸くおさめる。	外面 口縁部はヨコナナギを施し、体部は軽くナナギを施す。また粘土色き上げによる接合部が残る。 内面 口縁部は横ヨコナナギを施し、体部は不断方向のケタリを施す。	色調 赤褐色 胎土 粘土色 焼成 良好 残存 完存
	SK1下面				
46	裏	底径 3.9	平底の底部から、上外方に大きく開く体部につながるが、体部の大半を欠損する。	外面 未調整 内面 指印压痕がみられる。	色調 姫褐色～黒色 胎土 角閃石・金云母を含む 焼成 良好 残存 底部欠損
	第3層				
47	羽茎	口径 24.6	口縁部、体部を欠損するが全体に内窓し、窓は大きく外反して底部は丸くおさめる。。	外面 口縁部から窓にかけてヨコナナギを施し、体部は縱方向ハサク彫塑を施す。 内面 ヨコナナギを施す。	色調 赤褐色 胎土 透2mm以下の板岩・石英、角閃石、金雲母を含む。 焼成 良好 残存 無
	SK2				

## 第7節 第8次調査

### I 調査の概要

調査地は八尾市光町2丁目に所在し、第5次調査地と道路を隔てた東側に位置する。調査地を2ヶ所に区分し、西側を第1調査区(17.5×25m)、東側を第2調査区(8×16m)と付称し、順次調査を実施した。調査面積は565.5m<sup>2</sup>、調査期間は昭和56年10月5日から12月4日までである。

調査方法は、現地表(O P + 9.00m)から盛土・休耕土・床土までを機械掘削とし、以下は人力による掘削作業としたが、まず調査区の周囲に幅約30cmのトレンチを設定し、遺構面の確認に従って掘削作業を進めていった。

### II 層序

盛土1mを除去すると、第1層旧耕土・床土、第2層淡灰色粘土、第3層灰褐色微砂混じり粘土、第4層淡灰褐色シルト、第5層灰褐色シルト粘土の基本層である。

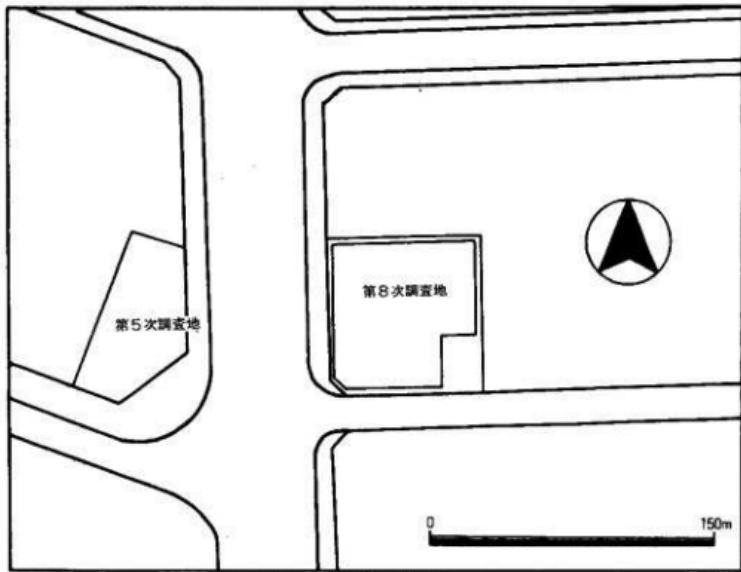


図46 調査地設定図

このうち第2層は、中世以降に削平をうけた水田址のため、調査は断面観察のみにとどめた。第3層は遺物包含層で、その下の第5層上面が古墳時代前期(庄内式の時期～布留式の時期)の生活面である。

### III 遺構・遺物

#### 1) 壇穴式住居

S I 1

第1・第2調査区間で検出した壇穴式住居で、S I 2を切る関係にある。平面は方形を呈し、東西辺 5.6m・南北辺 5.8mを測る。主軸方向は N-39°-E を指す。壇穴の周から床面までの深さは約10cmを測り、床面は平坦である。周溝は幅25~40cmを測り、断面はU字形を呈する。

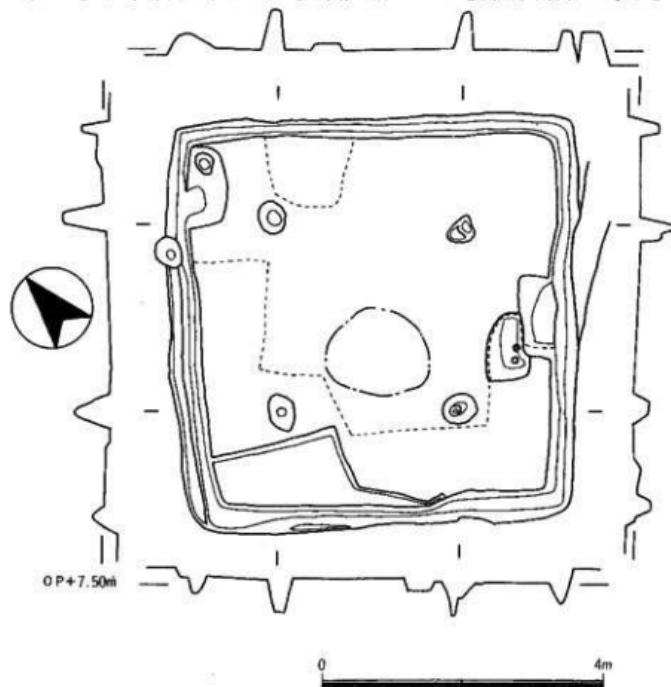


図47 S I 1平面図

この周溝には、北隅と南東辺中央部の2ヶ所に、約 $110 \times 55\text{cm}$ の長方形の掠がりがある。

柱穴は4個を検出し、東西・南北ともに $2.6\text{m}$ の等間隔である。柱穴は径 $30 \sim 50\text{cm}$ ・深さ $40 \sim 50\text{cm}$ を測り、平面は円形および梢円形を呈する。床面の3分の2と柱穴の底部には、小石(小砂礫)をほぼ平坦に敷きつめている。炉址はほぼ中央で確認した。長径 $1.9\text{m}$ ・短径 $1.2\text{m}$ ・深さ約 $5\text{cm}$ を測り、平面は梢円形、断面は皿状である。

住居内の埋土は上方から暗茶灰褐色粘土と暗灰茶色砂混じり粘土の2層に分かれ、床面の小砂礫は厚さ約 $2\text{cm}$ を測る灰褐色砾砂である。周溝・柱穴の埋土は住居内の第2層と同層である。

また、住居内東側では長径 $1\text{m}$ ・短径 $50\text{cm}$ ・深さ $20\text{cm}$ を測る梢円形の落ち込みを検出した。埋土は暗灰茶色砂混じり粘土1層である。

遺物は庄内式甕3点を図示したが、そのうち(1)は住居の床面から完形品に近い状態で出土し、(2・3)は遺構内に堆積する暗灰茶色砂まじり粘土から出土した。また、住居内東側の落ち込みから小型器台(4)や小型丸底壺(5)が出土しているが、住居内出土のものとの時期差は認められない。

## S I 2

南側をS I 1に切られている。  
東西辺 $5.5\text{m}$ 前後・南北辺 $4.7\text{m}$ を測り、長方形を呈する。周溝は幅 $15 \sim 30\text{cm}$ ・深さ $10 \sim 25\text{cm}$ の断面U字形を呈する。

柱穴・炉址は確認できなかつた。また、竪穴の肩と床面が同一レベルであることから、上面はS I 1やS B 9の構築時に削平されたものと考えられる。

同溝の埋土は暗茶灰褐色シルト粘土1層で、ここから庄内式甕(6)の小片が出土した。

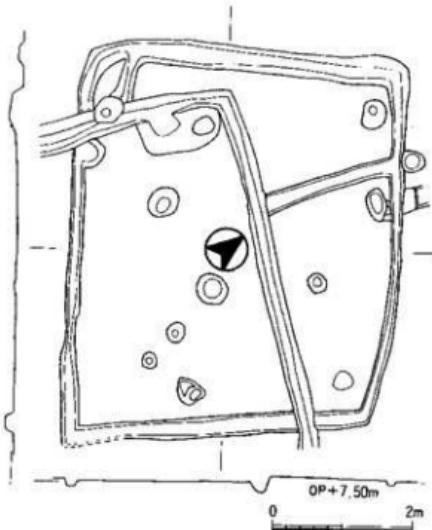


図48 S I 2断面図

## 2) 据立柱建物

### SB 1

第1調査区の南西隅付近で検出した。桁行は2間(4m)で、柱間は2mの等間隔である。梁行は調査区外のため不明である。主軸方向はN-9°-Eを指す。

柱穴の掘形は径50~70cmの楕円

形で、深さ30~40cmのU字形の断

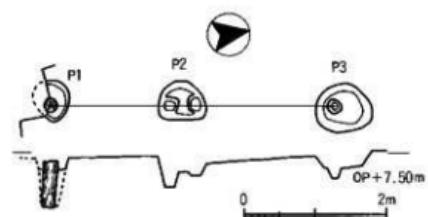


図49 SB1平面図

面を呈する。P1には径20cm・長さ50cmを測る柱根が遺存しており、P2・P3にも径20cm程度の柱の痕跡が認められた。柱穴内の埋土は暗茶灰色シルト粘土で、柱の痕跡内には暗茶褐色砂粘土が堆積する。

遺物はP3の埋土内より庄内式甕(9)等の細片が出土したのみである。

### SB 2

第1調査区の西側中央付近で検出した。中央部をSD5が切っている。桁行1間(2.4m)×梁行1間(2.1m)を測る。主軸方向はN-18°-Eを指し、復元床面積は5.04m<sup>2</sup>である。

柱穴の掘形は径30~50cmの円形および楕円形で、深さは20~30cmを測る。P1・P4には径10~20cmを測る柱の痕跡が認められた。

SB1の南側と北側には、建物を囲むようにして、落ち込みと浅い溝SD6があるため、堅穴式住居の残存ではないかと考えられる。

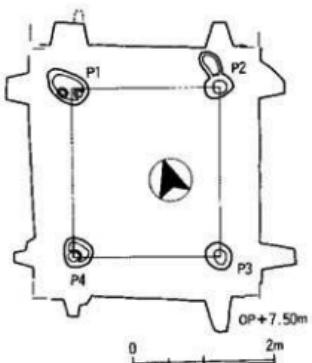


図50 SB2平面図

遺物は柱穴の埋土内から庄内式甕の細片が出土した。

### SB 3

第1調査区中央部付近で検出した。桁行1間(2m)×梁行1間(1.8m)を測る。主軸方向はN-18°-Eを指し、復元床面積は3.6m<sup>2</sup>である。

柱穴の掘形は径40~50cmの円形で、内部には径10~20cmの柱の痕跡がある。このうちP3・P4から柱根が検出された。P4の柱根は径12cm・長さ80cmを測り、先端には加工痕が明瞭に遺存する。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

また、建物の南側では径1m・深さ20cmを測り、横円形を呈する焼土塗を検出した。この土塗の埋土も暗茶灰色シルト粘土であることから、建物に付随するものと考えられる。

柱穴の埋土内や焼土塗内より、壺・庄内式甕等の細片がわずかに出土した程度である。

#### S B 4

第1調査区の中央部で検出した。S B 3と重複している。1間×1間の規模を持ち、柱間は2.5mの等間隔を測る。主軸方向はN-17°-Eを指し、建物の復元床面積は6.25m<sup>2</sup>である。

柱穴の掘形は径20~30cm・深さ30cmを測り、平面は円形を呈する。P1・P2には径10cm程度の柱の痕跡が残存しており、P3には径5cm・長さ20cmの柱根が、P4には径30cm・長さ40cmの柱根がそれぞれ遺存していた。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土1層である。

#### S B 5

第1調査区のS B 3の北側で検出した。桁行3間(3.7m)×梁行1間(1.25m)の規模を持ち、南北に長い建物で、主軸方向はN-22°-Eを指す。柱間は桁行の南側から1.15m・1.25m・1.30mを測る。復元床面積は4.63m<sup>2</sup>である。

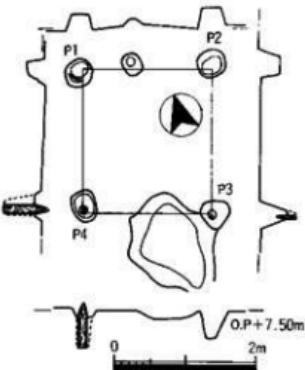


図51 SB3平断面図

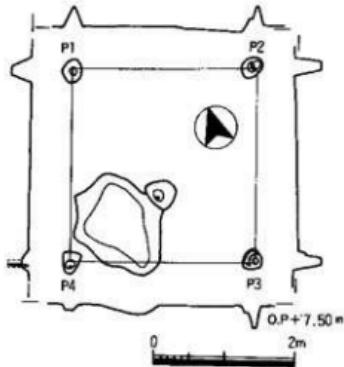


図52 SB4平断面図

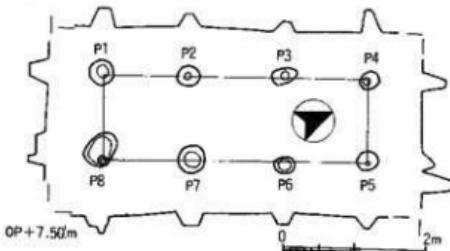


図53 SB5 平断面図

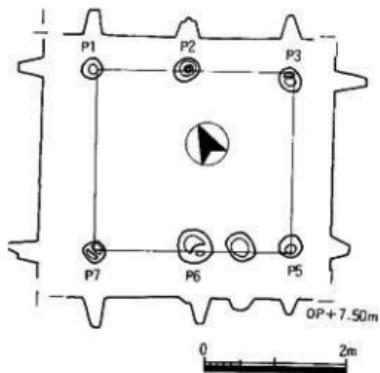


図54 SB6 平断面図

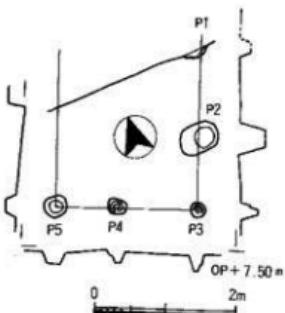


図55 SB7 平断面図

柱穴の掘形は径25~50cmの円形を呈し、深さは30~50cmを測る。掘形内には径15cm程度の柱の痕跡が残存していたものもある。柱穴内には、暗茶灰色シルト粘土が堆積している。

柱穴の埋土内からは、土師器片が若干出土した程度である。

#### S B 6

第1調査区のS B 5の北東部に接した状態で検出した。桁行2間(2.75m)×梁行1間(2.5m)を測り、主軸方向はN-29°-Eを指す。

柱間は南側桁行の西から1.5m・1.25m、北側桁行は西から1.25m・1.5mを測る。建物の復元床面積は6.88m<sup>2</sup>である。

柱穴の掘形は径30~50cmの円形および梢円形で、深さ20~40cmを測る。柱穴内には、径15cmの円形の柱の痕跡が残存していたものもある。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

#### S B 7

第1調査区の北隅で検出したが、北側は調査区外へ至る。検出した範囲内では、桁行2間(2.2m)×梁行2間の建物規模である。主軸

方向はN-21°-Eを指す。

柱穴の掘形は径20~40cmの円形を呈し、深さは20~30cmを測る。内部には径10cmを測る円形の柱の痕跡が検出されたものもある。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

P2の埠土内から、壺(11)がほぼ完形に近い形で出土した。

#### SB8

第1調査区の南東で検出した。桁行2間(3.2m)×梁行1間(2.75m)を測り、主軸方向はN-8°-Eを指す。柱間は東側の桁行北から1.9m・1.3m、西側の桁行はそれぞれ1.6mを測る。復元床面積は8.8m<sup>2</sup>である。

柱穴の掘形は径20~80cmの円形および梢円形で、深さ20~50cmを測る。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

#### SB9

第2調査区S I 1の北東部に隣接し、S I 2を切っている建物である。桁行3間(4.0m)×梁行1間(3.1m)を測り、主軸方向はN-2°-Wを指す。建物の復元床面積は12.4m<sup>2</sup>である。

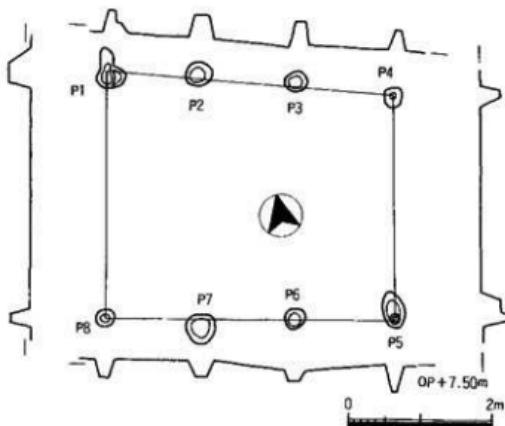


図56 SB9平面面図

柱穴の掘形は径20~50cmの円形および橢円形で、深さは20~30cmを測る。柱穴の内部には柱の痕跡が残存していたものもある。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

柱穴の埋土内より、庄内式甕等の小片が、若干出土した。

#### S B10

第2調査区の北隅で検出した。桁行2間(3.5m)×梁行1間(2.2m)の建物で、主軸方向はN-12°-Eを指す。柱間は東側の桁行兩から1.9m・1.6m、西側のものは1.8mを測るが、北側は調査区外へ至るため不明である。

柱穴の掘形は径20~60cmの円形を呈し、深さ20~40cmを測る。柱穴内部には径20cmの円形の柱の痕跡が残存していたものもある。柱穴の埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

#### 3) 土塙

##### S K 1

第1調査区北西隅で検出した。最大幅2.5m・最小幅2m・深さ15cmを測る不定形の土塙である。内部には暗茶灰色シルト粘土が堆積する。

##### S K 2

第1調査区西壁で検出した。東側はSK3に切られ、西側は調査区外へ至る。検出部で長辺4m・短辺2mの三角形を呈する。周囲には幅30~50cm・深さ10cmを測る溝が廻る。

SK2の埋土は第1層暗茶灰色砂粘土、第2層暗茶灰シルトと淡灰褐色シルトの混合層である。

この遺構は、方形の竪穴式住居とも推測されるが、柱穴・炉址が確認できなかったことや、底部が平坦でなかったことから、ここでは一応土塙として取り扱った。

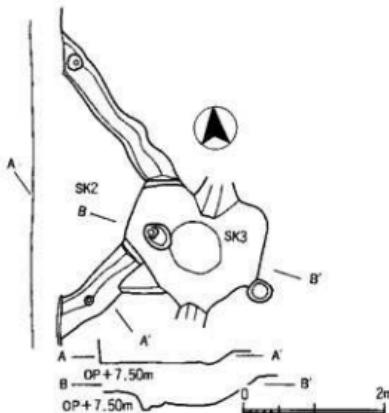


図57 SK2・SK3平断面図

遺物は埋土内より、壺、庄内式甕、V様式タイプの甕、高杯、小型丸底甕等をわずかに出土したが、いずれも細片であった。

#### S K 3

第1調査区の西側で検出した。SK2とSD4を切断している。長径2m・短径1.3m・深さ50cmを測り、平面はほぼ梢円形、断面はすり鉢形を呈する。西肩から径30~40cm・深さ20cmの平面円形を呈するピットを検出した。その内部には径15cm程度の柱の痕跡が認められた。SK3の埋土は上方から暗茶褐色砂粘土、暗灰褐色シルト粘土に二分される。

遺物は上層で甕(13~15)、高杯(17・18)等の破片が出土した。、

#### S K 4

第1調査区の南西隅で検出した。東側はSD2で切られ、西側は調査区外に至る。検出部の最大幅1.7m・最小幅0.4m・深さ20cmを測る。内部には暗茶灰色シルト粘土、黄灰褐色シルト粘土の2層が堆積する。

甕(19)、庄内式甕(20)等が出土した。

#### S K 5

第1調査区の南側中央で検出した。長径4.9m・短径60~90cm・深さ20cmを測り、長梢円形を呈する溝状の土塙である。底部には径20~40cm・深さ30cmを測る円形のピット2個が検出された。南側のピットからは柱の痕跡が認められた。SK5の埋土は暗茶灰色シルト粘土1層である。

#### S K 6

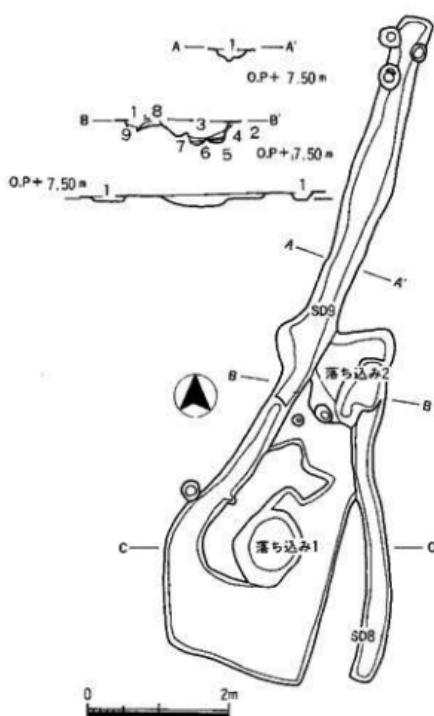
第1調査区の南東で検出した。中央部は幅60cmを測り、溝状を呈し、7条の突起を持つ。底部からは径20~50cm・深さ20~40cmの円形を呈するピット6個が検出された。このうちの2個には、柱の痕跡がみられる。SK6の埋土は暗茶灰色砂粘土である。

埋土内より、壺やV様式タイプの甕等の細片が少量出土した。

#### S K 7

第1調査区北壁の西側で検出した。検出部の最大幅2.6m・深さ10cmを測る。形状から輕穴

式住居の一部と推定されたため、調査区を北側へ拡張した結果、底部から径約1mと0.6mの2ヶ所の落ち込みを検出したが、周溝が認められなかったので、ここでは土塙として取り上げた。



1. 茶灰茶色シルト粘土
2. 流灰褐色シルト
3. 茶灰茶色シルト粘土(焼土・炭を含む)
4. 茶灰茶色粗砂混じり粘土
5. 灰色礫砂
6. 茶灰色粘土
7. 茶灰色シルト粘土
8. 灰褐色細砂粘土
9. 灰褐色シルト粘土

図58 SK10平面図

土塙の埋土は茶灰褐色シルト粘土で、高杯や庄内式甕の細片が若干出土した程度である。

#### SK8

第1調査区西壁の南側で検出した。周囲をSD2が廻る。径90cm・深さ30cmを測る。埋土は上方から茶灰褐色粘土・灰褐色粘土に二分される。

#### SK9

第1調査区で検出し、北側をSD5に切られている。最大幅1.5m・深さ20cmを測る不定形の土塙である。底部には径20cm・深さ15cmを測り、内部に柱の痕跡を残すピットを伴なっている。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

遺物は小型鉢(21)の他、V様式タイプの甕や庄内式甕、小型丸底甕等の細片が出土している。

#### SK10

第1調査区S I 1の西側で検出した。長辺約5m・短辺約2mを測り、ほぼ方形を呈する。南北方向に延びる2条の溝SD8・SD9や、径1m・深さ20cmを測り、西側に高みを持つ落ち込

み1を伴なっている。また、遺構内北側でも長径1m・短径50cm・深さ40cmを測る橢円形の落ち込み2を検出した。

落ち込み2の底部にはS I 1と同様に礫砂が敷きつめられていることから、S I 1に関連する遺構である可能性が強い。

S K10の埋土は暗灰茶褐色シルト粘土の1層であるが、落ち込み2には上方から暗灰色シルト粘土、黒灰褐色砂まじり粘土、灰色礫砂混じり粘質土の3層が堆積しており、上方の2層には焼土や炭を含んでいる。

遺物は小型鉢(22)が小片で、小型丸底壺(23)が完形品で出土した。

#### S K11

第1調査区の南、S B 2の東側で検出した。最大幅90cm・最小幅40cm・深さ10cmを測り不定形を呈する。南東の一部が突出し、その底部から径10cm・深さ20cmのピットを検出した。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

#### S K12

第1調査区の北壁に沿って検出した。検出部で幅90cm・長さ1.5m程度の規模を測り、溝状を呈する。埋土は暗茶灰色砂粘土1層であった。

遺物は土器のごく細片を出土した程度であり、時期や器種は不明である。

#### S K13

第2調査区の東壁近くで検出した。東部は調査区外に至る。検出部での長辺4m・短辺1.5m・深さ20cmを測り、平面は方形に近い。埋土は暗茶灰色砂粘土1層である。底部からは、ピットが検出された。

遺物は壺・庄内式甕等の細片が若干出土した。

#### 4) 溝

##### S D 1

第1調査区の西壁近くで検出した。

幅約50cm・深さ20cmを測る。西側は

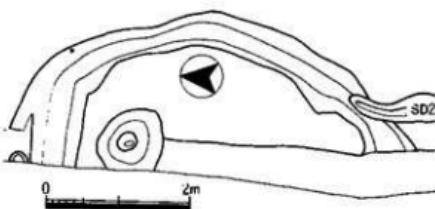


図59 SD1平面図

調査区外へ至るが、検出部で半円形に廻る溝である。南側は S D 2 に切られ、北側は S D 5 を切っている。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

土器の細片を出土したのみで、時期等は不明である。

#### S D 2

第1調査区の南西で検出した。S D 1 を切り、南に延びる構である。幅約50cm・深さ20cmを測る。埋土は暗茶灰色粘土である。

#### S D 3

第1調査区の東側で検出した。S I 1 の南肩に切られ、南に延びている。幅40cm・深さ15cmを測る。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

#### S D 4

第1調査区の西側で検出した。幅20~40cm・深さ10~20cmを測る。中央部の S D 5 西側から派生し、S K 3 に切られた後、ゆるやかなカーブで北東へ流れる溝である。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

遺物は庄内式甕を含む土器の細片が出土した。

#### S D 5

第1調査区を東西に横断する溝である。幅0.6~1.1m・深さ20~30cmを測る。西端では S D 1 に切られている。埋土は上方から暗茶灰色砂礫土、暗灰色粘土に二分できる。

V様式タイプの甕(24・25)等が出土した。

#### S D 6

第1調査区の南西、S B 2 の南側で検出した。幅20~30cm・深さ5cmを測る溝である。埋土は暗茶灰色シルト粘土1層である。

#### S D 7

第1調査区の中央部、S B 3 の西側で検出した。幅30cm・深さ10cmを測り、南北に延びる溝である。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

#### **S D 8**

S K10の北東部から南へ延びる溝である。幅30cm・深さ10cmを測る。埋土は暗灰茶褐色粘砂土1層である。

#### **S D 9**

S D 8同様、S K10に付属する溝である。幅30cm・深さ10cmを測り、北方へ延びる。埋土は暗灰茶褐色粘土の1層である。

#### **S D 10**

第1調査区の南東、S K 6の北部を東西に延びる溝である。幅30cm・深さ15cmを測る。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

#### **S D 11**

第1調査区の北壁近くで検出した。幅10~20cm・深さ10cmを測り、北西方向に延びる溝である。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

#### **S D 12**

第2調査地、S I 1の周溝の北辺より北東方向に延びる溝である。S I 1の外部排水溝と考えられる。埋土は暗茶灰色粘土である。

#### **S D 13**

第2調査区の北側で検出した。幅15~20cm・深さ5~10cmを測り、北西流した後S D14と交差し、角度を変えて北方へ延びる。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

#### **S D 14**

第2調査区の北側で検出した。幅20~30cm・深さ10cmを測り、S I 2の外部排水溝と推定される。北東流し、S D13と交差した後、東西へ曲がる。暗茶灰色シルト粘土が堆積する。

#### **S D 15**

第2調査区の中央で検出し、S D16に切られる溝である。幅50cm・深さ20~30cmを測り、南

北方向に延びる。埋土は暗灰茶色砂粘土である。

壺・庄内式甕等の細片をわずかに出土した程度である。

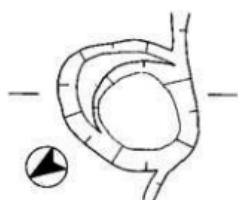
#### S D16

S D15を切り、北東に延びる溝である。幅50cm・深さ30cmを測る。内部埋土は S D15同様である。

#### 5) ピット

当調査地では掘立柱建物10棟を検出したが、他にも内部に柱の痕跡を有し、柱穴と考えられるものを多数検出した。しかし、ほとんどのピットについて、規則性は確認できなかった。ピットの規模には、径10~20cmの小型で浅いものと、径30cm以上の大形のものがあり、前者が多くを占める。

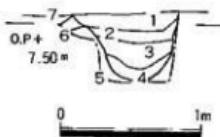
ここでは、規則性の認められたもの、遺物が出土したものについて取り上げる。



#### S P 1

第1調査区北西隅近く、S K 1に隣接するピットである。径1m前後・深さ50cmを測り、平面は円形を呈し、断面は一部に段をもつ。内部埋土はほぼ4層に分かれ、水平に堆積する。

壺2個体(7・8)が出土した。



1. 灰褐色シルト粘土
2. 灰色礫じり粘土
3. 淡灰色シルト粘土
4. 増灰褐色シルト粘土
5. 淡灰色シルト
6. 灰色シルト
7. 淡灰褐色シルト

#### S P 2

第1調査区の北壁中央部、S B 7の付近で検出した。最大径60cm・最小径50cm・深さ35cmを測る楕円形のピットである。内部埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

埋土内から、完形の鉢(10)が出土した。

#### S P 3

第2調査区南東部で検出した。径80cm・深さ32cmを測る平面円形のピットである。

図60 SP1平断面図

壺の底部と思われる(12)が出土した。

#### SP4・SP5・SP6・SP7

第1調査区の北西側で検出したピット列である。主軸方向はN-16-Eを指し、南から1.5m・1.6m・1.8mの間隔で並ぶ。これは柵の柱穴ではないかと考えられる。

掘形内より庄内式壺を含む土師器の細片がわずかに出土した。

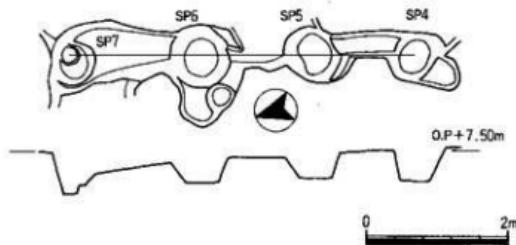


図61 柵列平断面図



図62 平面図

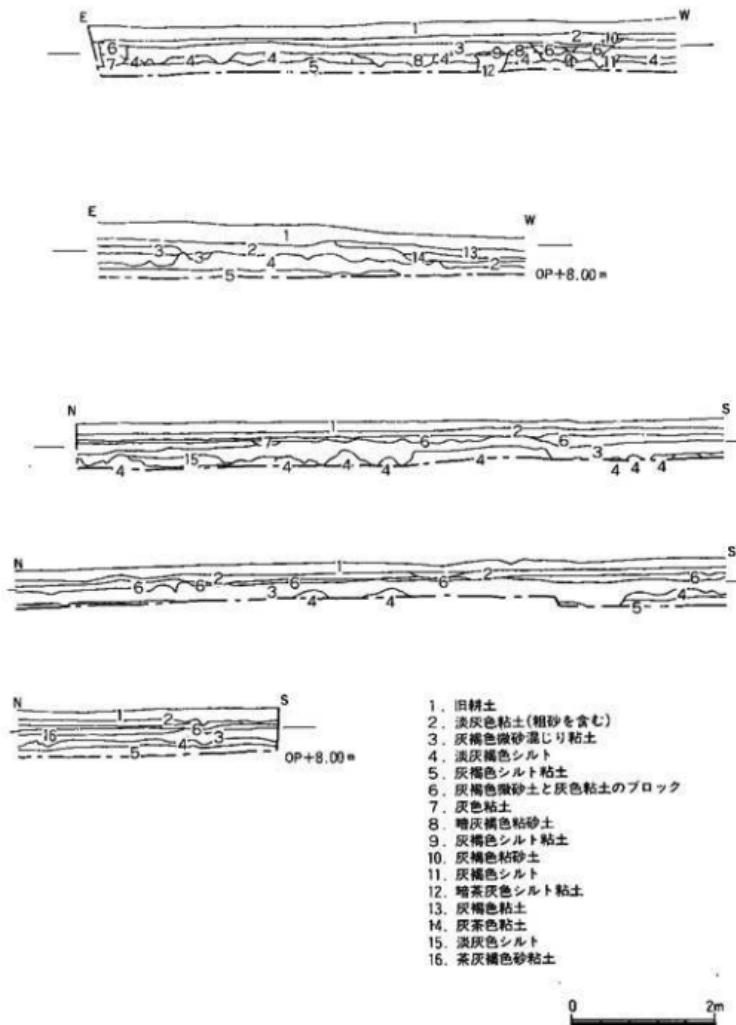


図63 断面図

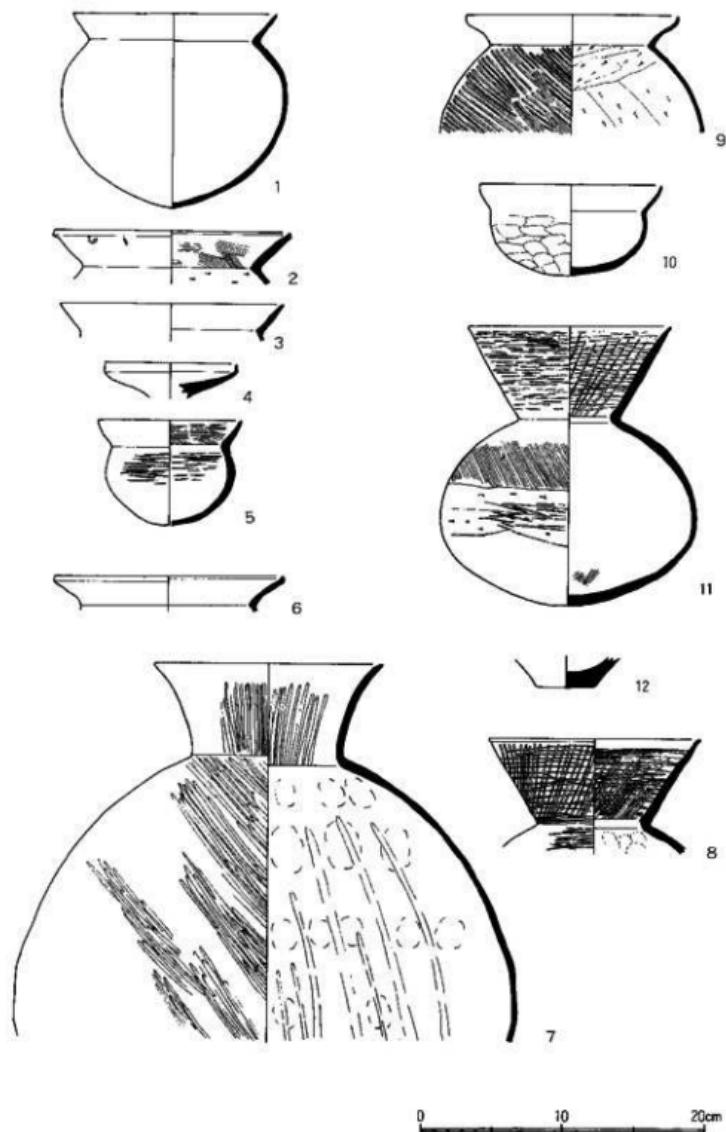


図64 出土遺物実測図1

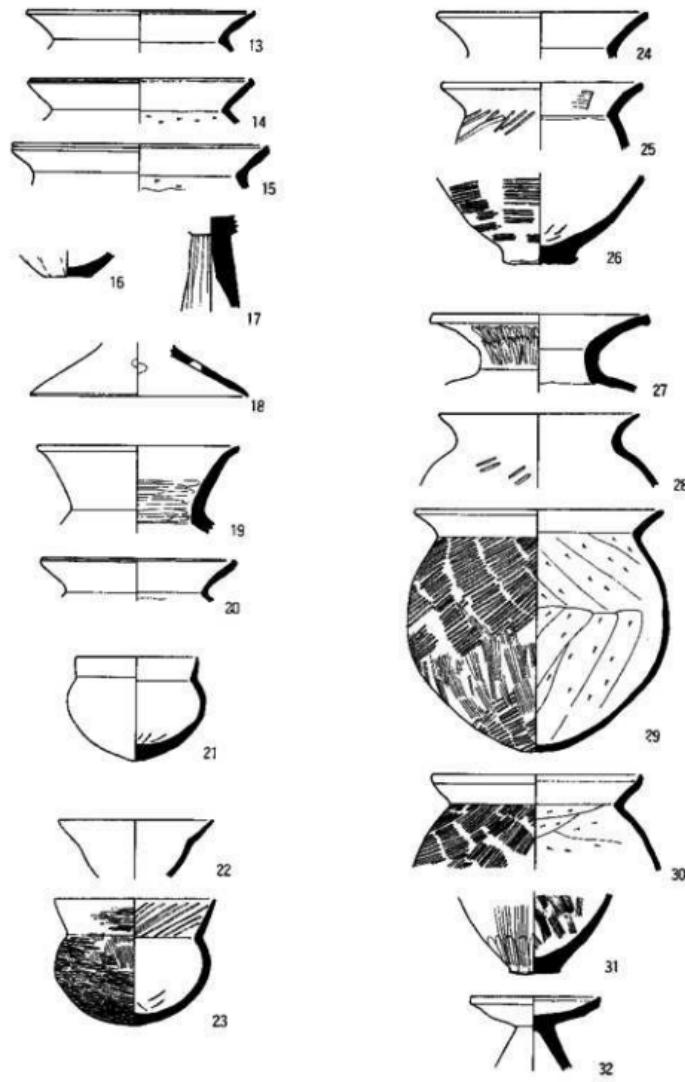


図65 出土遺物実測図2

#### IV 出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒土・焼成・備考	
1 鉢	SDI床面	口 径 14.3 最大径 25.8 高 13.8	「く」の字形に屈折し、実際的にのびる口縁部に至る。縁部は高く尖りぎみに終わる。体部は肩の張る扁平な錐形を呈し、尖り底をもつ。	外側 内面	全体に消耗を受け不明	色調 淡白褐色 粒土 粒石・基材・くさり砂を含む。 焼成 良好
		口 径 16.5	「く」の字形に屈折し、外反する口縁部に至る。縁部上方へわざかにつまみ、外傾する平坦面をつくす。	外側 内面	口縁部をヨコナデ。 口縁部は7条/9.5mmのハケのあとヨコナダシ、底部にヘラケズリを施す。	
2 鉢	S II	口 径 15.6	「く」の字形に屈折し、実際的にのびる口縁部のみ直角。縁部は先端となり、外へ尖りぎみに終わる。	外側 内面	全体に消耗を受け不明	色調 淡褐色 粒土 粒粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
		口 径 9.2	浅い圓形の杯部のみ直立。口縁部は外反ぎみに直立し、縁部は尖って終わる。	外側 内面	全体に消耗を受け不明	
4 小型器古	S II	口 径 10.0 最大径 9.0 高 7.4	体部より丸く突出し、内包ぎみにのびる口縁部に至る。縁部は丸く終わる。	外側 内面	口縁部、体部とともにヘラミガキを施す。 口縁部に6条/9.5mmのハケのあと軽くヨコナダシ、体部内面はヘラミガキを施す。	色調 淡赤褐色 粒土 石英・長石・くさり砂を含む。 焼成 良好
		口 径 17.1	「く」の字形に屈折し、外反する口縁部のみ直角。縁部は上方につまみ、外傾する平坦面をつくす。	外側 内面	全体に消耗を受け不明	
6 鉢	S II 2	口 径 15.9 最大径 35.8	体部より屈曲し、実立した状態で最ものびる口縁部に至る。縁部は尖りぎみに終わる。体部は大きくながり、下ぶくれの跡体になると思われる。	外側 内面	口縁部、胴部ともヘラミガキする。 口縁部にヘラミガキを施す。	色調 淡白褐色 粒土 粒粒の角閃石を含む。 焼成 良好
		口 径 14.8	体部より「く」の字形近くに屈曲し、実立して最ものびる口縁部に至る。縁部は外へ丸くつまみに終わる。	外側 内面	口縁部をヘラミガキのあと焰文状のヘラミガキを施し、胴部にもヘラミガキをおこなう。 口縁部をヘラミガキのあと焰文状のヘラミガキ。胴部には焰文状がみられる。	
8 鉢	S P I	口 径 11.5	体部より「く」の字形近くに屈曲し、実立して最ものびる口縁部に至る。縁部は外へ丸くつまみに終わる。	外側 内面	口縁部をヘラミガキのあと焰文状のヘラミガキを施し、胴部にもヘラミガキをおこなう。 口縁部をヘラミガキのあと焰文状のヘラミガキ。胴部には焰文状がみられる。	色調 淡褐色 粒土 粒粒の長石を含む。 焼成 良好
		口 径 15.9	体部より「く」の字形近くに屈曲し、実立して最ものびる口縁部に至る。縁部は外へ丸くつまみに終わる。	外側 内面	口縁部をヘラミガキのあと焰文状のヘラミガキを施し、胴部にもヘラミガキをおこなう。 口縁部をヘラミガキのあと焰文状のヘラミガキ。胴部には焰文状がみられる。	

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調 粘土・地成・備考
9	甕	口 径 14.8	「く」の字形に扁曲し、外反した縁内 弯きみにのびる口縁部に通る。口縁 端部は薄くなり、上方へ尖りぎみに 終わる。	外面 口縁部をヨコナゲし、肩部に 11束/18.0mmのクタキのあるとハ ケ。タクタキは左上がりである。 内面 口縁部をヨコナゲし、肩部は ヘラケズリである。	色調 淡褐色 粘土 微粒の角閃石を多く含む。 地成 良好
	SB1-P3				
10	小型甕 器 高 6.4	径 12.7	半球形の体部から腰曲し、内弯ぎみ にのびる口縁部に至る。端部は上方 へ尖りぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナゲし、体部は ヘラケズリし、そのあとナデと思われる。 内面 11束/18.0mmのクタキをヨコナゲし、体部に ナデをおこなう。	色調 淡褐色 粘土 微粒の長石を含む。 地成 良好
	SP2				
11	甕	口 径 14.2 底 周 17.9 器 高 19.8	「く」の字形に丸く屈曲し、直線的に のびる口縁部に至る。端部は粗くなり 、尖って終わる。体部は底径が 下位にあり、丸底をもつ。	外面 口縁部をヘラミガキし、肩部は ヘラケズリのあると7束/9.0 mmのクタキのちヘラミガキを おこなう。 内面 口縁部をヘラミガキし、その あと地文状のヘラミガキをす る。肩部下半をハケのあとナ デ。	色調 淡褐色 粘土 チャート、微粒の長石 を含む。 地成 良好
	SB7-P2				
12	甕	底 径 4.2	突出する平底の底部である。	外面 全体に磨耗を受け不明。 内面	色調 淡茶褐色 粘土 微粒～3.0mm程度の石 英を多く含む。 地成 良好
	SP3				
13	甕	口 径 15.8	「く」の字形に扁曲し、外反ぎみにの びる口縁部のみ直立。端部はつまみ 上げ、外傾する平坦面となり、1条 の凹線が走る。	外面 全体に磨耗を受け不明。 内面	色調 淡褐色 粘土 微粒の長石・角閃石・ くさり織を含む。 地成 良好
	SK3				
14	甕	口 径 15.3	「く」の字形に扁曲し、外反ぎみにの びる口縁部のみ直立。端部はつまみ 上げ、外傾する平坦面となり、1条 の凹線が走る。	外面 口縁部をヨコナゲする。 内面 口縁部をヨコナゲし、肩部は ヘラケズリである。	色調 淡茶褐色 粘土 微粒の角閃石を含む。 地成 良好
	SK3				
15	甕	口 径 17.8	「く」の字形に扁曲し、直線的にのび る口縁部のみ直立。端部は直立する 平面となり、1条の凹線が走る。器 内はかなり厚めである。	外面 口縁部をヨコナゲする。 内面 口縁部をヨコナゲし、肩部は ヘラケズリである。	色調 淡褐色 粘土 微粒の角閃石を多く含 む。 地成 良好
	SK3				
16	甕	底 径 3.3	中央がわずかに凹む上げ底状の底部 である。	外面 磨耗を受け不明。 内面 ハラナデと思われる。	色調 淡褐色 粘土 長石・石英を含む。 地成 良好
	SK3				

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
17	高杯		平底な杯底部を残す柱状部のみ遺存。	外側 柱状部にヘラケズリがみられる。 内面 ナデをおこなう。	色調 淡褐色 胎土 長石・石英・くさり織を含む。 焼成 良好
	SK3				
18	高杯	口 径 15.2	直線的にのびる兩部のみ遺存。	外側 全体に磨耗を受け不明。 内面	色調 淡赤褐色 胎土 長石・くさり織・雲母を含む。 焼成 良好
	SK3				
19	甌	口 径 14.0	体部より屈曲し、外反してのびる口縁部に来る。端部はわずかな平底面をつくって終わる。	外側 磨耗を受け不明。 内面 口縁部下位にヘラミガキする。	色調 赤褐色 胎土 鹿絨~2.0mm程度の石英・長石が多く含む。 焼成 良好
	SK4				
20	甌	口 径 13.4	「く」の字形に屈曲し、外反ぎみにのびる口縁部である。端部は上方へ丸くつまみ外傾する平底面となり。1条の内側が返る。	外側 口縁部をヨコナデする。 内面 口縁部をヨコナデし、肩部はヘラケズリする。	色調 淡赤褐色 胎土 鹿絨の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SK4				
21	小型甌	口 径 8.4 最大径 9.4 高 底 7.3	体部から屈曲し、内凹ぎみに立つ口縁部に来る。端部は細く尖って終わる。体部は上位に最大径があり、わずかに平底面を残す底をもつ。	外側 磨耗を受け不明。 内面 肩部近くにヘラ風体による押圧がみられる。	色調 淡赤褐色 胎土 鹿絨の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SK9				
22	小型甌	口 径 10.7	半球形の体部から屈曲し、内凹ぎみにのびる口縁部。端部は細くなり、尖りぎみに終わる。	外側 全体に磨耗を受け不明。 内面	色調 淡赤褐色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好
	SK10				
23	小空丸底甌	口 径 11.2 最大径 10.9 高 底 8.9	扁球形の体部から「く」の字形近くに屈曲し、やや内凹ぎみにのびる口縁部に来る。端部は尖りぎみに終わる。	外側 口縁部をヘラミガキし、肩部は9条/8.5mmのハケのあとヘラミガキを施す。 内面 口縁部をヨコナデのあと研磨状のヘラミガキ。肩部はヘラナデのあとナデ。	色調 赤褐色 胎土 鹿絨の長石を含む。 焼成 良好
	SK10				
24	甌	口 径 14.5	体部から屈曲し、外反する口縁部のみ遺存。端部は丸みのある底をなす。	外側 ヨコナデと思われる。 内面	色調 淡赤褐色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好
	SD5				

番号	器種	法縦(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
25	甕	口 径 13.9 底 径 5.2 SD 5	'く'の字形に崩曲し、24と同様の口縁部となる。器内は厚めである。	外面 口縁部をココナシし、胴部に3条/12.0mmのタタキを施す。 内面 口縁部へラナナのあと軽くココナシし、胴部はヘラナナする。	色調 淡褐色 粘土 ナイート・石英を含む。 焼成 良好
26	甕	底 径 5.2 SD 5	突出する半丸で、中央部がわずかに凹む。	外面 3条/12.0mmのタタキ 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 淡褐色 粘土 ナイート・石英を含む。 焼成 良好
27	甕	口 径 15.0 包含層	体部から崩曲して一旦直立した後、外反する口縁部に至る。底部はわずかにつまみ上げ、外側する平坦面をつくる。器内は厚い。	外面 口縁部にヘラミガキを施す。 内面 全体に磨耗を受け不明。	色調 淡褐色 粘土 長石・石英を多く含む。 焼成 良好
28	甕	口 径 14.0 包含層	体部より丸く崩曲し、外反ぎみにのびる口縁部に至る。端部は細く、尖りぎみに終わる。	外面 胎部にタタキがみられる。 内面 磨耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 粘土 長石・石英を含む。 焼成 良好
29	甕	口 径 17.2 底 径 17.1 包含層	'く'の字形に崩曲し、わずかに外反する口縁部に至る。胎部は丸く終わる。体部は最大径が中位にあり、わずかに平坦面を残す丸窓をもつ。	外面 口縁部をココナシし、胴部に7条/20.0mmのタタキのあと5条/9.5mmのハケを軽く施す。 内面 口縁部をココナシし、胴部はヘラケズリである。	色調 淡褐色 粘土 長石 - 0.5 mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
30	甕	口 径 14.8 包含層	'く'の字形に崩曲し、内突ぎみにのびる口縁部に至る。胎部は上方へ尖りぎみに終わる。	外面 胎部に7条/13.0mmのタタキを施す。 内面 胎部はヘラケズリである。	色調 淡茶褐色 粘土 花崗岩と微粒～1.0 mm程度の角閃石を含む。 焼成 良好
31	鉢	底 径 3.5 包含層	突出する半底をもつ。	外面 ヘラケズリのあとヘラミガキと思われる。 内面 5条/5.0mmのハケを施す。	色調 淡褐色 粘土 微粒の長石・くさり織を含む。 焼成 良好
32	小型鋤臼	口 径 8.9	浅い四形の杯部から、わずかにつまみ上げる縁部に至る。縁部は漏斗状に開くと思われる。器内は厚い。	外面 磨耗を受け不明。 内面	色調 赤褐色 粘土 長石の長石・くさり織を含む。 焼成 良好

## 第8節 第9次調査

### I 調査の概要

調査地は八尾市光町1丁目に所在し、第8次調査地の北方約30mに位置する。当初、調査地内に9×16mの範囲に調査区を設定したが、SE1・SE2の規模を確認する目的で、東側に2×2m、北東隅に1×2mを拡張した。調査面積は約210m<sup>2</sup>、調査期間は昭和56年12月4日から12月23日までである。

調査方法は現地表(O P + 8.9 m)から盛土、旧耕土、床土までを機械掘削し、以下は人力による掘削作業とした。第8次調査と同じく、調査区周囲に幅約30cmの溝を掘り、遺構面の確認の後に調査を開始した。また調査終了後、遺構面以下を確認するため、機械掘削による試掘調査を行なった。

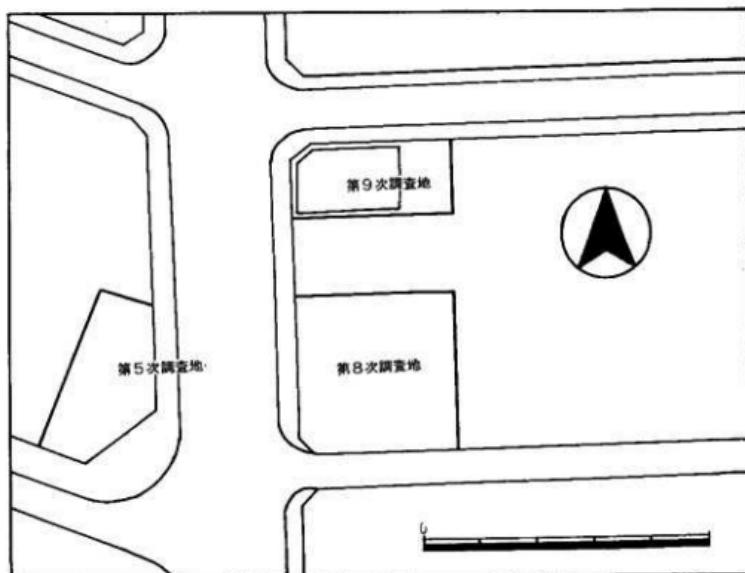


図66 調査地設定図

## II 層序

盛土 1m を除去すると、第1層旧耕土、第2層床土、第3層淡灰色粘土、第4層灰茶色砂粘土、第5層灰色シルト粘土、第6層暗灰茶色シルト粘土、第7層淡灰褐色シルト、第8層暗灰色シルト混じり粘土、第9層灰青色シルト、第10層灰色微砂土、第11層灰黄色粗砂土と灰色粗砂土の混合層、第12層暗灰黑色シルト、第13層暗灰色シルト粘土、第14層灰色シルト、第15層灰色粗砂、第16層暗灰色粘土の基本層序である。

このうち第3層は中世以降に削平された水田址で、断面観察のみにとどめた。第6層は遺物包含層、第7層が古墳時代前期の生活面である。

## III 遺構・遺物

### 1) 土塙

#### SK 1

調査区の西側で検出した。最大幅 2m・深さ 40cm を測る不定形の土塙である。東側は SD 6 に切られ、西側は中世溝 2 に切られている。埋土は暗茶灰褐色粘土である。

遺物は甕(1)の他、庄内式甕等の細片が出土した程度である。

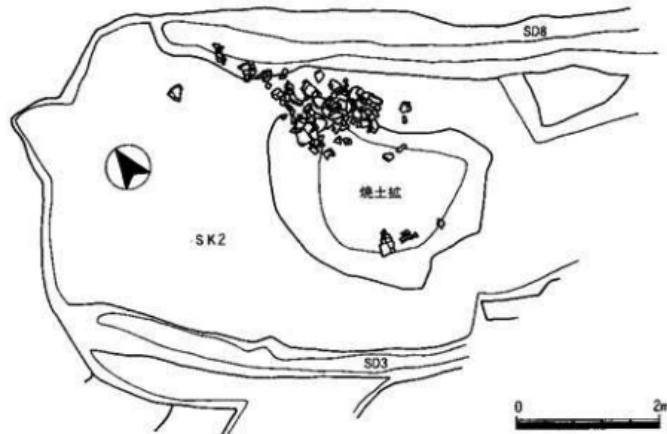


図67 SK2平面図

#### SK 2

SK 1の東側で検出した。最大幅約5m・最小幅約2.5m・深さ30cmを測り、不定形を呈する大型の土塹である。SD 3・SD 8に切られており、底部中央では径約1.5m・深さ10cmの焼土塙を検出した。SK 2の埋土は暗茶灰褐色砂粘土、焼土塙には黒灰色砂粘土と暗灰茶色シルトの2層が堆積し、上層には炭化物を含む。

焼土塙の上面からは、壺(2・3)、甕(4~6)、鉢(7)、底部有孔土器(8・9)、小型鉢(10)、小型甕(11)の10点が出土した。甕にはV様式タイプのもの(4)と庄内式のもの(6)がある。小型甕(11)は複合口縁部をもつもので、恩智遺跡や大園遺跡で、近似するものが出土している。  
① ②

#### SK 3

SK 2の東側で検出した。検出部の径は3m前後・深さ15cmを測り橢円形を呈するものと思われるが、南側は近世の井戸構築の際に削られている。また、東側はSD 9と、西側はSD 8と切り合う関係にある。内部にはSK 2の埋土と同じ層の暗茶灰褐色砂粘土が堆積する。

遺物は壺(12)、甕(14~16)等合わせて5点が出土した。甕は庄内式のものであるが、遺物間には時期差が認められる。



図68 SK3平面図

#### SK 4

SK 3のさらに南、調査区南側の中央部で検出した。最大幅1.7m・最小幅1.2mの不定形を呈し、深さは約10cmを測る。北側にはSD 3が掘り込まれており、西側ではSK 10を切っている。また、ここからSD 7が西方向へ延びている。内部埋土は暗茶灰色シルト粘土1層である。

遺構内からは、庄内式甕(17)の他、土師器のごく細片をわずかに出土した程度である。

#### S K 5

S K 3 の北東部に隣接する土塙である。長径4.4 m・短径1.2 mの楕円形を呈し、深さは20 cmを測る。埋土は暗灰茶色砂混じり粘土1層で、遺物は出土しなかった。

#### S K 6

調査区の南西隅で検出した。北側はS D 4 に切られる。現存部は径約1 mの半円形を呈し、深さ8 cmの浅い土塙である。埋土は暗茶灰色シルト粘土1層である。

甕(18)等が若干出土したが、小片のために遺物からみた時期は不明である。

#### S K 7

調査区の南東で検出した。径1.5 m前後・深さ25cmを測り、平面はほぼ円形、断面は逆台形を呈する。埋土は暗茶灰色砂混じり粘土1層である。

遺物は甕(19)の他、小片がわずかに出土した。

#### S K 8

S K 7 の西側で検出した。長径1.2 m・短径0.8 m・深さ30cmを測り、平面はほぼ楕円形、断面は逆台形を呈する。埋土はS K 7 同様暗茶灰色砂混じり粘土1層である。出土遺物はなかった。

#### S K 9

S K 8 のさらに西側で検出した。長径90cm・短径70cmのほぼ楕円形であるが、東側の一部は溝状にわずかに延びる。埋土は暗茶灰色シルト粘土である。

#### S K 10

北側をS K 4 に切られた土塙である。現存部で1辺60cm前後の方形を呈し、深さ10cmで断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色シルト粘土1層である。

#### S K 11

調査区北側で検出した。北側は近世井戸に切られ、調査区外に至る。検出部径1.5 mの楕円形、深さ20cmで断面は逆台形を呈する。埋土は暗茶灰色砂混じり粘土1層である。

### S K12

調査区の東側近くで検出した。長径90cm・短径40cmの長椭円形を呈し、深さ6cmで断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰青褐色砂混じり粘土1層である。

### S K13

調査区の北西隅で検出した。西側はSD6と切り合う。最大幅1.4m・最小幅0.4m・深さ10cmを測り、平面は不定形、断面は逆台形を呈する。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

### S K14

調査区の南西側で検出した土塹で、SD4に切られている。現存部は一辺約50cmの方形で、深さ15cmの逆台形の断面を呈する。埋土は暗灰褐色シルト粘土1層である。

## 2) 井戸

### S E 1

調査区北東隅で検出した井戸である。北東側は調査区外へ至ったため、拡張して規模を確認した。長径2m・短径1.6m・深さ1.1mを測る素掘りの井戸である。平面は梢円形、断面はU字形を呈す。

内部埋土は上方から暗茶灰褐色粘土・暗灰褐色粘土、青灰青色粘泥土・青灰色シルト粘土の4層が堆積する。

井戸の底部に接する状態で完形の壺(20)が出土した他、中位に堆積する暗灰褐色粘土から、多数の遺物が集積して出土した。中層から出土したものには、壺(21・33~41)・小型壺(22)・甕(23~32)・底部有孔土器(42)・鉢(43)・小型鉢(44~46)・高杯(48~51)等がある。

甕については、V様式タイプのものが多く、タタキは太筋で平底を持つ。他の器種の底部も平底のものが多く、凹み底や尖り底のものはわずかである。

これらのことから遺物全体の時期は、ほぼ庄内式の古柏に比定できるものと思われる。

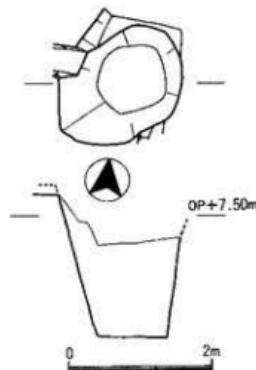


図69 SE1実測図

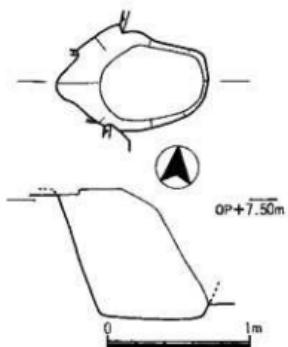


図70 SE2 平断面図

### S E 2

調査区の東壁で検出したため、S E 1 と同様に拡張したが、東側は肩から底部近くまで斜めに搅乱をうけていた。長径約 2.1 m・短径 1.3 m・深さ 90cm を測り、底部はほぼ水平である。

埋土は上方から灰青褐色粗砂土、暗灰青褐色粘土、灰青色粘土、暗灰色粘土の 4 層が堆積する。

遺物はすべて、造構中位に堆積する暗灰青褐色粘土からの出土である。器種には甕(52・63・64)、甕(53～61・65～69)、小型甕(62)、高杯(73～76)等がある。

遺物のうち甕には V 様式タイプのもの(55・67・68)

の他、V 様式と庄内式両型式の要素をもつ甕が多くを占めている。また、底部については、平底を残すものがほとんどである。遺物全体を通じ、S E 1 と同様に庄内式の占相に比定できるものと考えられる。

### 3) 溝

#### S D 1

調査区西側で検出したが、中央を中世溝 1 に分断されている。幅 50cm・深さ 15cm を測るもので、北西方向に延びる。内部には暗茶灰色砂粘土が堆積している。

甕(77)の小片等がわずかに出土した程度である。

#### S D 2

S D 1 の西側に隣接し、ほぼ平行する溝である。南側では S D 5 に切られ、S D 7 と合流する。北側で S K 1 を切り S D 6 と合流するが、この溝も中世溝 1 に切られている。幅約 25cm・深さ 15cm を測る。埋土は S D 1 同様暗茶灰色砂粘土の 1 層である。

#### S D 3

調査区南側中央から北西隅に延びる。南側では S K 4 を、北側では S K 2 を切っているが、S D 1・S D 2 同様中世溝 1 に切られている。幅約 25cm・深さ 15cm を測る。内部埋土は S D 1・S D 2 と同層である。

#### SD 4

調査区南西隅で検出した。SD 2 の西側を平行して流れる溝である。SK 6・SK 14を切り、中世溝2に切られている。幅30~50cm・深さ20cmを測る。埋土は暗茶灰色砂粘土1層である。

#### SD 5

調査区の南壁ぎわで検出した。北側でSD 2 を切っている。L字形に曲がる溝で、幅20~60cm・深さ10~20cmを測る。埋土は暗灰茶色シルト粘土である。

#### SD 6

調査区西側で検出した南北方向の溝である。SK 1 を切り、SK 13と切り合う。南側ではSD 2 と合流している。幅40~80cm・深さ30cmを測る。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

#### SD 7

調査区南側で検出した東西方向の溝である。東側ではSK 4・SK 10と切り合い、西側でSD 2 と合流する。幅20~30cm・深さ15cmを測る。埋土はSD 2 と同層である。

#### SD 8

調査区中央で検出した。SK 2 の北東側を切っている。幅30~50cm・深さ15cmを測る。埋土はSD 1~SD 3 と同層であり、SD 1~SD 4 に平行して北西方向に延びることから、これらの溝は同一の目的で構築されたものと推定される。

#### SD 9

SK 3 の東側で検出した溝である。幅60~100cm・深さ15cmを測り、L字形を呈する。埋土は暗茶灰色砂粘土である。

#### 中世の溝

調査区中央を東西に延びる溝1と西壁に沿って南北に延びる溝2を検出した。これらの溝は灰色粘土層をベースにしており、中世の条里制の区割にも一致し、水田耕作に伴なうものと考えられる。

(注 記)

- 1 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡III』1981年

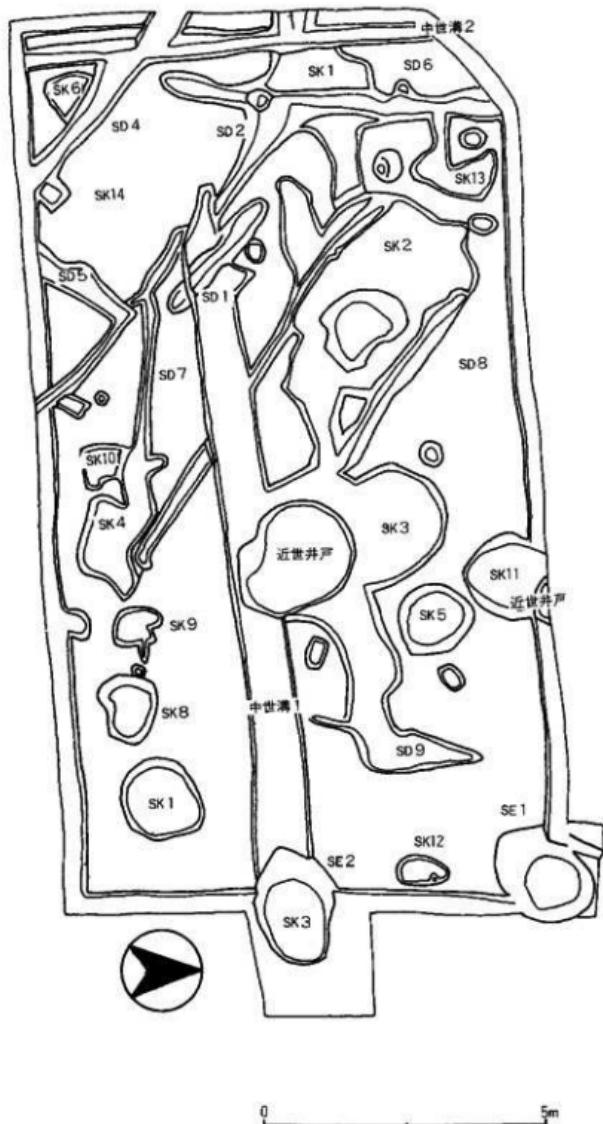
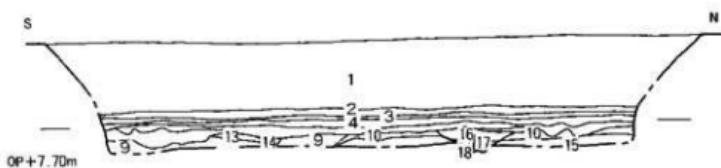
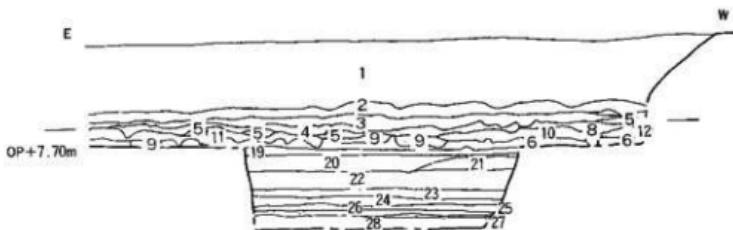
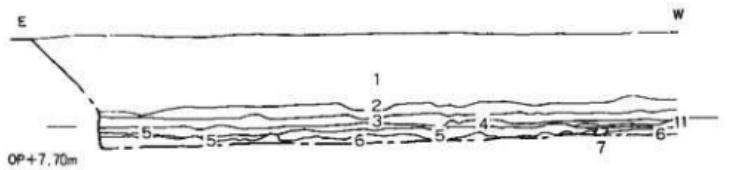


図71 平面図



- |               |                      |              |
|---------------|----------------------|--------------|
| 1. 盛土         | 13. 淡灰茶色シルト粘土        | 25. 暗灰色シルト粘土 |
| 2. 旧耕土        | 14. 淡灰茶色細砂混じり粘土      | 26. 灰色シルト    |
| 3. 床土         | 15. 灰褐色シルト粘土         | 27. 灰色粗砂土    |
| 4. 淡灰色粘土      | 16. 暗灰茶色細砂混じり粘土      | 28. 暗灰色粘土    |
| 5. 灰色シルト粘土    | 17. 灰茶色砂混じり粘土        |              |
| 6. 淡灰色シルト粘土   | 18. 灰茶色砂粘土           |              |
| 7. 暗灰褐色シルト    | 19. 暗灰色シルト混じり粘土      |              |
| 8. 灰褐色シルト粘土   | 20. 灰褐色シルト混じり粘土      |              |
| 9. 暗灰褐色細砂粘土   | 21. 灰青色シルト           |              |
| 10. 暗灰茶色シルト粘土 | 22. 灰色微砂土            |              |
| 11. 暗茶色砂粘土    | 23. 灰黄色粗砂土と灰色粗砂土の混合層 |              |
| 12. 茶灰色細砂粘土   | 24. 暗灰黑色シルト          |              |

0 2m

図72 断面図

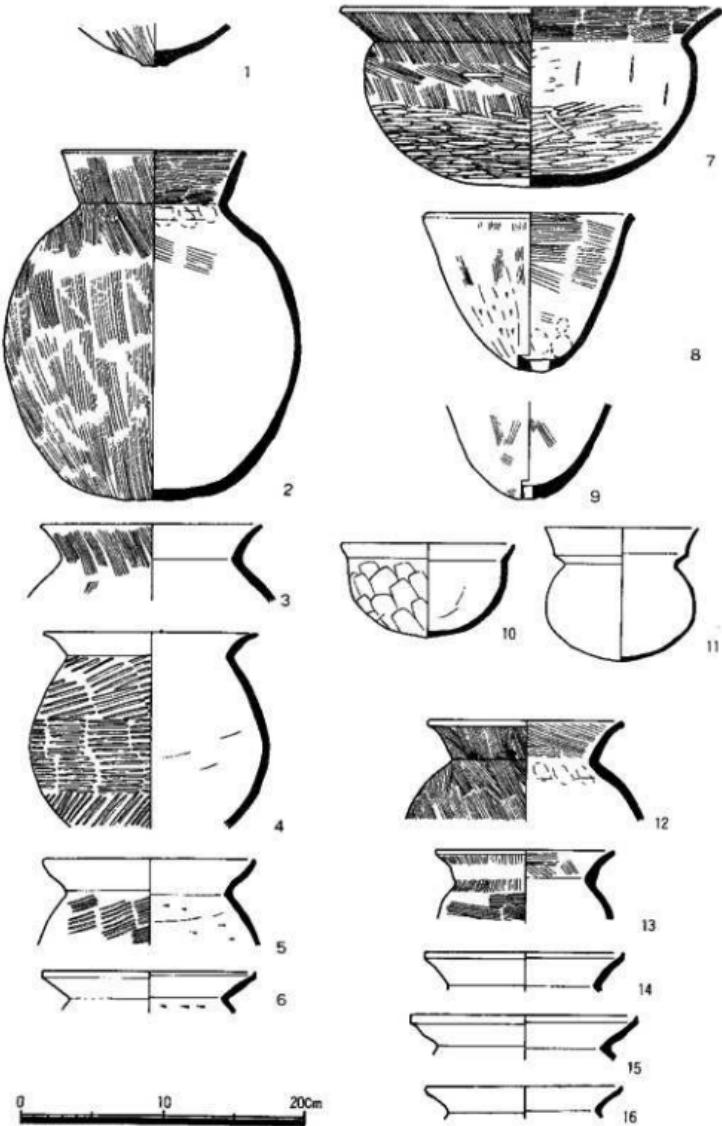


図73 出土遺物実測図1

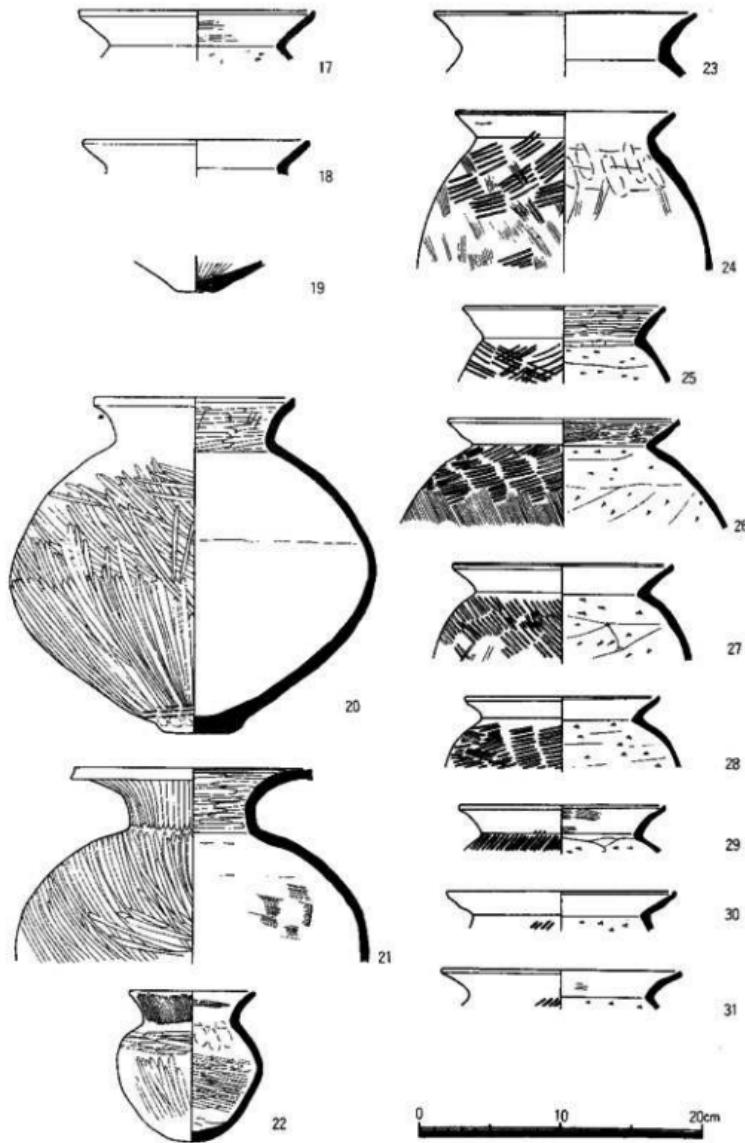


图74 出土遗物实测图2

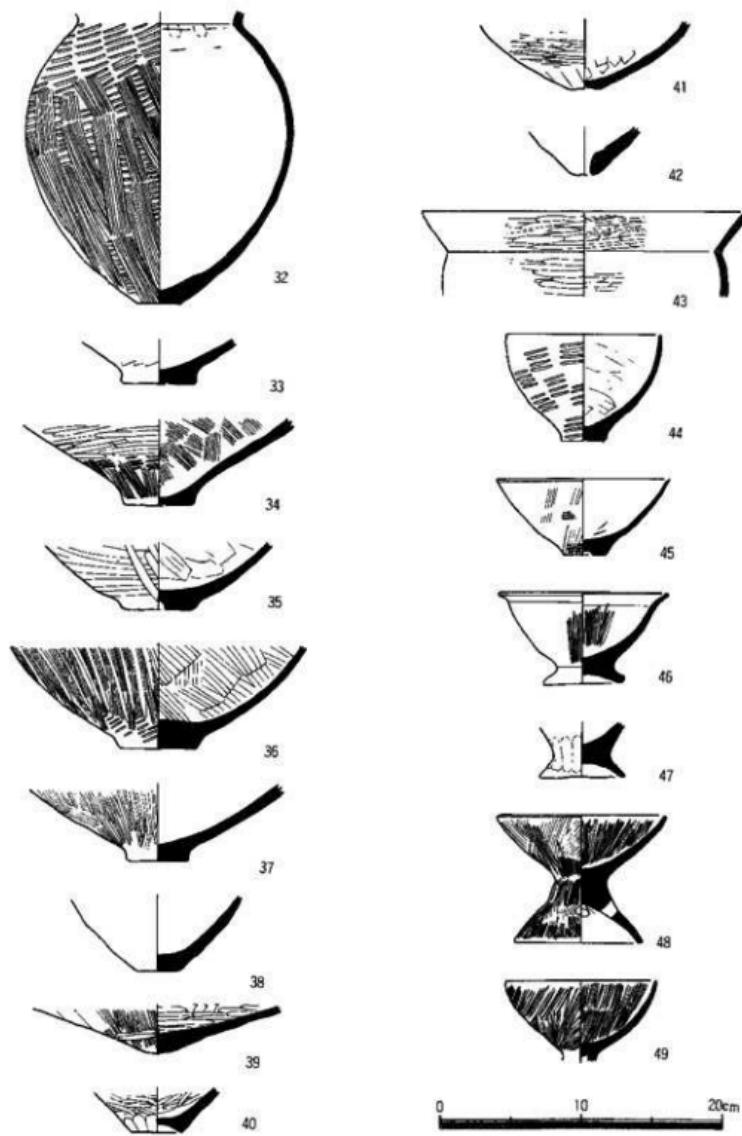


图75 出土遗物实测图3

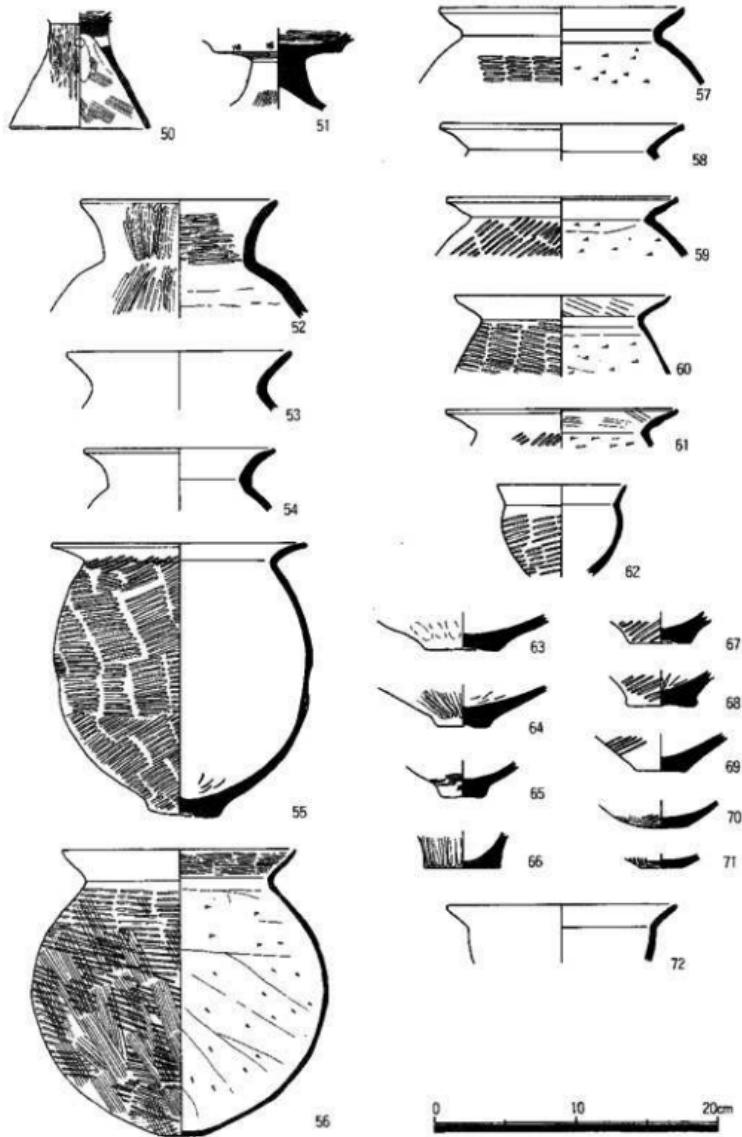


図76 出土遺物実測図4

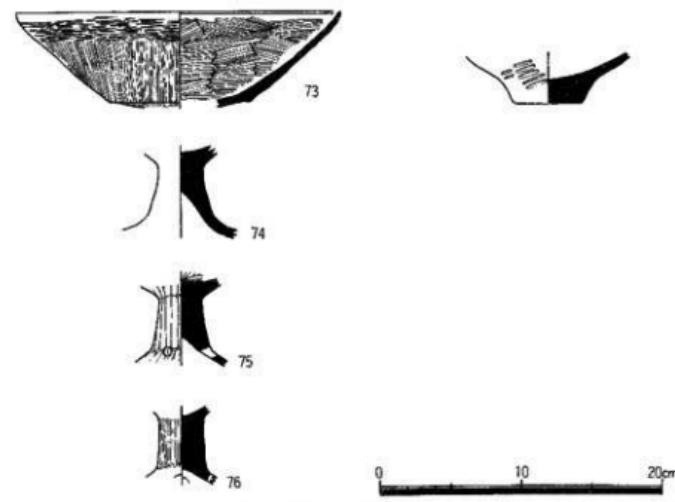


図77 出土遺物実測図5

#### IV 出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
1 瓢	底 径 1.6		突出する小さな平底で、中央がわずかに凹む。	外側 ヘラミガキを施す。 内面 磨耗を受け不明。	色調 淡褐色 粘土 0.5~3.0mm程度の石英を多く含む。 焼成 良好
2 瓢	口 径 12.5 最大深 20.8 基 高 24.7		体部より加高し、外傾する口縁部に至る。端部は外傾する平底面となる。体部は中位に最大径がある卵形形で、丸みのある平底をもつ。	外側 全体に9条/14.0mmのハケを施す。 内面 口縁部に9条/14.0mmのハケ。胴部はハケのあとナダ。	色調 淡赤褐色 粘土 粘土~2.0mm程度の石英、長石を含む。 焼成 良好
3 瓢	口 径 15.2		「く」の字形近くに屈曲し、外傾した縦上位で外傾する口縁部である。端部は扁くなり、尖りぎみに終わる。	外側 11條部を7条/13.0mmのハケのあとヨコナダする。 内面 口縁部をヨコナダし、胴部にナダをおこなう。	色調 淡白色 粘土 粘土~1.0mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
4 瓢	口 径 15.0 最大深 16.8		「く」の字形附近に屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は扁くなり、丸く終わる。 体部は中位に最大径があり、球形に近い形狀と思われる。	外側 11條部をヨコナダし、胴部は7条/21.0mmのタタキを上・中・下の3段に分割して施す。 内面 口縁部をヨコナダし、胴部にナダをおこなう。	色調 淡赤褐色 粘土 粘土の角閃石を多く含む。 焼成 良好
5 瓢	口 径 14.7		「く」の字形近くに屈曲し、内寄ぎみにのびる口縁部に至る。端部は丸く終わる。	外側 11條部をヨコナダし、胴部は6条/15.5mmのタタキを施す。 内面 口縁部をヨコナダし、胴部はヘラケズリである。	色調 淡褐色 粘土 粘土の角閃石を多く含む。 焼成 良好
6 瓢	口 径 14.9		「く」の字形附近に屈折し、直線的にのがれる11條部に至る。端部はつまみ上げ、直立する平底面をつくる。	外側 口縁部をヨコナダする。 内面 口縁部をヨコナダし、胴部はヘラケズリを施す。	色調 淡褐色 粘土 粘土の角閃石を多く含む。 焼成 良好
7 瓶	口 径 26.3 基 高 12.6		半球形の体部から屈曲し、外反してのびる口縁部に至る。端部は外傾する平底面をつくる。	外側 全面を7条/10.5mmのハケのあと11條部を軽くヨコナダ。胴部下半を中心へラミガキを施す。 内面 口縁部を7条/10.5mmのハケのあと胴部をヘラナダする。下半にヘラミガキがみられる。	色調 淡赤褐色 粘土 長石、石英、チャートを含む。 焼成 良好
8 瓶	口 径 14.2 高 11.2 孔 径 1.3		尖りぎみの丸底から内寄ぎみに開き、口縁部に至る深い裏口の瓶である。口縁部は短くわずかに外反し、端部は外傾する平底面となる。	外側 口縁部をヨコナダする。体部は下部をヘラケズリし、上部にハケのあとナダ。 内面 下部をヨビナダし、上部は7条/14.0mmのハケ。	色調 淡赤褐色 粘土 チャート、長石、石英を含む。 焼成 良好

番号	器種 出上位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・鉱土・焼成・備考
9	直筒形口唇 SK 2	丸径 9.8	Sと同様の体の底部であろう。	外面 4条/6.5mmのハケのあとナゲ。 内部 底部付近をナゲ。 上方に5条/6.0mmのハケを施す。	色調 淡灰色 鉱土 錫鉱の角閃石・長石・ 石英・チャートを含む。 焼成 良好
10	小型体 SK 2	口 径 12.0 高さ 6.5	平円形の体部から屈曲し、内凹ぎみに立つ狭い口縁部に至る。底部は丸く突りぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナゲし、体部にヘラケズリがみられる。 内部 口縁部をヨコナゲし、体部はヘラ型体による押圧が残る。	色調 淡灰色 鉱土 錫鉱の長石・クリア理 石英を含む。 焼成 良好
11	小型体 SK 2	口 径 11.7 最大径 10.5 高さ 9.3	「く」の字形に屈曲した後屈曲し、上方へ外反ぎみに立つ口縁部に至る。底部は丸く突りぎみに終わる。 体部は圓錐形を呈する。 芯肉は極めて薄い。	外面 口縁部をヨコナゲする。 他は麻耗が著しく不明である。	色調 淡褐色 鉱土 1.0~4.0mm程度の花崗 岩を多く含む。 焼成 良好
12	裏? SK 3	口 径 13.4	「く」の字形近くに屈曲し、外反ぎみに立つ口縁部に至る。底部は丸くつまんで終わる。	外面 口縁部に6条/8.0mmのハケのあとヨコナゲし、頂部は6条/8.0mmのハケを施す。 内部 口縁部を6条/8.0mmのハケのあとヨコナゲし、底部はヘラナゲをおこなう。	色調 淡褐色 鉱土 長石・チャート・石英 を含む。 焼成 良好
13	裏? SK 3	口 径 12.4	「く」の字形近くに屈曲し、外反ぎみに立つ口縁部に至る。底部はわずかに平底となる。	外面 口縁部を6条/8.5mmのハケのあとヨコナゲし、底部は6条/8.5mmのハケを施す。 内部 口縁部をハケのあとヨコナゲし、底部はヘラナゲを施す。	色調 淡褐色 鉱土 錫鉱のチャート・長石 を含む。 焼成 良好
14	裏 SK 3	口 径 13.8	外反する口縁部のみ遺存。底部は丸くつまみ上げ、直立する平坦面となる。	外面 口縁部をヨコナゲする。 内部 口縁部をヨコナゲし、底部はヘラケズリする。	色調 淡褐色 鉱土 錫鉱~1mm程度の角閃 石を含む。 焼成 良好
15	裏 SK 3	口 径 15.9	「く」の字形に強く屈折し、外反ぎみに立つ口縁部に至る。底部は強くつまみ上げ、直立する円面となる。	外面 口縁部をヨコナゲする。 内部 口縁部をヨコナゲし、底部はヘラケズリする。	色調 淡褐色 鉱土 錫鉱の角閃石を含む。 焼成 良好
16	裏 SK 3	口 径 13.7	外反した横上位で内凹ぎみとなる口縁部のみ遺存。底部は上方へ丸くつまみ上げぎみに終わる。	外面 ヨコナゲと思われる。	色調 淡褐色 鉱土 錫鉱の角閃石を多く含 む。 焼成 良好

番号	器種 出上位置	法縫(mm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒上・焼成・備考
17	樂	口 縫 16.5	「く」の字形に屈曲し、直線的にのびる口縫部のみ奥行。端部は上方へつまみ、直立する頂部となる。	外側 口縫部をヨコナデする。 内側 口縫部のハケのあとヨコナデし、肩部はヘラケズリである。	色調 淡青褐色 粒上 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SK 4				
18	樂	口 縫 15.8	体部より外折ぎみに屈折する口縫部のみ進各、端部は外傾する面となる。	外側 口縫部をヨコナデする。 内側 口縫部をヨコナデし、肩部はヘラケズリである。	色調 基褐色 粒上 微粒の角閃石を含む。 焼成 良好
	SK 6				
19	樂	基 深 2.4	中央がわずかに内む上り窓状の窓部である。 底面に木漬痕がみられる。	外側 ヘラミガキあるいはナデと思われる。 内側 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 基褐色 粒上 微粒の長石。くさり細 粒を含む。 焼成 良好
	SK 7				
20	樂	口 縫 14.1 横大深 25.8 横 小 5.7 谷 高 23.6	体部より外傾した後、外反ぎみとなる口縫部に至る。端部は上方へわざかにつまみ、外傾する半球面となる。 体部は中位に最大径がある扁平な球形で、突出する平底を有する。	外側 口縫部をヨコナデし、底部近くにタグキのあと全体にヘラミガキを施す。 内側 口縫部はハナナデのあとヘラミガキし、端部近くをヨコナデする。肩部は「平なヘナナデ」と思われる。	色調 淡赤褐色 粒上 粒物～1.0mm程度の角 閃石を多く含む。 焼成 良好。 外側に埋め付番する。
	SEIT層				
21	樂	口 縫 16.7	体部より丸く屈曲し、外反する口縫部に至る。端部は上方へわずかに膨脹し、直立する円面となる。体部は球形に近いと考えられる。	外側 全面にヘラミガキを施す。 内側 口縫部をヘラミガキし、肩部はハケを施す。	色調 淡黄白色 粒上 チャート・石英を多く 含む。 焼成 良好
	SEIT上層				
22	小型盤	口 縫 8.7 横大深 19.3 横 小 2.4 谷 高 30.6	体部より丸く屈曲し、外反する口縫部に至る。端部は丸く終わる。体部はやや上位に継続性があり、肩の後の球形で、わずかに平坦面を残す底部を有する。	外側 口縫部はハケのあとヘラミガキし、肩部は部分的にヘラミガキが残る。 内側 口縫部、肩部ともにヘラミガキを施す。	色調 淡褐色 粒上 微粒の角閃石・長石・ 石英を含む。 焼成 良好
	SEIT上層				
23	樂?	口 縫 18.4	丸く屈曲して外反ぎみにのびる口縫部のみ進各。端部は弱くなり、尖りぎみに終わる。	外側 口縫部をヨコナデする。 内側	色調 基褐色 粒上 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
	SEIT上層				
24	樂	口 縫 15.3	「く」の字形に丸く屈曲し、直線的にのびる口縫部に至る。端部は丸く終わる。体部は下位に最大径があると思われた。	外側 口縫部をヨコナデし、肩部は5mm/14.0mmのタグキのあと、4mm/6.0mmのハケを施す。 内側 口縫部をヨコナデし、くびれ部近くにユビナデのあと全体にヘナナデを施す。	色調 淡褐灰色 粒上 チャート・石英・長石 を含む。 焼成 良好
	SEIT上層				

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・地成・備考
25	裏 SE1上層	口 径 14.0	「く」の字形近くに弧曲し、外反する口縁部に生る。端部は細くなっている。	外側 口縁部をヨコナデし、肩部に4条/11.0mmのタタキを右J.よりあと左上の方に施す。 内面 11縫部を4条/11.0mmのハケのあとヨコナデし、肩部はヘラヶズリである。	色調 淡灰褐色 粘土 微粒の長石を含む。 地成 良好
26	裏 SE1上層	口 径 16.2	「く」の字形に弧曲し、わずかに内窪してのびる口縁部に生る。端部は上方へつまみ、外傾する平底面となる。全体部は上位で強く張ると思われる。	外側 口縁部はヨコナデし、肩部に6条/14.5mmのタタキのあと10条/15.5mmのハケを施す。 内面 11縫部はヨコナデし、肩部はヘラヶズリである。	色調 淡褐色 粘土 粗粒～1.0mm程度の角閃石を含む。 地成 良好
27	裏 SE1上層	口 径 15.5	「く」の字形に弧曲し、外反ぎみにのびる口縁部に生る。端部はつまみ上げ、外傾する平底面となる。	外側 口縁部をヨコナデし、肩部に5条/14.5mmのタタキのあと、わずかに4条/4.5mmのハケがみられる。 内面 口縁部をヨコナデし、肩部はヘラヶズリである。	色調 淡灰褐色 粘土 微粒の長石を含む。 地成 良好
28	裏 SE1上層	口 径 13.6	「く」の字形に弧曲して外反し、上位で内窪ぎみとなる口縁部となる。端部は上方へ丸くつまみ。	外側 口縁部をヨコナデし、肩部に6条/13.5mmのタタキのあと、わずかに5条/4.5mmのハケがみられる。 内面 口縁部をヨコナデし、肩部はヘラヶズリである。	色調 淡褐色 粘土 微粒の角閃石を含む。 地成 良好
29	裏 SE1上層	口 径 14.5	「く」の字形に弧曲し、外反する11縫部に生る。端部は上方へつまみ。外傾する平底面となる。	外側 肩部に6条/13.5mmのタタキを施す。 内面 口縁部はハケのあとヨコナデし、肩部をヘラヶズリする。	色調 本焼色 粘土 石英、長石を含む。 地成 良好
30	裏 SE1上層	口 径 16.0	「く」の字形に弧曲し、直線的にのびる口縁部のみ遺存。端部はつまみ上げる。	外側 11縫部をヨコナデし、肩部に4条/6.5mmのタタキ。 内面 口縁部をヨコナデし、肩部はヘラヶズリである。	色調 淡褐色 粘土 石英を多く含む。 地成 良好
31	裏 SE1上層	口 径 16.8	「く」の字形に弧曲し、外反する口縁部のみ遺存。端部はつまみぎみとなり、外傾する平底面となる。	外側 肩部はタタキを施す。 内面 濃紺を受けて不明。	色調 淡褐色 粘土 角閃石、石英、クリア 地成 含む、 良好
32	裏 SE1上層	最大径 18.8 底 径 3.2	上位に最大径をもつ倒卵型を呈する 全体で、口縁部を欠損する。底部は わずかに平底面を残す。	外側 6条/19.5mmのタタキのあと底 部を中心で數枚に10条/10.0 mmのハケを施す。 内面 ヘナナテを施す。	色調 淡褐色 粘土 石英を含む。 地成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
33	甕	底 径 5.4	突出する平底で、中央部がわずかに凹む。	外側 ヘラ棒体による押圧がみられ、そのあと全体にヘラミガキするとと思われる。 内側 ヘラナデを施す。	色調 淡褐色 胎土 石英・チャートを含む。 焼成 良好
34	甕	底 径 5.0	突出する平底で、中央部がわずかに凹む。	外側 4条/11.0mmのタタキのあと部分的に8条/11.5mmのハケを施し、全体にヘラミガキを施す。 内側 8条/11.5mmのハケを施す。	色調 淡褐色 胎土 角閃石・雲母を含む。 焼成 良好
35	甕	底 径 5.4	ドーナツ状の底部である。	外側 ヘラミガキを施す。 内側 ヘラナデを施す。	色調 淡褐色 胎土 チャート・長石・石英を含む。 焼成 良好
36	甕	底 径 5.0	突出する平底をもつ。	外側 5条/15.5mmのタタキのあと8条/6.0mmのハケを施し、そのちヘラミガキする。 内側 ヘラナデを施す。	色調 暗茶褐色 胎土 長石・石英を含む。 焼成 良好 外側に傷付感が若干しい。
37	甕	底 径 4.4	突出する平底で、本茎部がみられる。	外側 7条/13.0mmのハケのあとヘラミガキを施す。 内側 底部近くにヘラ棒体による押圧が残る。	色調 淡口褐色 胎土 0.5~1.5mm程度のチャートを多く含む。 焼成 良好
38	盤	底 様 3.6	平底の底部である。	外側 全体に磨耗を受けない。 内側	色調 淡褐色 胎土 角閃石・石英・長石・くさり織を含む。 焼成 良好
39	甕		尖り底の底部である。	外側 9条/10.0mmのハケのあと、底部近くをヘラ棒体によって押に対する。 内側 ヘラナデのあとヘラミガキを施す。	色調 暗茶褐色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好 外側に傷が付着する。
40	甕	底 径 3.5	中央が凹む上部底の底部である。	外側 ヘラケズリのあとヘラミガキを施す。 内側 ヘラミガキを施す。	色調 淡褐色 胎土 石英を多く含む。 焼成 良好
SEI上層					

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
41	器 SEI上層	底径 2.0	中央が凹む、小さな上げ底状の底部である。	外側 底部近くはヘラケシリし、調部にヘラミガキがみられる。 内面 ヘラナデのあとヘラミガキと思われる。	色調 淡褐色 胎土 鹿粒の角閃石、石英、石英を含む。 焼成 良好
42	実物陶土器 SEI上層	孔 径 1.4	尖りざみの底部で、中央に孔をもつ。	外側 全体に擦耗を受け不明。 内面	色調 赤褐色 胎土 石英チャートを含む。 焼成 良好
43	鉢 SEI上層	口径 23.0	体高より周曲し、直線的にのがる口部に至る。端部は細く尖る。	外側 口縁部・体部をヘラミガキする。 内面 口縁部をヘラミガキする。	色調 淡褐色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好
44	小型鉢 SEI上層	口径 11.8 底径 3.2 高さ 7.5	内窓がみに口縁部まで続く直口の鉢。底部は丸く終わる。底部は突出する平底で、中央が若干凹んでいる。	外側 4条/15.0mmのタケを施す。 内面 底部にヘラ原体による押圧がみられ、全体にヘラナデ。	色調 淡褐色 胎土 角閃石・石英・長石を含む。 焼成 良好
45	小型鉢 SEI上層	口径 12.2 底径 3.0 高さ 5.4	複数を呈する直口の鉢で、端部は細くなり、外側へ尖りざみに終わる。底部はトーネ状である。	外側 口縁部をココナチし、体部にタケがあると6条/12.0mmのハケを施す。 内面 口縁部をココナチする。体部は底部近くにヘラ原体による押圧がみられ、全体にヘラナデ。	色調 淡褐色 胎土 鹿粒の角閃石を含む。 焼成 良好
46	小型鉢 SEI上層	口径 11.8 底径 5.8 高さ 6.5	複数を呈する体部からわずかに傾斜し、左から右縁部に至る。端部は外傾する圓柱となる。 底部は高台状である。	外側 口縁部をココナチし、体部はヘラミガキ。底部はナデ。 内面 口縁部をココナチし、体部はヘラミガキ。先端はナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 チャート・角閃石・石英を含む。 焼成 良好
47	器? SEI上層	底径 6.0	底の跡丸であろう。	外側 指圧痕がみられる。 内面 腹部にナデと思われる。	色調 赤褐色 胎土 チャートを含む。 焼成 良好
48	小型高杯 SEI上層	口径 11.6 底径 8.9 高さ 9.0	半球形の杯部で、底部は内に若干肥厚し、外傾する角をつくる。杯部は内窓がみに開き、底部は丸く終わる。底部上位4方に凹孔を穿つ。	外側 杯部、脚部ともに7条/11.0mmのハケのあとヘラミガキ。 内面 杯部にヘラミガキ。脚部にヘラナデのあとナデ。	色調 淡灰褐色 胎土 鹿粒の角閃石・透母を含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
49	小型高杯	口 径 10.6 SE1上層	深い半球形の杯部のみ遺存。端部は丸く終わる。	外面 ヘラミガキ 内面	赤褐色 胎土 焼成 良好
50	高杯	口 径 10.0 SE1上層	支高の脚部で、底部は平坦面となる。上位4方に円孔を穿つ。	外面 ヘラミガキする。 内面 7mm/10.0mmのハケのあと軽くナゲ。	赤褐色 胎土 焼成 良好
51	高杯	SE1上層	平坦な杯底部から屈折し、外反する口縁部をわずかに残す。脚は大きく開くものと思われる。	外面 杯部にヘラミガキ。口縁部に5mm/4.5mmのタケみられる。 内面 桟状部はヘラカズリのあとわずかにハケがみられる。 脚部をヘラミガキし、脚部はヘラ原体による押圧が残る。	赤褐色 胎土 焼成 良好
52	盃	口 径 13.7 SE2上層	体部より屈曲し、直立した後外反する口縁部に至る。底部は丸く終わる。	外面 全体にヘラミガキする。 内面 口縁部をヘラミガキし、脚部はヘラナゲする。	赤褐色 胎土 長石・チャート・石英を含む。 焼成 良好
53	盃	口 径 15.6 SE2上層	「く」の字形に丸く屈曲する口縁部で、端部は丸く終わる。	外面 口縁部をヨコナデする。 内面	赤褐色 胎土 焼成 良好
54	盃	口 径 13.5 SE2上層	丸く屈曲し、外反する口縁部で、端部は崩く尖りぎみに終わる。	外面 口縁部をヨコナデする。 内面 口縁部をヨコナデし、脚部はヘラナゲする。	赤褐色 胎土 角閃石・チャート・花崗岩を含む。 焼成 良好
55	盃	口 径 17.2 縦大径 18.2 底 径 5.1 高さ 20.0 SE2七層	「く」の字形近くに屈曲し、平たく外反する口縁部に至る。端部は丸い。体部は中位に最大径があり、卵球形を呈し、ドーナツ状の底部を有する。	外面 口縁部をヨコナデし、脚部に4mm/15.0mmの左上カリのタケみのあと6mm/15.0mmのハケを板状に削ぐ地す。 内面 底部をヘラナゲする。底部汎くにヘラ原体による押圧がみられる。	赤褐色 胎土 1.0~2.0mm程度の石英を含む。 焼成 良好
56	盃	口 径 16.4 縦大径 20.9 底 径 2.5 高さ 20.3 SE2上層	「く」の字形近くに屈曲し、内側がみにのびる口縁部に至る。端部は稍くなり、尖りぎみに終わる。体部は球形を呈し、底部はわずかな平底面を残す。	外面 口縁部をヨコナデする。脚部は6mm/15.0mmの左上カリのタケみのあと6mm/15.0mmのハケを板状に削ぐ地す。 内面 口縁部を6mm/15.0mmのハケのあとヨコナデし、くじれ部をヨコナデし、脚部にヘラカズリを施す。	赤褐色 胎土 滑峻の墨丹・角閃石を多く含む。 焼成 良好

番号	器種 出上位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒度・塊成・備考
57	鏡	口 徑 17.2	「く」の字形に丸く屈曲し、内湾がみにのびる口縫部に至る。端部は細くなり、上方へ尖りざみに終わる。	外側 口縫部をヨコナダレし、端部は5mm/13.5mmのタタキを施す。 内側 口縫部をヨコナダレし、端部はヘラケズリする。	色調 淡褐色 粒度 微粒の長石を多く含む。 塊成 良好
58	鏡	口 徑 17.0	「く」の字形に屈曲し、外反する口縫部である。端部は外傾する平坦面となる。	外側 口縫部をヨコナダレする。 内側	色調 淡褐色 粒度 微粒の長石を多く含む。 塊成 良好
59	鏡	口 徑 16.2	「く」の字形に丸く屈折し、直線的にのびる口縫部に至る。端部は上方へつまみ、外傾する平坦面となる。	外側 口縫部をヨコナダレし、端部に6mm/15.5mmのタタキを施す。 内側 口縫部をヨコナダレし、端部をヘラケズリする。	色調 淡褐色 粒度 微粒の角閃石・長石を多く含む。 塊成 良好
60	鏡	口 徑 15.2	「く」の字形に丸く屈曲し、内湾がみにのびる口縫部である。端部は細くなり、上方へ尖りざみに終わる。背面は僅めて窪い。	外側 口縫部をヨコナダレし、端部に9mm/20.0mmのタタキを施す。 内側 口縫部を4mm/9.5mmのハタのあとヨコナダレする。くびれ部はヨコナダレする。端部はヘラケズリである。	色調 淡褐色 粒度 新土 塊成 微粒の角閃石を多く含む。 良好
61	鏡	口 徑 16.3	体部より鋭く屈折し、外反する口縫部になる。端部はつまみ上げる。	外側 口縫部をヨコナダレし、端部は3mm/6.0mmのタタキを施す。 内側 口縫部を3mm/8.0mmのハタのあとヨコナダレ。端部はヘラケズリする。	色調 淡褐色 粒度 新土 塊成 角閃石を多く含む。 良好
62	小型鏡	口 徑 9.1	薄い楕円の体部から「く」の字形に屈曲し、直線的にのびる口縫部に至る。端部は丸く終わる。	外側 口縫部をヨコナダレし、端部は5mm/14.0mmのタタキを施す。 内側 口縫部をヨコナダレし、端部はナナである。	色調 淡褐色 粒度 新土 塊成 角閃石・長石を含む。 良好
63	鏡	底 徑 5.2	ドーナツ状の底部である。	外側 タタキのあとナダ。 内側 廉耗を受け不明。	色調 淡褐色 粒度 新土 塊成 1.0mm程度の石英を多く含む。 良好
64	鏡	底 徑 3.5	突出する平底で、中央がわずかに凹む。	外側 ヘラミガキを施す。 内側 廉耗を受け不明。	色調 淡褐色 粒度 新土 塊成 角閃石・長石・雲母を含む。 良好

番号	断面 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
65	裏	底 径 3.4	突出した平底である。	外面 タタキを施す。 内面 ナデと思われる。	色調 棕褐色 胎土 石英・チャート・角閃石・雲母を含む。 焼成 良好
	SE2上層				
66	裏	底 径 5.5	平底の底部である。	外面 ヘラミガキを施す。 内面 4条/4.5mmのハケのあとナデ。	色調 棕褐色 胎土 角閃石・雲母・石英を含む。 焼成 良好
	SE2上層				
67	裏	底 径 4.2	ドーナツ状の底部である。	外面 4条/14.0mmのタタキを施す。 内面 ヘラナダと思われる。	色調 外面 深褐色 胎土 内面 深褐色 雲母・石英・長石を含む。 焼成 良好
	SE2上層				
68	裏	底 径 5.1	ドーナツ状の底部である。	外面 タタキを施す。 内面 ヘラ原体による押圧がみられる。	色調 深褐色 胎土 背母・角閃石を含む。 焼成 良好
	SE2上層				
69	裏	底 径 3.5	平底の底部と思われる。	外面 5条/10.5mmのタタキを施す。 内面 ヘラナダと思われる。	色調 基褐色 胎土 雲母・角閃石・花崗岩を含む。 焼成 良好
	SE2下層				
70	裏?	底 径 3.5	平底の底部である。	外面 底部を5条/15.0mmのタタキである。 内面 ヘラケズリと思われる。	色調 淡水褐色 胎土 石英・長石・チャート・くさり砂を含む。 焼成 良好
	SE2J層				
71	裏?	底 径 3.0	平底の底部である。	外面 底部を5条/15.0mmのタタキである。 内面 ヘラケズリと思われる。	色調 基褐色 胎土 石英・長石・チャート・くさり砂を含む。 焼成 良好
	SE2J層				
72	裏?	口 径 15.1	外縁より屈曲し、外反するU形部に似る。底部は丸く終わる。	外面 口縁部をヨコナナフする。 内面	色調 暗灰色 胎土 石英・長石を含む。 焼成 良好
	SE2上層				

番号	器種	出土位置	法 量(cm)	形 态 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成・備考
73	高杯	T1 後	22.9	杯底部より弧曲し、外周に縦をつくり、内寄ぎみに長くのびる口縁部に至る。細部は細くなり、突りぎみに終わる。	外面 内面 ヘラミガキを施す。	色調 淡赤褐色 胎土 チャート・石英を含む。 焼成 良好
		SE2上層				
74	高杯			中央でやや外削きの柱状部である。	外面 内面 全体に調耗を受け不明。	色調 淡小褐色 胎土 内閃石を多く含む。 焼成 良好
		SE2上層				
75	高杯			中央でやや外削きの柱状部である。 弧曲部3方に円孔を穿つ。	外面 柱状部をヘラケスリ。杯部、 脚部にヘラミガキがみられる。 内面 杯底にヘラミガキがみられる。	色調 淡赤褐色 胎土 チャート・長石・石英 焼成 良好
		SE2上層				
76	高杯			中央で筒状の柱状部である。	外面 筒状部にヘラミガキを施す。	色調 成褐色 胎土 微粒の角閃石を多く含む。 焼成 良好
		SE2上層				
77	壺	底 係	5.2	突出した平底で中央は若干凹む。	外面 わずかにタタキがみられる。 内面 調耗を受け不明。	色調 淡白褐色 胎土 石英・長石・くさり織 焼成 良好
		SD1				

## 第9節 第10次調査

### I 調査の概要

調査地は八尾市光町2丁目に所在し、第8次調査地の南方約10mに位置する。調査地内に23m×27mの調査区を設定した。調査期間は昭和57年2月1日から3月12日まで、調査面積は621m<sup>2</sup>である。

調査方法は、現地表(O P + 8.8 m)から盛土、旧耕土、床土までを機械掘削し、以下は人力によって掘削作業を実施した。しかし、調査区南側で古墳時代前期の遺構を検出した他は、ほとんどが弥生式土器を含む自然河川であったため、平面的には南側の一部を調査するにとどまった。なお、最終的に自然河川の流路等を確認する目的で、南北方向に3本、東西方向に1本のトレンチを設定し調査するに至った。

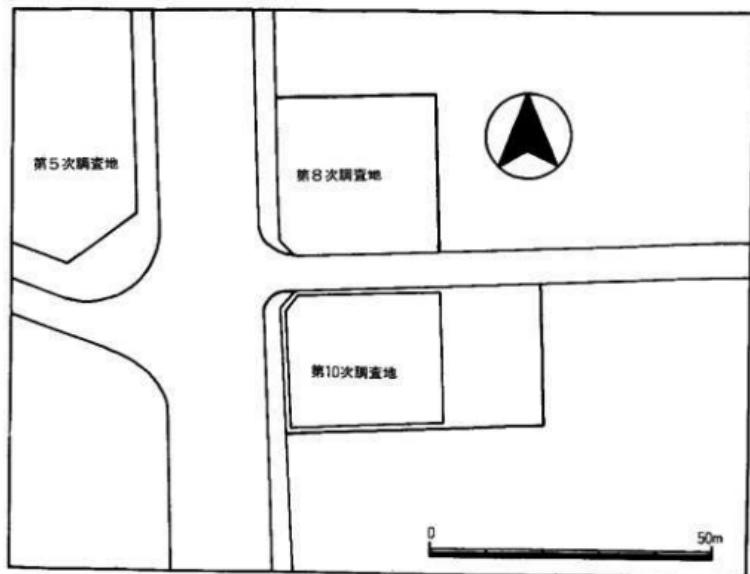


図78 調査地設定図

## II 層序

盛土90cmを除去すると第1層旧耕土、第2層床土、第3層灰色粘土、第4層暗灰褐色シルト粘土、第5層淡灰青色シルト、第6層灰色粘土が調査区南側での基本層序である。このうち第3層が中世の水田址、第5層上面が古墳時代前期の生活面である。

一方、北側の自然河川は上層では植物遺体を多く含み、漸移的な堆積を示すため古墳時代前期には河川としての機能を停止し、沼沢地状になったものと考えられる。また、第3調査地・第4調査地でも同様の堆積状況を認めていることから、沼沢地の南への拡がりが明らかになつたわけである。その後さらに堆積が進み、中世には他の調査地同様、水田として土地利用がなされていた。また、第5調査地で北側の肩部のみを認めたSD10は、この自然河川の北岸であると推定される。

## III 自然河川および出土遺物

調査区の南側を除き、ほぼ全体にわたって自然河川が認められた。南岸は調査区の南側で確認したが、北岸は調査区外に至る。検出幅約18m・最深1.8mを測る。流路は北西方向である。南岸はOP+7.6m前後を測り、なだらかに傾斜して1mほど落ち込む。その後約10mはほぼ平坦で、河川中央部へ角度を持って再び落ち込む。最深部のレベルはOP+5.75mを測る。

内部には第1層暗茶灰色砂粘土、第2層暗灰色粘土、第3層灰褐色粘土、第4層灰色粘土、第5層暗灰色粘土、第6層淡灰色粘土、第7層灰色粘土がほぼ水平に堆積し、以下には灰黒色粘土、淡灰色砂まじり粘土、暗灰黒色粘土、灰白色細砂土、暗灰褐色粘土等が入り組み、複雑な堆積状況を示している。このうち第4層・第5層・第7層には何層もの植物遺体が含まれている。

下位に堆積する灰白色細砂土から、畿内第Ⅲ様式の壺(1)と木製品(図79)が出土した他、第7層灰色粘土からは畿内第Ⅳ様式木-V様式初頭の壺(2)が出土した。また、第2層暗灰色粘土層からはV様式タイプの甕(3)、庄内式甕(4・6)や小型鉢(7)、小型丸底壺(5・7・8)等が出土した。

木製品は長さ約26cm・最大幅5.6cm・最小幅2.0cm、厚さ1cmを測る用途不明の板材である。両面を粗く加工し、幅が広くなる方へ行くほど薄くなっている。

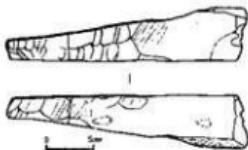


図79 自然河川出土木製品

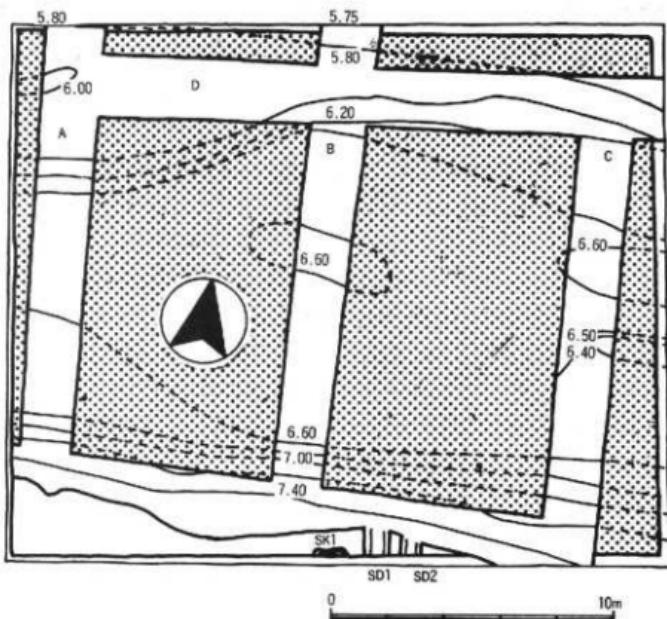


図80 平面図

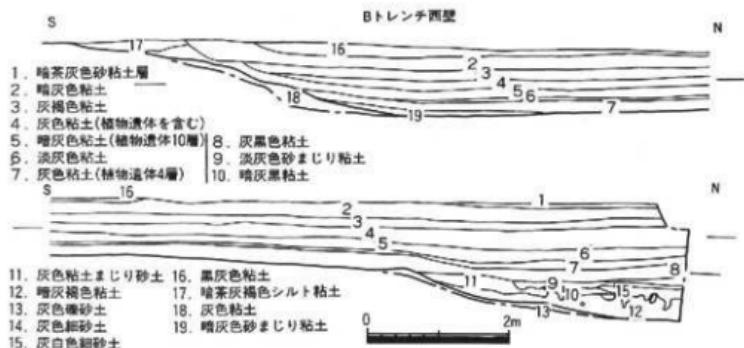


図81 自然河川断面図

## IV 古墳時代の前期の遺構・遺物

### S K 1

調査区の南壁ぎわで検出した。検出部の長径1.3m・短径0.6m・深さ10cmを測り、楕円形に近い形状を呈する。埋土は暗茶灰色シルトである。

埋土内より、庄内式鏡の細片をわずかに出土した程度である。

### S D 1

S K 1 の東側で検出した。幅1m・深さ30cmを測る溝で、沼沢地に流れ込んでいる。内部には上方から暗灰褐色シルト粘土、暗灰色粘土の2層が堆積する。

### S D 2

S D 1 の東側に位置する。幅90cm・深さ20cmを測る。S D 1 同様に沼沢地に流れ込む。

## V 中世の遺構・遺物

第3層の水田面に掘り込まれた5条の溝を検出した。すべて南北に延びるもので、幅20~100cm・深さ5cmを測る。内部には灰色粘土が堆積する。これらは水田耕作に伴なうものと考えられる。

これらの溝の内部から、瓦器・羽釜等の遺物が細片でわずかに出土した。

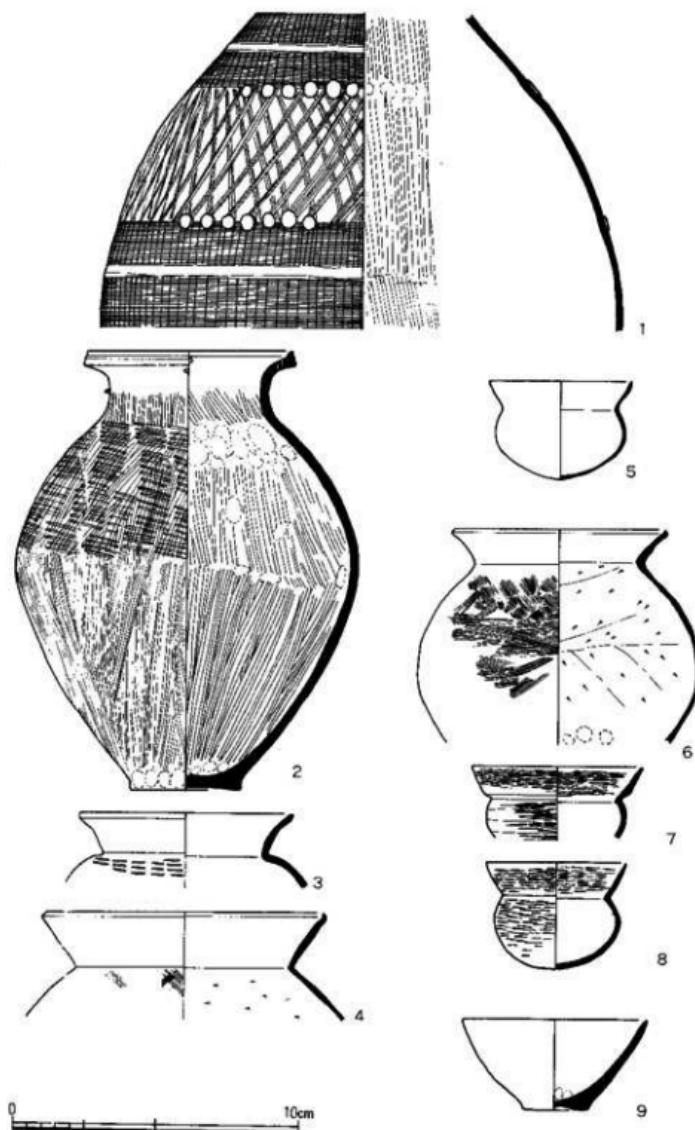


図82 出土遺物実測図

VI 出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	最大径 36.5 自然河川上層	側部のみの瓶形。などらかに下がる肩部を有する。瓶口はかなり下位にある。 瓶身は蓋状と考へられる工具で刻摺子文を施す。また、蓋状文・斜格子文間に円形浮文を施りつける。	外側 蓋状文間に光沢を持つヘラミガキ。 内側 粗い横方向のハケを施す。	色調 淡茶褐色 胎土 角閃石・石英等の繊維を含む。 焼成 良好
2	壺	口 径 14.2 最大径 23.9 高 底 7.5 基 高 30.9 自然河川上層	玄青の器形から直立しみの矧い側部に絞り、外上方へ丸く屈曲する口縁部に至る。口縁部は内側する弧をつくり、つまみ上げる。 口縁部には、3~4条の退化凹筋がみられる。口縁部4方に小孔(径約0.5mm)が空けられる。	外側 口縁部ココナデ。体部上半左上がり横タタキの後組い・横刃向のハケ。体部下半は横方向の織かいハケ。 内側 11種類ココナデ。体部粗い横方向のハケ。後部には指頭圧痕がみられる。	色調 淡褐色 胎土 石英・ガルバを多く含む。 焼成 やや吸質 外面には糠が多量に付着する。
3	壺	口 径 14.9 自然河川上層	瓶の底も全体から屈曲し、外反する口縁部に至る。底部は尖りぎみとなり、直立する面をつくる。	外側 口縁部をヨコナデし、瓶部は4条/11.5mmのタタキを施す。 内側 口縁部をヨコナデし、瓶部はヘラナデである。	色調 淡茶褐色 胎土 石英・長石・花崗岩を含む。 焼成 良好
4	壺	口 径 19.5 自然河川上層	「く」の字形に屈曲し、直線的にのびる口縁部に至る。端部は上方へつまみ込みに丸く終わる。大きさに比較し、器内は深めである。	外側 口縁部をヨコナデし、瓶部は上上がりで4条/5.5mmのタタキを施す。 内側 滑耗を受け不明。	色調 淡褐色 胎土 角閃石・長石・石英を含む。 焼成 良好
5	小型丸底壺	口 径 9.9 最大径 9.1 基 高 6.8 自然河川上層	扁球形の体部からくの字形近くに内寄ぎみにのびる口縁部に至る。端部はつまみ上げて、端部は丸く終わる。瓶部は尖りぎみの丸底である。	外側 体部はヘラケズリのあとヘラミガキと思われる。 内側 滑耗を受け不明。	色調 淡赤褐色 胎土 くさり繩・長石・石英を含む。 焼成 良好
6	壺	口 径 14.2 最大径 19.8 自然河川上層	「く」の字形に丸く屈曲し、外反ぎみにのびる口縁部に至る。端部はつまみ上げて、外側する平坦面をつくる。 体部は最大径が中位にあり、球形を呈すると想われる。	外側 口縁部をヨコナデし、瓶部は横筋のハケと思われる。 内側 口縁部をヨコナデし、瓶部はヘラケズリである。下位には指頭圧痕がみられる。	色調 淡褐色 胎土 滑松・0.5mm程度の角閃石を多く含む。 焼成 良好
7	小型丸底壺	口 径 11.7 最大径 9.8 自然河川上層	体部から屈曲し、内寄ぎみにのびる口縁部に至る。端部は細く、尖りぎみに終わる。体部は扁平な球形であろう。	外側 口縁部、体部ともにヘラミガキをする。 内側 口縁部をヘラミガキし、体部はナデと思われる。	色調 淡褐色 胎土 チャート・石英・長石を含む。 焼成 良好
8	小型丸底壺	口 径 9.9 最大径 8.8 基 高 7.5 自然河川上層	「く」の字形に屈曲し、内寄ぎみにのびる口縁部に至る。端部は細く、尖りぎみに終わる。体部は扁平な球形を呈する。	外側 口縁部をヘラミガキのあと周文状ヘラミガキを施す。 内側 口縁部をヨコナデし、体部はヘラケズリのあとヘラミガキを施す。	色調 淡褐色 胎土 くさり繩を含む。 焼成 良好
9	小型鉢	口 径 12.8 底 径 4.5 基 高 6.5 自然河川上層	底部から内寄ぎみにのびる直口の鉢。端部は若干尖りぎみに終わる。底部はわずかに突出し、中央が凹むだけ張形である。	外側 口縁部をヨコナデし、体部はナデと思われる。 内側 口縁部をヨコナデし、体部はナデと思われる。底部に指頭圧痕がみられる。	色調 淡褐色 胎土 玄母・チャート・石英・長石を含む。

## 第10節 まとめ

### I 検出遺構について

昭和56年度における東郷遺跡の発掘調査は9件を数え、調査面積は延べ約1700m<sup>2</sup>を計る。これらの調査地点は、東郷遺跡推定範囲の中央部と東部に概ね大別される。中央部は第3調査地・第4調査地・第5調査地・第8調査地・第9調査地・第10調査地の6ヶ所、東部は第2調査地・第6調査地・第7調査地の3ヶ所である。

調査では、弥生時代中期から中世に至る遺構や遺物を検出したが、調査地によってそのあり方に相違が認められた。特に中央部の調査地では、古墳時代前期の集落に伴なう遺構や遺物が多く検出され、東部の調査地では古墳時代後期の集落に伴なうものが多く検出された。各調査地で得られた結果は断片的ではあるが、当遺跡の性格を知る上で重要な資料を与えてくれた。しかし、今後に多くの課題を残している。

ここでは遺跡の性格について、各時代ごとに若干の考察を加えながら述べてみたい。

#### 1) 弥生時代

弥生時代の遺構は検出していないが、第10調査地の自然河川から、畿内第III様式の壺やV様式末～V様式初頭の壺が出土した。

この自然河川は南東から北西への流れを持つもので、内部から出土する遺物に磨滅痕が認められないことから、近隣に弥生時代中期以降の集落が存在した可能性が考えられる。

#### 2) 古墳時代前期

古墳時代前期になると、第10調査地で検出した自然河川はその本流の機能を停止し、沼沢地状になったと考えられる。また、第3調査地・第4調査地で検出した沼沢地、および第5調査地で部分的に検出したS D10は、この沼沢地と同一のものと考えられ、北西方向への拡張性を持っていたと推定される。これらの沼沢地内からは、V様式タイプの壺・庄内式壺・布留式壺・小型丸底壺等が出土した。

この時期の遺構としては、沼沢地の北側にあたる第4調査地・第5調査地・第8調査地・第9調査地で、竪穴式住居3棟、獨立柱建物2棟・井戸9基・土塙・柵列・溝・ピット等を検出した。

第8調査地で検出した竪穴式住居は、床面に砂礫が敷きつめられており、検出例の少ないも

のである。この竪穴式住居を中心として、それを取り囲むような状態で掘立柱建物が位置している。さらに建物群の周囲では、第5調査地SE1・SE2・SE3・SE5、第9調査地SE1・SE2の6基の井戸を検出した。

これらのことから、古墳時代前期における集落は、共同体を支配する首長層が第8調査地の竪穴式住居を居所とし、それを囲むように掘立柱建物、さらにその外側に井戸を伴なう居住地を構成していたものと考えられる。

これらの集落に伴なう遺構からは、在地産以外に吉備系・山陰系・北陸系の搬入品が含まれており、他地方との交流があったものと推定される。

また、当遺跡の南部に隣接する成法寺遺跡は、当遺跡と同一の沖積地上に立地しており、昭和56年度に実施した電々公社社屋増築工事に伴なう発掘調査で、古墳時代前期の方形周溝墓4基を検出している。このことから、この時期北部の東郷遺跡を居住地域、南部の成法寺遺跡を墓域とする大規模な集落構成をもっていた可能性が考えられる。

### 3) 古墳時代中期

今年度の調査ではこの時期の遺構や遺物は検出されていないが、第1調査地では包含層に古墳時代中期の遺物がわずかに含まれることが確認されている。このことから、古墳時代中期の遺構の存在を遺跡範囲の北方ないしは北東地域に推定してもよかろう。

### 4) 古墳時代後期

古墳時代後期では、当遺跡推定範囲の東部にあたる第1調査地・第2調査地・第6調査地・第7調査地で、土塹・溝・ピット等を検出し、内部からは多数の遺物が出土した。

また、前述の成法寺遺跡の調査では、同時期の掘立柱建物等を検出していることから、当遺跡の集落規模の拡大、あるいは成法寺遺跡が分村的な性格の集落である可能性が考えられる。

### 5) 平安時代

当遺跡の東部にあたる第1調査地では、根石を据えた柱穴群と井戸枠内に曲物を設置した井戸等を検出している。この時期も古墳時代中期同様、遺跡範囲の北東方向に拡がることが推定されよう。

## 6) 鎌倉時代

この時期の遺構としては、第3調査地・第4調査地で水田畦畔や足跡状の窪みを伴なう水田面を検出し、第5調査地・第8調査地・第9調査地・第10調査地では、古墳時代前期の遺構を削平して東西方向や南北方向に延びる小溝を検出した。また、畦畔や幾筋もの小溝は東西・南北方向に平行してみられるところから、条里制の区割に関連するものとも考えられる。

一方、東部にあたる第1調査地・第2調査地・第6調査地・第7調査地では、厚さ30~60cmの固く締まった状態で各時代の遺物を含む土層を検出しており、埋め立てによる整地層ではないかと考えられ、鎌倉時代に条里制の地区割等に関連する大規模な土地整備がなされたのではないかと推測される。

表2 井戸内遺物出土状況一覧表

### II 出土遺物について

#### 1) 井戸内出土遺物について

各調査地で検出した古墳時代前期の井戸は、あわせて10基である。

井戸より出土する遺物については、出土のしかたに種々の状態がある。本調査においては、底部に接するような状態や、上層に集積する状態で出土したものがある(表2参照)。

井戸底に接するような状態で遺物を検出したものとして、第5調査地SE2・SE4・SE5、第9調査地SE1がある。これらの井戸からは完形品の壺または甕が各1点ずつ出土しており、壺2点のうち1点には胴部中位に穿孔があり、甕には煤の付着が著しい。

上層に遺物が集積していたものには、第5調査地SE5、第9調査地SE1・SE2がある。このうち、第5調査地SE5の遺物は完形品あるいはそれに近いもの6点を含んでいる。

井戸より出土する遺物の性格については、

調査区	井戸名称	出土状況		
		下層	上層	その他
4	SE1			
	SE2	井戸内に散乱		
	SE3		散乱	
5	SE1			肩部より
	SE2	完形単独		
	SE3			
	SE4	完形単独		
	SE5	完形単独	完形複数	
9	SE1	完形単独	集積	
	SE2		集積	

単に他から流入や転落したものの他、廃棄されたものや意味をもつて埋置されたものなどがあると考えられる。今回の調査では、遺物の出土状態からあきらかに『井戸祭祀』の可能性を持つものを数ヶ所で確認している。

近接する遺跡の類例についてみると、八尾南遺跡では検出した27基の井戸のうち、7基について祭祀の可能性が考えられている。<sup>④</sup> 遺物は底部から出土したもの4例、上層から出土したもの3例で、後者については報文中に井戸廃絶時の祭祀と考えられる記述がある。馬場川遺跡では<sup>⑤</sup> 2基の井戸が検出され、いずれも井戸廃絶時などに2回(1号井戸は上面で2回、2号井戸は底部と上面の2回)にわたって祭祀を行なっていたと記載されている。大和川・今池遺跡では<sup>⑥</sup> 第6~2地区SE1より、高杯や甕等を人為的に埋設したと考えられる状態で検出したと報告されている。これらは報文中に祭祀・供獻等の記載が行なわれているもの一部で、類例は増加するものと思われる。

当遺跡では、井戸底から遺物が出土した第5調査地SE2・SE4・SE5・第9調査地SE1の4例と上層から出土した第5調査地SE5の1例について祭祀が検証された。井戸底で検出した遺物については、日常使用のものや穿孔をもつものがあり器種は一定していないが、完形品が単独で出土するのが特徴である。上層で検出したものとしては、第5調査地SE5の資料のみであるが、ここでは複数の完形品が含まれている。

## 2) 各遺構より出土する遺物について

検出した遺構のうち、出土状況等から第9調査地SE1・SE2および第5調査地SE5・SD9で比較的一括性の高い遺物が検出された。ここでは具体的に各遺構から出土した遺物、とくに甕を中心とした資料の様相について、照合して概述する。

### 第9調査地SE1

甕9点のうち、口縁部は「く」の字形に屈曲し、端部につまみ上げをみないものとつまみ上げるものがあるが、後者がほとんどを占める。胴部にはヘラケズリを行なうが、(24・32)はヘラナデを施す。(32)は胴部外面にタタキの後下半にハケを施し、底部はわずかに平坦面をもっていることから、V様式甕と庄内式甕の中間形態であるといえよう。タタキは全体的に太筋のものを使用する。

甕については、底部の破片が出土している。このうち突出する平面をもつものは9点あり、尖り底や中央がわずかに凹むものなどが少數出土した。鉢については、3点のうち2点が突出

する平底をもつ。

これらの土器群は各器種を通じ、底部は突出した平底やわずかな平坦面をもつもので、タタキは太筋である。

#### 第9調査地 SE 2

合わせて25点が出土した。甕についてみると、口縁部の形態は「く」の字形に屈曲し、端部をわずかにつまみ上げるものが多い。底部については、壺や甕の破片が含まれているが、わずかに突出した平底から押されたような平底のものが含まれる。タタキは総じて太筋である。形態・技法からみてこれらの土器群は、前述のSE 1と同時期のものと考えられる。

第9調査地 SE 1・SE 2の遺物の類例として、中田遺跡出土のものがある。

⑦

#### 第5調査地 SD 9上層

甕28点が出土した。完形あるいは完形に近いものが7点あり、そのうちの6点が庄内式甕である。庄内式甕は全般的に最大径が中位よりやや上位にあり、底部は尖りざみの丸底をもつものが多い。タタキは前述のSE 1・SE 2出土のものに比較すると細筋で、器肉も薄く、比較的新しい要素をもつものが多い。

#### 第5調査地 SE 5上層

完形あるいは完形に近い土器が6点出土した。甕は庄内式のものと布留式のものが共伴し、小型精製器種のうち小型器台・小型鉢が出土している。これらの土器群については、庄内式と布留式の接点の時期のものと考えられる。

この時期の類例資料として、美園遺跡・馬場川遺跡などがあげられる。

⑧ ⑨

表3 タタキの幅について

(番号は実測図番号)

造 構 名	タタキ 1 条の幅 (mm)					
	1.0	2.0	3.0	4.0	5.0	6.0
第9調査地 SE 2		◎	◎	◎	◎	◎
第5調査地 SE 1	◎	◎	◎	◎	◎	◎
第5調査地 SD 9上層	◎	◎	◎	◎	◎	◎
第5調査地 SE 5上層	◎	—	—	—	—	—

次にV様式窓と庄内式窓の特徴であるタキについて、上記の編年資料を通じて幅の太細を明確にする。

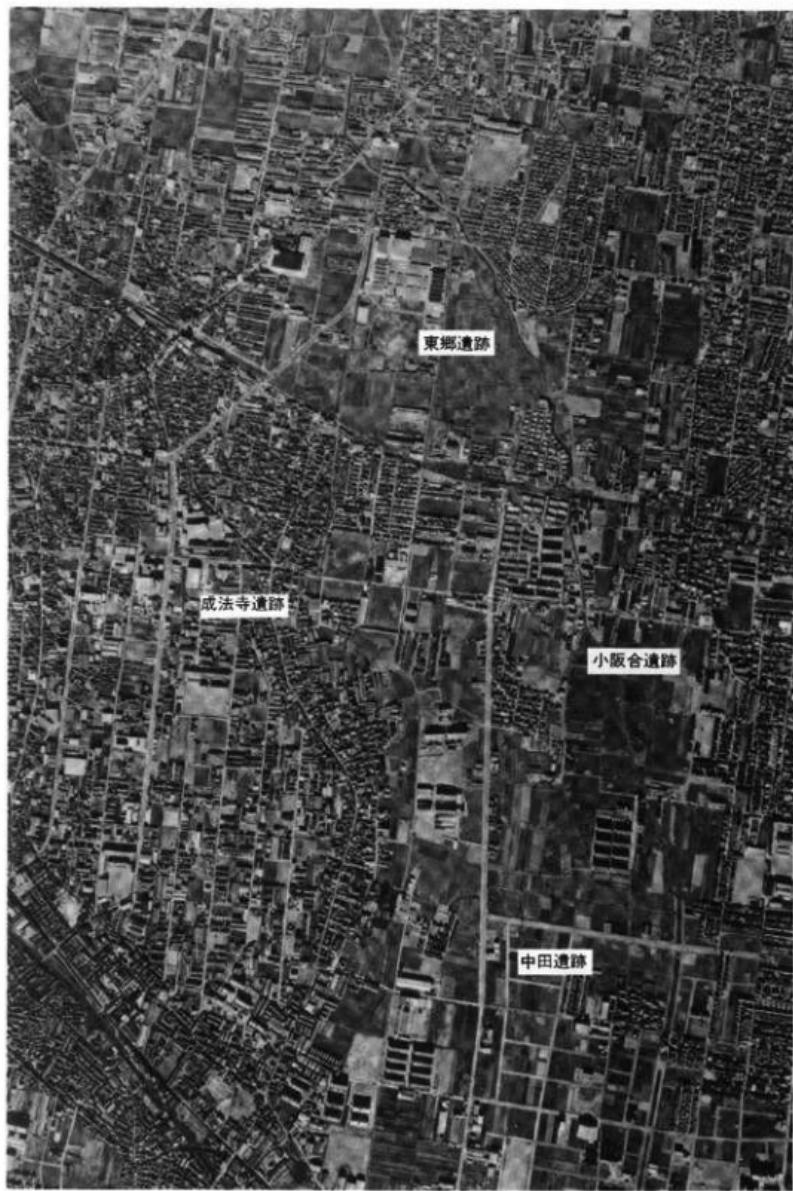
各資料の計測値は表3のとおりである。資料が少なくて不充分であるが、庄内式古相と考えられていたタキの幅の太細がより具体的に知り得るものと理解できよう。

以上の事項を前提として各資料をみていくと、古いものから順に第9調査地SE1・SE2次に第5調査地SD9上層、最後に第5調査地SE5上層資料に組み立てられるものと考えられる。

今回の報告は、昭和56年度に実施した発掘調査の概要であり、調査地も当遺跡の一部分にすぎないため、今後の調査結果や隣構の諸遺跡との関連性等を求める必要性がある。また、出土した遺物の考察についてもまだまだ不充分であり、これからも課題としたい。

#### (注 記)

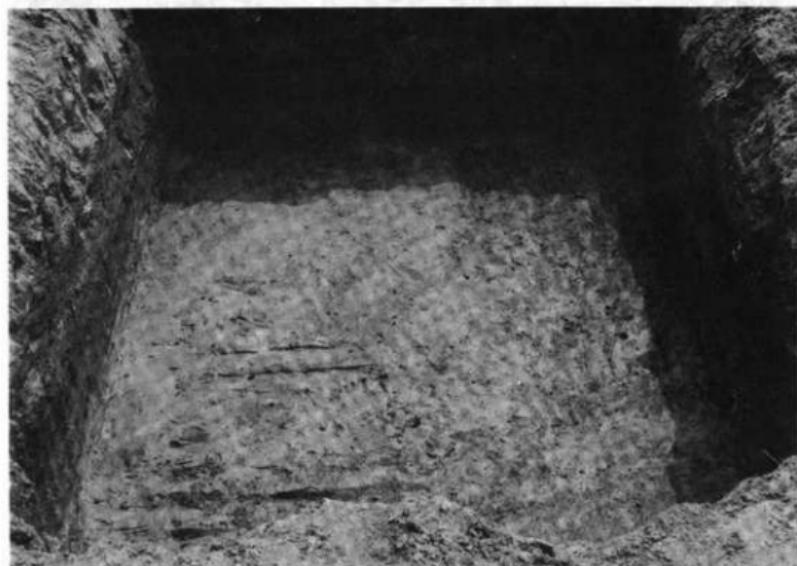
- 1 昭和56年度発掘調査現在整理中
- 2 昭和56年度発掘調査現在整理中
- 3 八尾市教育委員会「八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要」『八尾市文化財発掘調査報告6』1981年
- 4 八尾南遺跡調査会「八尾南遺跡」1981年
- 5 東大阪遺跡保護調査会「馬場川遺跡発掘調査報告」1977年
- 6 大和川・今池遺跡調査会「大和川・今池遺跡発掘調査資料その5第6区」1980年
- 7 八尾市教育委員会「八尾市中田遺跡刑部地区出土の土器」『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第5回)資料』(財)大阪文化財センタ--1980年
- 8 本誌所収第5章
- 9 東大阪市教育委員会「馬場川遺跡発掘調査概要IV」1976年



東郷遺跡周辺航空写真 ( $\frac{1}{15,000}$ )



第1トレンチ 沼沢地検出状況（西より）



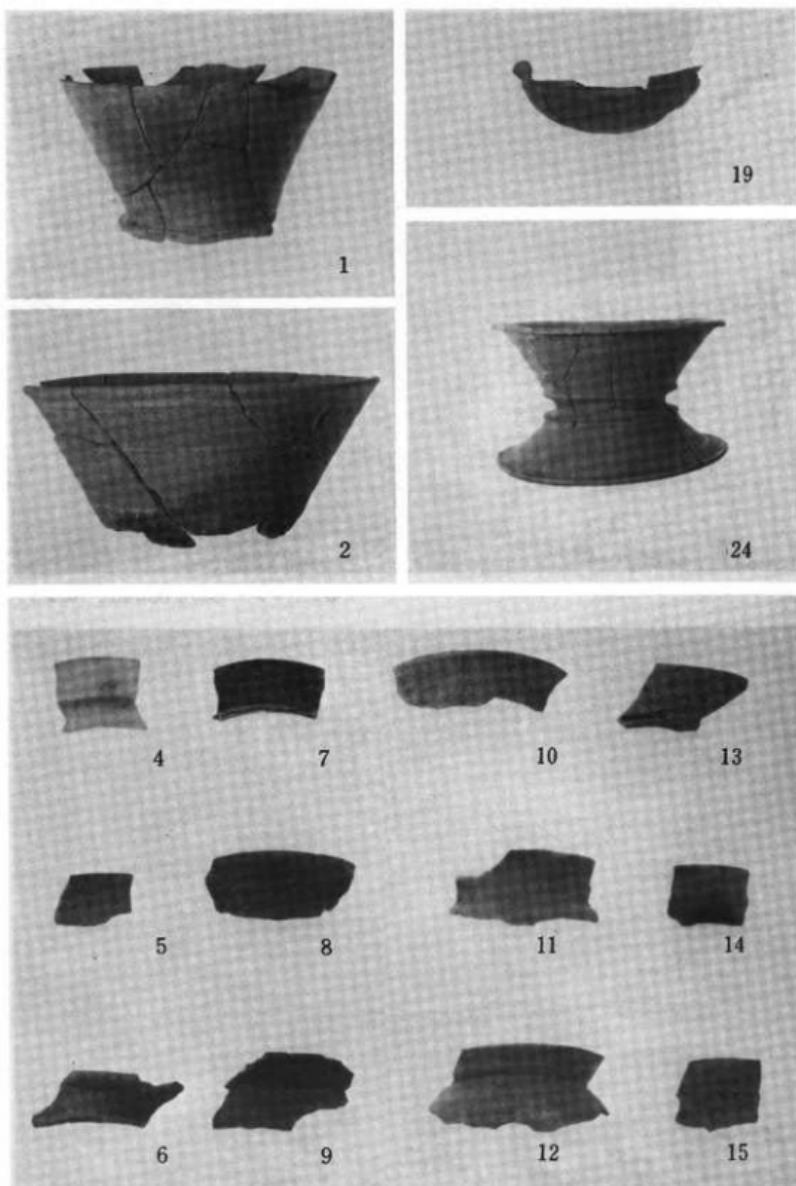
第2トレンチ 水田址検出状況（北より）



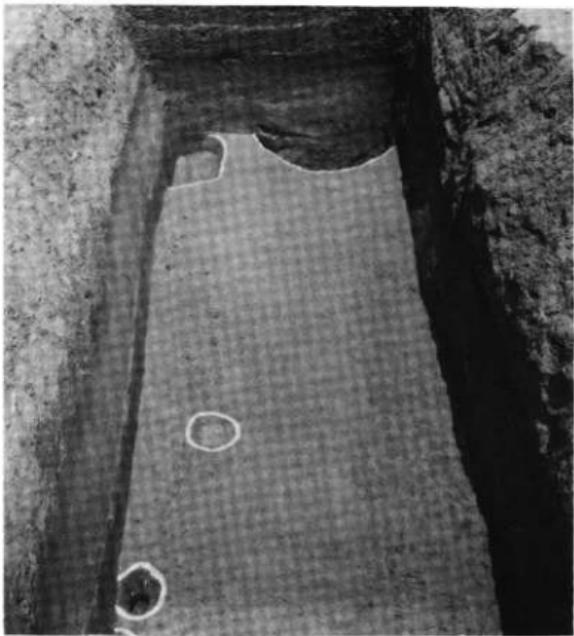
第3トレンチ 水田址検出状況（北より）



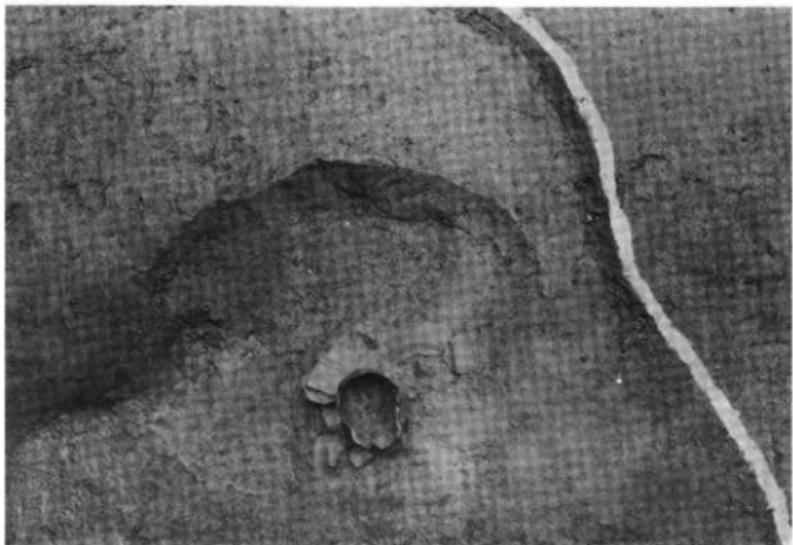
同上 水田咗畔断面（東壁）



沼沢地出土遺物



第1調査区 第3遺構面検出状況（南より）



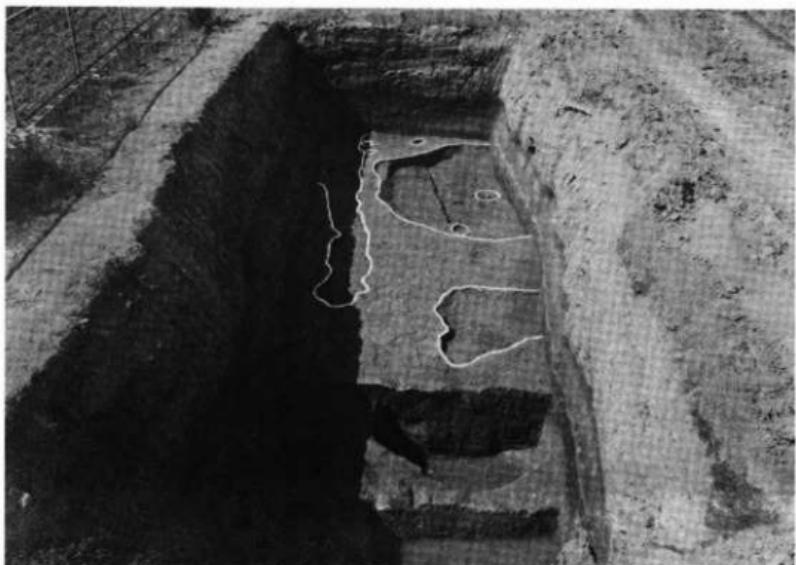
同上 S.E.2 (北より)



第2調査区 第3構造面検出状況（南より）



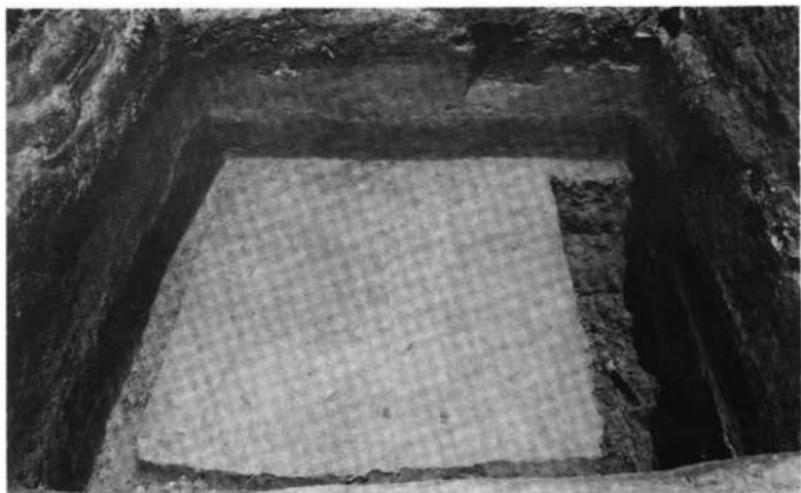
同上 SE3(西より)



第2調査区 第2遺構面検出状況（南より）



同上 SE3上層（南より）



第3調査区 沼沢地検出状況（南より）



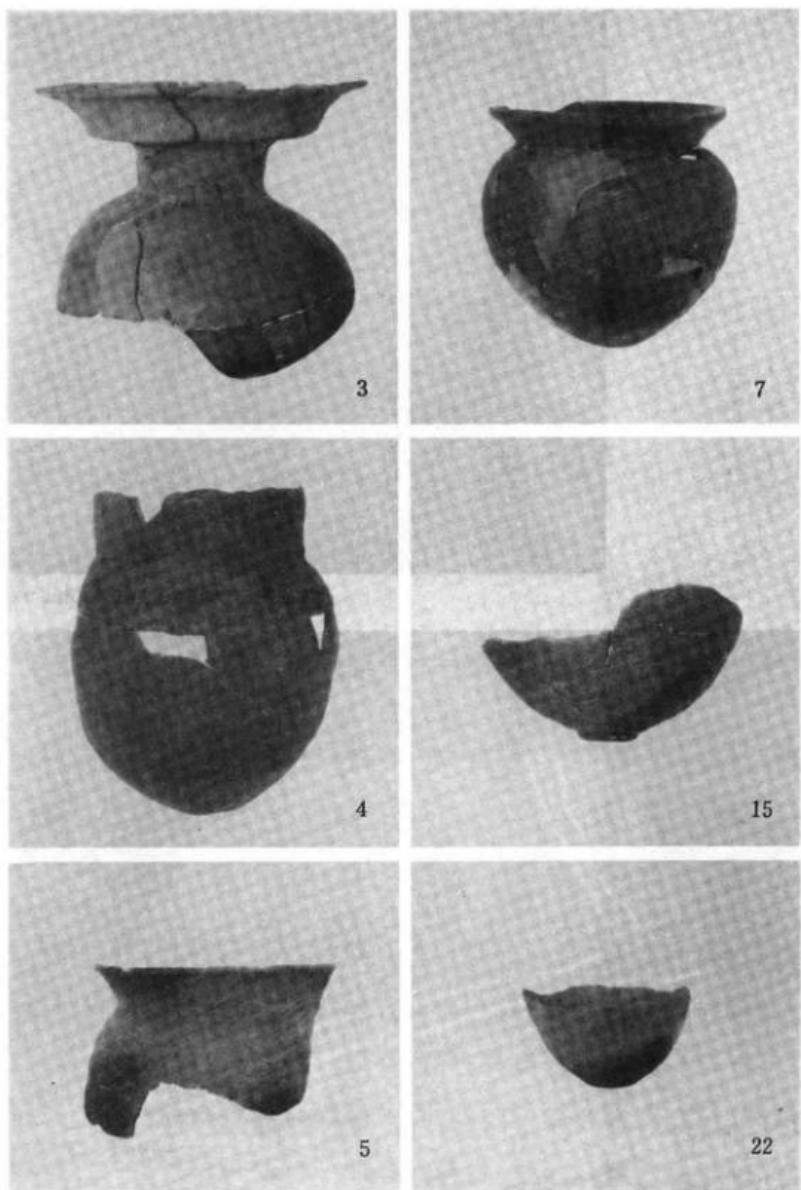
第1調査区 水田址検出状況（南より）



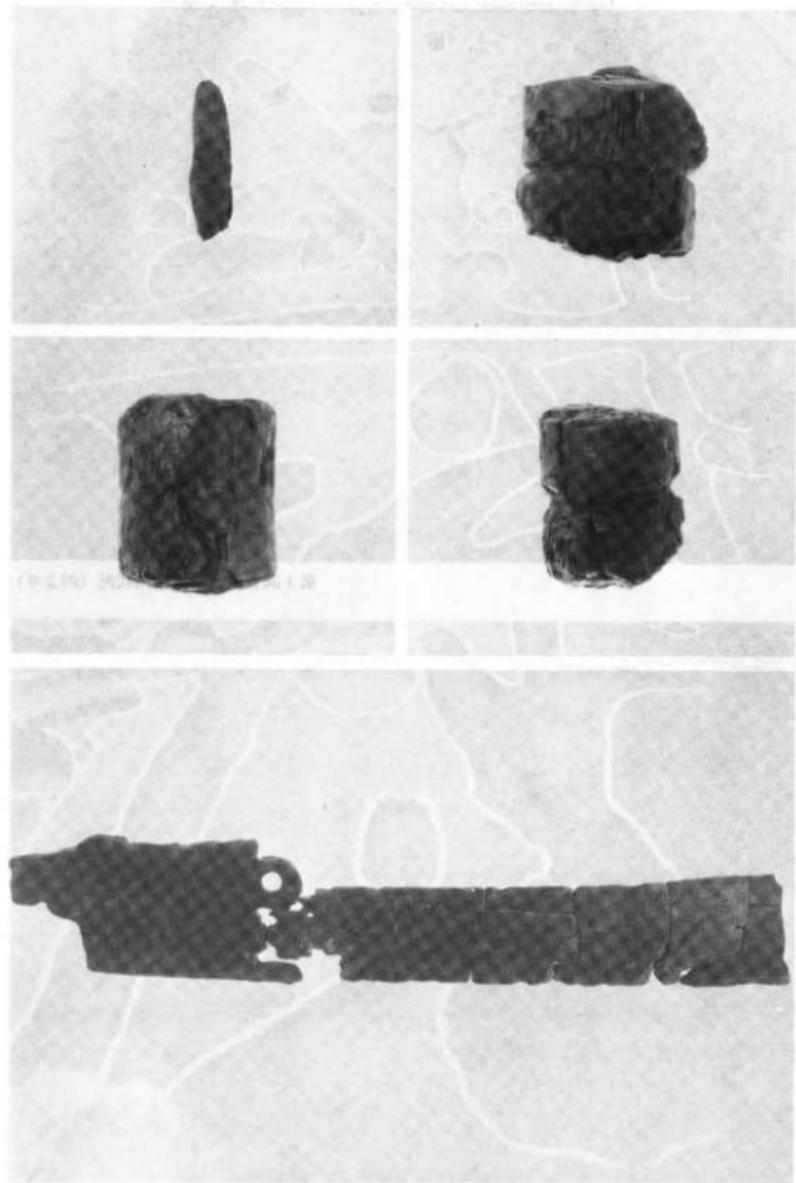
第2調査区 水田址検出状況（南より）



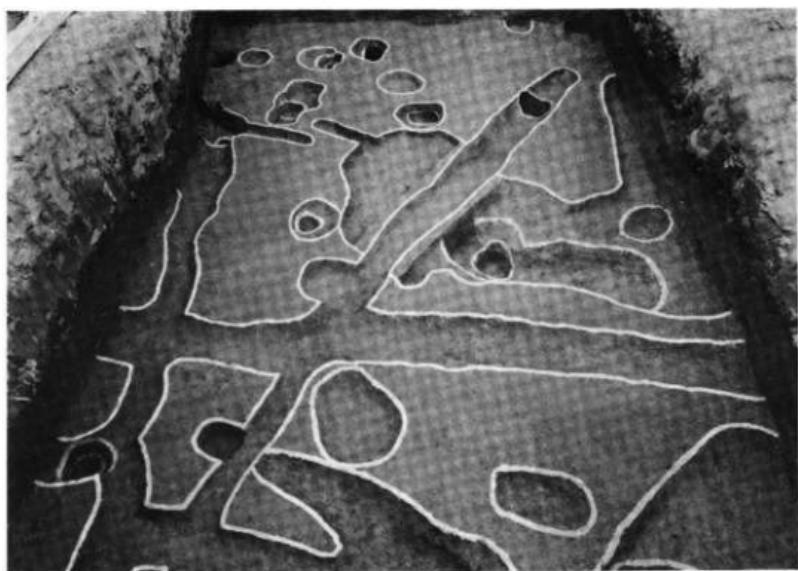
第3調査区 水田址検出状況（南より）



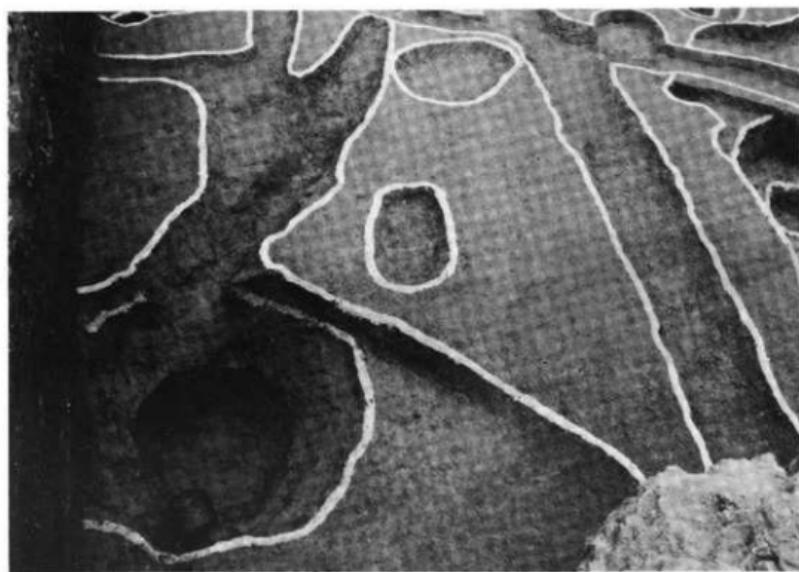
S E 2 出土遺物(3~5・7) S E 3 出土遺物(15・22)



S E 3 出土砥石(左上)・木製品(1~4)



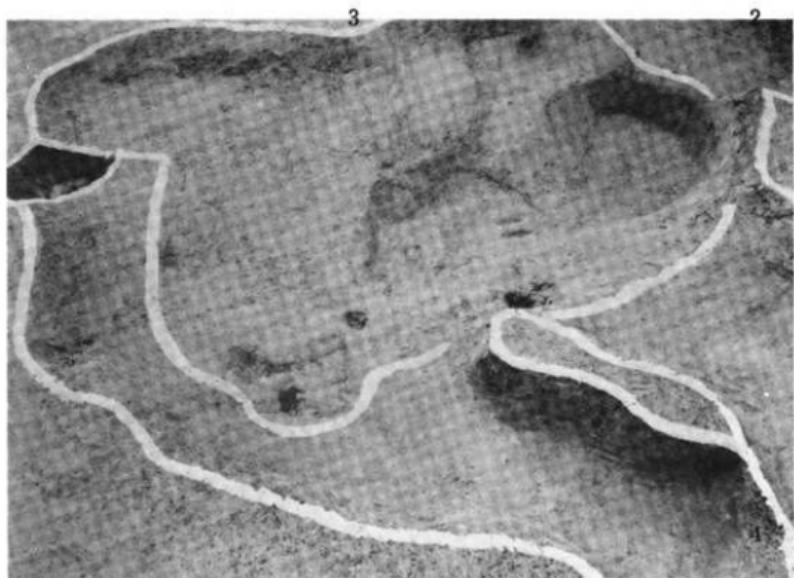
第1調査区 遺構検出状況（西より）



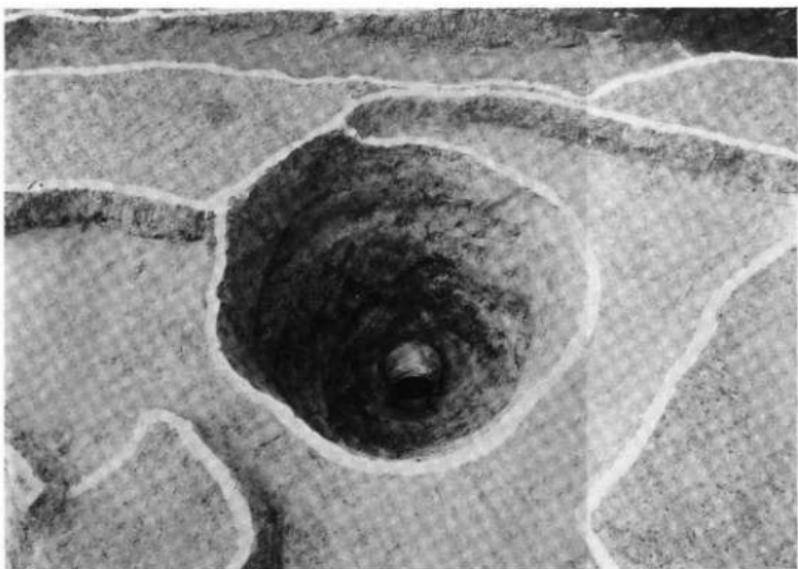
同上 S E 1 遺物出土状況・完掘（南より）



第2調査区 遺構検出状況（西より）



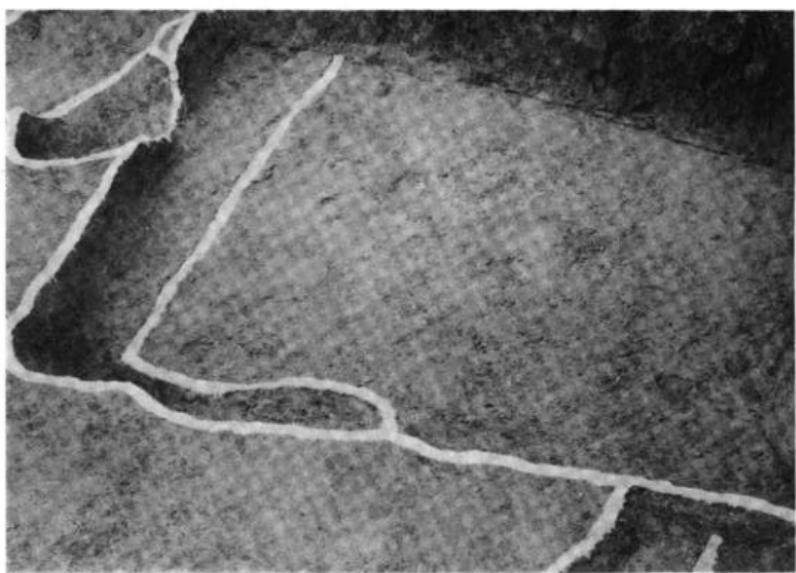
同上 SK5（南より）



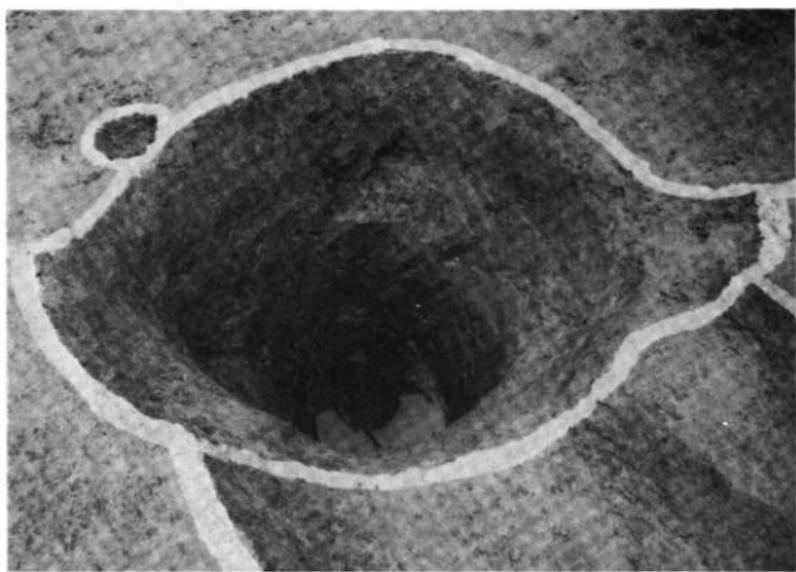
第2調査区 SE2(南より)



第3調査区 遺構検出状況(南より)



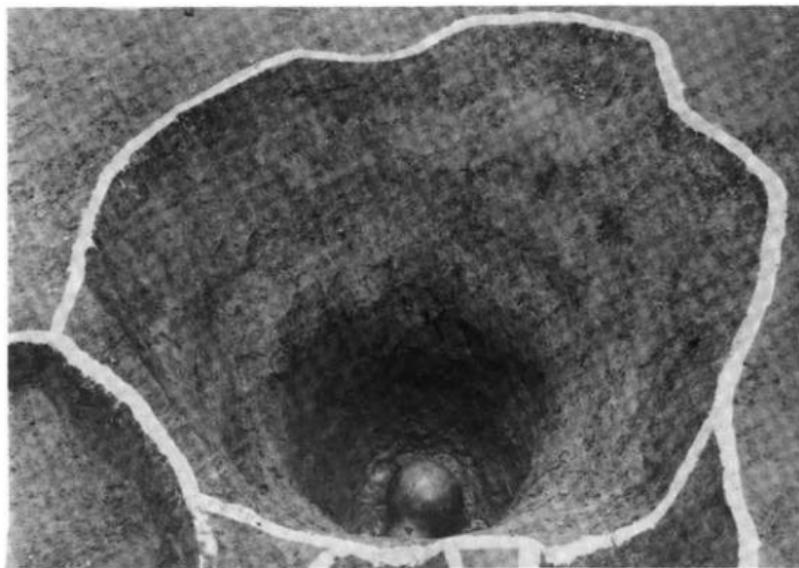
第3調査区 S I I (南より)



同上 S E 3 (南より)



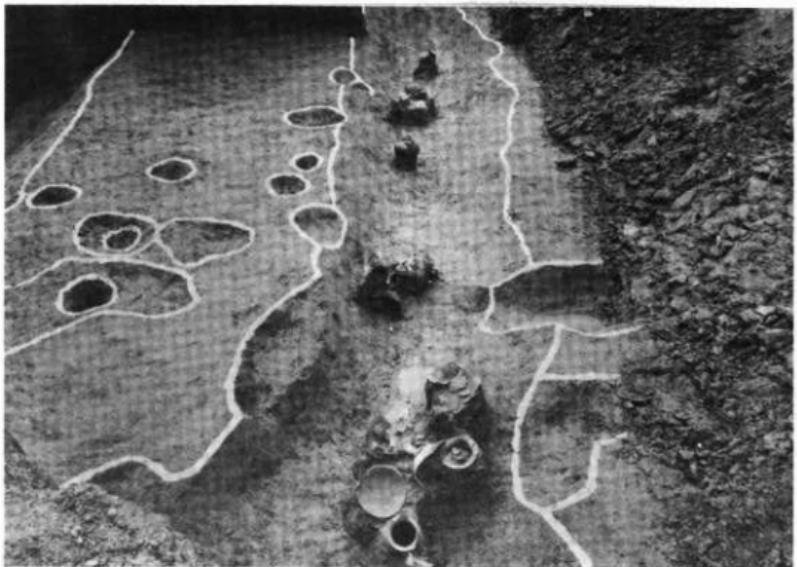
第3調査区 SE 4 上層遺物出土状況（東より）



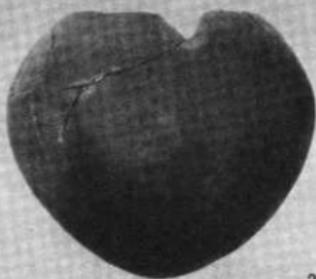
同上 完掘（西より）



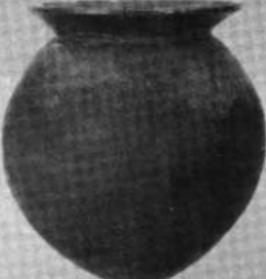
第4調査区 遺構検出状況（北東より）



同上 SD 9 遺物出土状況（東より）



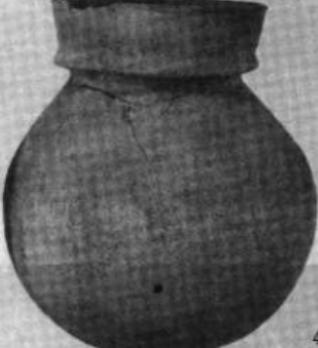
38



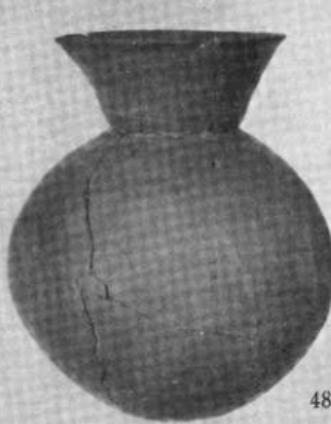
46



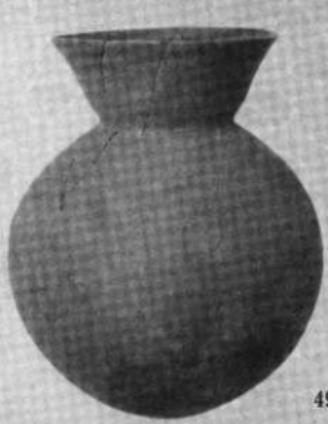
42



47

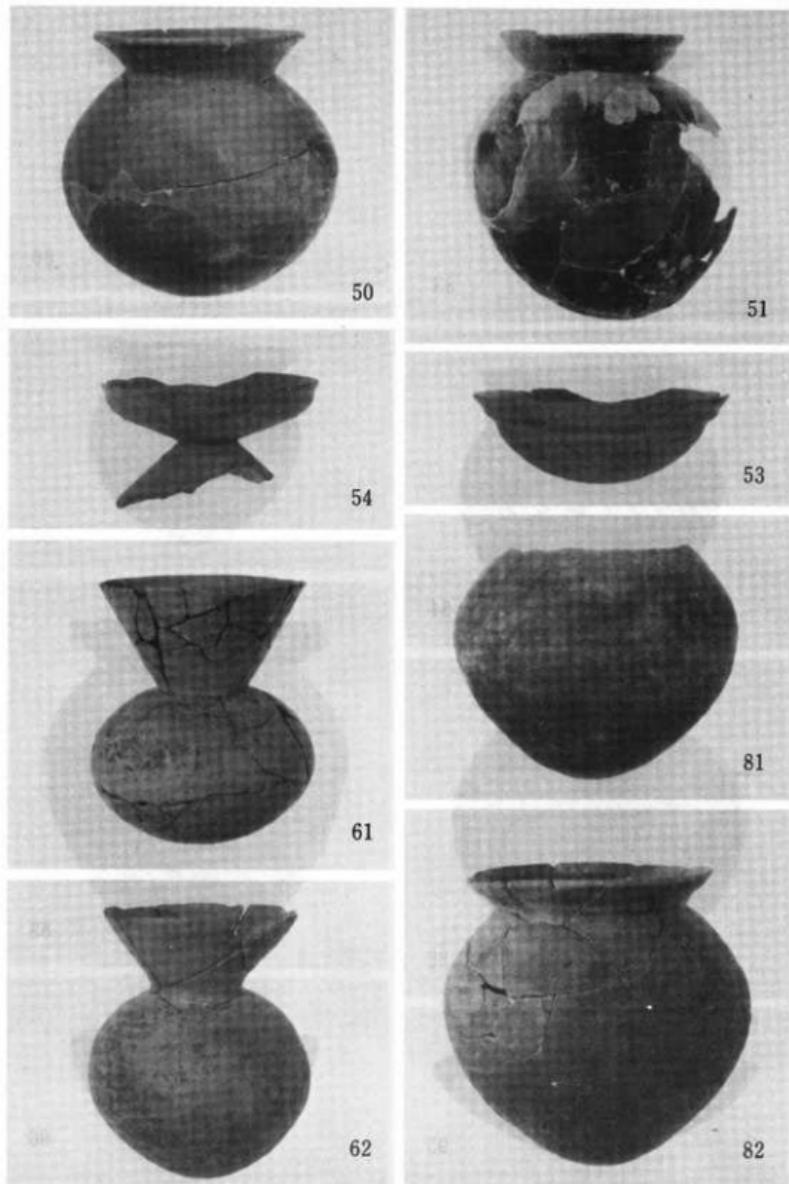


48

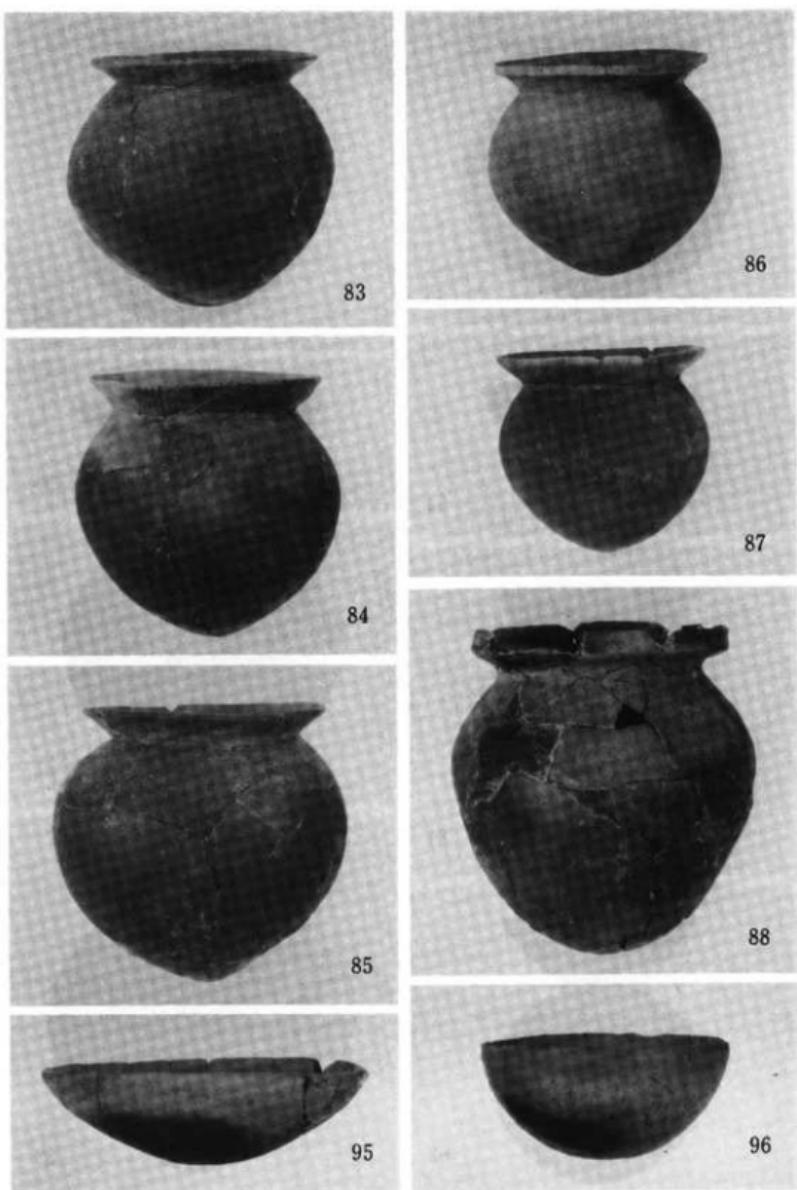


49

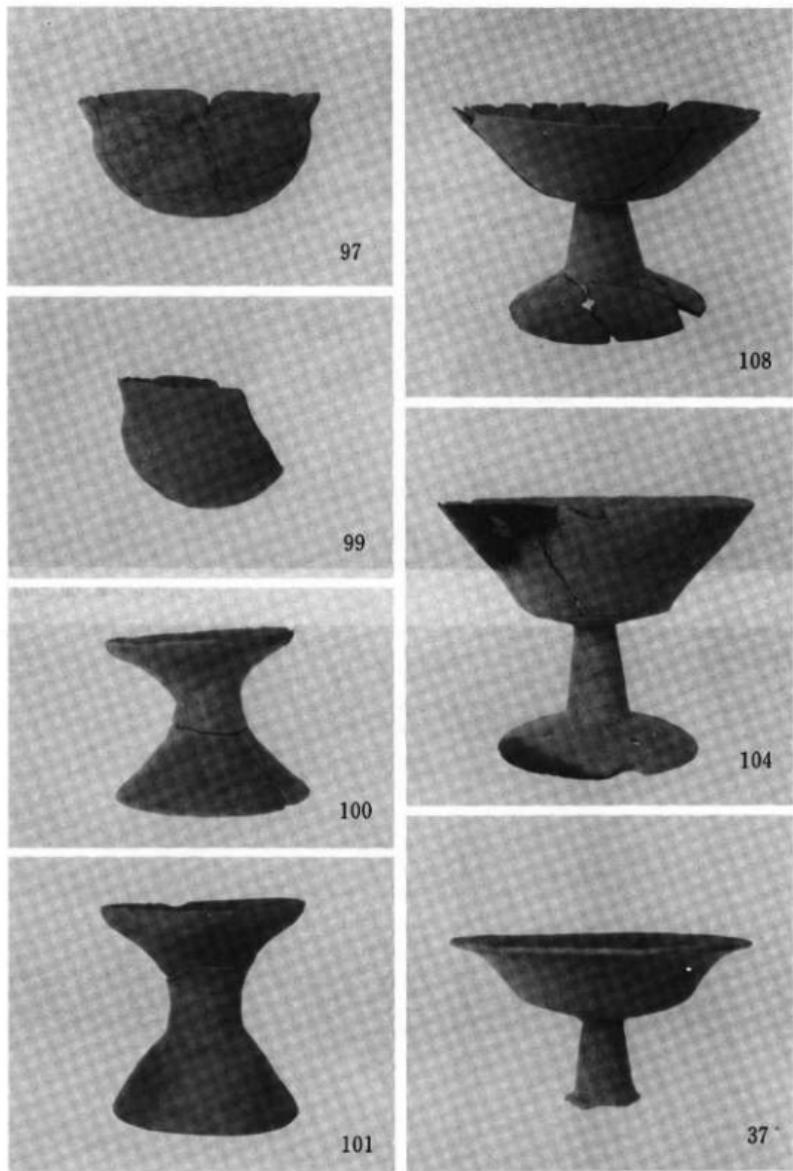
SE 1(38)・SE 2(42)・SE 4(46)・SE 5(47～49)出土遺物



SE 5(50・51・53・54)・SD 9(61・62・81・82)出土遺物



SD 9 出土遺物



SD 9(97・99～101・104)・SD10(108)・SK10(37)出土遺物